

私の足を舐めなさい！

足でされたい

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

橘楓は月村家に仕えるメイドだった。いつも冷酷で高飛車なお嬢様、月村エレナは普段は絶対に夕飯時など人を入れたがらなかったのに、突然楓を誘うようになり、そこからエレナの態度が一変する。

主人とメイドの噛み合わないラブコメがここから始まります。

微エロ注意です。ガチ百合です。

# 目次

変化	1
姉妹？	4
姉妹になりました	8
初夜	13
私の気持ち	20
恋人同士になって	24
前兆	33
天音様来訪	38
楓、壊れる	46
月村エレナはマゾである	50
決意	59
エレナ感激です！	62

学校にて①	67
学校にて②	75
発熱	86
初めての看病	90
朝起きて	97
とある日の月村家	100
修学旅行①	106
修学旅行②	112
修学旅行③	118
場所が変わっても	125
危機一髪	132
一段落して	144
修学旅行最終日	154

久しぶりのお屋敷	159
突然の来客	165
お母さん	172
番外編1	181
番外編②さゆりと天音	187
前日	194
面接	200
天音様来訪	203
出会い	212
ファミレスにて	219
告白	223
入学式前夜	234
入学式とジェシカさん	241

ヤキモチ?	250
ジェシカの初恋	260
体力測定	263
百合ツプル会議	274
エレナと紅葉	285
エレナ様いじり	289
アルコール	296
制服デート?	301
制服デートだったのに……	305
制服〇〇	317
作戦会議	325
告白	328
楓の気持ち	338

ヤキモチ	408	答え	343
遅れた理由	402	一段落して	352
胸の話はしないで。	398	過去編 メイドがいなくなった日①	359
精神崩壊したエレナさん②	393	過去編 メイドがいなくなった日②	368
精神崩壊したエレナさん	389	詩織さんとお嬢様	372
お風呂にて	383	お風呂にて	383

エレナ様は逆らえない	412	夏季休暇の予定	418
お出かけデート	424	お出かけデート	424
試着室にて	429	試着室にて	429
仲直り	438	仲直り	438
泥酔エレナ様	446	泥酔エレナ様	446
エレナとジェシカ	453	エレナとジェシカ	453
たまにはこんな夜も	458	たまにはこんな夜も	458
最終日	461	最終日	461
幕間 2人のお母さん	469	幕間 2人のお母さん	469
幕間 子供が欲しい	475	幕間 子供が欲しい	475
妹	480	妹	480
単位	486	単位	486

秋季休暇の2人

500

番外編 七夕祭り 前編

509

番外編 七夕祭り 後編

525

こんな寒い日の夜は

533

寂しい気持ち

539

球技大会？

544

種目決め

550

クラス内紛争

556

作戦会議

562

球技大会本番

569

インターバル

584

初回の攻防

594

戦う理由

610

結末

617

一夜明けて

630

クリスマスに向けて

643

クリスマスに向けて②

649

クリスマスに向けて③

656

クリスマスに向けて④

662

クリスマスに向けて⑤

671

クリスマスに向けて⑥

682

クリスマスパーティー開宴

689

プレゼント交換

703

これからもずっと。

714

# 変化

「私の足を舐めなさい！」

うーん、どうしてこうなってしまったのだろうか？

話は半月程前に遡る。

「エレナ様ご夕飯の準備が出来ました」

「少し遅いんじゃないの楓」

いつもこうだ。エレナお嬢様は毎回何かと理由を付けて文句を言う。洗濯物にわざとスープをこぼして何やってるの！洗濯したてのものになんて染みがついてるのよ！！なんてわめいたこともある。ほんとに何言ってるんだこいつと何回思ったことかわからない。

月村エレナ、今年で18になった月村家のお嬢様。私とは小さい頃からの幼馴染でもある。父親と母親が事故で他界し18という若さで月村家の当主をしている。しかし性格のきつさから月村家に仕えていたメイドは私一人になってしまった。つまり馬鹿広い屋敷には私とエレナお嬢様しか住んでいない。エレナお嬢様の生活サイクルは一定なので仕事は楽だが他のメイドが1人もいない環境というのはどうなのだろう？私

だってまだ17なのだ。友達と遊びに行ったり買い物に行ったりしたい。1人というせいで休みがなく自由な時間は寝る時ぐらいのものだった、

「いいえ、時間丁度ですよエレナお嬢様」

「そう。まあいいわ、楓、ずっと座っていたから足が痺れて立てなくなっちゃったの、手を貸してちょうだい」

「え？あ、すみませんわかりました。」

橘 楓17歳。私の唯一のメイドである。両親はいないと言っていた。何か深い事情でもあるのだろう。楓は私が物心つく前からこの屋敷にいた。歳も近かったので小さい頃は身分なんて気にしたこともなく良く遊んでいたものである。今となっては完全な主従関係が成立してしまっていて遊んでいた頃の面影はお互いがない。

「何か文句でもあるの楓？」

「いえ、では失礼します。」

そう言つて私はエレナお嬢様の細い腕を掴む。ほんと黙ってれば美人なのにな…毎回楓は思っていた。黒髪ロングでスレンダーな体型はモデルと言っても十分に通用するレベルだ。足も長いし羨ましい…って何考えてんだ私。

「今日の夕飯は何なの？」



「はい、マグロのお刺身にカニのお味噌汁に茶碗蒸しとなっております」  
「そう。」

「じゃあ私はこれで。」

私はエレナお嬢様に料理を出すと部屋を出る。毎回のことである。料理を食べる間は私の貴重な自由時間の一つでもある。普通はお側にいるものなんだろうけどどうにも昔からお嬢様は1人で食べたらしい。

「楓ちよつと待ちなさい。」

「はい?」

「たまには一緒に食べない?もう貴方1人になって1年近くになるでしょ。そろそろ私も1人でご飯というものに飽きたわ。面白いテレビもやってないし」

月村家の珍事が起きてしまった。あの人を寄せ付けないエレナお嬢様が私を夕飯に誘うなんて小学生以来じゃないかな?

「お嬢様が宜しいんですしたら喜んで相席致します」

「そう」

エレナが優しく頷いたのを見て少しドキッとした楓だった。

## 姉妹？

「久しぶりね一緒に食事なんて。小学生以来じゃない？」

「そうですね、私もあの頃はエレナお嬢様が次期当主などと知らなかったもので随分失礼をしました」

なんか緊張する……ご飯の味がわからない。

「いいのよそんなことわ。ねえ楓、前みたいに今度からエレナお姉ちゃんって呼んでよ」「はい……？」

箸に掴んでいた刺身を落とすほどの衝撃だった。一体何がエレナお嬢様にあつたのだろう。今朝まではいつもどおりだったのに……

「そんなに驚くことないじゃない。私も寂しいのよ。それに楓だって天音のメイドに大きな屋敷に一人だからちよつと寂しいんだよねって話をしてたらしいじゃない？ だつたら前みたいに上下関係なくお友達、いえ姉妹みたいな関係にならない？」

天音とは緒方天音。緒方家の次期当主で数少ないエレナお嬢様のお友達だ。主人同士が仲がいいと自然に主人の愚痴など言い合つてメイド同士が仲良くなることが多い。ちなみに天音のメイドは伊集院さゆり。伊集院家は代々緒方家に仕えているらしい。

あーなんて言うかなあ……エレナお嬢様のお氣遣いはすんごい嬉しいけどお姉ちゃんだなんて呼べないよ。恥ずかしいし身分つてものが絶対許してくれるはずもない。

「しかしお嬢様。私はメイドです。いくらお嬢様が良いと言われましても他の方の目もありませんし……」

「んーまあ確かにね。でも貴方は小さい時にここに拾われてメイドになったじゃない？

だから血の繋がってない姉妹も同然なのよ!!」

大きな声で宣言するエレナお嬢様。こうなるとお嬢様は聞かない。自分の意見を第一にお持ちの人で、一度決めたら絶対に曲げない。

「本当に宜しいので……? 私としてもお嬢様とお姉妹の関係になれたらとても嬉しくは思います。ですが学校などではやはりお嬢様として接させて頂きます。それで大丈夫ですよ? お屋敷ではお姉様とお呼びさせて頂きたいと思えますので」

「相変わらず楓は頑固だねえ、お母様がきつく指導するからあんなに可愛かった楓がこんなお固くなつちやつたじゃないまったく。後、お姉様じゃなくてお姉ちゃん!」

自分の聞き間違いだろうか。今お嬢様が私の事を可愛いつて言った? え!? あの  
外見だけはモデル級のお嬢様から可愛いって!?

「あ、あのあのお嬢様が私を可愛いっておっしゃられました?」

「言ったけど?」

「失礼ですけどあの、視力落ちてるようなら眼科に行かれることをオススメします…」

その直後バン!とテールブルを叩いたお嬢様が立ち上がりこちらにやってくる。やばい…気が動転してて失礼なこと言いすぎたかもどうしよ…

「もうー!謙遜してる楓もかわいい!」

待つて待つてごめんほんとにわかんない。なんで私はお嬢様に抱きつかれてるの!?そこはピンタして月村家次期当主になんてこと言うの!!じゃないの!?

「え、えつとあのお嬢様、これはどういう…」

「あのね、私が嘘をつかないことぐらい楓だつて知ってるでしょ。貴方は私から見ても可愛い。自信持ちなさいな、今までずっと我慢してたんだからね私。ほんとは堅苦しい話し方も嫌だったしね。お嬢様っていうよりは姉妹って感じで仲良くやろうよ楓。貴方は私がどんなことをしても最後まで付いてきてくれた。そのご褒美でもあるの。メイドから解放されるのよ?」

メイドから解放されてエレナお嬢様の姉妹になる?確かにそれはとても魅力的な話だった。

「えっと姉妹の件は了承しました。私としてもえっと、エレナお姉ちゃんとは仲良くなりたいですし、でもやっぱり家柄というものはありますし、えっと他の方が来られた時に友達口調はやっぱりあれで、それにキツめな性格のお姉ちゃんも私は好きなんです!! っつて今のは違うんです! 気が動転しててえと、あの、ほんとに違くて! ごめんなさい! お食事片付けます!!!」

「ちよっと楓!」

何言つてんだろ私のバカバカ! なんとかお嬢様に納得して貰うような言い方ないだろうかって話しながら考えてたら変なこと言っちゃったよお!! これじゃ私がメイドとして残ったのはDMで綺麗なお嬢様に罵ってもらうためだとか思われちゃうじゃん! これからどう接したらいいかわかんない!

「楓入るわよ」

「ひゃい!」

どうやら私に逃げ場はないらしい…

## 姉妹になりました

「えつと何か御用でしょうかエレナお嬢様…」

それを聞いたお嬢様はむっとした顔をする。

「お嬢様じゃないでしょお姉ちゃん！」

「ごめんなひやい、いたい！いたいれす！」

おじよう、エレナお姉ちゃんが私のほおを引つ張つて注意する。

「まったく…それでさっきの話の続きをしにきたの」

あーやつぱりそうですよね…

「はい…すみません先程は取り乱してしまつて」

「別にいいのよ、楓の本当の気持ち確認出来たしね、それにごめんなさい。楓に少し特殊な性癖つけてしまつて…でも心配しないで！私が責任持つて楓の気持ちに答えてみせるから！」

あかん…この人私が嘘ついたと思つてない。もちろんそんな性癖あるわけないんだけど…つてかもしかしてこれから性欲解消のためにお嬢様が!? つて何考えてるのよ私！

「いえ！あのお姉ちゃん！そんな性癖なくてすね、なんて言ったらいいかわかんないんですけど…」

「え？楓？貴方もしかして嘘をついたというの？」

しまった。エレナお嬢様は嘘が何より嫌いなお人だった。流石に嫌われたくはない。仕方ないか…

「違います！その、恥ずかしくて…お姉ちゃんにきつい言い方されて嬉しくなっていたなんて言ったら気持ち悪がられて一生お側にいられないと思つて…本当にごめんなさい！お姉ちゃんが私に尽くして下さるなんて考えたら嬉しくて嬉しくて気が動転して嘘をついたふりをしてしまいましたすみません！」

ああ…何言つてんの私。いつそ嫌われた方がマシだったんじゃないのかな…

「ほんとに真面目なんだから…別に人それぞれ好きな人も事も違うんだから一々気にしないわよ。じゃあ改めてこれから宜しくね楓。後家では敬語も禁止よ。姉妹なら敬語なんていらぬからね」

「わかり、いえわかつた！これから宜しくねお姉ちゃん！」

「じゃあそろそろ遅いし一緒にお風呂入って一緒のお布団で寝ましょう楓」

「うん！つては？」

「は？じゃないでしょ、姉妹ならそんなこと当然よ」

いやあ流石に高校生でそれしてる姉妹は少ないと思うんだけど…まあお嬢様乗り気だし断るのもあれよね…

「そ、そーだね！じゃあお風呂沸かしてくるねお姉ちゃん！」

「うん！お願いね！」

それから数十分してお風呂は沸いた。

「じゃあ行きましょうか」

「うん！」

二人で脱衣所へと向かう。一緒に脱衣所最後に入ったのは小学3年生ぐらいだったかな。

「なんか新鮮だわ誰かとお風呂入るなんて中学の時から1人だったから」

「私はメイド同士で入ってたから一応なれてはいるかな」

新鮮だわ言ってるけど他の人よせつけなかったじゃないですかお嬢様…

脱衣所にはかわいた布切れの音が響いていた。

あーなんか恥ずかしいなお嬢様とお風呂なんて…同性とお風呂入るのにこんな洋服



脱ぎたくないなんて初めてだよ。

「なにしてるの楓早くいらっしやい」

「あ、うん」

そこには月村エレナの産まれたままの姿がそこにあつた。まるで宝石のように透き通った肌とこぶりな胸。正直に言おう。私は見とれてしまっていた。10秒は見つめてしまった。

「どーしたのよ固まって、私の裸なんて小さい時に何度も見てるじゃない」

笑いながら話すエレナお嬢様。いや、でも昔とは色々違ってますよ…

「いや、そ、そーだよねごめんねお姉ちゃんすぐ行くから先お風呂入ってて体冷えちゃうし」

「わかったわ」

あんな綺麗な人と同じお風呂に入るのか。自分の体を見直しても痩せ細ってるし肌は荒れてるところがあるし…はあ…もうどうにでもなっちゃまえ。どうせこれから毎日一緒に入ることになるんだし。

「お姉ちゃんお待ちせ」

「もう遅いわよ。つてかなんでバスタオル巻いてるのよホテルの温泉とかじゃあるまい

し」

「なんか恥ずかしくて…」

「ごめんなさい普通に無理ですお嬢様の前で素の私を見せるのわ…」

「もーそういう子にはこーよ!」

「え!?ちよつと!!」

巻いていたバスタオルをお嬢様に取られてしまった…

「全く…こんな立派なもの隠してたのね。私に少しわけなさいよ!」

「ちよつとくすぐりたいですつて!ちよつとこれ以上は!んん、んあつ!」

うそ!?私今なんて声だしたの…

「あらあ、楓の弱いところ見つけちゃった。今日寝る前楽しみにしててね」

目がまじだよこの人!私どうなっちゃうの?

この後楓は3分でお風呂を出て寝室に逃げ込んだらしい。

「全く恥ずかしがりやさんなんだから。さて。私も責任取るつて言ったし今日の夜どんな感じにすればいいのかネットですし検索してみようかしらね。楓、貴方の気持ちに絶  
対答えてみせるから」

お風呂場で不敵に笑うエレナを楓は知らなかった。

## 初夜

はあ…お嬢様の前でほんとなんて声出してしまったんだろう…さゆりも良く私の胸触ってきたけどくすぐったさはあつたけどあんな反応したことなかったのに…つてまたお嬢様の事考えてるじゃん！お嬢様来る前に寝ちやお。先に寝ちやえばこっちの勝ちだもんね！

寝れない…あーそりやそうだよねメイドの仕事してた時なんて0時ね5時起きが基本なのにまだ9時だもん。お嬢様はきつちり10時寝7：30起きだから10時までにはなんとか寝たいんだけど…

寝ようとした結果、全く眠れず結局10時を迎えるのだった。

ガチャ。

「あれ、もう寝ちやったの楓、せっかくだから私のベッド招待しようとしたのに。まあいつか私も寝よ」

普通に入ってくんなよおお。少しは遠慮とかないの!?

「ちよつと狭いわね…よいしよつと」

くつつかないでくださいなんか色々やばいんですうう!!

「じゃあ楓おやすみなさい。また明日ね」

チュツ。

え?

今ほつぺたに柔らかい感触が。おやすみのチューとか海外だよお嬢様!色々勘違いしすぎたよ…

「すううう…zzzzzz」

もうお嬢様寝ちやったんだ。生活リズムきちつとしてると寝やすいとかあるのかな。ちよつとお水飲みに行こ、なんか緊張したせいか喉乾いちやった。よいしよつと。

「捕まえた」

「ひいひい!お、驚かさないで下さいよお嬢様!あ、いや驚かさないでよお姉ちゃん!」

突然腕をお嬢様に掴まれた。

「全く、なんで寝た振りなんかしてんのよ。せつかく初めて一緒に寝るんだから少しお話ししようと思ったのに：それに私まだ貴方の責任取るの今日まだやってないし！」

あー：ほんとに信念固いんだからこの人。何されちゃうんだろ私。つてかお嬢様なんでパンツ一枚しか履いてないの!?

「あの、お姉ちゃんパジャマはどうしたの：」

「え？あーそういえば寝る時私が服着ないことなんて楓が知ってるわけないか。私寝る時無駄な者一切身に付けないのよ」

「そ、そうなんだ」

目のやり場に困るんだけどほんと：同性とは思えないほど魅力的なんだもんお嬢様。そりや学校にファンクラブも出来るよね。ちなみに私とお嬢様が通っている高校は聖チエリチヨウ女子大学付属高等学校。名前に女子がついてるだけあって女子高だ。そんな中でもお嬢様は人気がある。もちろん月村家ってブランド目当てに近付いてくる人もいるが8割型は純粋なお嬢様のファンだ。確かファンクラブの名前は、ああエレナ様に罵られ隊だったかな。なんか私がエレナお嬢様に罵られてるの見て興奮した生徒が多数いたんだとかで：だからそんな綺麗なお嬢様が半裸でいたら私も気が気ではないわけ。

「じゃあ楓目を瞑って。今日のお仕置きしてあげるから、貴方にとってはご褒美って意味だけだね」

いや、なんか笑いながら言ってますけど全然私からしたら笑えない案件なんですけど…

「目を？怖いよお姉ちゃん」

「大丈夫だから、私を信じて」

顔が近いんですって！もう私の気なんて知らないで…もうこうなったら言うこと聞かないしだし諦めて目瞑ろ…

「わかったよお姉ちゃん、じゃあ瞑るね」

「ありがとう楓」

楓は両手を掴まれた気がした。何してるんだろうお嬢様…なにか金属みたいな音がしたような気がするけど…って服腕がされてるじゃん全然気付かなかった。ってなにほんと怖いんだけど…

「目を開けていいわよ楓」

「なんなのこれ!?!ちよつとお姉ちゃん!」

説明しよう。私は手錠をかけられ服はパンツ1枚になってるしマジで何してんだ馬鹿野郎って感じになってる。ほんと姉妹だからって許されないこともあると思うんだけど。

「なにつて調教？つてやつよ。さつきお風呂から上がつてネットで調べたから完璧よ！」

自信満々に言っているがほんとに何言つてんだこいつ…

「いやほんとにそういうの大丈夫だからこれ外してよお姉ちゃん、恥ずかしいし嫌だよこんなの」

私は必死に抗議する。しかしそんなもの1度決めたお嬢様が折れるはずもなく…

「大丈夫だから私に任せて、ちゃんと楓の好きなことしてあげるから」

好きなことつてなに、ほんとに私お嬢様に犯されちゃうの???お嬢様は嫌いじゃないけど流石に私も我慢の限界だった。

「いい加減にして！お姉ちゃんのこと好きだけどこんなのおかしいよ！普通こういうのつて好きな人と流れとか段階とかえてするものだって本に書いてあったよ！だから本当にお願ひ、、、やめて、、、」

私は涙を流して抗議した。まあもちろん演技だが。流石にお嬢様も私の涙を見れば考えを改めてくれるだろう…

「可愛い……」

「え？」

「泣いている楓ってこんなに可愛いのね…それに私のこと好きって言うってくれて本当に嬉しいわ。私も楓の事が小さい時からずっと大好きだったの、段階とか踏んで言っただけど私が我慢出来ないわごめんねこんなお姉ちゃんで…」

「おいおいおい、お嬢様に男関係の話聞かないな思ったけどお嬢様の好きな人がわたしい!?別に嫌じゃないけどだどって、でも私女だよ？」

「そんな事を考えてるうちにお嬢様は私の唇にキスをした。」

「んんんちよっとおねえひゃん!」

「楓……」

潤んだ目で見つめてくるお嬢様。

「んんんーんーっ!!」

構わず舌を入れてくるお嬢様。ファーストキスだったんだよ!なんて乙女チックななんて事を考える余裕もなく…それに私は手錠で体を拘束されているので抵抗なんて出来るはずもなく。ああさようなら私の貞操。



「はあ…はあ…楓」

熱を帯びた目をして見つめてくるお嬢様。

「お姉ちゃん…でもこれ以上先は私も恥ずかしいから流石にやめて欲しいかな…それにね、これからずっと一緒なんだからその、そういうことはまた別な日にしたいかなって…」

「そ、そうね、ごめんなさい私、楓からの告白で我を忘れてしまっていたわ、手錠も外さなきゃね、また今度使う時までそのタンスに入れておくから」

その場しのぎはなんとかなったみたいだったけどそれ使う機会ないって…ってか私とお嬢様従者とメイドから姉妹になって恋人同士になったってこと????色々飛躍しすぎてわけがわからなくなりそう。

「う、うん！それじゃおやすみお姉ちゃん！」

「おやすみ楓」

そう言ってお嬢様は私の頬にキスをして眠りについた。

はあ、私これからどうなっちゃうんだろう…

楓は今日何度目かわからない溜息をついたのだった。

## 私の気持ち

ジリリリリリリリリ!!

「うわ、もう朝！早くお嬢様の食事の支度しなきゃ！今何時？は!?もう10:30じゃん！学校もう間に合わないよ、ってかなんでこんな時間にアラームが鳴るの、」

気が付けば昨日一緒に寝ていたお嬢様の姿がない。お嬢様一人で学校行ったのかな？なら起こしてくれてもいいのに、

がちや。

「あー楓起きたの？今朝ごはん作ってるから待っててね」

「え？お嬢様が朝ごはんを、？ってか学校ですよ！もう10:30じゃないですか!!」  
「楓！お嬢様じゃなくてお姉ちゃん！あと今日は土曜日で学校無いよ！それなのに昨日時計見たらアラーム5:00とかに設定されてるしどーせ私の朝の支度とかやるために起きるつもりだったんでしようけどもうメイドじゃないんだからそんなことしなくていいの！今度からはかわりばんこでやりましょ」

あーそっか私メイドじゃなくなつたんだ、ってかちよつと嬉しいかも私のためにお嬢様にご飯作ってくれるなんて、それに私が休めるように気を使ってアラーム遅くし

てくれたんだ、

「ちよつとちよつと！なんで泣いてるの楓？何か私嫌な事言つた？」

え、私泣いてる？あ、ほんとだ全然気が付かなかつた、

「えつと、お嬢様にこんなな気を使つて貰つてそれに結構メイドの仕事辛くて時々心折れそうになつた時とかあつて、解放されたんだなつて思つたらなんか勝手に涙出てきちゃつて、」

「楓、」

そう言うとお嬢様は私を強く抱きしめた。

「ごめんね負担かけて、私がずつとあんな性格だつたばっかりに、もつと早く気付いてあげればよかつた、お母様がキツイ性格だつたからあれが正しいと思つてきつい当たり方してきてごめんね、でもこれからはもうそんな私じゃないから！月村エレナとして橘楓を絶対幸せにするから！」

「ううう、お姉ちゃあああん!!」

何分お嬢様の胸で泣いていたかわからない。私は今までに溜め込んでいたものを全て吐き出した。後1つ疑問が確信に変わった。私は月村エレナが好きだ。ちよろいつて言われるかもしれないがこんなに人から優しくされるのが嬉しいんだなんて思わ

なかつた。時々お嬢様目当てのかっこいい男の人が来ても全然ドキドキだつてしなかつたのに私はメイドをしていた時から時折見せるお嬢様の優しさにすんごいドキドキしたしもつと見たいと思つてしまつていた。全然気が付かなかつたけどこういうのが好きになるつてことなんじゃないかなつて思う。

「落ち着いた？」

「うん、もう平気、、ほんとにありがとうお姉ちゃん」

「もうこれからは絶対に溜め込まないでよ！何回も言うけど私はもう貴方の主人じゃないんだからね！これからは姉妹であつて私の自慢の彼女なんだからね！何かして欲しいこととかあつたらいつでも言つてね、私に出来ることがあつたらなんでもするから」

ほんとにお嬢様変わったんだな、、それに彼女か、えへへへ、素直に嬉しいかも。私も自分の気持ちに素直にならなきや。

「お姉ちゃん。私からもちゃんと言うね。橘楓は月村エレナさんの事が大好きです。これからも姉妹としてそして彼女として宜しくお願いします。あ、後ね、お姉ちゃんが嫌じゃなければその、昨日みたいなキスして欲しいな、、」

その瞬間お嬢様の顔が赤くなつたのがわかつた。自分からやる分には恥ずかしくもないのに私から言うのと恥ずかしくがるんだ。

「わ、わかつたわ、じゃあ楓目を瞑つて、」

「うん、」

私が目を瞑るとお嬢様は私の肩に手を当てて優しく唇にキスをした。

「楓、」

「お姉ちゃん」

その瞬間が長く続いて欲しいと思う楓でした。

## 恋人同士になつて

エレナお嬢様と恋仲になつてから生活は一変した。朝早く起きる必要もなくなり今では0時寝5時起ききの生活が10:30寝の6:30起きに変わりつつあった。朝ご飯はエレナお嬢様の提案で交代交代で作ることになった。お嬢様はお母様の教えもあつて料理がものすごく上手かつた。

「楓、起きて！朝ご飯出来たよ」

「ん、ありがとうお姉ちゃんおはよ」

「おはよ、今日は学校あるから早めに食べちゃつてね」

「うん、後学校ではお嬢様つて呼ぶからねお姉ちゃん」

「えー、、」

「いやええじゃないですよ、この関係知つたらどういふ反応貰うかわかつたものじゃないし、、」

「えーじゃないよお姉ちゃん、私達のためだもん」

「そーね、その代わり家帰つたらいっぱい甘えていいんだからね！」

「もーお姉ちゃんつたら」

そうして私とお嬢様は朝食を食べ終え学校に向かった。私もメイドモードに心を入れ替えて登校した。学校に向かって歩いてみると、

「やつほー！えーれなーかえでちゃーん！」

お嬢様の少ない友達の一入緒方天音様だ。相変わらずこの人は昼夜問わずテンションが高い。

「おはようございませす天音様、それにさゆりも」

「朝から相変わらず騒がしいな天音、もう少し静かに挨拶出来ないのか、あと、楓に抱きつかないで貰える？嫌がってるでしょう？」

別に嫌がってはないんだけど毎朝天音様に抱きつかれるのは慣れたし、毎回朝会うと胸揉まれるんだもん、

「えー!?どうしちやつたのエレナ！前まで私が楓ちゃんにいくらセクハラしようが何も言わなかったのに!？」

あー、そういうところは鋭いのね天音様、

「そりゃ付き合ってる人が触られてるの見て不快に思うのは当たり前でしょうが」

「ちよつとお嬢様!？」

「エレナどうしたこと!？」

「え、エレナさん楓と恋人同士なんですか!？」

さらっととんでもない発言をしたのにも関わらずお嬢様はケロッとした顔で、

「そうよ、私達昨日から付き合ってるのよ、一応学校ではそういうところ見せずにやっていくけどねもちろん」

「いやお嬢様あれだけいわないでって言ったのにどうして言っちゃうんです、、、」

「ごめんね楓。誰かに自慢したくて仕方なかったの、、、」

「自慢したかったのって、天音様、さゆりこの事は学園の人には内緒でお願いします!」

私は頭を下げた。お嬢様が天然っていうのはわかってたけどここまでとは、、、

「ふふふ、大丈夫よ楓ちゃん、そーね、私達だけ秘密知っちゃったしこっちも隠してたこと教えてあげるよ」

「ちよつと天音様!?!それは流石に、、、」

いきなり声を荒らげるさゆり、どーしたのだろう、、、

「なにい? 私に文句でもあるのかな?」

「ないです、、、」

今の笑顔怖すぎだよ、、、人殺せちゃうよ。そのぐらい怖い笑顔を見せた天音様だった。

「じゃあさゆりこっちきて」



「え、はい、つてんー」

「え????」

何が起こったのか一瞬わからないぐらいその行動はとても大胆だった。

「ぶはあ、ごちそうさまさゆり、つてことなの。私もさゆりと結構前から恋人同士だったのよ。まさかエレナと楓ちゃんが出来てるとは思ってたわよ。女の子同士でだけでも特殊なのにあのエレナがねえ、楓ちゃんもすみにおけないなー」

ひじでツンツンついてくる天音様。そっかさゆりに好きな人の話聞いた時好きな人はいるけど教えられないかなって言ったのはこういうことだったんだね。

「い、いやその、私も今見たことは内緒にしますから！お互い様っていうことでいいんですよね？」

「まあそうね、つてエレナ何顔真っ赤にしてるのよまさかキスもしてないの？あんなら付き合つて初日で楓ちゃん押し倒しそうな性格してるのに」

お嬢様の方を見ると顔を真っ赤にしてそっぽを向いていた。自分がやるのはいいのに他の人のは見れないんだ、

「バカ言わないでよそんな事しないわ。まあキスはしたわよ、貴方に隠し事はしないわ」

「あらあ流石に手がお早いようでもまあ今度休みの日ダブルデートでもしましょうよ、そ

れじゃあ学校に行きましよ」

「そーね」

学校に再び向かおうとすると放心状態のさゆりがいたので声をかける。

「ちよつとさゆり天音様とお嬢様もう歩き出してるよどうしたの腰抜かして」

「あー楓、、、いやあ天音様いつもいきなりだから驚いちやつて昨日の夜もお風呂上がったら急に抱きつかれたりキスされたりで大変だったんだから、、、それをここでやられるとは思わなくて、、、」

「大変だねさゆりも、、、もしかしてその首筋の絆創膏ってキスマークだったの？毎日のようにつけてたから火傷のあとでも隠してるんじゃないかなってメイドの中で話題だったんだよそれ」

「あーそーだよ、、、天音様毎回マーキングとか言つて首筋にキスマーク付けるんだもん流石にそのまま学校行けないよ、、、あーもうあんな遠くにいるじゃん天音様。ごめんね足止めて、じゃあ行こ」

「あはは、そーだねいこー！」

身近に同じ境遇の子がいて少し安心した楓だった。

学校につくと、お嬢様のファンで校門前は人だかりができていた。これも毎朝恒例のことである。

「エレナさんこれ良かったら貰ってください!!!」

「私からも!お弁当作ってきたんですよかったです!!!」

「あー今日も素敵ですエレナ様!!こっち向いてください!!!」

改めて思うけど凄いな、そんな人の彼女なんだ私、釣り合ってるのかな、

「あ痛あ!?つてお嬢様!」

いきなりお嬢様に頭を叩かれた。

「今余計な事考えたでしょ?かおにでてたわよ、次そんな事考えたら楓の弱いとこ天音にばらして毎朝そこせめて貰うからね」

「うう、すみません余計な事考えました」

「はい、宜しい」

「楓ちゃんいいなあ、エレナさんにあんな目で見てもらえるなんて、」

「ああ私のこと叩いてえ!!」

ああ今日も平常運転だなエレナ様に罵られ隊は、

「つたくほんとうるさいわね、毎朝毎回こんなことしてて面倒じゃないのかしらこい

つら」

「私に言われましても、まあそれだけお嬢様は人気なんですよ、ささ早く教室行きましょ」

「そーね」

お嬢様のおっかけを軽くあしらって私達は朝のHRが始まる3分前に教室に入った。  
キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン

「はーい、じゃあ皆席についてー」

私達のクラスの担任である七咲 詞（ななさきつかさ）先生が声をかけた。歳は今年で27で外見は黒髪のロングで童顔で貧乳。身長も153センチと小柄で中学生と間違われることもあるとか、しかし生徒からの信頼は厚くつかさちゃんなどと呼ばれている、本人はちゃんと先生って呼びなさい！って言うんだけど誰一人先生って呼んでないのはちよつと気の毒かなって思う、

「えーと、皆知ってると思うけど再来週から修学旅行で京都に行きます。1時間目の学活は班決めになるからねー。班員は4人です、その4人は泊まる部屋、グループ行動とかも全部同じになるからちゃんと考えて決めること！じゃあHRは終わり！今日も頑張ろうね！」

あーそういうえば修学旅行あるんだった。全然頭になかったよ。

「エレナー楓ちゃんももちろん同じ班になるよね？秘密共有してる仲だし」

にやにや近付いてくる天音様。私としても知らない人より知ってる人がいいし賛成だ。

「そーね、じゃあこの4人で修学旅行回りますよ。でもまだ1時間目始まってないのに早くないかしら？」

「はあわかってないわねあんた、、、私が声掛けてなかったら今頃あんたの机の周り人だかりが出来てるわよ、、、人気者って事を自覚しなさいな」

「天音こそわかってないわよ。私がどうでもいいと思ってる奴らなんかと班なんて組むわけないでしょ。あんなんいくら集まろうが無視よ無視」

流石っていうかなんというかお嬢様らしいというか、、、ほら周りの目が恐ろしいことになってるよ、、、

「ほんといつも通りね、ってことで1時間目そういうことで提出しといてきゅり、私は寝る」

「ちよつと天音様授業始まるのに寝るって、、、つてもう寝てるし」

天音様は基本的に授業中は寝てばかりなのに何故か成績はトップクラス。頭の中どうなってるんですか、、、

こうして修学旅行はエレナお嬢様、私、天音様、さゆりの4人で回ることに決まった。

## 前兆

「楓、お昼ご飯を食べに行きましようよ」

時刻は12:45分学校のお昼休みだった。

「お昼ご飯ですか？いつもの用にここ（教室）でいいのでは？」

「何言ってるのよ、せっかく付き合っただし屋上で二人で食べましようよ」

「え、いいんですか屋上なんかに入って？あそこ生徒立入禁止じゃ」

「私を誰だと思ってるのかしら、つかさちゃんに屋上からの眺めの絵を描きたいから入らせてくれ言ったら快くおーけーの返事貰ったわ」

つかさちゃん騙されてるよ、..

「そういうことでしたら折角ですし一緒に一緒にさせてください」

「じゃあ行きましようか」

「はい！」

そう言って私達は屋上へ向かった。しかし屋上には先客がいて、..

「ちよつと天音様これ以上は！っんんはあ、..」

「なによさゆり誰も来たことないんだし大丈夫だつてほら楽にして」

「そう言つてさゆりのスカートに手をかけた時に、」

「ちよつと天音！学校で何してんのよ！」

顔を真赤にしたお嬢様が止めに入った。

「え!?!はあびつくりしたエレナか、、」

「え、ええ!?!見られてたのちよつと楓いるなら止めてよ！」

「い、いやあなんか見とれちゃつて」

「なんだエレナかじゃないわよ！ここ学校よ！わかつてんの!?!」

「もお大きな声出さないでよ滅多に人來ないし見られやしないつて」

「はあ、、、そういう問題じゃないでしょうに、、、見つけたのが私じゃなかったら大騒ぎ

よ」

「んで、何でエレナと楓ちゃんがここに？もしかして同じ事考えてたとか？」

ニヤニヤしながら話す天音様、ほんとこの人は表情豊かだなあつて思う。まあお嬢様

もわかりやすいつて最近わかつたけど。

「んな!?!そんなわけないでしょ！ただ楓と一緒にご飯食べたかつただけよ」

「ええ、ご飯なら教室でも食べれるじゃんどーしてー？」

「なんていうか付き合つて初めての昼食だから誰にも邪魔されたくなくて、、、」



最後の方は聞こえないぐらい小声で言っていた。やばい、お嬢様めちやくちや可愛い  
んだけど。あのお嬢様がモジモジしながらとかほんと考えられない。

「まあそういうことにしてあげる、まあ私達もそろそろ行こつかさゆり、続きは家でね」  
「ちよ！ちよつと天音様！待ってください！」

こうして天音様とさゆりはこの場を後にした。

「す、すごかったですねあの二人、、なんていうか大人な感じでした」

「そ、そーね、まあ私達はお互いのペースでやっていけばいいと思うわ」

「ですね、まだ勇気がないです、もちろんお嬢様にあんな事されるのは嫌いじゃないです  
けど」

その瞬間お嬢様の顔が真赤になった、ほんとこの人わかりやすいなあ、なんか私が  
になりそうだよこのままだと。

「まあ、別に私もそれは、そのゴニヨゴニヨ」

「え？なんですかお嬢様？」

「なんでもないわ！後ね、今日の夜一つ試したいことがあるんだけどいいかしら？」

「はい、私に出来ることでしたらなんでも」

「そう、ありがとう楓、じゃあご飯食べましょうか」

「そうですね」

私達は屋上で2人昼食を食べた。

残りの1時間の授業は座学でそれを終え帰り支度をしてしていると天音様に声をかけられた。

「やつほー楓ちゃん、あのさ今日月村家のお屋敷にお泊まりしてもいいかな?」

「え、お屋敷にですか?別に構いませんがどうしてです?」

「んー、修学旅行の事前練習、みたいな?」

「ようするになんとなくだけど遊びに来たいって感じで大丈夫ですかね?」

「まあそんなところで、平気かな?」

「お嬢様次第ですね、私に決める権利はないですから、今お手洗い行かれてるので少々お待ちください」

「はいはい」

数分するとお手洗いからお嬢様が帰ってきた。

「あーやつときた!遅いよお!」

「突然何よ天音、何か用?」

「そーなの!今日あんたのお屋敷に泊まるから!」

「はあ!?!どうしてそんないきなり?」

「別にいいじゃんーん秘密共有してる仲だしやることないでしょ二人だけだと」

「まあそうだけど、、まあいいわいらっしやいな、貴方達二人の部屋だけど一緒の方がいいかしらっ？」

「よくわかつてるじゃない！流石エレナね！夜エツチ出来なくなるとこだったよ」

「うちのベッド洗濯すんの楓なだけど？そういうことはホテルにでも行つてきて、つてかそんなことしてたら、その、濡れて他の人にバレるんじや、、」

「まったく女同士なのにごによごに言わないの、私のベッドの掃除、洗濯はさゆりにしかさせてないからバレないわよ。その点あのお屋敷に2人なんだからやりたい放題でいいじゃない、ねえ楓ちゃん？」

「いや、同意を求められましても、、」

「全くお互い堂々としなわねえ、まあこの話はまたお屋敷行つた時にさせてもらおうわ」  
この話まだ続くんですか、、普通にトランプとかして遊びましょうよ。

「じゃあ私達は1度お屋敷戻つて準備していくからまた後でねエレナ！楓ちゃん！」  
「はい、お待ちしておりますので」

天音様がいらしたことにまさかあんなことになるなんてこの時は思いもしない楓だった。

## 天音様来訪

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン！

あーうちのお屋敷にピンポン連打する人なんて天音様しかいないじゃん、、来たかな。

「あーうるさい！楓、多分天音だから通してあげて」

「あ、はいお嬢様、とりあえず客間にとおひまふねってなにふるんへすかいひなひふねらないへふたはい」

話してる途中だと言うのに急にお嬢様に頬を抓られた。

「あんたねえ、お屋敷ではお姉ちゃんでしょ！」

「しかし天音様いらつしやりますし、、」

「別にいいわよ天音にばれるぐらい」

「お嬢様がそう言うならそうしますね」

「よろしい」

そうやって私は天音様とさゆりを迎えに行つた。

「天音様おまたせし」「やつほー楓ちゃん!」

最後まで言われるまでに天音様に抱きつかれた。

「メイド姿もやつぱり可愛いねえ」

「あの、胸に顔を埋めるのやめてもらっても、、それにさゆりの目が痛いんですけど、、」  
「なによさゆりいい嫉妬してんの?」

「しないもん、、」

「天音様そろそろ、、」

「んーもうちよつとだけえ」

ほんとこの人は相変わらずだな、、

「あーまーねーねー!!!」

「んあ?つてあいたあ!!なにすんのよいきなり飛び蹴りつてなによ!?!」

「あんた今朝も言つたけど私の楓にセクハラとかいい度胸してるじゃない」

「うわあ独占欲のおばけだよこの人、、楓ちゃん今なら乗り換えキャンペーンで私でもいいんだよーさゆりと一緒に可愛がってあげる」

「遠慮しときます、、私も言うて独占欲はありますし、正直お姉ちゃんがモテすぎて心配  
しています」

「お姉ちゃん、、?エレナ姉妹プレイ強要してるの貴方、、DSはやることわかんない

わー」

しまった、お屋敷の中とはいえ説明してなかった、、

「何言ってるのよ、プレイも何も私達は姉妹みたいに育ってきたんだからそう呼ぶのもなんの抵抗もないし当たり前よ」

「まあお二人が幸せならいいんじゃないすか、んじやそろそろ中入れてよ」

「誰のせいでこーなったとおもってるのよ、、、」

「こうして私達は客間に天音様とさゆりを案内した。

「いつ見ても広いですね月村邸は、、、」

「さゆりも変わらないわねえ、毎回入る度言ってるわよ」

「ですがエレナ様なれないものは慣れませんかよ」

「ふふ、まあ仕方ないわね」

「エレナ様は初対面の頃より表情が柔らかくなった気がします、最初の頃は正直怖かったです」

そりやそうだ。さゆりが会った時のお嬢様は毒舌全盛期。お客様が来て用が関係無くメイドを罵倒していたんだから。

「あーあの時は怖がらせてしまつてごめんなさい、私もあの時は色々焦っていたから」  
「お姉ちゃん私からもいい？」

「ぶっくす」

まだ天音様はお姉ちゃんという単語に笑いを抑えきれないらしい、、

「どうしたの楓？」

「聞いてなかったけどなんであんなにガラツと性格変わったの？最初は変なものでも食べたのかと思っただぐらいびっくりしたんだから」

「きっかけは天音よ」

「え!?! 私なの？なんでなんで!?!」

「貴方の家に行った時メイドから信頼っていか距離感が近くていいなって思ったの、私は距離を置いていたお母様を真似して強く当たっていたら気付いたら楓しかいなかったの。何回も楓がいなくなったらって考えたのよ、考える度にぞっとしたわ。朝の支度は誰がしてくれるの？洗濯は？掃除は？それになによりこの屋敷に一人ぼっちって言うのが耐えられないと思った。それで言ううって決心したのがあの日だったの。楓に酷いことをした分今度は私が楓に恩返しする番だって。だからあの夜貴方がマゾだと思っただけね。だから天音、貴方には感謝してるわありがとう」

そんな風に考えていてくれたんだ、、

「お姉ちゃん、、ありがとう、、」

気付けば私は涙を流していた。

「もう、ほんと泣き虫なんだから」

お嬢様は私を抱きしめて頭を撫でてくれた。あーダメお嬢様に対する好きって気持ちを抑えられない、あの夜みたいにキスしたい、

「お姉ちゃん」

「ん？どうしたの？」

顔をこちらに向かせ強引にお嬢様の唇を奪った。それだけでは私は満足出来ず舌を入れお嬢様の歯茎や歯、舌をこれでもかと舐め続けた。

「はあ、はあ、、ごめんなさいお姉ちゃん我慢出来なかった」

「楓、、次は私の番」

「へ？んん!!」

今度はお嬢様が私の口の中に舌を入れてきて同じ事をしてきた。負けじと私もやり返す。

「はあ、楓がつつきすぎだつて」

「お姉ちゃんこそ凄かったよ、ほんと私幸せだよお姉ちゃん」

お嬢様が私をそっと抱きしめてくれて頭を撫でてくれる、それだけで私は幸せを噛み



締めていた。しかし大事な事を忘れている気がする、

「楓ちゃん見かけによらず大胆だね、さゆりともそんな情熱的なディーチューしたところないかも、」

「楓／＼／＼」

「あ、あのその、すみませんお茶の準備してきます!!」

「楓待ちなさい!こんな状況で私置いてかないで!」

「お姉ちゃんは待つて!今顔見られたくないから!!」

私はキッチンへ続く扉に鍵をかけ侵入を防いだ。

ああ、何してんだろ私、今お嬢様への好きの気持ちがい慢出来なくて半ば強引に唇を奪つてその先まで、はあどうしよう見せる顔ないよお、とりあえず落ち着いたらお茶出しに行こう、

「楓開けなさい!今あなたのせいで客間でさゆりと天音が同じ事おっぱじめてすんごい居づらいの!お願い!」

「ええええ!!あ、はい!今開けます!」

「全く逃げることはないでしょ、別に恋人同士だからあんなこともしたくなるのは普通

よ、性欲は三大欲求の一つなんだから」

「まさか私もあんな感情表に出ちゃうとは思わなくて、、つてか天音様我慢出来なかつたんですね、、」

「あそこに一人で置いていかれるのはきついわ、、しばらく放っておいて先にお風呂入らない?」

「そうするかな、お客様にお茶のひとつも出さないのいいのかな?とは思うけど、、」

「じゃあお茶だけ出しに行つて貰える?客間入る前に確認して入つた方がいいわよ、、入りにくい状況なら部屋の前に置いてきていいから。私お風呂沸かしてくるね」

「わかつた、うんお願い!」

お嬢様に敬語外すのも大分慣れてきたなあ。さて客間客間、、つて!?

「さゆりダメだつてこれ以上は!!ちよつとブラ外さないでつてんー!!!」

私は何も見てません何も見てません。親友がブラ外して胸揉んでるとこなんて見てません。

「お姉ちゃーん!!!」

「あーやつぱりそーなつてたのね、、」

「流石に親友のあれしてるところは見たくないし、、つてか立場が逆転してたよ、、受け

が天音様になってて、そこだけは流石にびっくり、、、」

「あの天音がねえ、、、立場逆転か、私達もやってみましょうか」  
「へ？」

お嬢様のこの発言があんなことになるなんて、、、

## 楓、壊れる

こればかりはやっぱ慣れないなあ。

恋人同士になる前からだがお嬢様とのお風呂だけはほんとに緊張する。毎日のようにお嬢様の純白の身体見てるはずなのに見るたび見るたび危ない欲求に駆られてしまふ、、、そんな私の心情なんかは知る由もなく、、、

「あーほんと楓のおっぱい大きくて羨ましいなあ、私と同じもの食べてたはずなのになんでこんなに差が出るのかしら」

毎日のように私の胸を触ってくるのをほんとにやめてほしい、、、毎回理性が飛ぶギリギリまで触られるからそのせいでお嬢様が眠った後で何回こっそり熱を冷やしたのかわからない、、、

「だからお姉ちゃんおっぱい触るのやめてっばくすぐりたい」

「別にもつたいぶることないじゃないこんな立派なもの持つておいて、えい！」

「ひやあーちよつとやめてよお姉ちゃん！」

「ほらほらあ逃げないの楓」

私の弱いとこを知ってるお嬢様はそこを執拗に責めてくる。手つきがおっさんだ

よ、こ、こー週間ゆつくりお風呂入れてない気がする、最後の手段使うか、  
「今度ゆつくり触らせてあげるからお風呂ぐらいゆつくり入らせて！」

それを聞いたお嬢様は口元をニヤつかせて

「その言葉を待ってたわ、じゃあ今日の夜にね、それに貴方に毎回夜な夜な自慰行為されたんじゃ私もすんごく寝にくいし」

「んな!?なんで知ってるんですかあ!!」

「あれでバレてないと思う方がおかしいわよ、毎回私が決まって10時に寝るからって11時にガサゴソ「わあ!!もういいですからこれ以上言わないでください!!!」

「じゃあそういうことで今日の夜楽しみしておくね楓」

私今夜どうなっちゃうんだろう、

リビングに行くとか天音様とエレナがテレビを見ていた。

「あら貴方達いつの間に終わってたの？」

「もうとつくの昔よ。エレナ長風呂すぎ!どれだけ待ったと思ってるのよ」

「そんな長く入っていたつもりはないのだけれど、いいから貴方達もお風呂入ってきなさいな、洗濯物はカゴがあるからそこに入れといて」

「はいはい、さゆり行こー」

「うん、天音ちゃ、ゴホン。天音様」

「今絶対天音ちゃんって言ったよねお姉ちゃん」

「ええ、、やってることほとんど私達と変わらないわね」

「だね」

なんだかおかしくて二人して笑ってしまった。

天音様とさゆりがお風呂から上がるとすぐに天音様は疲れたから寝ると言って寝室に入られました。明日は学校がないから私もゆつくり寝れる。

「お姉ちゃん、私達もそろそろ寝ない？」

「そーね、流石に眠いわ」

そうして私達はベッドに入って寝ることにした。そういえばなんか忘れてる気がする、、、

私はそんな事を考えているうちに深い眠りについた。夜中何か身体を触られている気がして目が覚めた。

「気のせいかな、ふああ、寝よ」

「気のせいじゃなかったりして？」

「え、お姉ちゃん？つてひやあ、ちよつとなんで私の胸触ってるの、、ちよつとそこはダ

メっ、ひゃあんーお姉ちゃんこれ以上はっ!! あ、ちよつとほんとに! んー、!!  
ひたすら弱い所を責められた私はものの数秒で絶頂してしまった。

「あー満足したわ、おやすみ楓」

え? 人の身体弄んでそれ!?! お嬢様の態度を見た私はちよつとカチンときて、、

「何言ってるのお姉ちゃん? 次はお姉ちゃんの番だよ」

「え? 何言ってるの? ちよつと楓目が怖いんだけど、、 つてんー! かえれ!」

私の心を引き止めていた鎖が外れたのかはわからないが私は強引にお嬢様の唇を奪ってそのまま馬乗りになっていた。

「お楽しみはこれからだよ」

「楓待って、私が悪かったから! だから今日の所は寝ましょ? ほ、ほら天音とかも来てるわけだからね?」

私は満面の笑みでこう返した。

「今夜は寝かせません」

それから私はお嬢様の身体を明け方近くまで責め続けお嬢様は快楽に溺れ気絶してしまうほどだった、、

## 月村エレナはマゾである

やっちやっつたあああ!!!

時刻は10:30 楓は昨夜の自分の暴走を思い出していた。かあああつと自分の顔が熱くなるのが自分でも分かる。つてかヤリ疲れてお互い寝落ちって酷すぎやしないか、、、シーツはぐちよぐちよだし私の体も熱が抜けきつていない。取り敢えずお風呂行こうかな、、、お嬢様はまだ起こさなくてもいいや。

風呂場へ向かう途中天音様とすれ違った。

「おはようございませす天音様、すみません朝ごはんちよつと待つてもらってもいいですか?今起きたものでして、、、」

「おはよー、全然大丈夫よー。私達も今起きたとこだからあ、お風呂だよね行くの?私も行ってもいいかな?」

「ありがとうございます、あーそーですけど何でわかつたんです?」

「そりゃ昨夜あんだけやって寝落ちしたらお風呂にでも行きたくなるかなと思って!?!」

「なんで知ってるんですかみたいな顔してるけど隣の部屋だよ私達、、まあ覗きに行っ



ちやつたけどね！それにしても楓ちゃんガチsだねえ。快樂から逃げようとするエレナ完全に抑え込んで何回も何回もイかせて今度は自分を気持ちよくしてもらおうと早く舐めて？つて自分差し出した時はすげえなこいつつて思っちゃったよ」

待つて。全然そんな記憶ないんだけど、、つてかお嬢様に対してそんなことしてたのわたいしい!？」

「すみません昨夜の記憶暴走したか飛び飛びで、、私そんなことしてたんですか」

「うん、やつぱりメイドやつてたら何かとたまるから立場逆転しがちなのかもね、さゆりもめちやくちやsなんだよあー見えて、毎回向こうのペースになっちゃうもん、まあこんな話は置いといて早くお風呂行きましょ」

「そ、そうですわ行きましょ」

私がs、、そーいえばお嬢様と付き合う前自分がmだつて偽つてたのが懐かしいな。

「はあ気持ちいい」

「ほんとですね、ほんとに昨夜は疲れました」

「まあねえ、言うて私達も明け方近くまで起きてたからさゆりもしばらく起きてこないと思うから昼ご飯からでいいよ、朝は抜こ」

笑いながら話す天音様、いつもの人懐っこい笑顔である。

「あ、そーだったんですか、わかりました。何か食べたいものとかありますか？」

「そーねえ、オムライスとか久々に食べたいかも！最近全く食べてなかったから」

「オムライスですねわかりました！任せてください」

「やったー！楽しみにしてる」

「はい！」

私達はお昼ご飯の話などたあいな会話をしてお風呂から出た。

時刻は11:15分になっていた。お嬢様はまだ起きていないみたいなので私は洗濯物を干していた。

「おはよ楓、私も手伝うよ」

「おーさゆりおはよ、いいよいよお客さんなんだから」

「いやなんかいつもやってるから落ち着かないからやらせてよ」

「職業病だね、じゃあ少しお願いしようかな」

「おっけー」

確かに気持ちは分かる。普段屋敷の中を掃除したり洗濯とかをやっていると他の人の屋敷に行った時にメイドが働いているのを見ると私も手伝おうかなって思う時も多々あった。

「それにしてもほんとエレナ様変わったよねいつからなの？私怖くて仕方なかったのに今じゃ正反對じゃん、笑顔なんてほとんど見たことなかったよ？」

「私もびつくりだもん、別に横暴なお嬢様も嫌いじゃなかったけどやっぱり笑ってくれた方が私としても嬉しいしね、それにお嬢様の笑顔ほんと綺麗で毎回見るたび見とれちゃう」

「ふふ、ほんと大好きなんだねエレナ様のこと。惚気けちやつて全く」

「大好きだよ。でも天音様のこと大好きじゃんさゆりだつて、一緒よ一緒」

「そーかもね」

その後2人してお互いのお嬢様を褒めあつては笑いあつての繰り返しだったらしい。

時刻は13時を回った頃、昼食も作り終え後はお嬢様を待つだけなんだけれどもまだ起きてこられない。

「珍しいわねエレナがここまで寝てるなんて」

「ですね、ちよつとようすみてきます」

それにしたつて遅いなあ。毎回遅くても10時とかには起きてるのに。

「お姉ちゃん起きてる？、、ごめんなさい失礼しました昼食先に食べてますので」

「え!? 楓ちよつと待ってこれはそのなんというか、違くて!」

そこには私のパジャマの臭いを嗅ぎながら1人自慰行為にふけているお嬢様の姿があった。そこには前までの人を見下すような視線で話したり横暴な態度を取っていたお嬢様のかけらもない姿だった。

「何が違うんです、、 お嬢様」

私はわざとお姉ちゃんとは言わずお嬢様と強く言つて少し軽蔑した振りをしてみた。

少しは反抗の態度取られるかなつて思ったがその真逆だった、、

「ああ楓にまたそんな目をしてもらえると思わなかった、、 もう一度今の目してよ楓」

待ってわかつちやつたかも、、

月村エレナは、、

ただのドMだこれ、

人のことMとか言っておきながら実は自分が一番ドMなんじゃん。

「お姉ちゃん人にMとか言っておきながら実は自分が一番ドMの変態さんなんじゃないの?」

「な、何言ってるのよ楓、そ、そんなわけないじゃない」

バレバレである。視線は動いてるし言葉に覇気が全く感じられず誤魔化すことしか考えてないみたいだ。

「ふーんそーなんだ。変態さんなんだねお姉ちゃん。取り敢えず私のパジャマ返してもらって早く服着てリビング着てよ皆待ってるんだけど」

「今すぐに行かなきゃだめかしら、、、後少しでその、、先に行ってよ楓、パジャマも後で洗濯機に入れて洗っておくから」

「私先に行かせた後で何するか教えてくれたら少しだけ考えてあげてもいいよ」

「えっとそれは、、ちよつと火照った身体冷やそうかなって、、」

やばいなんかゾクゾクする。私も気付いちやつた、、、すごいサディストかも。お嬢様もノリノリだし私も悪ノリしちやおつかな。

「その冷やすことなんていうの？お嬢様ならわかりますよね？それに言ってくれたらその作業私も手伝って上げてもいいよ、、お嬢様」

お嬢様と冷たく言う度に私のパジャマを下腹部に当ててるのが見てわかるからこの口調をやめられなかった。

「えっと、オナニーです」

小声で言うお嬢様。

「お嬢様聞こえません。私に罵声浴びてた時ぐらいの音量でお願いします」

「楓の意地悪、、おな、その、だから、、オナニーです！もうこれで勘弁してえ、、」

泣きそうになりながら顔を真っ赤にして主張するお嬢様。

「やれば出来るじゃないですか、私に何をして欲しいのお姉ちゃん」

「えっと、前に本で読んだことがあるんだけどね、その、足を舐めさせて欲しくて、、」  
なんて本読んでるんだよこの人は、、今度お嬢様の部屋掃除した時に処分しておかなきや、、

「えっと、足を、、？汚いと思うんだけど、、」

「楓の身体で汚いところなんてないわ！」

もうダメだこの人、自分が気持ちよくなることしか考えてない、、遅いつて天音様も覗きにくるかもだし早いとこ終わらせるかな、、

「まあ約束だから、、はい」

私はスルスルと靴下を脱いでお嬢様の顔の前に差し出した。

「えっとね、命令して欲しいの私に」

「命令、、？」

「うん、私の足を舐めなさい！つてゴミを見るような目をしながら言つて欲しいの！」

うわあ、、流石にガン引きですよお嬢様それわ、、私を罵倒してた頃のお嬢様が見たら泣きますよこれ。

「わかりました、じゃあ行きますよ」

「うん、お願い！」

すんごい目がキラキラしてるよ、

「私の足を舐めなさい！」

「はい、舐めさせて頂きます楓様」

無我夢中で私の足を舐めながら下腹部をいじるお嬢様は本当に幸せそうな顔をして  
いた、

ほんとにどうしてこうなった？



## 決意

「遅くなって悪いわね天音」

「全くあんたが1時過ぎまで寝てるとかびっくりしたわ、疲れてたんじゃないの?」

「んーそーかも。取り敢えずご飯食べましょう」

「そーね、つて楓ちゃんは?」

「あー、楓ならお手洗い行ってくるから先に食べてつて言つてたわよ」

「ごめんなさい天音、それは嘘。私が足をペろペろ舐めてたせいで唾液だらけになってしまったせいで足を洗いにお風呂に行きました、、、、」

「あーそーなの、じゃあ食べてようか」

「それで10分ほどするとお風呂から帰つた楓がひよこつと顔を出した。」

「ごめんなさい遅くなりました」

「大丈夫だよー、あれはエレナが悪いもんねー、足舐めさせては私も許容範囲外かな、つて痛い痛い!エレナさん!」

「顔を真赤にして天音様の脇腹を思いつきりつねるお嬢様がそこにいた。つてか見られてた、」

ほんと天音様隙がないっていうかなんつうか、

「いつから見てたの、？」

「ええとね、楓ちゃんの様子見に行つてきます行つてからこつそりついていつてたから最初からかな、でもほら！人様それぞれ好きなことあるだろうし私はいいと思うよ」

最後の方思いつきり違う方見て言つてましたよね天音様、まあ流石にあんな姿のお嬢様は誰にも想像出来ないわ。

「あんたらが盛つてた時見ないふりしてあげたのに！」

「みられるほーがわるいんだよおだ」

笑いながらテーブルの周りを追いかけてっこしているお嬢様と天音様。とてもじやないけどお互い名の知れたところのお嬢様だとは思えない、

「ちよつと天音！うるさい！ほこりたつ！」

その追いかけてっこに終止符を打つたのは天音様のメイドであるさゆりだった。

「はい、すみません」

「ちよつとさゆり！お嬢様にそんな口聞いて大丈夫なの！」

普通はメイドが上の立場の人間にタメ口、暴言などはいたら下手したら解雇とかの扱い受けるって聞いたことがあつて私はさゆりに問いかけた。

「別に何の問題もないわよ。今はプライベート中だしね。学校とお屋敷では敬語は外せ

ないけどプライベートなら友達感覚で話してつて天音から言われてるから」

「あーそーだったんだね、私もなんだよね実は。お屋敷の中ではお姉ちゃんって呼んでつて言われたりね。お互い似てるね」

「そーね」

笑いながら話していたらお嬢様と天音様も追いかけてつこをやめ食事に戻っていたようだった。

昼食を食べ終わると各自自室に戻って昼寝をするもの読書をするもので別れた。泊まりに来てそんなバラバラでいいのか？と思うかもしれないがそんなものである。何かしら1人の時間が欲しくなる時だつてある。私は何をしていたかというと、

「楓様もつとわたくしめを罵つてそのおみ足で踏んでくださいまし」

このダメなお嬢様の相手をしていた、

決めた。

私はお嬢様の性癖を完全には治せないかも知れないけど少しでもまともにしてみせるつて。

## エレナ感激です!

夜になると知らない間に天音様とさゆりは帰っていた。私もお嬢様の相手をして疲れて3・4時間ほど寝てしまっていてお見送りが出来なかった。屋敷のメイドとしてこれはダメだろうって自分でも思う、、最近お嬢様にもうやらなくていいのよって言われてから少し気が緩みっぱなしの気もするし、、取り敢えず夜ご飯作りに行こうかな。お嬢様に何がいいか聞こに行こ。

しかし私がお嬢様の部屋に行ったらお嬢様はそこにはいなかった。ん?どこに行つたんだろう?リビング、キッチン、お風呂場、娯楽室、書庫、両親の部屋を探しても見つからない。え、ほんとにどこに行つたんだろう、、普段お出かけになる際は絶対に私を横に置いて出掛けるのが当たり前になっていた。だから1人で外出したことはないお嬢様を野放しにしたら道に迷つたり変な人に声を掛けられる可能性だってなくはない。私は考えるより動いていた。

『探さなくちゃ!!いくら高校生とはいえお嬢様はちよつと世間知らずだし、、』

思いつきり玄関の扉を開けた時だった。

「ぎゃああああいつたああああ」

「はっ」

おそるおそる叫び声の方を見るとお嬢様が倒れていた。

「お嬢様!! え!? なんて扉の先にいるんです!? お嬢様! お嬢様!! しっかりしてください!!」

「うーん、、、 ああいつたあ、、、」

意識はあるみたいだ。

「すみません今お部屋まで運びますので」

私はお嬢様をお姫様抱っこして寝室まで運んだ。

「ちよつと待つてて下さいね冷やすもの持つてきますので」

すぐ冷凍庫から保冷剤と乾いたタオルを取つてきてお嬢様の頭を冷やした。よく見るとたんこぶが出来ていた。

「本当に申し訳ございませんお嬢様、、、 綺麗なおでこにたんこぶも作つてしまつて。ほんと何てお詫びしたらいいか、、、」

「お姉ちゃん」

「はっ」

「お姉ちゃん! 慌てすぎよ楓。そんなバタバタしなくても私は死にはしないしたんこぶ

なんて気にしないわ。」

「ですが「でも!敬語まだ抜けないの?」

「あ、ごめん」

「もーすっかりしてよね、でもなんであんな大慌てて扉開けたのよ?」

「いや私が起きたらいいないんだもん、お姉ちゃん1人で出かけたことなんてないだろうし道とかに迷ってたらどうしようって思ったら探しに行かなきゃって思ってたで慌てて、」

「もー私だって高校生なんだからね、そのぐらい大丈夫よ、まあ心配してくれてたのねありがとう」と

優しい顔でありがとうなんて言われるの慣れてないからほんとクラッとくる。美少女のありがとうほど強いものはない。

「う、うん。これからは気を付けるね」

「つてか寂しかったんでしょ私がいなくて」

「い、いや別にそんなことは」

「ふーん、ねえ楓熱でもあるんじゃないの?顔赤いわよ」

そう言ってお嬢様は私の顔を自分の前にもっていっておでこをおでこをくつつける。

キスとかはしたけどこれはこれですごく恥ずかしい。直前まで冷やしたお嬢様の

おでこはひんやりしていて気持ちよかった。しばらくしてお嬢様は満足してがっちり  
ホールドしていた頭を離してくれた。のだが、

「楓、」

知らない間にお嬢様の目がうつとりして吐息が荒くなっていることに気付いた。  
ああ今のでスイツチ入ったか、でもここでまた流されたら昼間と同じになる。私だつ  
て女子高生だ。性欲だつて無いって言ったら嘘になる。でもいくら付き合いたてでイ  
チャイチャしたくたつて一日数回はやりすぎだつてことお嬢様に分かつてもらわな  
くつちや。

「お姉ちゃん、じゃあ私何か作ってくるから」

私は逃げるように寝室から移動しようとした、のだが、

「ちよつと待つてよ楓！」

ガつと足を掴まれて思いつき転んでしまう。つてか普通に痛いんだけど。彼女に  
対してどうなのよそれ、

「お姉ちゃん痛いんだけど」

ちよつと不機嫌さが声に出してしまったかもしれない、そんなことを私が気にしてい  
たのだが、

「ご、ごめんなさい楓様！ですが私はその、楓様に昼間のようなことをお願いしたくてで

すね、、、」

ほんととお前誰だよってレベルの変化してるんだけどこの人、、、もしかしてちよつと私  
がきつくあたるとこーなっちゃうの、、、?

「あ、あのお姉ちゃん」

「なんででしょうか?」

「いやなんで敬語?」

「だってその、、、私的にはそつちのが好きですし」

「いや、ごめんねお姉ちゃん今日はもうやる気ないんだけど、、、正直疲れたって言うかま  
た明日の夜とかじゃだめ、かな?」

「分かりました!放置プレイってことですよね!そういうのもあるって本に書いてあり  
ました!そこまで考えてくださるなんてエレナ感激です!」

「ぶふっ!」

エレナ感激ですって、、、ぷ、ダメだ笑つちやいけないあんなんでもお嬢様からしたら  
真面目に言ってるんだでも無理笑いこらえられるわけないこんなの。

「お姉ちゃん、わ、私先に寝てるからね!」

急いでその場を後にして私は自室で枕に突っ伏して笑い声を押し殺した、、、



## 学校にて①

私は明け方にトイレに行きたくなつて目を覚ました。

『はあ、昨日は散々だったな、お姉ちゃん怪我させちゃうしちよつとこじらせるし、ダメだ思い出し笑いしそう考えんのやめよ。今日は普通に学校あるしトイレから戻ったら1時間寝直して朝食の準備でもしなきゃ』

コンコンコン

「お姉ちゃん起きてる？」

朝起きてそろそろ学校へ行く準備をしなきゃなのにまだお姉ちゃんは起きていないみたいだった。

「入るねー。つてあれ？いないじゃん。」

お姉ちゃんが寝ていたと思われる布団は綺麗に畳まれていた。

「ん？何してんの楓？」

「あ！お姉ちゃんいた！どこ行つてたの？朝だから起こしに来たらいないんだもんビツ

クリしたよ」

「あーちよつと最近熱くなつてきてじゃない？だから寝てる間汗かいたからシャワー浴びてたのよ」

「あーそーだったんだ、朝ごはん出来てるから食べちゃつてて、私は洗濯物干してくるか」

「はいはい、じゃあまた後でね」

そう言つて私達は各自学校に行くまでにやることをやつて学校へと向かった。

「今日の1時間目って何だっけ」

「えつと、確か体育でバレーボールだったと思うよ」

「バレーボールかあ。いきなり疲れそうね、」

「お姉ちゃんエースだしね」

「やめてよたかが体育でエース扱いされても困るわ」

前にも言つたが月村エレナは学園の人気者で運動神経も良く体育などではメインポジションに置かれることが多い。去年の球技大会のソフトボールではなんと4試合全ての試合にピッチャーとして出場しソフトボール部相手にも完封勝ちするなんてわけのわからないことをしていた。

「いいじゃんエース様、ねえ楓ちゃん」

「あ、天音様おはようございます」

天音様ときゆりと私達は合流した。

「あんたねえ、負けたら私のせいみたいになるでしょうが。1年の時全学年の合流のソフトボール大会で決勝で私が打たれたからって嫌味言ってきた馬鹿な先輩何人いたと思ってるのよ」

「あーお姉ちゃんそのことなんだけど、、、」

「ん?」

「その先輩は私が二度と学校来れないようにしたから、また何かあつたら言つてね」  
周りにいた3人の空気が変わったのがわかった。

「楓ちゃんが黒いよエレナ。あんた何教えたのよ」

「何も教えてないわよ、、、つてか何したのよ楓」

「ちよつと裏連れて行つてお話しして襟首掴まれたからやり返したら泣いちやつて次の日から来なくなつちやつたんだよね、つてかさゆり見てたじゃんあの時」

「あー思い出したくないからやめてあれ。ほんとあの時見てる私が怖かつたんだから」

「エレナ、楓ちゃん大切にしなね、、、」

「わ、わかってるわよ」

「まあこの話はやめて学校行きましょうよ」

こうして私達4人は学校に向かった。

キーンコーンカーンコーン

「おはよー席ついてねーHR始めるよー」

私達の担任の七咲詞先生が入ってくる。相変わらず童顔でスーツがコスプレに見える。まあ可愛いんだよねほんと。

「それじゃ修学旅行まで1週間になったわけだけど皆計画建てられてるかな？」

各席からまだなんもーだとかもう完璧だとか様々な飛び交う中私達の班はそういうえげつないにも考えてないなって思った。

「お嬢様どこ行きたいとかありますか？」

「そもそも修学旅行に行きたくないんだけど？」

予想してる答えと180。違う回答が返ってきてしまった。

「ええ、ちよつとそれは流石に容認出来ないと言いますか、ってか行かないと単位に響きますよっ。」

「別に私進学しなくても幸い両親が残してくれた遺産あるし楓さえいればそれでいい

わ」

いやあ流石にそれはダメでしょって言おうとしたら横槍が飛んできた。

「ちよーつと聞き捨てならないかなそれ」

「何よ天音」

「私は楽しみにしてんの！行かないならあれ放送室から流しちゃうから」

「は？なによあれって？」

「あれ言わなかったっけ？これだけど？」

そういつて天音様は何故か胸元から iPhone を取り出して机に置いた。

「あんたそれ私に対する嫌がらせかしら？」

「べつつにー。それじゃ再生つと、おつと楓ちゃん、さゆり誰かに見られるとエレナが死

んじやうから携帯隠すように立っててね」

「あ、はい」

お嬢様が知られるとまずいことって私の中だとーつしかないんだけどまさかな、、

「んじや再生つと」

そこに映っていたのは昼過ぎまでお嬢様が寝ていて私が起こしに行つて月村エレナマゾ事件が起きた時のやりとりそのものだった。しっかりと私の『足を舐めなさい』つていう言葉も入っていて私は途中から見えられなかった。

「あの、天音様流石にこれは、」

さゆりからもフオローが入る。いくらなんでもちよつと、ね。

「エレナにはこれぐらいしなきゃ動かないのよ。中学の時も修学旅行私に黙って休んで私だけ先生と回るハメになったんだから。ね、エレナ？」

「楓、調べてほしいことがあるのだけど」

「なんでしよう？」

「殺人、完全犯罪、方法」

「はい!？」

「生かしておくわけにはいかないわ、」

「ちよ！落ち着いて下さいお嬢様！天音様には消してもらおうよう私からもいいいますから！」

「ほら天音様謝って下さい！」

さゆりからも天音様に謝罪の言葉が送られる。

「もー、そんな怒んないですよ。ほら消したわよエレナ、ごめんて」

お嬢様は下を向いたつきり頭を上げようとしなかったので下から顔を覗き込んでみた。

「お嬢様、天音様も消してくれたみたいですよ、ひいひい」

「ちよつとどうしたの楓ちゃん！ エレナが何かつてうわ顔こわ、」

今までに見た事のないほど怒りに震えるお嬢様がいた。なんていうか眼だけで人を数人殺せそうなレベルだった。

「はあ、、天音。次はないわよ。修学旅行には仕方ないから行ってあげる。その代わり」  
「その代わり？」

「しばらく私のパシリになりなさい。普段さゆりちゃんに昼飯とか買いに行かせてるでしよ？ たまには自分の足で行くことも覚えなさいな」

「ええ!? なんですよんどくさうっ、」

ぱたん。口答えしようとした天音様にお嬢様の無言の腹パンが決まったア!!! じゃなく、、

「ちよつとお嬢様!?!」

「口答えしようとした罰よ。ああスツキリした。着替えて体育館行きましょ。1時間目に遅れるわよ。ほらさゆりちゃんも。そのバカ放つておいても大丈夫だから」

「ええ、ですが」

「い、く、わ、よ」

「はい。」

人を殺せる目で話しかけられ私達はどうすることも出来なかった。ごめんなさい天





## 学校にて②

「相変わらず楓の胸おつきくて羨ましいなあ」

「毎回着替えるたびにそれ言うよねさゆり、」

私達は1時間目の体育に備えて更衣室に来ていた。お嬢様に腹パンされて倒れていた天音様も合流して今はピンピンしている。

「だって羨ましいもん！やっぱり女に生まれたからにはちよつとでも大きい方がいいじゃん」

「そんなもんなのかなあ」

「そういうものよ、まあ私は気にしないけどね」

「お嬢様？」

横から割ってお嬢様が会話に混ざってきた。

「なによ」

「いや、なんでもないですが、」

私は知っている。天音様に胸の大ききさとかの指摘を受けると毎回自室で溜息をついていた。この前はシャットダウンし忘れたのかつけっぱなしになっていたPCを見て

みるとバストアップの方法を調べていた。

「楓ちゃんない乳の2人は置いておいて早く行きましょ」

横から天音様がお嬢様とさゆりを煽る。これはお嬢様から聞いた話だが天音様は私と同じdカツプらしい。ちなみにさゆりはbでお嬢様はaらしい、、、

「天音様また怒られますよ、、、」

「事実を言つて怒られるなんておかしな話よ。ほらエレナとさゆりもそんな目してないで早く行きましょ」

「さゆりちゃんわかつてるわよね」

「ええ、もちろん」

後から何かの企みみたいな会話が聞こえたが聞こえなかったことにして私達は体育館に向かった。

「じゃあ今日の体育はバレーボールでクラスで2つに別れて試合をして貰います！チーム分けは目の前のボードに貼つてあるのでそれみて別れて下さい」

一同「はい」

私達のクラスは全体で15人と少ない人数で構成されている。聖キエリチヨウ学院の全校生徒も3学年で280と少ない。まあ学費とかくそ高いからねこの学院。

「あ！楓ちゃん一緒のチームだね！頑張ろ！」

「あ、そうみたいです！宜しくです！」

えつとお嬢様は、、相手チームみたいだ。それにさゆりもか。お嬢様敵に回すときついんだよなあ、、

ちなみにチーム分けはこんな感じだ。

カバンチーム

月村

伊集院

田中

菊池

丸井

涼風

チエリーチーム

橘

緒方

東田

扇

天矢

栗原

欠席が3人いるため6. 6のチーム構成で試合が行われる。

「じゃあ最初はチェリーチームのサーブで始めるよー」

体育教師の佐伯先生の指示で試合開始の笛がなった。

「よっしやー！エレナ倒すよ楓ちゃん！」

「たまには勝ちたいですね、じゃあサーブお願いします天音様」

「おっけー！そーれ！」

天音様の大きな弧を描くサーブから試合が始まった。

「涼風さん！いったよ！」

お嬢様の大きな声が体育館に響く。やりたくないとか言っているも負けず嫌いな性格が響いてたかが体育だからって手を抜かないのがお嬢様だ。

「はいよ！さゆり！」

「任せて！」

涼風さんからさゆりにトスが繋がる。最後はもちろんお嬢様が打ってくるのはわかっているが止められるか、

「エレナ様！さっきの仕返しです！」

「あつたりまえ！貧乳になれアタック!!」

なんちゆう下品なアタックですかそれ……さっきの企みはこういうことだったんですね、

ボールは一直線に天音様の顔面付近目掛けて一直線に飛んでいった。

「天音様！」

「読んでたわよ貴方がさっきの仕返しで狙ってくることぐらいね。それを見越して私はサーブ役を買って出て後ろに下がったのよ。私の頭を狙ってく打ってくる球なんて避けるだけでアウトよ」

天音様は軽くお嬢様の強烈なアタックを交わして見せた。

「アウト！」

チエリーチームの先制となる。

「天音様流石です！」

「伊達にあいつと幼馴染やっつてないわよ」

その頃カバンチームのお嬢様とさゆりはと言うと。

「ねえ、あんたのそこのお嬢様あれでドヤ顔して私の事分かったような顔してるけど恥

「ずかしくないの?」

「いや、それを言われると困るんですけど、、多分今のアタック【わざと】外したって思っ  
てないです」

「それじゃあ調子づいてるおバカさんは放っておいて勝ちに行きましょ」

「はい!」

エレナの考えはこうであった。適当な名前付けて天音にアタックが行くということ  
を促して後に釘付けしておいて後は手薄になった手前中心に攻めるっていう策だ。  
チエリーチームで運動神経がいいのは天音と楓ぐらいなものだった。温室育ちで運動  
が出来る人はなかなかいないからね。

「じゃああの単細胞のない乳のところに打ちちやおうかなあじやあいくよー!」

後でどうなっても私はしーらないと、、ネット手前で楓は頭を抱えていた。

「aカップからa aにまで胸なくなれシュート!」

先程の弧を描くサーブと正反対のジャンプサーブで鋭いボールがお嬢様の顔面へ飛  
んだ。

「お嬢様危ない!」

「心配いらないわよこんなションベンサーブ、おら死ねや!!」

だから下品ですって、、周りの人の目が死んでますよお嬢様、、

お嬢様はトスもせず顔面に来たボールをストレートで打ち返して守備の薄い東田さんと天矢さんの間に綺麗に打ち返した。

「すごいですエレナさん！同点ですね！」

「なーにいつてんのよこれから1点もあのバカに取らせないわ」

その言葉通り試合はお嬢様のサーブエースの連続で10—1まで広がっていた。

「ごめんね緒方さん私達がボール取れないばかりに」

「ううん大丈夫だよ！まだ20点マッチの試合なんだから可能性あるよ！私に策があるの」

「策って？」

「あの乳無しは狙ったとこに速いサーブ打ってくるでしょそれを逆手に取ってジャンプした瞬間に私が東田さんと場所入れ替わってボール取って楓ちゃんにトスあげるから速攻でさゆりにぶち込んで。あの子運動は全然出来ないから」

だから名前やめましようってすんごい皆反応しづらそうにしてるじゃないですか。

「わかった！じゃあちちな、じゃなくて月村さんが打つ瞬間変わるね！」

ほら周りの人にまで影響出るじゃないですか、、、

「この作戦で1番大事なのは楓ちゃんだからね頼んだよ！」

「なんとかやってみます」

そしてお嬢様がボールを上げたその時っ！

「いまー」

天音様の掛け声と共にメンバーチェンジ！見事天音様がボールを受けることに成功する。

「楓ちゃん！あ、もちろんアタックに名前付けてね」

この間0.2秒。もう少しまでもな事言ってくださいよ、、、

「ジャンプしても揺れない胸なんて、、価値無い!!」

掛け声と共にさゆりの足元にボールを打ち込んだ。

さゆりはそれに反応することも出来ずコートにボールが着弾する。

「よーし！ナイスよ楓ちゃん！」

恥ずかしい、、私は顔を真っ赤にして下を向いていた。この1回だけでやめようそうしよう。

「楓にまで、、エレナさんどうします?」

「殺す」

「はい?」

「完膚なきまでに叩きのめすわよ。ボールを全部私に集めなさい」



「は、はい」

さゆりはこの時のお嬢様を鬼神と言っていた。

その後の試合展開はというと、

結果から言うと20―2でカバンチームの勝利だった。しかし試合内容が酷すぎた。サーブ権を取られてからと言うものお嬢様のサーブエースの連続で試合が終わってしまった。プロ顔負けの緩急に変化球まで使われて1番運動神経のいい天音様でもどうしようもなかった。金輪際胸のことでいじらないと天音様と誓い合うことになると思わなかった。そして今1時間目が終わり2時間目との間の小休憩なのだが私と天音様は屋上で正座をしていた、

「言いたいことはわかるわよね貴方達」

「はい」

お嬢様の目からハイライトが消えていた。私は怖すぎてちびってしまいかもと思うレベルにまで怯えていた。

「ごめんなさいお嬢様調子に乗りました」

私は許しを乞うために頭を下げ続けた。

「楓はもういいわ、主犯に言わされてたのはわかったし、顔を上げなさい。そしてこっちに来なさいな。惨めなのはこの無駄にでかい胸持つてるバカだけでいいわ」

「あ、ありがとうございます、」

「なんで楓ちゃんはよくて私はダメなのよ！つてあいたあ！痛い痛いごめんなさい！もう言いませんから！ない乳とか言いませんから！！」

「今言つてんじゃないのよ！！」

「それは会話の流れ上仕方ないじゃない！痛い痛い！これ以上胸掴まないでマジで無くなるー！」

「はあ、もういいわ。脂肪の塊掴んでるのも虚しくなるわ」

「うう、」

天音様は半泣きだった、そりゃ握力45とかあるお嬢様に思いつき掴まれたら痛いよね、

キーンコーンカーンコーン

2時間目の始まる前の予鈴がなる。

「あ、授業遅れちゃうわね、行くわよ楓。そこのバカは多分サボりでしょうから」

「え、いいんです？」

「毎回の事だからね、早く行きましょ」

「わかりました」

私はお嬢様と共に教室へと戻った。

「ううおっばい痛い、、、寝よ、、、」

## 発熱

キンコンカンコンコン

「んー、やっとお昼ね」

「ほんと古典は長く感じて嫌です。お昼食べましょお腹すきました」

「そーね」

私達は丁度お昼ご飯前の4時間目が終わったところだった。

「そーいえばさゆりまだ天音様寝てるの?」

「んー、わかんない。でも起きてたら呼ばれるしまだ寝てるのかも」

「今日あったかいしね、お昼寝には持ってこいかも」

「ふふ、確かに」

「今日はここでいいわ、楓、お弁当出してもらえる?」

「わかりまし、あーごめんなさい!!お屋敷に置いてきました!!」

ああなんで確認してこなかったんだらうわたしのバカ!

「すみません急いで購買行って買ってきますので!!」

「そんな慌てなくても大丈夫よ、ってか初めてじゃない楓が忘れ物なんて?」

「確かに。私も初めて見たよ楓が何か忘れるなんて」

「ほんとごめんなさい気が緩んでました、、」

「待って、何か貴方顔赤いわよ顔貸しなさい」

「え、そんなことない、ってお嬢様!?!」

お嬢様はおもむろに私の額に顔を近づけて体温を測るようにおでこをくつつけた。

私はその行為で熱が上がるのではないかと思った。

「やっぱり熱あるじゃない、、楓、帰るわよ。私が送って行くから」

「そんな、お嬢様にそこまでしてもらおうわけには！それに大丈夫ですよこれぐらい」

「何言ってるの！貴方にもし何かあったら誰が悲しむのか考えなさい。帰るわよ」

久しぶりにお嬢様に怒られた気がする。でも私の事を考えて怒ってくれているのがわ

かったからとても嬉しかった。

「ごめんなさい、先生に連絡してきます」

「じゃあ私は下駄箱で待ってるから、1人で来れるわよね？」

「はい」

「じゃあさゆり、天音に一言宜しくね」

「あ、わかりました！お大事にね楓」

「うん、ありがとうさゆり」

こうして私とお嬢様はお昼に学校を早退することとなった。お嬢様まで早退することとはなかったんだけれども家に看病する人間いないんだからということでは付いてくれるみたいだった。

「はいこれ体温計、脇に挟むタイプのやつ。使い方わかるよね？」

「うん、ありがとうお姉ちゃん」

お屋敷に戻ると自然と敬語は抜けていた。

「全く、ちよつとでも体調おかしいな？ っと思つたら言つてよね」

「ごめん、でも全然そんな感じはなかったんだよね」

「そーなの、あ、測れたみたいよ」

「ん、うわ38.3もある、」

「薬とか持つてきといてあげるから寝ちやいなさいな」

「ごめんねありがとう」

「彼女なんだから当たり前でしょう」

ニコツと笑うとお嬢様は部屋を出られていった。

それにしても風邪を引いたのなんていつ以来だろうか、っ、っつか引いたことなかったかも。こんなにつらいんだ、ああ考えると頭痛くなつてきちゃった。寝よ、、

「楓、薬とか持ってきたわよ。あら寝ちやったか。よいしょつと、心配しなくてもずつとここに居るからね」

「ん、あれ今何時なんだろう、って7:30!? 14時間近く寝てたんだ、あーまだ頭痛いなあ。あれ？」

「私は右手に温かい感触があることに気付く。お嬢様の右手が優しく私の手を握っていた。いったい何時間見ていてくれたのだろうかタオルも毎回変えていてくれたみたいでまだ頭の上にある冷やしタオルはしっかりと冷たかった。」

「お姉ちゃん、本当にありがとう大好き」

「私はお嬢様の右手にそつと口付けをした。」

## 初めての看病

看病をしていたエレナ視点での話になります。

「薬持ってきて上げるから横になっていいからね」

「ありがとうお姉ちゃん」

こんな辛い時でもありがとうが言えるなんてほんとにこの子は、

ええと、確か薬箱はつと。あーあつた良かった覚えておいて。頭痛薬と解熱剤ぐらいでいいかしらね。食欲あれば卵がゆか何か持っていてあげよ。

「入るわよ楓」

中から返事はなく私は静かに扉を開けた。既に楓は寝ていた。ベッドの中で苦しい顔をしながら眠りについていた。

「やだ、凄い汗、それに制服のまま寝ちゃしわになっちゃう、服と冷やしタオル持ってこなくっちゃ」

私はすぐに駆け出して一直線に楓の部屋に入ってパジャマとタオルを持ち出した。後はお風呂場から洗面器と冷蔵庫から氷と水で大丈夫だね。



寢室に戻ると先程と変わらず辛そうな表情の楓が横になっていた。

「ちよつと失礼するわよ」

そう言つて私は楓の着ている服を全て脱がした。

「お嬢様、、、？」

「辛いところにごめんね、ちよつとだけ起きれる？」

「うん、、、」

楓は言われた通りに重い腰を上げた。

「今身体拭いちやうね、そしたらパジャマ来て寝ちやつていいから。その間にこのお薬飲んでいてね」

「うん、ごめんね、お姉ちゃん、、、」

「謝ることなんて何も無いのよ、辛い時はお互い様だから」

体に触れてみるとやはり熱かった。体を拭くのに時間をかけると体を冷やしてしまふかと思つて私は出来るだけ急ぎ足で体を拭いてパジャマを着させてあげた。

「お姉ちゃんの手あつたかいね」

「呑気なこと言つてないで寝なさいな。つてあれ？」

「どうやら今のは寢言だったらしい。そこにはもう寢息をたてて眠る楓がいた。」

「貴方が元気になるまでずっとそばにいるからね」

私はそう言って楓の綺麗な髪を撫でた。

それから1時間に1回おでこに当てるタオルを変えて水がぬるくなったら変えての作業をしていたら気付けば朝になっていた。

そろそろ私の方も眠くなってきたわね、楓の熱は、よかった。昨日に比べたら下がってきたみたい。私も少し横に、

ここで私は楓の手を握りながら意識が途切れた。

「お姉ちゃん入るよ？もう夕方になるからと思つて起こしに来ただけど？」

あれ、私いつのまに眠つてて、つてかなんで自分のベッドに？

「かえ、で？体調は大丈夫なの？」

「この通り大丈夫だよ！ほんと夜通しそばに居て看病してくれてありがとうね！起きた時お姉ちゃんが手握つててくれてほんと安心出来た。それに寝てる間声掛けてくれてたのも私知ってるんだよ？もうこの気持ち我慢出来ないの。ほんと大好き!!!」

そう言つて楓は私がまだ寝起きで視界や意識がはつきりしてない中胸の中に飛び込んできた。

正直に言おう。

肘がお腹に入ってクソ痛かった。

まあ可愛いからいいか。

意識もしつかりしたし。

「もうどうしたのよ今日はほんとに甘えん坊さんなんだから」

「えへへ、今日はしばらくこのままでいて欲しいな。改めてお姉ちゃんの優しさとか知れて風邪引いて逆によかったかも」

「別にいいわよ、今日は一緒に寝ましよ。病み上がりだからって風邪なんて伝染らないだろうし。私も以外に楓が寂しがりってわかったわよ」

「うん！あとその、」

「どうしたの？」

「お姉ちゃんに昨日体拭いてもらった時からその、熱がまだ冷めなくて、」

「本当に今日の楓はどうしたんだろう？そんなに私に優しくされたのがよかったのかな？私から体の交わりに誘うことはあっても楓から誘ってくることなんてなかったのに。」

「じゃあシャワー浴びてきてもいいかしら？寝起きでまだ目が覚めてないのよ。楓は

シャワー浴びたの？」

「私はさつき浴びちゃったから大丈夫！じゃあ待つてるね」

待つてるねのとこだけ恥ずかしそうに言っていて可愛すぎて鼻血が出るところだった。

私はシャワーを浴びている途中自分も楓との行為を楽しみにしちゃっていることが体の変化で気付いてしまった。いつもとテンションが違いすぎるせいでもしかしたら強気に責めてくるのではないか？私には少しマゾの気があるらしく逆に期待してしまっている自分がいた。この性癖にきづいたのも最近だったな、

下らない事を考えている間に体を洗い私はお風呂場から出て楓の待つ寝室へと向かった。

「楓、お待たせ」

「お姉ちゃん、早く来て」

なにになににこのすんごい色っぽい楓、普通にやばいってこの顔。でもやつぱりいつもと感じが違いすぎる。不審に思った私は楓に問いかけた。

「楓、何か私が寝てる間に変な物食べたか飲んだりしてないでしょうね？」

「お姉ちゃんが寝てる間に？私が食べたのは冷蔵庫の中にあつたバナナと前にお姉ちゃ

んが買ってた栄誉ドリンクしか飲んでないよ」

栄誉ドリンク？そんなもの私買ったっけ？

「ちよつとその栄誉ドリンク見して楓。まだ冷蔵庫にあつた？」

「え？うん、あつたと思うけど、、、もしかして飲んじやダメだった？ごめんなさい、、、」

ああそんなに仔犬みたいにしゅんとした顔にならないで！

「ううん、違うの私も飲もうかなつて思つて、ええと栄誉ドリンク、栄誉ドリンク、あ！あつたこれかな？」

ああ、、、私のバカ一昨日密林で密かに買った媚薬入り栄誉ドリンクこんな分かりやすいように置いといたなんて、、、つてカラベルで気付いてよ楓！媚薬入りつて書いてあるわよこれ！

でも今更言えるわけないし、、、もういいや、この際私も飲んで薬のせいにしよ。

「冷たくて美味しいわね」

「そーだね、お姉ちゃんまだ、、、？私もう我慢出来ない、、、えい！」

「ちよつと楓！がつつかないの！つてんー！」

抗議する暇もなく楓に唇を奪われてしまった。そしてすぐさま舌を入れてきて私の歯茎から何まで舐めてきて私も薬のおかげかほとんど理性を失っていた。

「楓、、、お願いします、いつもの感じでいじめて下さい」

それを聞いた楓はニヤツと笑うと、

「いいよ、今夜はたくさんいじめあげてあげる」

その後は私が快楽に溺れ気絶するまで交わり続けていた、

## 朝起きて

楓視点に戻ります。

身体がめちやくちやだるい。

私は身体のだるさと共に目を覚ました。確か私は風邪でダウンして、、ああ栄養ドリンクと精力剤間違えて飲んであんなことに、、

その証拠に私の横には衣服を身につけていないお嬢様が転がっていた。転がっていったって表現はどうかと思うがだってベッドにすら乗ってないんだもん床に転がってんだもん。とにかくお嬢様ベッドの上に運んで布団かけてあげなきや、、このままじゃ風邪引いちゃう。

私はお嬢様をベッドへ運ぶとシャワーへと向かった。時刻は午前10:30。もう学校にはどうあがいても間に合わないのので休むことにした。幸い今まで無遅刻無欠席だったので単位とかは問題ない。

「はあ、久々にシャワー浴びれた気がする、それに熱も下がったみたいでよかった」  
身体はだるかったがそれはただのやりすぎの疲れでありだるさの根源の風邪はどこかに行ってしまったようだった。

私は風邪でダウンしてた時出来なかった洗濯などの家事をしようとしたのだが、

「ええ!?何もやることない!お嬢様私が倒れてる間に全部終わらしちゃったの、」

ほんとパーフェクトな人だなと改めて思ってしまった。性癖以外ね、

洗濯物はしわなく干されてるし洗ったお皿は吹いて綺麗に元の場所に戻してあるし掃除機をかけた後もあった。あれ?私の存在意義は?

まだお嬢様も起きてこないだろうし朝ご飯って言つていい時間帯かは分からないが朝ご飯を作ることにした。

「えっと、たまごたまご、それにベーコン」

凝ったものを作るのは面倒だったのでベーコンエッグと食パンと買い置きのあるヨーグルトで済ませることにした。

「よしっと。冷めちゃう前にお嬢様起こしに行こ」

トントントン

「お嬢様起きてます?」



「起きてるよ、今着替えてるからリビングで待つてもらえる？つてかお嬢様じゃないでしょお姉ちゃん」

すつかり忘れていた。やっぱりこだわるのね。

「うっかりしてた、じゃあ待つてるね」

5分ほどすると眠たそうな目を擦りながらお嬢様は席へついた。

「眠い、、、後楓聞いてもいいかしら？」

「どうしたのお姉ちゃん？」

「どうして私はベッドじゃなくて床で寝てたの、、、」

「その事だとは思いましたよ、、、」

「お姉ちゃん昨日の事私もあんまり覚えてないんだけど多分行為中に何かあったんだと思うよ、、、」

「はあ、、、まあいつか。お腹すいたわさつきと朝ご飯食べちゃいませよ」

「そーだね」

こうして私達は朝ご飯を食べ終え何故か気まづくなつてその後は夜まで自室で過ごすのだった。

## とある日の月村家

時刻は夕方の18時過ぎ。そろそろ夜ご飯を作らなきゃいけない時間だった。今日のご飯の当番は私なのでお嬢様に何がいいか聞きに行かなきゃ。

「お姉ちゃん、入ってもいい？」

「ん？いいわよ」

お嬢様はPcで調べ物をしていたみたいだった。

「あれ？お嬢様メガネなんていつの間にか買ったんです？」

前まではPcなどを使っている時メガネなどしていなかったのに何故か今は縁が赤いメガネをつけていた。つかめちやくちや似合ってて惚れ直しました。可愛いって感じじゃなくてめちやくちや綺麗って感じ。出来るOLの雰囲気めちやくちや出てるよお嬢様。

「最近視力落ちてきてね。似合うかしら？あんまりメガネとかかけたことないからさ」

「めちやくちや似合ってる！綺麗なお姉ちゃんかもっと綺麗に見えるもん！」

私は思っていることをそのまま言ってみた。お嬢様の反応も見えたかったし。

「そ、そうありがとう」

「こちらこそ予想通りの反応ごちそうさまです。お嬢様は顔を真っ赤にして照れていました。私の事はよく褒めるのに自分が少しでも褒められると顔を真っ赤にして照れるからほんとに可愛くて仕方がなかった。」

「そーだ！本題！今日の夜ご飯何か食べたいものとかある？」

「ん、そーねえ、、確か冷蔵庫の中ムネ肉あったよね？揚げ物食べたいかも、唐揚げ！」

「了解！塩と醤油味で作っとくね」

「ありがとー、また出来たら呼んでもらってもいいかしら？まだ調べたいことあるから」「はーい」

私は急いで夕飯の準備に取り掛かった。揚げ物だと少し時間かかっちゃうからね。

唐揚げだけだと食卓に色がないしサラダも一緒に作ることにした。唐揚げに味を染み込ませている間にレタスをちぎってトマトを添えるだけの簡単なサラダが完成する。後は揚げるだけだからもうお姉ちゃんを呼んでもいいかな。

「お姉ちゃん、そろそろ出来るよ」

「ん、わかった」

お嬢様は残念ながらメガネを外して自室から出てきてた。せつかくならもう少しメガネ姿のお嬢様見ていたかった、、今度またつけてもらうことを強く決意した私だっ

た。

「どうしたの急に真顔になって」

「ううん、何でもない、お姉ちゃん温かいお茶と冷たいお茶どっちがいい？」

「んーじゃあ温かいの貰える？」

「はい」

私は急須にお茶つ葉を入れてポットからお湯をついでお嬢様にお出しした。

「じゃあ食べちゃお」

「いただきます」

ちやんと揚がっているか少し心配だったけどしつかり揚がっていて唐揚げは美味しく出来上がっていた。楓は実は揚げ物料理が余り得意ではなかった。メイドとして仕事を教えて貰っている時に一番苦労したのがこの揚げ物料理だった。苦手なのはとても単純な理由だった。油がはねて1度目のそばに当たった時に恐怖心が芽生えてしまいそれからずっと恐怖心と闘ってきて克服できたのはつい最近。メイドがお屋敷からいなくなったあたりで逆に頭のネジが飛んだのかはわからないが私しかないんだから！という風に意識したら自然と恐怖心が消えたらしい。

「そーいえば長い間何調べてたの？」

「あー、ちよつと修学旅行の事をね。天音から連絡来てたのよ調べといてって、それで仕方なくよ」

仕方なくよと言いながら調べてあげるのは優しいなあと思うのはお嬢様には言わないでおくことにした。

「そーだったんだ」

「うん」

その後は美味しい美味しいと言いながら食べるお嬢様をおかずにご飯を食べていた私だった。やっぱり自分の作ったご飯を嬉しそうな顔をして食べてくれると作った側としてもすんごい嬉しいよね。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

「じゃあお風呂沸かしてくるから皿洗い宜しくね楓」

「わかった!」

私はさくつとお皿を洗い終わるとお風呂が沸くまでお嬢様と談笑していた。

「あ、お風呂沸いたね」

「あ、ほんとだ、行こうお姉ちゃん」

最初の頃は一緒にお風呂なんて恥ずかしくてたまらなかったのに今では自分から行くこうなんて言うようになるなんて思わなかったな。

「はあ、昨日熱でお風呂入れなかったからすんごい気持ちよく感じるよ」

「ほんと、熱下がってよかったね楓、栄養ドリンクのおかげかしらね」

「もー、あーいうの普通に冷蔵庫に入れて置かないでよねお姉ちゃん。ほんとビックリしたんだから」

「ごめんね、今度からはこっそり自分のとこ置いておくわ」

いや、買わないって選択肢はないんですか、、

「楓いらつしやい、背中流してあげるから」

「はーい」

今では自然にお嬢様に甘えるようにもなっちゃったな、。ほんとに自分の変化に驚かされるよ。

お風呂から上がるとお互いもう眠いって感じになったので少し早いが寝てしまうことにした。明日学校もあるしね。

「おやすみ楓」

「ん、おやすみお姉ちゃん」

私達は唇が少し当たただけのキスをして眠りについた。

## 修学旅行①

日にちが少し飛びますごめんなさい。

今日は聖チエリチヨウ学院の修学旅行の日だ。

結局お嬢様は天音様の説得もあり今年に参加することを決めてくれたようだった。

「お姉ちゃん荷物の確認は大丈夫だよね？」

「もーそれ聞くの3回目だよ楓、大丈夫だって」

「あれ、そうだっけ」

「楓らしくもないわね、楽しみすぎて焦ってるんじゃないの？」

「そ、そんなことないよ」

そう、実のところ、私は修学旅行はめっちゃくちゃ楽しみだった。幼少期からメイドをやっていたのもあってほとんどお屋敷から出たことがなく他県に遊びに行くのは実は初めてだった。それにお嬢様とどこかに一緒に行くだけでほんとに楽しみだった。

「ふーん？じゃあお互い準備出来たみたいだし学院向かいましょうか」



「うん！」

私達は荷造りを完了して学院に向かった。

この時楓が大切なものを忘れていた事に気付くのはまだ先の話、、、

「おつはよー！エレナ、楓ちゃん！」

「おはようございます天音様」

毎朝恒例ともなりつつある天音様の抱擁にも慣れた。そしてこれも恒例になりつつあるのだが、、、

「だからセクハラすんな！」

毎度の如くお嬢様が天音様に飛び蹴りするのも当たり前になっていた。天音様毎朝のように蹴られてるけど大丈夫なのかな、、、

「もー痛いじゃない、、、でも楓ちゃんと今日から2泊一緒だし夜楽しみにしててね」  
ウインクしながら言ってくる天音様。いや、楽しみにしててね言われましたも、、、

てかお嬢様その目やめてください、バレーボールの時のトラウマ蘇るので、、、

「じゃあ点呼とるので集まってー！各班の班長は私にメンバー全員いるか報告宜しく！」

クラスの担任のつかさちやんの声が響く。

あれ? そう言えばうちの班の班長って誰なんだろう、

「お嬢様、この班の班長って誰なんです?」

「あ、そう言えば決めてなかったわね、天音あんたやりなさい」

「ええ!?! やだよめんどくさい」

「ん? やりなさいって言うってんだけど? 文句ある?」

「ないです、」

相変わらずのカリスマ力はお持ちのようで。お嬢様の強さの1つだと思っただよね、目力で相手に主導権を与えないって言うのかな。わかりやすい言い方1つあった。メンチビーム! え? わかんない!?

「よかった、ありがとう天音ちゃん」

「エレナからちやんづけとかバス横転するからやめて」

「さあ楓バス乗りましよ、貴方酔いやすいから窓際の方がいいでしょ?」

「え? 私が酔いやすいって言いましたっけ?」

「貴方私がパーティとか呼ばれた時車で行くと毎回青い顔してたじゃない、だからそうなんじゃないかなって思ったんだけど違う?」

いや、あつてるんだけどお嬢様そんな私の事見てくれたんだ、その事が知れただ

けでもちよつと嬉しいかも。

「はい、ちゃんと見ててくださいね、ありがとうございます」

それを言った瞬間お嬢様の顔がほんのり赤く染まったのが分かった。

「あの時は主人として使用人の体調管理も仕事だから見て当然よ」

「そうでしたか、じゃあお言葉に甘えて窓際の席に失礼させてもらいますね」

こうして私は最後尾の窓際というベストポジションを確保することが出来た。横にお嬢様、天音様、さゆりという席順になった。

「じゃあ京都に向けて出発します！トイレなど行きなくなつた場合にはすぐ教えてくださいね！到着予定時刻は今から4時間後の12時になってます！では各自自由にくつろいでね」

つかさちゃんも元気いいなあ。それなりに楽しみにしてたみたいだった。

「ねえねえ何しようか？」

奥の席から天音様が片手にトランプ、もう片方の手にはUNOを持って身を乗り出して来た。遊ぶ気満々といった感じだった。

「天音悪いんだけど楓車に弱いだよ。多分トランプなんてした日には私の服が大変なこ

とになりかねないわ」

いや、流石にエチケツト袋持ってきてますよ、、、

バスに揺られること30分ほど、、、

「気持ち悪い、、、」

酔い止めの薬を飲んでもこんなに酔うなんて、、、私弱すぎじゃないかな、、、

「楓顔色悪いけど大丈夫？」

「ちよつと酔ったかもです、、、」

「早くない!?肩貸してあげるから楽にしていいわよ」

「とても嬉しい提案なんですけど他の人の目もありますし窓に寄りかかるんで大丈夫ですよ」

「他の人仲良い子達とお喋りに夢中で端の私達の事なんて気にやしないから平気よ。それに横でゲロゲロされるの見たくもないし」

「ごもつともである、、、窓開けても匂いも残るだろうし、、、私は申し訳ない気持ちになりながらお嬢様の肩に体を寄せた。」

「戻しそうになつた時とかすぐ言うんだよ？遠慮することなんてないんだからね」  
「すみません、ありがとうございます」

ほんとに何してるんだろお嬢様にござ迷惑おかけして、、

でも、

お嬢様に寄りかかつたら急激に吐き気が収まるのが分かつた。安心感から来るものかもなのかは分からないがとにかく気持ち安らいだ。

そして私はそれから京都に着くまでお嬢様の肩に顔を寄せて熟睡したのだった。

## 修学旅行②

「起きて！楓ちゃんもエレナも！京都ついたよ！つてかさゆりこれ写真撮つとこ」

「後でバレて怒られても知りませんよ、、、」

私達の横に座っていたエレナ様と楓はお互い肩を寄せあつて熟睡していた。ほんと私から見てもお似合いの2人だと思う。

車酔いした時に周りの目なんていいから私の肩貸してあげるからつて言った時はほんとエレナ様イケメンだったし楓も素直に甘えてて見てるこつちが恥ずかしくなっちゃつたよ。

さて、そろそろ起こさないと、、、しっかし眠り深いなこの2人。幸せそうに寝てるところ悪いけど起こさせてもらうね、、、

「楓起きてー！」

少し手荒だが楓のおでこにチョップをした。

「んー、、、お姉ちゃん、、、？」

「お姉ちゃんじゃないよ、さゆりだよ。もう京都着くから起きちやいなよ、それでエレナ様起こして」

「え!? もう着いたの!？」

「楓ずつと寝てたよ、エレナお姉ちゃんに寄りかかって気持ちよさそうにね」

「もう! からかわないですよ! 嘘でしょ私車でしつかり寝れたことなかったのに、」

「まあとりあえずエレナ様起こしてよ、うんともすんともなんだもん私が起こそうとしても微動だにしないよ。天音様も起こさなきゃだし」

天音様の方を見ると口を開けて見事に爆睡していた、

「わかった、なんとかお嬢様起こしてみろね」

そう言つて私はお嬢様の方を見る。

はあ、、 やっぱり改めて見ると綺麗だなあ。溜息でちやうぐらいだもん。綺麗な長い黒髪に整いすぎて人形かと思違えるぐらいの小顔。こんな人が彼女なんだもんなあ、

「ちよつと楓にやけてないで早く起こしなさいよ」

「にやけて!?! そんな顔してないよ!」

「してたから言つてんのよ、」

すぐ顔に出るみたいだから今後は気を付けなきや、さあお嬢様起こしますか。

「お嬢様起きてください、京都着きました」

反応がない。こんなに寝起き悪かったつけかな、、次は少し体を揺すつてみるも反応

がない。ここで私は気付いた。寝息がわざとらしすぎる。いつも横で寝てるからこそわかることだった。何のために寝た振りをしてるのかわからないけどこれ以上付き合つてられないので私は強攻策に出た。

私は耳元に近付いて声をかける。

「寝た振りわかつてるよお姉ちゃん、早く起きてくれない?」

反応なし。我が主ながらほんとになんでこんなことしてるんだろ、

「わかつた、今後足貸してあげないから、それでもいいなら寝てれば?」

私は不貞腐れた感じで囁いた。するとお嬢様は、

「はあ、よく寝たわ。楓起こしてくれたのねありがとう」

ほんとにこの人は、

「はいーじゃあ皆お疲れ様!今日はこのままホテルに行つて各自自由行動にするからホテルに荷物置いたら皆考えであるルートあると思うから行つてきてね。くれぐれも車や他の一般の人には気を付けてね」

一同「はいー!」

「お嬢様どうします?」

「外出たくないからホテルに籠る」



「ええ、、天音様がゆるしてくれないんじや、」

「いや、それが天音様も疲れたみたいでホテルで寝たいってさ」

だらけすぎじゃないご主人達!?

「そ、そーなんだ。じゃあ私もホテルにいたら大浴場行ってゆつくりしようかな」

「私も行こーっと」

こーして私達4人はホテルにチェックインした。

ホテルの部屋は丁度4人部屋で和室だった。月村家、緒方家共に洋風な家だったのでとても新鮮に感じた。

「畳の匂いがする、わー！凄いいポットに緑茶入ってるじゃんお嬢様すぐいれますね！」

「そんなにはしゃがないのもう、、確かに畳の部屋なんてうちにはないからはしゃぐのも少しわかるけども」

「私の実家は和室結構ありましたよ、天音様も二三度来てますからわかりますよね？」

「あー確かにさゆりの実家そーだったね、どーりで畳に既視感あったわけだわ」

「楓、悪いんだけど布団引いてもいいかしら？少し寝たいのよ」

「わかりました、後でやることになると思うので皆さんの分も引いておきますね」

「あ、楓、手伝うよ」

「ありがとう」

私とさゆりで4人分の布団を引いたところでお嬢様と天音様の言い争う声が聞こえた。何事かと耳を傾けると、

「私が楓ちゃんの横で寝るの！ エレナは端で寝てればいいじゃん！」

「はあ!? 楓は私のメイドで彼女よ? なんだあんたの横なんて危ないところに置かなきゃ行けないのよ。それにさゆりちゃんがいるでしょあんたには！」

「いいじゃんたまには! 貸して！」

「やだ！」

小学生みたいな争いに終止符を打ったのはさゆりだった。

「ねえ、天音ちゃん。私は隣で寝たかったんだけどな、」

目頭に涙を溜めて天音様に抗議するさゆり。彼女に違う子がいいなんて言われてシヨックを受けたんだと思う、。天音様も結構適当だからなあ、。

「えっと、そのもちろんさゆりが1番なのは当たり前で、その、ごめんなさい！」

天音様はさゆりを強く抱き締めて髪を撫でていた。そこで驚いたのはさゆりが笑顔でこちらにウインクをしていた。恐らくさっきのは演技だったんだろう、。あの演技力凄いな、。

「はあ、さゆりちゃんのお陰で助かったわね。大浴場行くんじゃないの? 私も行くから行こうよ、後、室内ではお姉ちゃん呼びだからね」

お姉ちゃん呼びにこだわるのは相変わらずだなと思う反面いつも通りの呼び方が出来て少し嬉しいと思う私もいた。

「うん、わかったお姉ちゃん」

混乱してる天音様と笑顔のさゆりを置いて私達は大浴場へと向かった。

## 修学旅行③

「うわあ、露天風呂ありますよお嬢様」

「夜景綺麗そうだし後で行ってみましようか」

「はいー」

ホテルの大浴場には色々なお風呂があった。

ジャグジー、寝そべりながら入れるお風呂、ワイン風呂やチョコレート風呂という香りを楽しむためのお風呂もあった。

普通なら混んでいるんだろうが今の時刻は13時30という中途半端な時間ということもあり貸し切り状態だった。

「ねえ、楓？」

「はいなんででしょうか？」

「今私達しかいないし敬語いらなと思うしバスタオル巻く必要ないと思うのだけれど」

「いやいやいや、普通ホテルとかなら仮に貸し切り状態でもタオル巻くでしょ、」

「えーっと、万が一に誰か来たら困りますし普通外の温泉とかならバスタオル巻くのは

普通かと、」

「まあそうだけれども、最近楓の身体見れてないんだけど、」

もじもじして恥ずかしそうに言うお嬢様。可愛いんですけどそういうのは時と場所をわきまえてよねーって感じなんです。まあ確かに最近修学旅行の準備とかで忙しくていわゆる夜の営みに関してはしばらく出来ていなかったな、それに2人一緒に寝ていることもあつてムラムラしてたのはお嬢様には言えないが私も同じことだった。

「えっと、面と向かつて言われると少し恥ずかしいです。その、提案なんですけど、」  
その提案を言った瞬間お嬢様も顔を真っ赤にしてそれを了承した。

色々なお風呂を堪能した私達はホテルを出て2時間ほどで事を済ませてまたホテルへと帰った。

まあ何を済ませたかは想像にお任せします。

部屋に戻ると天音様とさゆりは布団に入って爆睡していた。バスの長旅で疲れたのだろう。

「んーどうしよつか。寝てる所にテレビとかつけて起こすのも悪いし」

「お姉ちゃんーっ施設で気になったところあるんだけど行かない？」

「ん？楓の行きたいところなら喜んで行くけどどこ？」

「ゲームセンター！私まだ行ったことないから気になっちゃって」

「そーいえば私も行ったことないわね。こんな時ぐらいにしか行けないから行きましようか」

「やったー！じゃあ早速行こ」

私達は部屋から出ると一階にあつたゲームセンターへと行った。

そこには私が初めて見る世界があつた。シューケース？に積まれているぬいぐるみやレースゲームのようなものまで全て初めて見たものだった。

「お姉ちゃん何やる？」

「そーねえ、あ、私あのゲームの漫画天音から借りて全巻読んだことあるからせっかくだからやろうかしら」

そう言つてお嬢様が指を指したのは頭文字Mというレースゲームだった。

「お、私もさゆりが読んでて少しだけだけどわかるよ。せっかくだから勝負して負けただけが罰ゲームでどうお姉ちゃん？」

「言つたわね？私のゲームセンス舐めない方がいいわよ？」

「人の足はよく舐めるくせにね」

「んな!?!と、とにかく始めるわよ！」

動揺しましたねお嬢様。勝負は心理戦から始まつてるんですよ。

お金を入れ店内対戦モードを選ぶ。車の種類がよく分からない私は頭文字Mの主人公が乗っていた86という車を使うことにした。

一方のお嬢様はエボIVという車を選んでた。次にコースの選択画面になった。お嬢様に何処がいいですか？と聞いたら頭文字Mは明奈峠というものを走らなければ語れないと言うのでお嬢様の言う通り明奈峠を選択した。

「ふふ、教えてあげるわ楓。86って作品では強いけど普通の車の中だとめちゃくちゃ遅いのよ。私が乗るエボIVは速いわよ。86なんてアウトオブ眼中よ」

なんですかその雑魚キャラが使いそうな台詞は、、

「車が速くても運転する人が下手くそじゃどうしようもないよお姉ちゃん」

「中々言うようになったじゃない楓。あ、スタートするわよ」

『3. 2. 1. . . go!!』

カウントダウンと共に私とお嬢様がいっせいにアクセルのペダルを踏み込む。お嬢様か言った通りこの86という車は加速が全然つかずに始めの直線で30メートル近く離されてしまった。

「どうよ楓！これがエボIVよ！」

「まだ始まったばかりかですし！」

どうやらこのゲームは4つの区間があり最後の区間で最後にゴールラインを抜けた

方が勝ちになるらしい。コース選択画面でちらつと見た時に最後の方にカーブがたくさんあったみたいだからこの車の遅い所をカバーできるんじゃないかな？って私は考えた。

レースは進んで第3セクション。エレナはもちろんのこと楓ちゃんも抜群のゲームセンスを見せ車では劣っていてもなんとかエレナのエボIVに食らいついていた。しかし差が開きすぎてしまった。105mまで差が開き絶対絶望かと思われたその時！

あ、ナレーションは天音でお送りしています。楓ちゃんが真剣モードに入ってナレーションしてる暇なさそうだったからね。

「お姉ちゃん、さっきから言おうとしてただけだね」

「なに？」

「ホテル出た時には気付かなかったんだけどそのTシャツ表裏逆だよ？」

「え?!嘘?!」

エレナがハンドルを離しシャツを確認したことにより壁にぶつかりペナルティで速度がぐつと落ち差は20mまで縮まった。つかホテルから出た時って何？普通部屋から出た時って言うよね？この子ら私らが寝てる間そういうことしに外出してたんだ、ふーん。後でエレナにそれとなく聞いてみよ。



あ、話がそれましたねごめんなさい。第4セクション突入で差は15mまで縮まったよ。

「汚いわよ楓！」

「先にずるしたのお姉ちゃんだもんねえ、さあ最後の区間だよ！」

楓の予想は当たっていた。カーブに入るとエボIVの動きは格段に悪くなり逆に86の動きが格段に良くなっていった。勝ちを確信した楓は指をパチンと鳴らしこう言った。

「お嬢様なんて、アウト、オブ、眼中！」

「言つてませんよ!!天音様ナレーションやるなら真面目にやつて下さい！」

「ちえ、バレたか、楓ちゃんが言うなら真面目にやりますう」

ゴールまで後残すところ後カーブ5個と言ったところ。差はもう車体1台分もなく後ろにピツタリと食いつかれていた。

「なんでエボIV乗つてて86なんざに追いつかれないのよ！」

「ここだ!!」

エレナは楓の車をブロックしようとして外に車体を出したところに綺麗に楓の86が内側を抜けていった。一瞬の出来事だった。

「やら、れた、、」

「わーい！私の勝ち！何お願いしようかなあ罰ゲーム」

「こうなりややけよ、何でもやってやろうじゃない」

「ん？今なんでもするって言ったよねお姉ちゃん？」

「え、ええ。私に出来る事ならだけど」

「そーだなあ、天音様に今夜寝る前にこう言つて。天音ちゃん、エレナ怖い夢見そうだからおてて繋いでもいい？つて」

「いやよそんなの！死んだ方がマシよ！」

「え？だつて何でもつて」

「つく、分かつたわよやってやろうじゃない！」

「へへへ、これで夜が楽しみになったな」

部屋に帰ると天音様とさゆりはまだ部屋で爆睡していた。そろそろクラスで集まつて食堂行かなきゃだから起こさなきゃだ、

その後私はさゆりを優しく揺すつておこしお嬢様はさっきの負けたストレスか日頃のストレスか知らないが思いつきり胸を掴んで起こしていた、

## 場所が変わっても

天音様ときゆりを起こして私達は食堂へと向かった。

「エレナあんたいい加減にしなさいよ、、、胸の形変わったらどーすんのよ」

「は？胸の形なんて変わらないでしょ？」

その返しはダメですよお嬢様、、、胸の形って変わるんですよ、、、胸「ある」人は。

「え？変わるよ？あ、、、ごめんエレナ気付いてあげなくて。胸の無いあんたには関係の無い話だったね」

泣く真似をしながら言う天音様。私知りませんからね、、、

お嬢様はどんな対応をするのかと思ったら無視を決めたようだ。よかった、、、また上段回し蹴りが決まると思ったよ、、、

食堂につくとつかさちゃんのおかげでいただきますの合図と共にご飯を食べた。流石お嬢様学校ってだけあって出てくる料理は皆美味しかった。ご飯を食べるとまた自由行動となり就寝時間の22時までには各自個人の時間を楽しんでいた。

あつという間に就寝時間となりお嬢様の罰ゲームの時間となった。

「お姉ちゃんわかってるよね？」

「もーわかっているわよ！はあ、、、なんで私が、、、」

「じゃあ電気消すねー！って言ってもまだまだ寝ないけどねー！」

まあ天音様ならそう言うと思った。幸い昼間にたくさん寝てるので眠たくもなかったし丁度よかったかな。

「何言ってるのよ、私は寝るわよ」

「えー!?ノリ悪いよエレナ」

「天音流石に人巻き込むのはやめようよ、私が付き合ってあげるから」

「はーい、、、」

と、、、  
流石さゆりだなと思った。天音様の扱いなら天下一品だ。そしてお嬢様はと言う

布団にくるまって何か呟いていた。きっとさっきの罰ゲームの言葉を復唱でもしてるんだろう。

「天音ちゃん」

「え？さゆり呼んだ？」

「私じゃないよ？」

「じゃあ楓ちゃん？」

「私でもないですよ」

「エレナ？」

「うん、私が呼んだの」

「ちよつとどうしたのよ急に天音ちゃんだなんて気持ち悪い」

「えつとね、、天音ちゃん、、エレナ怖い夢見そうだからおてて繋いでもいいかな？つて」

かわいかわいい!!!顔を真っ赤にしているいつものぶつきらぼうな口調じゃなくてか弱い女の子みたいな口調で言うお嬢様はすぐにでも抱きしめたくなるほど可愛かった。天音様の反応はと言うと。

「さゆり、、誰この可愛い子」

「いや、エレナ様だよ」

「さゆり、、一瞬浮気してもいい？」

「あの可愛さは反則だからいいよ、でも一瞬ね」

「ありがとう」

天音様は深呼吸してエレナ様の前に立つと、、

「もー！可愛い！ほんとにエレナなの!!チューしていい!?あーほんと可愛い！天音

お姉ちゃんがお手て繋いであげまちゆからねー！」

一心不乱にお嬢様に抱きついて頬ずりをしていた、お嬢様の様子はと言うと、

「あー！気持ち悪いわよ！罰ゲームよ！罰ゲーム！楓にやれって言われたからやったの

！HANANA☆SE！」

抵抗するようにポカポカと天音様の頭を殴っていた。私もこれ以上お嬢様を取られなくなかったので天音様を引き剥がしにかかった。

「正気に戻ってください天音様！お嬢様から離れて下さい！！もー！よっこいしょおー！」

「へ？待って体が浮いてるって！楓ちゃん！」

「あ、勢い余って持ち上げちゃいましたすみません」

「ほんとあんた無駄に力あるわよね、」

「え、えつとごめんなさい」

「つてかか弱いエレナ破壊力あるわねほんと。また今度やってよ動画撮るから」

「絶対やらないから大丈夫よ、寝るわ、おやすみ」

「私も寝るよ、おやすみ」

ひと騒動あったが私達は各自布団に入って寝ることにした。

「お姉ちゃん起きてる？」

「ん？どうしたの？」

「その、一緒に寝たいなって、それにさつき天音様とイチャイチャしてたし、だからその分私ともイチャイチャしてよ」

私から提案した罰ゲームとはいえ少し後悔していた。まさか天音様が抱きつくとは思わなかったし。

「あれはイチャイチャとは言わないわよ。ほらおいで楓」

そう言つてポンポンと自分の布団を叩くお嬢様。

「へへへ」

さつき天音様がやっていたようにお嬢様に抱きついて頬ずりをした。ほんといつからこんな自分が甘えん坊になったんだらうか。

「もー、そんなに天音に妬いてたの？言つたのは自分なのに」

「だつて天音様があんな反応すると思わなかつたんだもん、お姉ちゃんあつたかい」

「ふふ、楓もあつたかいわよ」

ずつとお嬢様に抱きついてしていると凄く安心感と満足感があつた。このまま抱きついて寝ちやおうかな。なんて考えてた時でした。

「ひやつ！ちよつとお姉ちゃん！」

「大丈夫よ天音もう寝ちやつてるから」

お嬢様が服の上から私の胸を触つてきた。昼間やつたばかりなのに、確かに天音様

は規則正しい寝息たててるしさゆりも寝てるみたいだけど。

「もー、ちよつとだからね」

そう言つて私はお嬢様の唇に唇を重ねた。それが合図だとばかりにお嬢様は私を求め続けた。私もそれに応えるようにお嬢様を求めた。

「お姉ちゃん、ちよつと今日激しいよ、んー、あ、待つて！ストップストップ!!」

「どうしたのよ楓、たまには私が貴方をいじめてもいいじゃない、ほら」

「あ、だめお姉ちゃん！天音様いるのに声でちゃうつて！」

お嬢様はお構い無しに私の秘部を責め続け何回も何回も絶頂に達してしまった。

「はあ、可愛いわよ楓、ほんと私だけのものなんだから、誰にもあげない。それじゃおやすみなさい」

発言がヤンデレちつくですよお嬢様、ちよつと待つて？私だけイカされ続けてお嬢様恥ずかしい思いしてませんか？

この瞬間私にもスイッチが入った。

「お姉ちゃん」

「ん？つてなんでパンツに手置いてるの？」

「これからは私の時間。ねえ？私の足、舐めたくない？」

この言葉がお嬢様がドMモードに入るためのスイッチみたいなものだった。毎回こ



の言葉を言うといつもの高飛車な姿勢から急変する。

「そ、それはずるいわよ楓」

「いいの？なら私寝ちゃうね、つて流石お姉ちゃん。じゃあ舐めながらいつもみたいに自分でしてみて」

「はい、、、」

その後の展開はここじゃ言えません。毎度の如くお嬢様は快樂の虜に溺れ氣絶してしまつた。

「楓ちゃん、、、」

「やっぱり起きてましたか、、、途中から氣づいてましたけどもういいかなって、、、私達も天音様とさゆりの見ちやつてますし」

「まあ、そつか、じゃあ私寝るね、おやすみ」

「私も寝ます、おやすみなさい」

氣絶してゐるお嬢様を放置して私と天音様は眠りについた。天音様が布団の中でゴソゴソしてたのは見なかつたことにしよ。

## 危機一髪

「ん…もう朝か…」

私は目覚ましがなる前にカーテンから差し込む日差しの眩しきで目を覚めました。

「今の時間は…まだ5:30じゃん。まあいつかシャワー浴びてこよ。あ、その前に…お姉ちゃん起きて、ちよつとお姉ちゃん！」

昨夜のせいで下着1つ身につけてないお嬢様を起こした。この格好をあんま他の人に見せるわけに行かないからね…

「ん、楓…？また私気失ってそのまま寝ちやったの…」

「まあ、そんなとこかな…とにかく今のうちにシャワー浴びて着替えちやってよ。寝直すのはその後でも大丈夫でしょ？」

「そーね。じゃあ一緒に入りましょうか」

「え？そんなに広くないんだけどお部屋のお風呂」

「いいからいいから」

「まあいいけど」

やっぱり狭い…2人で浴槽に入りシャワーを交代交代で浴びるならどっちかが部屋

で待機してるのが正解だった。

「はい楓、前いらつしやい洗ってあげるから」

「ん、ありがとうお姉ちゃん」

すっかりお嬢様に髪や身体を洗ってもらうのもなれた。前まではちよつと恥ずかしかつたが体を重ねるうちにそんな恥じらいは一切消えてしまったみたいだった。

「少し髪伸びたんじゃないの？」

「あー確かに最近切つてなかったかも。お姉ちゃんぐらい伸ばそうかな」

「いいんじゃない？楓はどんな髪型でも似合うわよ。元の素材が完璧なんだし」

「それは褒めすぎだよお姉ちゃん」

「そんなことないって、ほらこことか」

「きやつ！ちよつと朝からはやめようよ…」

「ちよつとした恋人同士の悪ふざけよ、じゃあ泡流すからね」

「はい」

私の方は洗い終わったので次は交代で私がお嬢様の体を洗う番になった。

「眠い…」

「お姉ちゃんお風呂場で寝ないですよ？風邪引いちやうからね」

「大丈夫よ、楓の指やつぱり気持ちいい、もつと髪触つてよ」

なんだろう…：すんごい今の発言エロく聞こえちゃったんだけど。私もお嬢様に毒されてきたのかな…：気にしないで髪洗うの続けちゃお。

「はあ…：気持ちいい…：」

「ねえ、わざとやってるよね？」

「バレちゃったか」

「そりや普段そんな声出したことないじゃんお姉ちゃん。朝からはやらないからね」

「楓に髪洗って貰ってる時に感じちゃったんだから仕方ないじゃない！」

ええ…：自分で言うかな普通…：このままじゃいつもの流れになっちゃうしどーしよ。不健全すぎるんだよね前話から。あ、なんでもないです。

「わかったからちよつと静かにしよ、お姉ちゃん…：天音様ときゆり起きちやうよ」

「あ、ごめんなさい」

「……………一回だけだからね」

そう言つて私はお嬢様の唇に軽くキスをした。

お風呂場で色々な意味でスッキリしたのかお嬢様は部屋に戻ると数秒で寝てしまつた。ほんとにこの人は…：欲に正直と言うかなんていうか。

「ふぁーあ。私も寝直そ…2日目は、ああ今日も自由行動なんだっけ。ほんとこの学校行事に關してはぬるいんだよね…団体行動が3日目の午後だけとか生徒ほったらかしすぎじゃないかな」

考えているうちに私は眠りについてしまった。

「楓！楓起きて！」

「ん……どうしたの…」

「やっと起きた。天音もエレナ様も皆爆睡してるんだもん。もう13時だよ？このままだといつも見たたく部屋でダラダラしてるだけの修学旅行になっちゃうよ！」

「うっそ…もうそんな時間なの…でもちよつと寝足りないや…さゆり様もう少し寝させてください眠いんです……zzzz」

私は昨夜、そして早朝のお嬢様との連戦のせいで疲れ切っていたのか普段なら絶対に寝直さない時間だったが今日ばかりは体が怠くて起きるのを拒んだ。

「え?!ほんとに寝ちやったの!うっそでしょ!」

さゆりの悲鳴を背に私は再び深い眠りについた。

「う、うう…なんだろ…体に重みがあるような。なんか甘い匂いもするし…」

私は体に違和感を感じて目を覚ました。

「あ、楓ちゃんおはよ」

「あ、おはようございます…天音様なんでわたしのお腹枕にして寝てるんですか…」

「どうやら体の重みは天音様だったらしい。甘い匂いがしたのは恐らく天音様がシャワーを浴びてそのまま私のお腹で寝てたからだと思う。」

「いやあなんかそこで寝たらよく眠れそうかなあつて思ったんだけど。起こしちゃったみたいだねごめんね」

「いやそれは大丈夫なんですけど今何時ですか？」

「ん？18時だけど？」

「へ？」

「アホみたいな声が出てしまった。でも18時!?! いったい今日だけで何時間寝ちゃったの私…」

「ふふ、そりやエツチするのも体力いるからねえ」

「ニヤニヤしながら言う天音様。私だつて朝は普通にシャワー浴びようとしたんですよ…」

「まあそれは置いといてお嬢様とさゆりどこいったんですか？姿が見えないようですけ

ど」

「さゆり、1回楓ちゃんの事起こしたんだけど起きなさそうだったから、たまたま起きたエレナ様と京都観光してきますって3時頃メッセ入ってたよ。私も起きたの今さつきだもん」

エレナ様とさゆりって珍しい組み合わせだなあ。私は何しようかな。今から外出る気にもならないし。

「そーだったんですね。私達はどうしましょうか」

「部屋いてもやる事ないんだよねえ。さゆり達は外でご飯食べてくるみたいだし私達もどこか探してご飯食べ行こっか」

「ですね、そうしましょ」

天音様と二人つきりでご飯なんて初めてだなそういえば。まあ付き合う前荒れてたお嬢様に普通に接してた私だしなんら問題ないだろう。

つと思っていたんだが問題はご飯屋さんに着く前に起きてしまった。

「お姉ちゃん達修学旅行生？可愛いねー。よかったら俺らと楽しいことしよーよ」

めんどくさい…この手のナンパはお嬢様と買い物に行く度にされるからもうコリゴリだった。どうやら天音様と歩いていてもそれは同じらしい。そりゃ天音様もめっちゃ

くちや可愛いからね。女目線だけど天音様はなんていうかふわふわした感じ？誰とでも仲良く出来るのはほんとすごいと思う。そのせいで色んな女の子勘違いさせて告白されたりもしてたっけな。うちの高校ではナンバー2だね間違いない。1はお嬢様。それは間違いない。

「解説してる暇あつたらやんわり断つてよ楓ちゃん。私のこと可愛いって思ってくれてたんだあ。後でチューしてあげるね」

「さゆりに殺されたくはないんで遠慮しときますよ。すみません私達そういうのは大丈夫なので、行きましょ天音様」

軽くあしらって行こうとしたのだが…

「おいおいノリ悪いなーちよつと待つてよ」

「いたっ！」

「天音様！」

1人の金髪の男が天音様の手を強引に掴んで自分の方へと引つ張っていた。

「お前もこっち来いよ！」

「ちよつと！なにするんですか！」

私ももう1人の男に手を拘束されて身動きが取れなくなってしまった。

「さあお姉ちゃん達楽しいことしよーな。そこに車止めてるからちよつちよと乗れよ」



この人達やばい！私は本能で危機を察した。このまま連れてかれたらどうなるかわかったもんじやない。私は必死で抵抗した。

「離してよ!!誰か来て!!お願い!!誰かあ!!」

私は声の続く限り叫び続けた。

「うるせえんだよ黙りやがれ!」

「うっ、ケホツケホ!なんてことするの……」

私は男に鳩尾の当たりを思いつきり殴られ息が出来なくなるほど苦しくなって声を荒らげることが出来なくなった。

「楓ちゃん!」

「ごめんなさい天音様……さゆりごめん。天音様守れなかったよ私……」

「おい見ろよ、こいつ泣いちゃったぜ。ホテル言ったらもつと泣くかもしんねーけどな、ギヤハハハ」

外道が。手さえ拘束されてなかったら私も戦えたのに……

私と天音様はそのまま抵抗出来ず車に連れ込まれそうになったその時だった。

「お前ら。何したかわかつてるでしょうね。私の一番大切なもの気付けたんだからそれ相応の覚悟はしてもらわよ」

「え……?」

次の瞬間暗闇の中から武装した軍人らしき人達が一瞬で私達を取り囲み男を手刀で一撃で落としてしまった。

「ご苦労様です。本当に感謝します」

「いいえ、私達には勿体なさすぎるお言葉です。また何かありましたらお声掛けください。私はこいつらを警察署まで運んで行くので」

「ちよつと待つて、金髪じゃない方にやらなきやいけない事があるの」

「は、はあ」

「お前か。私の楓を痛みつけたのわ。楓が受けた痛みの数倍の痛みを受けてもらうからな」

「ひ、ひい。ごめんなさい！出来心だったんです！」

「知るか。死ぬやあ！」

まあそれは見るも無残と言いますかこれまで天音様を蹴り飛ばしてた蹴りとは比べ物にならないぐらいの威力で男の顔面を蹴り飛ばしていた。やっぱり絶対怒らせちゃいけない人なんだなと思った。

「じゃあ、あとお願いね」

「承知しました」

軍人風の男が2人の首根っこを掴んで警察署の方へと引きずっていった。

「楓!!」

お嬢様が勢いそのままに抱きついてきた。ほんとお嬢様がいなかったらどうなっていたのか……私は安心感からか泣いてしまった。

「うぐ、お姉ちゃん！お姉ちゃあん！ほんとに怖かったんだよ！もう会えないかと思つてたんだから！うわああん！」

「もう大丈夫だからね。私がずっとそばに居るから」

「うん……」

しばらく私はお嬢様の腕の中で泣いていた。その感もお嬢様は私の頭を撫でてくれたり励ましの言葉をずっとかけてくれていた。

「ありがとうお姉ちゃん、もう大丈夫」

「よかった……じゃあホテル戻りましょうか」

「うん、でも警察とか行かなくていいの？」

「面倒なことはあいつらに任せるわ。一応先生には報告するけどね」

「あの、あの人たちはいつたいたいという関係なの？」

「それ、私も聞きたかったのよ。後なんで私たちの居場所やらの状況がわかったのか。さゆりいい加減に離れて、もう大丈夫だって」

「でも、でも……何もしてあげられなかった自分が悔しくて……」

「いいのよ。それに襲われたのがさゆりじゃなくてほんとによかった。多分貴方可愛いから車連れ込まれる前にやられちゃってるよ」

「うう、天音ちゃあん！ほんとによかったよお！」

さゆりがここまで動揺して甘えてるのも初めて見た。ほんとにこの事件は忘れられない思い出になりそう。

「よしよし、ホテル戻ってゆつくりしようね、ごめんエレナ話し切って。それでどういふことなのあれは？」

「ああ、まずさっきの人達は私の持ち物よ。持ち物って言い方は失礼かな。お母様が雇っていた用心棒だと思ってもらっていいわ。お母様が亡くなった後もずっと私を見守ってくれていてそれですぐ向かってもらったの。場所となんであの状況がわかったのはこれのおかげなの」

お嬢様は鞆からタブレット端末を取り出した。そして、アプリを開くと今いる地点が表示されていた。

「楓には言つてなかったけど貴方の靴に発信機と盗聴器仕掛けさせてもらってたのよ。私と離れてる時に何かあったら困るなと思って。盗聴器もこの自作のアプリで声が聴けるようになってるのよ。さゆりにはバレないように片耳だけインカムつけてそれです。ナンパされてるのがわかって成り行き見守っていたらあんなことになってたからす

ぐに用心棒に連絡して向かってもらってわけて」

なんていうか：お嬢様はお嬢様だなんて。忘れかけていたけどお嬢様は超がつくほどのお金持ちで日本でも名のある月村家の当主だ。確かに用心棒を雇っていても不思議ではないが…

「発信機と盗聴器って…私のプライバシー的な問題は…」

「まあそのおかげで助かったんだしいいじゃない楓ちゃん。今回はエレナに頭が上がりませんよ。それじゃ帰ろ。お腹すいちゃったよ安心したら」

「そうね、行きましょ」

さゆりがまだ泣き止まないので私達は4人仲良く手を繋いでホテルへと帰った。

## 一段落して

あの事件の後私達はすぐに先生へと報告しに行った。それがあつてか、明日の午前の自由行動は中止となつた。修学旅行も残すところは明日の午後の団体行動のみとなつた。

私達は部屋に戻ると先程の事を忘れられず私はお嬢様に、さゆりは天音様にくつついて離れられなかつた。つてか天音様の芯の強さがほんとに今回の件で分かつた。あんな事があつたのに弱みを見せずさゆりのケアに一生懸命で普通の女の子ならあんな事をされたら泣いてもおかしくないのに一切泣かず笑顔さえ見せていた。やっぱ次期当主つてだけあつて肝が座っているなど改めて思い知らされた。その点私とさゆりはどうだろうか、すぐにお互いのお嬢様に会うと泣いてしまい弱い所を見せてしまった。私も強くなりたくないなあほんと……お嬢様に守られるだけじゃなくて守れるようになりた。今度天音様にそれとなく強くなれる秘訣とかを聞いてみようかな。

「楓」

「え？」

「貴方自分が弱いとか思つてない？」

また心を見透かされたようだった。ほんとよく私の事見てるんだな…

「まあ…今回の件で何も出来なかったし」

「バカ」

優しくお嬢様は私の頭を抱えて言葉を続けた。

「あそこで楓が叫んでくれなかったら私は助けにすら行けなかったのよ。それだけで弱くなんてないわよ。楓は強い子だから大丈夫。楓は楓のままできて大丈夫だからね」

「お姉ちゃん…なんでそんなに優しいの…ずるいよ。これ以上好きになっちゃうじやん。」

私はお嬢様に軽い口付けをしてまたお嬢様の腕の中に戻った。

「ほんと甘えん坊さんなんだから。今日はもう遅いし寝ちやいませよ」

「そーだね、また一緒に寝てもいい?」

「もちろんよ」

「ふふ、ありがとうお姉ちゃん」

話している間に天音様とさゆりも布団に入っていたので私達も寝ることにした。

「おやすみお姉ちゃん」

「おやすみ楓」

私達はまたキスをして眠りについた。

「楓、朝よ起きて」

「ん…お姉ちゃんおはよ」

私はお嬢様の声で目を覚ました。時間は…9時か。昨日疲れてたしこのぐらいに起きるのは仕方ないか。

「おつはよー楓ちゃん。昨日の疲れは取れた？取れるわけもないか」

「あ、天音様おはようございます。あんま取れてないですね。まだ体重たいです」

「だよねー。私も昨日あの変態に掴まれたところアザ出来ちゃってほんと最悪だよ。まあ慰謝料ふんだんに取ったからいいけどさ。手出したのが緒方家の次期当主と月村家のメイドだもん相手も運が悪いよね」

「ええ!?!アザできたんですか!?!そんな強く掴まれてたんですね…まあ確かに…自業自得ですけどね」

「別に大丈夫だよ。アザのところはスカーフでも巻いて誤魔化しとくしよ。楓ちゃんこそお腹大丈夫なの？結構強く殴られてたでしょ」

「そーいえば昨日お風呂も入らずに寝ちゃって見てませんでした…」

「だよねー。私達も今順番にはいつてるからさ今見てみたら」



「あ、了解です。えっと…」

パジャマの裾を掴んでめくろうとした時だった。

「ちよつと！そんな簡単に人に素肌見せないの！こつちいらつしやい！」

「え!? うん」

「ちえ。楓ちゃんの綺麗な肌見れるチャンスだったのに」

いや、前一緒にお風呂入ってますよね天音様…

「見ていいのは私だけよ」

「独占欲おぼけ」

「うるさい、ほら楓いらつしやい」

「う、うん、うわ…思いつきりアザ残ってるじゃん」

お腹を見て私は驚愕した。天音様とは比べられない程大きなアザが残っていた。アザを撫でるとヒリヒリする痛みが伝わってきて嫌な感じだった。お腹のアザを凝視していたお嬢様というと…

「やつぱりこの世から消しておくべきだった…楓の綺麗な肌にこんなもの残すなんて

……痛いよね？」

私は前半部分を聞き流して後半部分だけを聞いていたことにした。

「特に触らなければ痛くないから大丈夫だよ。さゆりお風呂から上がったみたいだし私

入ってくるね」

話の途中でさゆりがお風呂場から出てくるのが見えたので私はお風呂に行くことにした。

「私も行「来なくていいです」

絶対そう言うだろうと思つたから私は話をぶつた切つてお風呂へと逃げ込んだ。

だつてお嬢様とお風呂入つたら絶対昨日みたいになるじゃん…今はそういう気分じゃないし。

「かえでえ！なんでよお！」

さつきまでのかっこいいお嬢様はどこに行つたんだらうつてぐらいいの変わりようだった。それを見て天音様とさゆりは笑いを隠せなかつたようだった。

脱衣場に行きパジャマを脱ぐ時にアザを触つてしまいチクツとした痛みが全身を襲つた。

「つたあ…ほんとあんなに強く殴られるなんて聞いてないよ…お風呂上がつたら持つてきた湿布貼つておこ」

浴槽に1人でつかつているとお嬢様と付き合う前の事を不意に思い出した。そう言えれば付き合い始めてからずっとお風呂一緒に入つてたから1人で入るの久しぶりだな。あの頃のお嬢様の面影なんてホントに皆無だもんね。冷徹で非情とまでは言わなくて

もホントにきつい人だったな……それが今じゃ私の彼女なんだもんなあ……人生ほんと何  
が起こるかわかんないや。

「へっくちー！」

「なにそのエレナに似合わない可愛いクシヤミは」

「うるさいわね、人のくしやみにいちいち突つかからないでよ」

「へいへい」

なんか外が賑やかな気がするけど気のせいかな。多分また天音様がお嬢様からかっ  
て遊んでるんだろうけど。

私は一通り体を洗って髪を洗いお風呂場を後にした。やっぱり1人より2人の方が  
いいなお風呂……お嬢様近くに感じられるし。お屋敷戻ったらまた一緒に入れるけどね。  
恥ずかしくてこんな事お嬢様には言えないけど。

「あ、楓ちゃん聞いてよ、エレナのクシヤミ可愛いんだよー」

「あんた突つかからないでよって言ったわよね？」

「痛い痛い！アザ出来るとこ掴まないでよ！」

ほんとこの二人は相変わらずだなあ。

「お姉ちゃんのクシヤミが可愛い事はよく知ってますよ天音様。寝てる時横でクシヤミされてビックリしたの思い出しました」

あれは驚いたなあほんと。お嬢様の可愛い一面の1つだと思う。だってへっくちだよ!? 萌え死ぬよね。

「なーんだ楓ちゃん知ってたのかあ。ってかなんでエレナは顔真つ赤にしてんのよ…いつも2人でイチャイチャしてんだから照れる要素どこにもないでしょうに」  
「うるさい」

顔を真つ赤にしてそっぽを向くお嬢様はとても可愛くてちよつと虐めたくなくなってしまうた。

「お姉ちゃん?ほんとに人に可愛いとか言う癖に自分が言われると照れちゃうんだもんね。そういうところほんと可愛いと思う」

「ほんとエレナちゃん可愛いよ、ねえさゆり?」

「え!?私に振るの…エレナ様可愛いと思いますよ」

三位一体の攻撃を受けエレナ様はと言うと…

「もー!うるさいってば!」

布団に包まって出てこなくなってしまうた。ちよつとやりすぎちゃったかな。

「楓ちゃんがDSになるのもわかるかもね」

「別に私はDSじゃないですよ」

「ふーん、じゃあ私達は食堂で昼ご飯食べてくるね、後はごゆつくりー」

「あ、じゃあ私もお姉ちゃん出て来たら向かいますね」

さてと……こうなった時のお嬢様はいつ出てくるかわからないからなあ。

「お姉ちゃんごめんつて。ちよつとからかいすぎた」

「…知らない楓のバカ」

完全に拗ねちゃったよ。仕方ないなあ。私はお嬢様が寝ている布団に潜り込んだ。

「仕方ないじゃんお姉ちゃんほんとに可愛いんだもん」

息が当たりそうな至近距離で私はそう言った。またお嬢様は顔を真っ赤にして照れ隠しに私にキスをしてきた。そういうことが可愛いのにほんと。私からもお嬢様にキスを返した。

「天音達は？」

「今食堂に行ったから部屋には私達二人きりだよ」

私はわざと二人きりの所を強調してお嬢様に話した。私もお嬢様が欲しくなったのだ。昨日お嬢様に助けられてまた好きの気持ちが強くなったからだ。でも自分から欲しいとは言いつらいから私は敢えてそういう言い方してみた。

「楓、いいの？お風呂断られたから今日はそういう気分じゃないのかなって思ってたん

だけど」

「なんでこういう時控えめなの!! いったつもは何も言わなくてもがつついてくるじゃんお嬢様。変に見透かされてる気がしてならなかった…」

「なんでこういう時は鈍いのお姉ちゃん…私だつてそういう事したくなる時だつてあるんだよ」

私はお嬢様の腕の中で小さく呟いた。お嬢様がその言葉を聞き逃すはずもなく。

「ごめんね気付いてあげられなくて。じゃあ遠慮なく、ん」

「ん!? 遠慮なさすぎじゃないかなそれは…」

お嬢様はいつもより激しく私を求めてきた。それに応えるように私もキスを返す。

「楓から誘ってくれる時は少ないからその分たくさん可愛がつてあげよっかなつて」

冗談交じりの笑顔で言ってくるお嬢様。

「ふふ、どーせいいつも見たくドMになる癖に」

「それはどーかしらね。今日の私は一味違うわよ楓」

お嬢様がそう言つてたつたの30秒後…

「お姉ちゃん? どこ舐めたいか言つていいよ? それとも踏まれたいかな?」

「楓様の足に踏まれたいです…お願いします」

「ふふ、ほんと可愛いんだから。じゃあ特別サービスで今日はたくさん踏んであげるね」

「エレナ感激です!!」

「ぶふっ!それやめてお姉ちゃん…」

なんだかんだでいつものお嬢様でしたとき。

やる事ややって私達は一緒に大浴場に来ていた。丁度皆お昼を食べている時間帯だったので貸切状態だったので他の人に見られない間に私達はお互いの背中を流しあったり髪を洗いあったりした。

「修学旅行来てよかったわ。また来年も行こうね楓」

「そうだね、でも今度は2人だけで旅行とか行きたいかも」

「じゃあ夏休み行こっか」

「ほんとに!?やったー!」

「ふふ、そろそろ午後の団体行動の時間だから戻ろっか」

「そーだね」

私達はお風呂から上がりクラスの集合場所へと向かった。

## 修学旅行最終日

「じゃあ皆集まったね！絶対に離れないこと！それだけを守って私達についてきてね」  
つかさちゃんの手紙で私達はクラスでの団体行動を開始した。帰りのバスの都合もあるので正味2時間ほどしかなかったが清水寺へ行つてクラス写真を撮ったり各自お土産を購入した。お嬢様学校つてこともあり各メイドは両手いっぱいにお土産を持っていた。やっぱり家柄によつてお土産の量とかも変わるんだなと思った。私はという

と。  
「お嬢様、何か記念に買っていきますか？」

「んー、別にいらなかな。楓も荷物持つの嫌でしょ？」

「いや、別にそれは構いませんが」

「それに何かもたせちゃつて両手ふさがっちゃつたら帰り手繋いで帰れないじゃない」

「あ、そこ…」

「何言つてんのよ、大事な事よ」

「まあ、そうですね」

お嬢様は相変わらず私の事を第一優先してくれてるみたいで嬉しかった。



「団体行動なのにイチヤイチャしてんじやないわよそのバカツプル」

「あ、天音様、つてさゆり何その荷物…」

声をかけてきたのは天音様だった。しかしその横にいるさゆりが死にそうな顔で両手いっぱいビニール袋を下げていた。

「天音様がたくさん買っていきたいって言うから…」

「貴方も少しは自分で持ちなさいよ。さゆり死にそんな顔してるわよ？」

「えーだつて重いし…」

「ほんとこういうお嬢様にはなりたくないわね」

ええ…それを半年前のお嬢様に聞かせたらなんていうんだろ…

「エレナにだけは言われたくないわ」

「昔と今は違うのよ」

「へいへい、さゆり片方持つから貸しなさい」

「え、ですが…」

「いいのよ、流石にそんな顔されちゃ持たせられないつて。ごめんね気付いてあげれなくつて」

「い、いえ…ありがとうございます」

さゆりは顔を真っ赤にしていて照れていた。無自覚イケメンだからなあ天音様も。

お嬢様もそういうところあるから時々ドキツとしちやうんだけどね。残念系お嬢様が8割を示してただけどこの前のナンパの1件で残念なのが5割ぐらいになった気がするよ。

私達はお土産などを買い終え帰りのバスへと乗り込んだ。

「なんかあつという間だったね。つてかまともに観光してない気がする…」

「確かに…つてきもぢわるい…」

私は行きと同じく少しの揺れでバス酔いを起こしてしまった。

「流石にその早さに脱帽するよ楓…エレナ様に言いなよ。また肩貸してもらえばいいんじゃない?」

「簡単に言うけど結構恥ずかしいんだからね!」

「ホテルのお風呂場でやってた人の台詞とは思えないんだけど…」

「うるさい、寝れば大丈夫だよ多分。おやすみ!」

「はいはい、おやすみ」

私はしばらく目を瞑っていたが一向に眠気が来ず吐き気だけが増していた。

やばい…マジでこのままだとお昼ご飯の海鮮丼出てきちゃう…その時だった。

「全く…気分悪いなら早く言いなさいよね。私の膝使っていいから寝ちやいなさい。肩貸してると私も少し肩痛くなるから膝で我慢して」

膝枕!? それはとても魅力的な提案だけど流石にほかの目もあるから無理だよお嬢様  
:

「いや…流石にほかの人の目ありますからそれは…つて!お嬢様!」

お嬢様は私の首根っこを捕まえると自分の膝の上にちよこんと乗せた。ほんとの話聞かないんだから…一度決めたら実行するつていうのはほんと付き合う前から変わつてない。

「そんなの気にしなれば平気よ。別に他の人になんと思われようが構わないわ」

構いますつてえ!お嬢様のファンの目がヤバイですつて!ほらあ!私の事すんごい目で見てますもん!

「いった…お嬢様何するんですか…」

突然お嬢様に頭をはたかれた。しかも割と強めに…

「まーた釣り合つてないだとか変な事考えてたでしょ?そんな事ばつか考えてたら学校の教卓の目の前でキスするからね」

死ぬわ。そんな事されたら色んな意味で死んでしまいますお嬢様。

「す、すみません…じゃあ改めてお膝お借りしますね」

お嬢様の膝枕はとても温かかった。細い足にどこからこんなぬくもりが…それにやっぱりお嬢様にくつついてしていると自然と体が安心感に包まれていた。

「お嬢様は体休めなくて大丈夫ですか？」

「私は大丈夫よ。それに楓がいるだけで疲れ取れるもん」

「もー！そんな恥ずかしい事平気で言わないでくださいよ！」

「ふふ、いいからもう寝ちやいなさいな。着いたら起こしてあげるから」

「ありがとうございます、おやすみなさいお姉ちゃん」

私は皆に聞こえないような声でお姉ちゃんと言った。お嬢様は不意打ちに少し照れていたようだった。

## 久しぶりのお屋敷

「楓、着いたわよ。ほら起きなさいな」

「ん、お姉ちゃん……?」

「今はお嬢様、でしょ?」

「あー!ごめんなさい!えっともう東京ですか?」

「どうやら私はお嬢様の膝枕で熟睡していたようだった。ヨダレとか垂らしてないよね……」

「もう後2・3分で屋敷よ。バスの運転手さんが気を使ってくださって皆の家まで送ってくれるんですって。ほんと助かるわ」

「バスの運転手さんがいい人で良かったです、人混みの中の満員電車はほんとに嫌いです」

「月村さん、着きましたよ」

「ありがとうございます、それじゃまたね天音」

「またねー」

「さゆりもまたね」

「じゃーねー」

私達は天音様ときゆりと別れ久しぶりのお屋敷に帰ってきた。

「はあ帰ってきたあ！修学旅行楽しかったねお姉ちゃん」

「そーね。色々あったけどそれなりに楽しめたわ。結構疲れちゃった。早速だけどお風呂  
呂沸かしてもらってでもいい？」

「わかったー」

「ありがと」

やっぱりお屋敷はいいな。安心感があるっていうかなんていうか。それにお嬢様と二人つきりっていうのはやっぱり嬉しい。

早速私はお嬢様に言われた仕事をこなししばらく家を開けていたので閉め切っていたりビングの天窓を開け空気を換気した。

「お姉ちゃん洗濯物出しておいてね。明日の朝回しちゃうから」

「りよーかい。そつか。明日から三日間疲れとるために休みなんだっけ」

「そーだよ、有難いよね3日も休みもらえるなんて」

「そーね、そういえば夜ご飯どうしよつか。なんか作り置きとかあつたけ？」

「あー……修学旅行前に作り置きは切らしちゃった。なにか出前頼む？疲れててあんま料理する気になれないや……」

「そーね、たまには出前でもいっつか。お風呂上がったら何頼むか決めましょ」

私とお嬢様はお風呂が沸くまで修学旅行で使ったカバンなどを押入れにしまったりして時間を潰した。

「あ、お姉ちゃんお風呂沸いたみたいだよ」

給湯器がお風呂が沸いたことを示していた。

「じゃあ行こっか」

「うん！」

私はお嬢様の後を追ってお風呂場へと向かった。

「なんか凄く久々な感じするわね」

服を脱ぎながらお嬢様が言う。確かにちよつといなかったただけですんごい久々に感じる気がする。

「確かに。なんなんだろうねこの感覚」

「先入ってるわよ、お湯の温度見といてあげる」

「見といてあげるっていつつもうちは41。でしょ！」

笑い声と共にお嬢様は浴室へと消えていった。

「さてと……はあ痣早く消えないかな……ほんと何してくれるのよあいつら」

私のお腹にはまだ痛々しく強姦魔に殴られた後が残っていた。目立たないところと

はいえ思い出すしホント嫌になる。まあ考えても仕方ないことだし早く入っちゃお。お腹すいてるしとつと出て何か冷蔵庫の中つまめばいいや。

「かーえで！」

「きやつ！なにになに!？」

私が入るといなやお嬢様が私に抱きついてきた。滑るお風呂場で危ないですよお嬢様……

「やっぱり二人つきりはいいなあと思つて。邪魔されずにイチヤイチャ出来るでしょ？」

予想はしてたけどまあそうなるよねお嬢様なら……私も久々に二人つきりになれて嬉しいしお嬢様に流されたつてことでいいよね？

「うん、お姉ちゃん……ん……ん……」

私は抱きつかれてお嬢様の顔をこちらに向けて軽い口付けをした。

「楓、このままベッド行きましょうか。久々のお屋敷だしゆつくり、ね？」

「うん、そーだね、時間はたくさんあるしね」

珍しくお嬢様はがつついて来なかった。なんだろう……付き合つて数ヶ月でお嬢様にも余裕が出来たのかな？今までエッチする時のお嬢様と言つたら……まあ酷かったからね。



私達は軽く体を洗い流すと二人の寝室（あいのす）へと向かった。

「ん、ぷはあ……お姉ちゃん……大好き、んちゅ……」

「つ……はあ……楓、ちよつとはげし、んーつはあ……」

「ふふ、目がトロンってなってるよお姉ちゃん、服脱がすね」

「うん……お願い……」

私はお嬢様が抵抗しない事をいい事に下着以外を全て脱がした。なんだかいつもより私お嬢様にながつついてる気がする……でももうこの気持ちを止められない……

「あ、ちよつといきなり！楓！ダメだつてそこは！んー！んあ……」

「何がダメなのかなあ。声我慢しなくてもいいんだよ？二人つきりなんだから。そろそろ私のアレが欲しいんじゃないのお姉ちゃん？」

「はあ……はあ……楓の……足を舐めてたいです……」

「聞こえないよお姉ちゃん。ちゃんとやってくれなきやここでお預けだからね」

「楓の意地悪……だから……その……楓の足を舐めさせてください！たくさん私の事虐めて欲しいの……」

「よく出来ました、ほら、お姉ちゃんが大好きな私の生足だよ」

挑発的な目線でお嬢様の目の前に私は足を差し出した。もうこうなつてしまえばお嬢様は普段のカリスマ性はなくダメなお嬢様になるからね。

「はあ、んちゅ、楓様……」

その後はお互い体力が続く限り快楽を求めあつて、出前を取る。という事も忘れご飯を食べずに眠ってしまった。ほんと私達って似たものどうしたんだなって思ってしまった。せめてどちらがストッパーをかければご飯を食べるなりまたシャワーを浴び直したり出来るもののぐっしより濡れたシーツの上で何回寝てるのかわからない……お嬢様に関してはベッドの上どころか行為をしたあとの床で寝てる率が半端じゃない………どうにか対策たてなきゃだね……

私達が眠って起きたのは翌日の夕方だったらしい。ほんとヤリ疲れて遅く起きるってだらしなすぎるよね……

## 突然の来客

修学旅行空けの連休も終わり私達は学校へと向かっていた。

「今日からまた授業始まると思うと憂鬱だよ……」

「そう？別にいいじゃない話聞いているだけなんだし」

「まあそうだけどさ」

お嬢様は話聞いているだけで勉強頭に入ってくるけど私はそうもいかないからノートとかちゃんと取らなきゃだし……

「おつはよー楓ちゃん！」

「あ、おはようございます天音様。つて……このセクハラはいつも通りなんですわ……」  
天音様はこちらに走ってきてそのまま私に抱きついてきた。これもいつも通り。つてことはこの後は。

「だから私の楓にセクハラすんなっての！」

「いったあ！たまにはいいじゃない！少しは目瞑ってよねエレナ」

「私が瞑るわけじゃないじゃない。くだらないことしないで早く行くわよ」

まあそうなるよね。ほんといつも通りだよ。

今日もこんな感じでいつも通りの日常が始まるとこの時は思っていた楓だった。

「学校につくと連休空けのせいかクラスメイトも普段にましてやるような顔をしていました。やっぱり連休空けの授業ってヤル気にならないよね。」

「はい、じゃあ皆席ついて。ホームルーム始めるよ……」

「なんかつかさちゃん眠そうだね、どうしたんだろ」

「せんせーねむいの？」

前の席の子がつかさちゃんの変化に気付いて早速質問をしていた。

「連休空けててだるいじゃん……」

「あー……」

大したことのない理由で私達皆は肩の荷を下ろした。いきなりテストだとか学校に問題があったとかだったら面倒だからね。

ホームルームが終わると1時間目は英語だったのでそのまま教室から出ることもなく準備をしていた時だった。

『橘楓さん、至急応接室まで来てください。繰り返します。橘楓さん、至急応接室まで来てください』

え？私？誰だろう……

「楓に来客？心当たりある？」

「いや全然ないです……」

「うん……まさか……」

「どうかしましたかお嬢様？」

「ううん、何でもない、行つてらっしゃい」

お嬢様の考え込むような表情が少し気になったけど私はその来客を待たせるわけには行かないと思つたから応接室まで早足で向かつた。

私は応接室につくと一呼吸置いて声をかけた。

「橘です、入つても宜しいでしょうか？」

「どうぞ」

「失礼します」

応接室に入ると年齢は30代後半といったところだろうか。スーツを着た女性がちよこんと座つていた。

「じゃあ私はこれで失礼します」

担任のつかさちやんが応接室から出ていくと私はその人と二人つきりになった。

しばらくお互い何も言葉を発さずその沈黙に耐えられなくなった私は口を開いた。

「あ、あの……私をどうして呼んだんですか？初対面だと思ふんですけど……何処かで会つて覚えてないのかならほんと申し訳ないんですが」

「ほんとごめんなさい。私が貴方にした仕打ちは謝って許されないことぐらいわかってるけどとにかく謝らせて下さい。ほんとごめんなさい」

突然スーツの女性は応接室のソファから降りて応接室の床に土下座をして私に頭を下げてきた。いきなり謝られて本当にわけがわからない。どうということなの？私は頭がパニックになっていた。

「あ、あのーいきなり謝られても困りますよ！貴方は一体どちら様なんですか！とにかく頭をあげてください」

このままだと埒が明かないと判断した私は女性に語りかけた。本当にわけがわからない。この人は私に一体何をしたというんだろう。

「そうよね……覚えてるわけないもんね……楓。私は実の貴方の母親よ。10年以上前に貴方を捨てた親。私の名前は橘紅葉。私がここに来たのは、って楓！誰か！楓が！楓が！！」

「橘さん!?大丈夫ですか！橘さん!?!」

お母さん？なんで今更？もう会うことなんてないと思ってたのに……どうし……て……

私の意識はそこで途絶えた。

「ここは……そっか、私応接室で倒れちゃったのか……」

まさかお母さんが来るなんて……でもなんで突然……今はもう幸せなんだよ私。私の幸せ壊すつもりなの。

「橘さん身体の調子はどうですか？」

白衣に身を包んだ恐らく、看護師さんだろう。その人が私に話しかけてきた。

「大丈夫です。ここは病院ですか？」

「そうですか……はい、学校で気を失った橘さんを救急車でこちらまで搬送しました」

「あの、スーツを着た女の人はどうしたかわかりますか？」

あえて私はお母さんとは言わなかった。お母さんなんていないと思っていたのだから当然だろう。

「あー、その方ならもう1人の付き添いの方と病院の外で話されてましたよ」

もう1人の付き添い……まさか!?

「あの、その付き添いの方ってどんな方かわかりますか？」

「えっと、長い黒髪の綺麗な方でしたよ。橘さんと同じ制服を着ていました」

お嬢様だ……一体何の話をしてるんだろう……

話は気になるが今の状況では病室から出させてはくれないだろう。どうしようもな

いと思ったその時だった。

コンコンコン

「付き添いのものです。入って大丈夫ですか？」

お嬢様の声だった。私はそれを聞いただけで泣きそうになった。

「大丈夫ですよ」

看護師さんが扉を開けると……

「楓！」

「お姉ちゃん……」

「ごめんね！ほんとあの時一瞬思ったから私もついて行ってあげればよかった……辛い思いさせたよね……」

ほんとにこの人は……どれだけ優しくしてくれるんだろう……気付けば私は涙を流していた。

「ううん……ほんと来てくれただけで嬉しいよ……ありがとうお姉ちゃん……」

「ほんと強い子だよ楓は……絶対私がそばにいるからね」

「それはお姉ちゃんがいてくれるからだよ。私だけだったらきつとまだ病室で泣いてたり混乱してたと思う。お姉ちゃんが来てくれたからしつかりした意識持って話せてる



んだよ。本当にありがとうお姉ちゃん」

「全く……あの人には私からきつく言つといたから。突然連絡も無しなんておかしいって。もしもだよ、楓が連絡取りたくなつたら言つて。一応連絡先は貰つたから」

「ありがとう、ちゃんと話すよ。絶対解決しなきゃいけない問題だろうし。明日には退院出来るから明後日話すよ」

「ほんとに？大丈夫なの……？」

「だからお姉ちゃん、ううん、エレナお嬢様をお願いします」

「何よ畏まって、何でも聞くわよ」

「私一人じゃとてもじゃないけど話せないと思うの。だから一緒にその場所にいてもらえませんか？」

私は右手をお嬢様の前に差し出した。

「いいに決まつてるでしょ、そんなんでかしこまらないの。じゃあ私はお屋敷に戻るね、寂しくなつたらいつでも連絡してね」

お嬢様はしっかりと両手で私の右手を優しく包んでくれた。

「ありがとうお姉ちゃん。うん、それじゃまたね」

ちゃんとした話し合い。絶対超えなきゃ行けない壁だし解決しなきゃいけない問題だもんね……

## お母さん

私は無事何事もなく病院を退院した。そしてついに今日は紅葉さんとの話し合いの日。

「顔が緊張してますって顔してるけど本当に大丈夫？」

「大丈夫。昨日、今日学校休んだ意味がなくなっちゃうもん。それにお姉ちゃんがついてるし」

「ならいいけど……辛くなったらすぐ行ってよね」

心配そうな顔で私に言ってくるお嬢様。そんな顔しないで下さいよ。これ以上お嬢様に迷惑かけてたら私が嫌になるもん。

「うん」

ピンポン

来たっ……！

「はい、月村ですが。お待ちしておりました。今お開けしますので」

お嬢様モードのお嬢様だねこれ。なんだかんだでお嬢様も緊張しているのが丸わかりだった。

そして……

「この間は突然ごめんなさい。しっかりとした話し合いの場を作ってくれたことに本当に感謝します」

「いえ……紅葉さんそこに座ってください」

私がお母さんじゃなくて紅葉さんって言うとは思わなかったんだろう、私が紅葉さんと言った瞬間顔がこわばったのがわかった。

ちなみにお嬢様には部屋の入り口にたつてもらいました。横に座るって言い張ったのを紅葉さんが緊張するかもしれないってことで断りました。

「はい、失礼します」

私は単刀直入に聞きたかったことを聞いた。きつと今聞かなかつたら一生逃げることになると思ったからだ。

「じゃあ聞きますね。何で年端もいかない私を月村家に預けたんですか？それとも適当に金持ってそうだからダンボールにでもいれて捨てたんですか？正直に言ってください。今更濁されても困るので」

自分で捨てられたとか言うのはほんとにやだな……言うたびに胸の奥がキュツとなるのが分かった。

「長くなりますけどそこは勘弁してくださいね。まず私は楓の父にあたる人と18の時

に楓を出産しました。その父はその時無職で21の大学生でした。私も高校3年生でお腹の中に赤ちゃんがいることにその時はとても驚きました。いわゆるできちゃった婚です。両親に相談することも出来ずその時はどうしよう、どうしようって気持ちでいっぱいでお腹に赤ちゃんがいるってその人に相談したらそれつきり連絡がつかなくなつてね……気づいた時にはその人は住んでいた家から引越した後でした。1人取り残された私はその事を両親に涙ながらに話したのを覚えています。父からは何も考えずにそういう事をするからだと怒鳴られ元から口数の少ない母親は完全に無視でした。それで私は堕ろすか産むかの2択の決断を父親から強いられました。堕ろすんなら家においていいが産むなんて言ったら金輪際家の敷居は跨がせないと……まあそれはそうでしょうね……橘家の面汚しとしかその時父親は思つてなかつたでしょうし。私は1週間という短い期間で答えを出しました。『お腹の子を産んで育てる』つて。1つの命を絶やした罪を背負つて生きるのが怖かつた……それだけが理由でした。家を追い出された私はある友達の家に住候をしながら仕事を探して楓を育てることにしました。その友達と言うのがエレナお嬢様の母親のカリナ様だったんです。彼女とはたまに中学時代部活の大会で仲良くなつて高校に入つてもママに連絡を取つていたんです。彼女に1番にこの事を相談したら「え？ほんとに……実は私もなんだよね……彼氏に避妊無しで無理やりされちゃつてさ……良かったらうち来ない？今1歳になる娘が

いるし色々と教えられるから」って。その時にお嬢様だったんだってことも知りませんでした。私はそんな彼女の優しさにつけてこんで月村家に居候する事を決めました。ですがやっぱりカリナ様のお母様はそれを歓迎してはくれませんでした。それはそうですね。由緒ある家柄の月村家。それに娘さんまで子供がいて大変な時期ですし。そんな生活を初めて1年になった辺りでした。カリナ様のお母様から楓をうちのメイドとして育てたいと。それに応えてくれるなら金銭面の補助を全てしてやると。楓が大きくなつてからのお金の補助は全て見てやると。もちろん私の生活費です。ただし条件として私が家から出ること、1週間以内に返事を出すことでした。ただでさえ仕事も楓が寝てからコンビニの夜勤をしていたぐらいでお金に余裕のない私は今後の事を考えたら悩んでる暇はありませんでした。この子の幸せを考えたらそれが一番かな……って。月村家のメイドさんは皆明るくて優しく、きつと悪い風にはしないかな？って思えましたし。そして私は家から出て月村家のお屋敷からそう遠くない一軒家に引っ越ししました。それから陰ながら楓を見守る日々が続きました。カリナ様からも育児の様子などの写メで貰つて楓の様子もわかりましたし。ですが不慮の事故でカリナ様とカリナ様のお母様が亡くなつて楓の様子がわからなくなつてしまつて……連絡の手段がカリナ様しか分からなかった私はただお屋敷の外から祈るばかりでした。そしてあれは確か楓が13歳になった頃でした。立派に成長した楓が家事をやつていて月村家

のメイドさん達がちゃんと育ててくれたんだな、と。それから私は楓が家事をする時間に合わせてこっそり見守ってきました。でもやっぱり見てるだけじゃ我慢出来なくて一昨日声をかけてしまったという訳です。本当に迷惑をかけてごめんなさい。もう母親でもなんでもないのでね……話は以上です」

知らなかった……紅葉さん、ううん、お母さんがそんな境遇の中で生きていたなんて。捨てられたって言われてたけど捨てられてなかった……確かに世間的には捨てられた。つて言い方が正しいかもしれない。でも私はそうは思わなかった。見守ってれていた。その事実がわかっただけでも嬉しかったのだ。

「楓？涙が……」

「え？嘘……」

お嬢様が私の変化に気付いてぼそつと呟いた。これは何の涙なんだろ……悔し涙でもないし悲しくて泣いてる訳でもない……

そっか。

嬉しかったんだ……私は嬉しくて泣いてるんだ……それを実感してすぐに私はお母さんに返事を返した。

「お母さん……冷たく当たってごめんなさい。今でもちゃんと見守っててくれたんだね……ありがとう……うう、お母さん!!会いたかったよお!!!」

私は思いつきりお母さんを抱きしめて泣いた。

「楓、ごめんね、悲しい思いをさせてほんとにごめんね……」

お母さんもそれに合わせるように思いつきり私を抱きしめてくれた。

しばらく私とお母さんは泣いていてそれを止めたのはお嬢様だった。きっとこのままだと永遠に泣いてしまうとも思ったのだろう。

「一件落着ね。紅葉さん。楓はもうあなたの事を許していますよ。今後は見守るだけじゃなくて普通に会いに来てみてはどうですか？流石に楓を連れ戻すのはやめてくださいね、私がめっちゃくちゃ困りますので」

「いいんですか？普通に会いに来ても」

「いいも何も母親じゃないですか。断る理由がありませんよ」

「ありがとうございますエレナ様。お心遣いに本当に感謝します」

「楓もそれでいいわね？」

「うん、後お母さん、早速だけど報告したいことがあるんだ」

「ん？何かしら」

私はお嬢様の元へと歩み寄ると……

「ん……」

お嬢様の唇を強引に奪った。

「へ？」

お母さんからはさつきまで真剣な話をしていたとは思えない間抜けな声が聞こえました。

「ちよーちよつと楓!？」

「お母さん。私ね、今真剣にエレナさんと交際しているの。やっぱり同性同士だと変に思われるかもって思ったから先に話しておきたくて……」

お母さんは反対かな？ こういう関係」

実はそれだけが理由じゃなかったりもする。お母さんに私の自慢の恋人を紹介したかったのだ。

「楓が幸せならなんだっていいと思うよ、それにこんな素敵な彼女さんなら私も安心だよ、絶対逃がしちやダメだからね！」

お母さんは今まで見せたことをなかつた笑顔を見せながら冗談交じりに答えてくれた。

「うん！」

私もその笑顔に応えようと全力の笑顔を返した。

「はあ……ほんと丸く収まって良かった……紅葉さんそろそろ時間も遅いのでこの辺で。後これを。私と楓の携帯番号とメールアドレスです。いつでも連絡して貰って構



わないので」

「そうですね、今日は本当にありがとうございます。わざわざありがとうございました。わざわざありがとうございます」  
「あともうひとつ、私に敬語なんていりませんよ。いずれお義母さんって呼ぶことですよ」

それってつまりその……プロポーズ!? え!? 嬉しいけどそのまだ心の準備っていうか  
その……

「わかりました。じゃあエレナちゃんでもいいかな? 楓が顔真つ赤になってるじゃない今の発言で、じゃあ後はお2人で楽しんでね」

「はい、ありがとうございます。それではおやすみなさいお義母さん」

「おやすみエレナちゃん、楓」

「お、おやすみなさいお母さん」

こうしてお母さんは帰っていった。

「いきなりなんてこと言うのお姉ちゃん! 心臓止まるかと思ったじゃない!」

「ふふ、顔真つ赤にしちゃって可愛いわよ楓」

「もー誤魔化さないでよ!」

「ふふ、それじゃ私達も寝ましょ」

「なんか腑に落ちないなあ……」

なんだか流されるままに寝室まで来てしまった……

「それじゃおやすみなさい」

「ん、おやすみ。お姉ちゃん」

「ん？」

「今日は側にいてくれてありがとう。多分お姉ちゃんが近くにいるくれなかつたらあんな風に最後まで話聞けなかつたよ」

私は横で寝ているお嬢様の手を握りながら話した。

「お礼なんていらぬわよ。彼女が困っていたら手を貸すのは当たり前でしょ」

ホントにこのイケメンは……狙って言っていないんだろうからほんとに困る。

「それでもありがと……これからも宜しくねお姉ちゃん」

「うん……それじゃおやすみ」

「おやすみ」

私はお嬢様の手を握りながら眠りについた。

## 番外編 1

こんにちは。月村エレナです。楓が母親と和解して私としても嬉しいのですが、そのせいで私に甘えてくれなくなつてめっちゃくちや寂しくなつたので楓を観察する事にしました。ストーリーカー？なわけないでしょ。まあ番外編つてやつです。母親と和解した楓と進級するまでをここに記したいと思います。

「お母さん、見て見て！成績表！」

今日は2学年の全日程を終了して各自成績表が配られた。家に帰ってきて早速電話でお母さんと呼んでいた。そりやそうだよね。今まで成績表なんか貰つても捨ててたもんね。私には見せる相手がいませんからつて言つてたっけ……

「娘から成績表見せてもらえる日が来るなんてほんと思わなかつたわ、じゃあ見させて貰うわね」

「うん！」

付き合つてそれなりに経つたから分かる。あれはめっちゃくちや褒めて欲しい時の日だつて。私に成績表見してくればいくらでも褒めて髪とか撫でてあげるのに……

「凄いいじゃない！4と5しかない成績表とかお母さん初めてみたよ」

「えへへ」

そう言つて紅葉さんは楓の頭を撫でていた。それを嬉しそうに受け入れる楓。あー私しか知らない顔だったのに……つて楓の實の母親に嫉妬してどうすんのよ私……これじゃ天音に独占欲の塊言われても仕方ないわね……

「そう言えばエレナちゃんはどうかだったの？」

「私ですか？ そう言えば私も高校入つて誰かに成績表見したことかなかったですね。一応こんな感じですよ」

「オール5……流石月村家当主ね。凄いじゃない！」

「え、いやその、ありがとうございます……」

紅葉さんは楓にしたように私の頭を撫でてくれた。両親から褒められたことがほとんどなかった私は少し動揺してしまった。

「あー、お姉ちゃん顔真つ赤になつてるよ、ふふ、可愛い照れちゃつて」

「あらあら、エレナちゃんつて結構照れ屋さんなのね」

まさか橘親子にからかわれる日が来るとは思わなかつたよ……

「もう、からかわないでくださいよ！ 仕方ないじゃないですか褒められたことがほとんどなくて慣れてないんですから」

「お母さん厳しかったもんね、これからは私でよければ困つたこととかあつたらいくら

でも言つてね。当主とはいえまだ高校生なんだからね」

「そーだよお姉ちゃん、私のお母さんつてことはお姉ちゃんのお母さんでもあるんだからね？姉妹でしょ私達」

「でも……流石にそれは……確かに私は小さい時に両親無くして親の愛情とか一切知らないけどせつかく楓はお母さんに会えて親の愛情独り占め出来るんだよ？それを私もつて言うわけにはいかないでしょうよ。それに私は恋しいとか思ったことないわ」

「また強がつて……もう何年お姉ちゃんと一緒に住んでると思つてるの？ほんとに寂しいこと知つてるんだから。私がお母さんと和解した夜の寝言教えてあげようか？『お母さん……会いたいよ……』つて。だからもう強がらないでよ……たまには素直に甘えたいわ」

楓に隠し事は出来ないか……確かに楓がお母さんと和解した時羨ましいなつて思つたわ……

「そーね……じゃあ私もお母さんつて呼んでもいいですか紅葉さん……」

「もちろんよ、あと敬語もいらなからね。後さつき聞こえないふりしようかとしたんだけど一緒に寝てるの……？それつて違う布団で寝てるのよね？」

「ありがとう……お母さん、えつと、一緒にの布団だけど？」

「あ、そーなの……仲良さそうで何よりだわ」

何故か今お母さんの顔が引きつった気がするけど気の所為だろう。別に恋人同士だし姉妹だしなんの問題もないわよね？

「じゃあそろそろ私は帰るね。2人ともまたね」

「うん！」

「わかった」

こうしてお母さんは自分の家へと戻って行った。

「よかったねお姉ちゃん」

笑顔で楓が私に言ってくる。上目遣いでそんな可愛い顔で見ないでよ……恥ずかしいじゃない。

「うん……ありがとうね提案してくれて。私からは絶対に言えなかったわ」

「ううん、やっぱりお姉ちゃんにも笑顔でいて欲しいから。お姉ちゃんの写真ってほんと素敵なんだよ。世界で一番綺麗なんだから！」

「ありがと、そんなはつきり言われると恥ずかしいよ」

「照れてるお姉ちゃんも可愛いよ」

「もーやめてってば！最近この流ればつかじやない」

「耐性つけないお姉ちゃんが悪いんだよーだ。それでいつもの流れってこの後どーするんだっけ？」

ニヤニヤとした顔でこちらを見てくる楓。この後の流れ……照れた私に楓がキスをしてそのままベッドにつて流れただけどうやらそれを楓は私の口からどうやら言わせたらしいようだった。

「え？それは……普通に寝るんだよね？」

主導権を簡単に渡したくない私はとぼけたふりをしてみせた。なんだか最近の楓からの方が夜の誘いが増えてきた気がした。付き合いたての頃は、あんなに恥ずかしがっていたのに人間わからぬものだな、ってほんとに思う。

「また照れちゃって……何かすることあるでしょ寝る前に？」

「ねえ楓？性格変わったよね貴方？エッチしたい時だけやけに強気になるもの。今日はしたい気分なのよね？なら素直にしたいって言えばいいのに……ほらおいで楓。私が断ることなんてないってわかってるでしょ？」

そう言った途端楓の顔が少し赤くなった。どうやら自覚がなかったようだ。

「ほんとに？そんな変わったかな……確かに今日はお姉ちゃんとそういう事したいなって思ってた……じゃあ遠慮なく甘えちゃおう！」

そう言うのと楓は私に思いっきり抱きついてきてそのまま私の唇を奪った。

「明日から冬休みだし今日は寝かせないからねお姉ちゃん」

もう楓はDSのモードに入っているみたいだった。私はその楓の挑発的な目が好き

でたまらなかつた。

「たくさんいじめてね……ん」

「うん、もうお姉ちゃん期待しすぎだよ、シート汚れちゃうよ、じゃあはい。いつも通り私の足舐めていいよ?」

「うん……」

次の日学校が無いからというのもあり私達は日付を超えても交わりあっていた……



## 番外編② さゆりと天音

## 私と天音様

私は物心つく前から緒方家のメイドとして働くことが決まっています、今年小学4年生に上がり、今はまさにその特訓中だった。

「さゆり！何回言ったらわかるの！食事を出したりする時は物音を立てないの！カチャカチャ音立ててみつともないわよ！」

「ごめんなさい……」

私のお母さんは緒方家の当主の飛鳥様のメイドと言うこともありとても厳しく私にメイドとしてはどーたらかーたらやらうんたらこーたら毎日のように言われ心身疲れ果ててしまっていた。夜は眠れずずっとうなされてる状態、だからほとんど寝ていない状態で毎日の稽古をこなしていた。今の食器を運ぶのだって疲れが溜まっていても右手が使えないからだった。

「もういいわ、今日はここまで。自分の部屋に戻ってなさい」

「はい、お母様……」

もう死にたい。私の精神状態はそこまで悪化しているぐらいに酷かった。今日は早

く終わって良かったなぐらいに思いながら私は自室へと戻った。小学生ながら一人部屋を与えてもらった私は毎日そこで一人本を読むのが唯一の楽しみだった。

「はあ……ほんと何でやりたくもないことやらなきゃいけないのよ」

「うわ!!びっくりした!!」

「え?」

何故か私の部屋に私と同じ年ぐらいの子供がベットに転がりながら漫画を読んでいた。

「ねえ!名前なんて言うの!?!私は天音!」

自分の事を天音と言った少女は言動のせいから私より歳下に見えた。もしくはそれが年相応なのかもしれないが……私は、小学校でもメイドの勉強をしているせいで友達はいなく周りのことに関心を置かないせいで全くわからなかった。

「私はさゆり、天音は何歳なの?」

「さゆりって言うんだ、宜しくね!10歳だよ。小学4年生」

天音は指を4本立ててにたーっとこっちに笑顔を見せていた。笑顔か……私最後に笑ったのいつだったかな……

「じゃあ同級生だよ、宜しくね天音。それで何で私の部屋にいるの?飛鳥様のお客様の子供かな?」

「宜しく！え？飛鳥は私のお母さんの名前だよ？お屋敷の中お散歩してたらなんか可愛い部屋があるから入ったらさゆりが来たの」

え、飛鳥様の子供……ってことは次期当主じゃん!!! 私タメ語使っちゃったよ何してんの!!

「す、すみません！次期当主とは知らずになれなれしくタメ口聞いてしまつて……」

「別に大丈夫だよ、同じ年なんだよ私達？丁度お屋敷の中暇だったから遊び相手欲しかったの！だからこれから遊んでねさゆり！」

「すみませんありがとうございます。わ、私なんかでよければ宜しくお願いします」

「もータメ語でいいのに……まあいいや。じゃあまた明日来るね！ばいばい！」

「はい！お待ちします！」

太陽みたいな子だったな……笑顔がとても素敵だなんて思った。私もいつかあんな風に笑えたらいいな……

次の日から天音様は約束通り毎日私の部屋に遊びに来てくれました。2人でお人形さん遊びをしたり時には外に出てキャッチボールをしたり本当に楽しかった。天音様のお陰か今まで全然寝れていなかったのが嘘のように寝付けるようになった。本当に太陽みたい……セミロングの茶髪は天音様にとっても似合っていてより1層その輝きを

強めている気がした。私は気付かないうちに天音様に友情と言うよりは恋をしていた。初めて自分に優しくしてくれた人。私を太陽みたいに照らしてくれて、それでいてメイドの稽古の愚痴を真剣に聞いてくれて同性とは言え本気で好きになってしまった。

天音様と遊ぶようになって1年たったある日、それなりに1人前とは言えないが半人前ぐらいのメイドになった私は、お母様に思い切つて相談をしていた。

「お母様お話があります」

「貴方からそういった話は珍しいわね、どうしたの？」

「もし、もしですよ……！私がお母様に認められるようなメイドになれば……！……その……天音様の専属のメイドになりたいんです！もちろん天音様が私でいいならつて言つてくれればですけど……！」

「そう……確かに最近仲良く遊んでいるものね。でもそれは無理な話よ。天音様のメイドは私なの。今もね。貴方には悪いけど専属は厳しいわ」

「そうですか……」

まあそりやそうだよね……私なんてペーペーが次期当主の専属なんて……

「なんでよ!!」

突然稽古部屋の扉が開かれてそこには天音様が仁王立ちをしていた。

「天音様!? どうしてここに?」

「いつもの時間にいないからここかと思って迎えに来たのよ。ってかなんでダメなの? さゆりに私の専属メイドになってもらえたらつてずつと思つてたのよ。そしたらさゆりがなりたいて言つてくれてて本当に嬉しかった。なのにそれを亜里沙は邪魔するの?」

え、天音様も私にメイドやつて欲しいって思つてくれてたんだ……私もすごい嬉しい。好きな人の側にずつといれたらとても幸せだろうなと思つて専属のメイドになりたいなんて言つたんだけど天音様もそんな気持ちでいてくれたらなんて思うけどそんなことあるわけないよね。

「天音様がそう仰られるのでしたら……しかしさゆりはまだまだ半人前で今は天音様につけられませんよ?」

「何言つてんの?別に私はメイドとしての能力なんて気にしないよ。ただ私は人としてさゆりが好きなの。だから私の側にいて欲しいからこう言つてるのよ」

「ですが……天音様が友達として好いてくれるのは本当に私としてもさゆりとしても嬉しいことだと思います。しかし飛鳥様がどう言うか……」

「亜里沙はほんと硬いんだから。お母様の許可はもう取つてあるよ。さゆりが1人前に

なる間は複数のメイドつけるからって。それに私は友達としてさゆりを好きなわけじゃないよ」

え……好きじゃないって……

「あの、それってどういう……」

私は思い切って天音様に聞いてみた。

「もー！なんで1年も絡んでてわかんないの！こういうこと！」

「ん……」

私は夢を見ているのかと思った。天音様は私のいるところまで走ってきてそのまま私の唇を奪った。唇が触れるだけのキスだったかふわっと甘い香りに包まれてとても幸せだった。

「じゃあ改めて私の恋人になってよさゆり、もちろんメイドも！」

「も、もちろんです！私も天音様の事大好きです！」

私は恥ずかしくてキスのお返しは出来なかったけど天音様に思いつ切り抱き着いた。

「これからずっと一緒だからねさゆり」

「はい……」

お母様は気付けば部屋からいなくなっていた。あの人なりに気を使ってくれたみたいだった。これから毎日が楽しくなりそうな気がして一時的に死にたいなんて思っ

たのが本当に馬鹿らしく感じた。

## 前日

「え？学校から電話」

「うん、お姉ちゃんに変わってくれだつて」

学校は春休みに入り私とお嬢様、それに加えてお母さんと仲良く談笑していた時にその電話はかかってきた。学校からの電話と言うと何かの呼び出しとかだとは思うがお嬢様に直接のお電話は初めてだった。

「はい月村です。ええ、代わりました。それでご要件と言うのは？……はい。え!?ですが橘は？私一人!?嫌です。なんで私が1人で行かなきゃ行けないんですか、メイドと主人は同じ学年、同じクラスって決まりではなかつたのでは？はあ……それはそちらの都合ですよ、もう切つてもいいですか？は？わかりました……では明日15時に校長室で。はい。失礼します」

ガチャン!!

お嬢様は思いつきり電話を叩きつけるように戻した。

「ちよつと聞いてよお母さん！それに楓！」

鬼のような顔をしたお嬢様がこちらにズカズカと歩いてきた。すつかりお母さん呼



びも慣れたみたいだった。前までは照れながら言ってたのに。まあ可愛かったよね。「どうしたの?」

「それが大学に飛び級しないか?」って連絡だったの。確かに高校の勉強範囲は頭の中に入ってるけど私だけ来いって言うのよ?普通メイドと主人は同じ学年、クラスが当たり前でしょ?楓と離れるなんて絶対やだもん。それなのに話勝手に進めて手続きしたいから明日学校に来てくれだって。そこではつきり断ってやるわ」

「あー、そーだったんだ……」

裏を返せば私ともう少し勉強出来たらお嬢様は何の障害もなく大学に飛び級出来たんだなって思うと少し胸が痛くなった。私だってお嬢様と離れるのは絶対に嫌だ。でもお嬢様の将来とか考えたら絶対大学行って先へ先へ言った方がいいよね……

私の意図を察したのか、私が喋らないから先に話したのかは分からないがお母さんが口を開いた。

「エレナちゃん的にはじゃあ大学は別に行かなくてもいいと思ってるの?」

「ううん、大学は行きたいとは思ってるよ。でもわざわざ急ぎ足で行くことはないでしょ?」

「まあそうね、じゃあ聞き方を変えるね。仮に楓と付き合ってたら行ってた?」

「それは……わからないかも……でも！絶対に今は大学なんて行きたくないのよ、楓も天音もさゆりちゃんもいないとこに1人で放り込まれたらと思うと少し怖くて……大  
学っていう所がどんなところかもわからないし不安しかなくて……」

「お姉ちゃん……」

そうだよ、お嬢様も1人の女の子だもん。知らない環境に飛び込んで行くのは少し怖いよね。でも……

「私は大学に行ってもらいたいかな」

「楓……？」

お嬢様は私へ不安を込めた目で見てきた。それはそうだろう。嫌だと言ってるのに恋人が勧めてくるんだからね。

「だってお姉ちゃんは凄いい人なんだって周りにも知って欲しいんだもん。どんどん大きくなってこれが私の彼女です！って堂々と言えたらすんごい嬉しいかなって思っちゃったの」

「楓……でも！離れちゃうんだよ？」

「明日私からお願いしてみる。一緒に大学に行かせてくださいって。それでダメなら大人しく3年生に進級しよ？それじゃダメかな？」

「ううん、私は楓さえいてくれたら何でもいいもの。ありがとうね、楓なりに考えてくれ

「たんだね……」

「当たり前だもん彼女だもん」

私は精一杯の笑顔でお嬢様に返答した。ちよつと臭すぎたかな。

「楓！」

お嬢様は私に思いつきり抱きついてきた。多分お母さんいること思いつきり忘れてるね……

「ほんとにありがとう……」

「ううん、当たり前だよ」

お嬢様は涙ながらに言っていた。本当に悩んでいたんだな。

「楓……」

「ちよ、ちよつと待つて！今お母さんいるからね？」

「え、あ……」

やっぱり気付いていなかった……多分そのままの勢いで私にキスしてくれようとしたんだろうけど……

「あはは、お邪魔みたいだったかな、まあまた明日聞きに来るね、後は2人で楽しみなさいな」

「うん、ありがとねお母さん、また明日」

「はい、それじゃね楓、エレナちゃん」

「はい……」

お嬢様は顔を真っ赤にして下を向いてしまった。ほんとにこの人はすぐ照れるなあ。

「そんな照れなくてもいいじゃん」

「いや……流石にお母さんに見られてる前で何してんだろって思っちゃって恥ずかしくて」

完全に自己嫌悪モード入っちゃったよ……仕方ないなあ。

「こっち向いてお姉ちゃん」

「何……? つん!! ちよつと楓!?!」

私はお嬢様の唇を強引に奪ってそのまま押し倒した。

「何でいいムードだったのにそうなるかなお……そういうお姉ちゃんにはお仕置きが必要だよね?」

ムードもくそもなかったけど私がしたくなかったしいよね? お母さんも気使ってたんだし。あれ? なんか最近の私性欲強くない……? まあいつか。高校生だもん普通だよな。

「お仕置き……そーだよね、悪い子にはお仕置き必要だよね……お願いします……」

流石お嬢様。お仕置きってワードにすぐ反応してくれたみたい。

「目が喜んでるみたいだけど気のせいかな？」

「そ、そんなことないよ！」

「そっか、ならいいけど、じゃあ、はい。わかるよね？」

私はお嬢様の目の前に足を差し出した。もう恒例となってしまうけど普通のカツプルこんなことしないよね。同性ってだけでも珍しいのにほんとぶっ飛んでると思う私達。

「はい……失礼します」

こうして私達はまた一つになった。この時だけは明日の面接の事を忘れられて目の前のお嬢様だけを見ていられてとても幸せだった。

## 面接

「行くよ楓」

「はい、お嬢様」

今日はお嬢様の大学行きを決める大切な面接の日。学校へ着くと私とお嬢様は気を引き締め治し校長室のドアをノックした。

コンコンコン

「失礼します月村です」

「どうぞ」

中から恐らく校長先生だと思われる声がしてそれに応じるように私達は校長室へと入った。

校長室へは初めて入ったが中にはどこかの部活が好成績を収めたトロフィーなどが飾ってあった。

「座って、立ちながらじゃ話もできないわ」

「あ、すみません」

聖チエリチヨウ学院の校長先生は28歳と若い女の人でとにかく厳しいって言うの

が学生達の中で噂になっていた。

「あんまり時間がないから本題に入りたいたいんだけどいいかしら？」

「はい、大丈夫です」

お嬢様が緊張気味に返答する。

「それでだけど……やっぱり大学に行ってもらうのはダメなの？ 誇りに思うことだと私は思うんだけど。普通の学生は飛び級なんて滅多に出来ないわよ？」

「確かに立派な事なんだと思います。でも私はメイドの楓を置いてまで1人で進級なんてするつもりはありません。校長先生前に言ってみましたよね？ メイドはいついかなる時も従者のそばに居ると。それを破ることになりますか？」

「た、確かにそれは言ったわ。でも大学よ!? 進級に苦労する子だっているんだから学院代表として入学式で堂々挨拶だって出来るのよ!？」

「なんかわかっちゃいました。先生、大学にいい顔見せたいだけなのでは？ 私が校長してる代で特待生が出ました! って。普通生徒が飛び級拒否してここまでがんなに拒否する教師いませんよ」

「そ、そんなこと! 私はただあなたのためを思ってる!」

「思ってるならメイドといや、楓と離れたくないって言ってるのを強行するのはおかしいでしょ?! 違う?」

「くっ……」

これ以上は校長先生が可哀想に見えてきて私は仲裁に入った。

「お嬢様、これ以上はもういいかと」

「そーね、そんなに大学に行つて欲しいなら条件があるわ」

「なによ……」

「どんな手を使つてでも楓を大学に進級させること。期限は一週間。これが出来なければ私は飛び級なんて絶対しない。話はこれで終わりでもいいですよ先生？それでは失礼します。行くわよ楓」

「ちよーちよつとお嬢様！あ、あのすみません！失礼しました！」

校長室から出る時に見た校長先生の表情はとても悔しそうな顔をしていた。それはそうだろうもう20を超えたい大人が生徒に丸め込まれたのだから……しかも最後には条件までつけられてしまつてはメンツが丸潰れだろうなと私は思った。



## 天音様来訪

「ちよー！ちよつとお姉ちゃん！流石に今のはいいすぎなんじゃ？」

「いいすぎ？そんな事ないわ。昔の私ならもつとけちよんけちよんにしてたはずだと思うけど？それを一番知ってるのは楓じゃないかしら？」

「まあ確かに……」

全盛期のお嬢様なら……多分あの校長先生再起不能までに潰して即断で、私の大学進級を決定しないと行かないとまで言いそうだな……

「とりあえず後はあのバカに任せましょ、帰るわよ」

「またそうやって悪い言い方で……ちよつと！置いてかないでつて！」

「どうやらそうとうご立腹みたいだった。私の話を聞かずに早足でお屋敷の方へと向かって行ってしまった。」

◇ ◇ ◇ ◇

お屋敷につくと思わぬ人達がお屋敷の前に座っていた。

「もー！どこ行ってたのさ！暇だからエレナの家で遊ぼうとしたのに」

「アポ取らず来る貴方が悪いでしょうよ……」

家の前にいたのは天音様とさゆりだった。どうやらやる事がなくお屋敷に来たみたいだ。

「まあなんでもいいからいれてよ」

「はいはい、ちよつとお待ちなさいな。楓、開けてくれる」

「はい」

私は玄関の鍵を開け2人とお嬢様をお屋敷の中へとご案内した。ご案内したって言ってももう天音様とさゆりはどこになにかあるぐらいわかるけどね。

「それで本題は何よ？わざわざ家に来るぐらいだからただ遊びに来たわけじゃないんでしょ？」

「え？そーなの？」

一緒に来ていたさゆりが1番に声を出した。きつと何も考えずに来たんでしょつて思ってた声だ。

「流石にエレナはわかるか」

「あんたと何年付き合ってると思ってるのよ」

「楓はわかった？」

「ううん、私はなんにも」

「まあ、とりあえず座ろうよ。楓ちゃん、さゆり悪いんだけど飲み物持ってきてもらって  
もいっしょ。」

「あ、はい！お嬢様コーヒーでいいです？」

「うん、お願い」

「天音ちゃんはいつものでもいい？」

「うん」

私とさゆりは急いで飲み物を用意してリビングの椅子に腰をかけた。

「それで単刀直入に聞くけど大学飛び級の話が来るとしてほんと？」

「全く……いくらなんでも情報が早すぎるわね。紅葉さんから聞いたの？」

「うん。あ！でも最初は口を開いてくれなかったよ。3時頃お屋敷に電話したら紅葉さんが出て今エレナちゃんと楓留守にしている、言ってたからどこ行っただんですか？って聞いたら学校って言うから何かあるなと思ってちよつと問い詰めちゃった」

「はあ……まあそんなことじゃないかと思っただわよ。ってかお母さんドコ行っただんだろ。責任感じて実家帰ったりしてないよね？楓何か聞いてない？」

「ううん、知らない」

その時リビングの扉が空いて紅葉さんが申し訳なさそうな顔をしながら入ってきた。

「ごめんなさい丁度おトイレ行ってたら入りづらい雰囲気感じて外で聞き耳立ててた

わ」

「別に大丈夫だよお母さん。悪いのは天音よ」

「私一人だけ悪者にしなくなつていいじゃん！つてかどうすんのよ大学」

「そうね……」

お嬢様は天音様とさゆりと紅葉さんに今日の校長室での話を包み隠さず全て話した。

「なんつーか……よくまあ校長にそんな口聞けたわね……下手したら退学よあんた」

「そんなことわかつてるわよ。でもあの人は私の能力を認めてる。捨てたくても捨てられないのよ」

「まあ流石エレナと言うかなんというか……まあ頑張りなさいな。私とさゆりは高校から応援してるわ。もちろん楓ちゃんもね」

「あ、ありがとうございます！」

「ありがとう」

お嬢様も天音様からの素直な応援の気持ちに少し照れくさくなつたみたいだった。

「それじゃお堅い話は終わり。楓ちゃんお風呂入ろうよ、今日泊まることにしたから」

「へ？一緒に入るかはともかくとして沸かしてきますね」

「いいじゃん私とさゆりと楓ちゃんと一緒ににはいろーよ。その毒舌お嬢様は一人で寂しく入るって言ってるから」

「楓、天音の言うことなんて聞かなくていいからちよつとお部屋にいらつしやい。さゆりちゃんお風呂の沸かし方わかるよね？」

「え、あ、はい！大丈夫です！」

「悪いけどそのバカの相手頼むわ。ちよつと楓と2人にして貰ってもいいかしら」

「もちろんです！行つてらつしやいませ」

「ありがと」

お嬢様はさゆりに優しく微笑むと、私を連れて自室へと入った。

「どうしたのお姉ちゃん」

「ちよつとね……トントントン拍子で貴方も大学入る事になりそうだけどほんとに楓はいいのかなつて思つて……」

「なんだそんな事か……お嬢様は心配そうにこちらを見ていたが私はすぐに返事をした。」

「なんでそんな顔するのお姉ちゃん。私はお姉ちゃんと一緒にいられたらそれだけでいいんだよ、だから心配しないで。一緒に大学行く」

「楓……ありがと。ほんとに楓が私のメイドでそれで彼女でよかった」

お嬢様は少し目を赤くしながら私に言った。

「私もほんとにお姉ちゃんが お嬢様で彼女で幸せだよ」

私は思いっきりお嬢様に抱きついて胸に顔を埋めた。少し恥ずかしくなってお嬢様の顔が見られなかったのだ。

「ふふ、やつぱり楓は甘えん坊さんだよね」

「お姉ちゃんに言われたくないし」

「あらあら言うようになったじゃない」

「ドMお嬢様」

「そういう事言うメイドにはお仕置きしなきゃね」

「どんなお仕置きされるんだろ、期待していいのかなお姉ちゃ、んん……」

最後までいう前にお嬢様に唇を重ねられてしまった。ふふ、喋れなくさせるお仕置きかな。

「楓……いいよね？」

「うん……お姉ちゃんの好きにしているよ」

そう言うとお嬢様は舌を私の口の中に強引に押し込んだ。私もそれに応えるようにお嬢様の口に舌を入れた。

「服、脱がすね」

「うん、もう言わなくてもわかってるよ」

「ふふ、それもそーね」



「ちよつと天音ちゃん！紅葉さんもこれ以上はやめときましようよ！」

「いいじゃないたまにはこういうのも」

「娘の成長も見るのも親の役目だし少しだけならいいよね？」

「もー！後でエレナ様に怒られても知りませんからね」

そう、私達はお風呂に入った振りをしてこの後2人は部屋で何の話をするのかな？と思ひ盗聴しに来たのはよかつたのだが……

なんでいつものパターンになつちやうかなあ……今お母さんもいるのにほんとあの二人は……

「あらあ……私はてつきりエレナちゃんが責めだと思つてたのに楓が責めなのね。ちよつと驚いたわ」

「ですよね！私もエレナがDMだなんて思わなくて最初はびっくりしましたよ」

「あら……若いつていいわねー。私ももう1人子供欲しくなつちやつた」

「紅葉さんまだお若いんですし再婚してみるのもありなんじゃないですか？」

「うーん、それはいいわ。ちよつと男性不信だしね」

「あー……そうですね、あ！楓ちゃんの決め台詞きますよ紅葉さん！」

「え？決め台詞？……あの子つたら、ほんと誰に似たのかしらね。これ以上はやめとく

わ。なんだか私の知らない世界みたいだし。それじゃあ私は帰るからあの二人によるしくね」

「はーい！それじゃあまた！」

「あ、さよなら！上手くいくといいですな楓ちゃんの大学進学」

紅葉さんは帰り際に手を振って私達と別れた。別れ際の笑顔が少し楓に似ていてやっぱり親子なんだなあって思った。

「さゆり」

「なーに？」

「久しぶりにしよーよ」

恥ずかしがる様子もなく天音ちゃんには私にお誘いをしてくる。まあだいたいいつもこんな感じなのだが……多分エレナ様と楓のを見ていたら自分も火照ってしまったのだろう。まあそれは私もだが……

「そんなご飯食べよーよぐらい軽く言わないでよ……まあいいけど」

「照れちゃってかーわい。ほら早く早く」

「ちよー！ちよつと天音ちゃん！」

私は手を引かれるまま客人用の部屋へと連れていかれた。





一方その頃校長先生はイチヤイチャしてることなんていざ知らず必死に橘楓を大学進学させることに全力を尽くしていたとか。

## 出合い

はあ……楓もやっぱりもう高校生なんだなあ。まさかエレナちゃんとおそこまで進んでるなんて思わなかったよ。天音ちゃんとさゆりちゃんも恋人同士だって言うし、最近の恋愛事情はわからないや。私も今年で34だしそろそろ再婚とか新しい恋見つけたいな……

私は今月村邸から徒歩で10分ほど離れた住宅街にある一軒家に住んでいる。それもエレナちゃんのおばあちゃんのおかげで家賃も払わなくていいというありがたい待遇を受けている。今日は1日仕事も無く暇なので朝から月村邸にお邪魔しようと思う。

◇ ◇ ◇ ◇

月村邸に着くと私はエレナちゃんから預かっている合鍵を使ってお屋敷へと入った。「お邪魔します、楓起きてる？」

寝室から返事がないのでまだ寝ているんだろう。昨日はお楽しみだったみたいだしね。

やる事もないので洗濯カゴに2人の洗濯物を入れてあったのでそれをさくつと洗濯

してテレビでも見ていようとしたのだが……

ピンポーン……ピンポーン

ん？ 誰だろう。 居留守するのもあれだし一応出ようかな。それでエレナちゃんに用なら今疲れて眠っているから、つて言つて後にしてもらえばいいし。

「はい、どちら様でしょうか？」

『朝早くにすみません。 聖チエリチヨウ学院の校長の観月と言います。 月村さんと橘さんにお話が会つて来たんですが会えますでしょうか？』

え!? ええ!? 校長先生来ちゃったよ! どうしよう……話つて絶対大学の事だよ……

「えーと……まだエレナと楓は寝てまして……先生余り時間取れないですよね」

『もしかしてお母様ですか? そうですね、余り時間は無いので少しお話をしにこようとしたんですが……』

「はい、橘の母です。 でしたら私だけでもお話聞いて2人に話しましょうか?」

『ほんとですか! 是非お願い致します』

「はい、今玄関開けますね」

なんていうかエレナちゃんと楓から聞いていた印象が違うなあと私は思った。クルで冷徹のイメージだったんだけど今の嬉しそうな『ほんとですか!』に少し子供らしさも感じられたような気がする。

「どうぞ」

「失礼します、わざわざお母様がお話を聞いてくれるとは思わなかったので私としても嬉しい限りです」

「いい、いえいえ」

何この綺麗な人……それが観月先生の第一印象だった。校長先生だって言うからそれなりの年齢だと思ったら、私より絶対歳下でしょこの人……

長い黒髪は毛先まで整っているみたいサラサラしてそうだし、目はぱっちり二重でその瞳に吸い込まれそうになるくらいだった。エレナちゃんが大人になったらこのぐらいの美人になるんだろうなあと思った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

話は昨日の夜に戻ります。

「ああーもうーなんで私が大学のじじいやばあにペコペコしなきゃなんないのよ!!」

私、観月佳奈は今年で29になる聖チエリチヨウ学院の校長だ。なんで若いのに校長をやっているのかと良く聞かれるがそれは私の母親が前の校長をやっていたからだった。母は私が27の時に病気で他界。それで継ぐ人がいなく私がやる事になった。まあやってみたらめっちゃくちや忙しくて普通にOLやっておけばよかつたってすんごい後悔してるけどね……それに突然の上からの成績最優秀者の飛び級申請。しかもそ

の最優秀者は飛び級拒否。なんでこうも上手くいかないのか……まあとりあえず上へ頭下げてなんとか最優秀者の月村エレナが飛び級する条件の橘楓の同伴はクリアしたのだが、電話で言うのもあれだから直接家に行つて来てとかいうのも面倒くさい。だって世の中は夏休みよ？合コンだつて行きたいし早く恋人とかだつて作りたいのになんでそんな日に生徒の家に行かなきゃいけないのよ……私は、手早くスーツを着て軽く化粧をして月村邸へと向かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「なんだこのお屋敷……流石有名なグループのお嬢様ね……」

家の前につくと私はそのお屋敷の大きさにとても驚いた。しかも聞いた話だとこのお屋敷には2人しか住んでないらしいじゃない。橘さんのお母さんがちよくちよく出入りしてゐるっていうのは七咲先生から最近聞いたけど……まあいいや言うこと言つてとつとと帰ろ。

ピンポーン…ピンポーン

『はい、どちら様でしょうか？』

あれ、月村さんの声じゃない気がする。橘さんのお母さんかしら？

「朝早くにすみません。聖チエリチヨウ学院の校長の観月と言います。月村さんと橘さんにお話が会つて来たんですが会えますでしょうか？」

『えーと……まだエレナと楓は寝てまして……先生余り時間取れないですよね』

まだ寝てるのあの二人……結構私生活はゆっくりなのかしら。分かってるじゃないお母さん！そーなの！時間ないのよ！早く帰りたいの！

「もしかしてお母様ですか？そうですね、余り時間は無いので少しお話をしにこようとしたんですが……」

『はい、橘の母です。でしたら私だけでもお話聞いて2人に話しましょうか？』

「ほんとですか！是非お願い致します」

よかつた！これでちやつちやつと話して帰る。お母さん私の気持ち察してくれそうだしこれならすんなり話進むかも。

玄関を開けてもらい橘さんのお母さんとの初めてのご対面だったのだが……

顔を合わせたのはほんとにこの人子供産んだの？ってぐらい綺麗な人だった。私とそんなに歳変わらないんじゃないかって思うぐらいには見えた。作り笑顔だとは思うけどとても優しそうな笑顔で私を迎え入れてくれてドキツとしてしまった。肩の上まで綺麗に揃えられた茶髪、服の上からでもわかる大きな胸は同性の私ですら目がそこに行ってしまうぐらい魅力的だった。って橘さんのお母さんに見とれる場合じゃないでしょうが！とにかく話をしなきゃ。

「えっと、月村さんと橘さんから大学への飛び級のお話は聞いていますか？」

「はい、存じております」

「なら良かったです。その件なんです、橘楓さんの飛び級が大学側に認められました。後日入学案内などを郵送させて貰う予定です」

「ほんとですか！楓も喜ぶと思います！ありがとうございます！観月先生！」

「やばい……めっちゃくちゃ可愛いんだけどお母さん。クールな感じかと思ったら声大きくして娘の進学喜ぶとかギャップ萌えだわこんなん。じゃなくて！」

「い、いえ。私としてもとても嬉しいです」

「楓までの進学は大変だったと思います……本当に先生にはご迷惑お掛けしてすみませんでした。私なんか手伝えることとかあつたらなんでも言つてくださいね」

「聖母か。まさか何か批判されることがあつても同情されたり感謝の言葉言われるとは思わなかった……そして私は感情の高ぶりのあまり、」

「あの……良かったらこの後お食事でもどうですか？学校での娘さんの話とかお母さんに聞いてもらおうかなとか……い、いや迷惑とかだつたらいいんですけど！」

「わ、私何言つてんだろ、今まであんまり人からこんなに優しくされたことなくてつい食事に誘つちやつたよ……流石にいきなりは失礼だつたよね……」

「ほんとですか！私学校での楓の事はよく知らないのは是非！それに観月先生ともゆつくりお話してみたいなって今日会つて少し思つていたので。ちよつと着替えてくるの

で外で待つてもらってもいいですか？」

「は、はい！わかりました！」

いいのお!? どうしようどうしよう……私軽くしか化粧してないし……こんなことならもつとしっかり化粧してくればよかった……

10分もすると橘さんのお母さんは恐らく仕事用のスーツに身を包んでいた。化粧をして身なりをしつかりすると更に綺麗な人だなあ……

「それじゃ先生行きましようか」

「はい！あと良かったら外で先生はお堅いので観月さんか、佳奈さんって呼んでほしいです……」

もうこーなったらグイグイ行ってやる！普通にお友達になりたい！私はそんなふう  
に思っていた。

「じゃあ佳奈さん、でいいですか？私の事も紅葉さんでいいですよ」

佳奈さん……佳奈さん……自分の名前を呼んでもらってこんなに嬉しかった事があつただろうか。それに下の名前教えて貰っちゃった……

すつかり早く帰りたいなんて思いは消えていた観月佳奈だった。



## フアミレスにて

まさか観月先生からお食事に誘われるなんて思わなかったなあ。やっぱり楓が言っていたように冷徹な人には見えなかった。感情表に出してくれるおかげでこっちもわかりやすくとても助かるし、私がいいですよ、って言った時の笑顔はほんとに素敵だったなあ……それに佳奈さんって呼んだ時は少し照れててほんと可愛かった。今のところ冷徹のれの字もないよ楓。

「紅葉さん、フアミレスでもいいですか？あまり持ち合わせがないもので……」

「いえいえ、私も普段私もフアミレスとかしか行かないので」

「そうなんですか、じゃあ行きますか」

私は佳奈さんに連れられ駅前のフアミレスへと入った。

◇ ◇ ◇ ◇

「ちよつとあれどういうこと!?なんで校長先生とお母さんが一緒にいるの?」

「落ち着きなさい楓、テーブルに書いてあったでしょ。先生とご飯食べてくるって、別に慌てて後追いかける事もなかったでしょうに」

「だってピンポンの音がして目覚めて、リビング覗いたら校長先生とお母さんいるんだ

もんそりやびつくりするよ。しかも校長先生はお母さんの事ご飯誘うしわけわかんないよ」

「私はなんで校長先生がお母さんの事ご飯誘ったのかなんだかわかるけどね、楓はわからない?」

「全然わかんない……教えてよお姉ちゃん」

「やつぱり子供ね楓わ、それはね、校長先生がお母さんに一目惚れしたのよ」

……は?何を言ってるんだろうかこのお嬢様わ。確かに私達は女同士で付き合ってるけど世間的には大分少ないからね?まさかそんなことありえるはずないだろう。確かにお母さんは外見30を超えてるようには見えないし、綺麗だとは思いますが、あの校長先生がお母さんを好きになるとは思えなかった。

「あのねお姉ちゃん、確かに私たちはレズだよ。それはわかる。でも世間一般からしたら大分人工少ないんだよ?まさか有り得ないでしょあの校長先生が」

「じゃあ確かめてやろうじゃない、ほらファミレス入るわよ。メガネは持ってきてるわよね?隣の席から話聞きましょう」

「お母さんごめんさい。でもやつぱり私気になる。ちよつとだけ盗み聞きさせてもらうね」

私はお嬢様と一緒にとお母さんと校長先生が座るテーブルの真後ろの席へと座った。

◇ ◇ ◇ ◇  
「ええ!?!紅葉さんって今年で34なんですか!?!全然見えませんよ!私と同年ぐらいかと思っりました」

「ふふ、そんな褒めても何も出ませんよ、佳奈さんはお幾つなんですか?」

「私は今年で29です、でも恋人もいないし趣味も無いわで悲しい限りですよ」

苦笑いで言う佳奈さん。そっかあ29かあ……その頃は私も楓と会って話して和解除来るなんて思わなかったなあ。

「お若くて羨ましいです、いえいえまだこれからですよ、佳奈さんお綺麗ですし学校の男性教師がほっとかないんじゃないですか?」

「お、お綺麗なんてそんなことないですよ!紅葉さんの方が綺麗です、私なんか到底及ばないですよ。いえいえ、全然ですよ。前に合コン行ったところはあるんですけどどうも男性の前だと緊張してしまっ……」

やっぱり佳奈さんって照れ屋だ。表情コロコロ変わって可愛いなあ。恥ずかしがり屋なのかな。

もう話をしていて楓から聞いていた冷徹っていう印象は全くなくなった。

「私なんてもうおばさんですよ、貫い手がないですよ」

「いやいやそんな事ないですよ!ほんと綺麗ですしスタイルもいいですよ!」

「なら佳奈さんが貰い手になってくれますか？ふふ、なーんてね」

あれ、ちよつとした冗談を言ったつもりだったのに何故か佳奈さんは顔を真っ赤にしてフリーズしてしまった。

「あのお。佳奈さん？」

「ひゃい！えつとその……紅葉さんさえよければ全然！」

「え？」

あらあら本気で捉えちゃったのね佳奈さん。でも嬉しいかも、こんな綺麗な人に貰い手になってもらったなら本望だわ。あれ、もしかして私も男性じゃなくて女性の方が恋愛対象なのかしら。

「はあ!？」

「ちよつと楓！声が大きい！」

「「え？」」

「「あ」」

「なんで貴方達がここにいるのよお!!」

店内に校長先生の絶叫が叫び渡った。

## 告白

「それで、何で月村さんと橘さんはここにいらっしゃるんですか？」

「ええと……」

私達は盗み聞きがバレて今は変装していたメガネも取りお母さんと校長先生を対面に置いて事情聴取をされていた。だって校長先生が突拍子な事言うんだもんそりや驚いて声も出るよ……

「もー、楓が大きな声出すからバレちゃったじゃない」

「それは、校長先生がいきなりびつくりする事言うんだもん仕方ないじゃん！その後お姉ちゃんだって大きな声出したしおあいこだよ！」

「ん？お姉ちゃん？今橘さん、月村さんの事をお姉ちゃんと呼びませんでした？姉妹じゃありませんよね？」

しまった……いつもの癖でお嬢様と言わずにお姉ちゃんと言ってしまった。

「ええと……そのこれには色々あります」

私に変わりお嬢様が慌てた様子を隠せずに口を開く。

「あー、佳奈さん、私が説明しますね。エレナと楓は小さい時からの幼馴染なんですよ。

それで小さい時はお互いに姉妹だと思つていたみたいで時々それが抜けてないんですよ。ね?楓」

「あーはい!すみません驚かせてしまつて」

お母さんナイスフオロー!まあそれでも十分に恥ずかしいけど……

「そういう事だったのね。びつくりしたわよ。まあその事は置いといて……付いてきたのはお母さんが私に何か言われるんじゃないか?つて心配になつたから?まあ学校での私の性格考えたらそう思うのは仕方ないかもしれないけど……でも橘さんのお母さんに何か言うつもりとかはないわよ。ただあまり学生生活してる橘さんの事を、お知りになつてないと思つたから、少しご飯のついでにお話しようかな、つて思つただけだから気にしないで」

気にしないで、つて言う時の顔は、いつも見ている校長先生の顔とは、180。違う優しい笑顔で少しドキツとしてしまった。こんな顔出来るなら日頃からその笑顔で対応すればいいのに……

「そーだったんですね、それではお嬢様私達はこの辺で失礼しましょうか?」

はあ危なかつた……お屋敷戻つてゆっくりしよつと。お嬢様何してるんですか早く立つて下さいよ……なんて心の中で思つていたのだが……

「何言つてんのよ楓。面白いのはここからじゃない。校長先生、紅葉さんに一目惚れし

ましたよね？だからこのお食事で上手く行けば友達になってあわよくば……なんて考えてませんか？」

ちよつとお嬢様!?!せつかくお母さんが逃げるチャンスくれたのになんて事してるんですか!?!

「んな!?!べ、別にそんな事思つてないわよ!」

「そうですか、それにしてもお顔が真っ赤ですしさっきの告白まがいの言葉はなんなんですか?」

ニヤニヤしながら校長先生に詰め寄るお嬢様の顔は悪魔そのものだった。人の恋愛話とか大好きなんだろうなあお嬢様。お嬢様の部屋の本棚恋愛小説だらけだったのを私は思い出した。

「えつとそれは……その……」

こうなればどっちが教師で生徒かもう分からなくなっていた。校長先生は私の方を見てきて目で助けを求めてきてはいるが、私には暴走するお嬢様を止める方法がなかった。

「エレナちゃんそこら辺にしてあげなさい、先生泣きそうになつてるわよ」

「紅葉さんが言うならそうしときます」

はあ……よかった。お母さんがいなかったらどうなつていたことやら……

「でも佳奈さん、1つだけいいですか？私から話があるんですけど」

「は、はい。なんででしょうか」

何を言うんだろうか。私とお嬢様は共にお母さんが口を開くのを待った。

「さっきのお返事本気とお考えになつて言つてくれたものだと思つて私からも言わせてもらいます。私も佳奈さんに一目会つた時に心奪われてしまったみたいです。同性で、しかも歳上ですけど良かったら、お友達からでもいいんでお付き合いしてもらえませんか？」

……………

「「ええええええ!!??」」

私とお嬢様と校長先生は同時に声を上げて驚いた。校長先生に至つては顔を真っ赤にして動揺しているのが丸見えだった。

「お母さん本気なの!?!」

「私はこういうことで嘘つかないわよ、佳奈さん返事はいつまでも待ちますので」

お母さんの目は真剣そのものだった。私と初めて会つた時と同じような目をしていて、たからすぐに本気だと言ふことが読み取れた。

「いいえ、私も今返事させてもらいます。私も一目紅葉さんを見た時に心奪われてしまったみたいです。こちらこそ宜しくお願いします。後、その……友達という段階踏ま



「ずい私は今すぐにも恋人同士になりたいです……だめですか？」

本当にここにいるのはあの冷徹な校長先生と同じ人物とは思えなかった。顔を真っ赤にして照れながら言う校長先生は私から見てもとても可愛く思えた。

「ほんとですか！私とつても嬉しいですよ！もちろん佳奈さんがいいなら恋人同士になりたいですよ！楓！お母さんやったよ！」

そう言つて私に抱きついてくるお母さん。よつぽど嬉しかつたんだろう。でも親子揃つて同性の事を好きになるなんてこれも何かの運命なのかな。後お母さんも校長先生も忘れてると思うけど……

「あの、お客様……他のお客様の迷惑となりますのであまり大きな声で話すのはお控えください……後、おめでとうございます」

「ここファミレスだからね……店員さんめっちゃ笑つてたじゃんこつちが恥ずかしいよ……」

「とりあえず私のお屋敷に戻りませんか？」

私達は無言で頷いてファミレスを後にした。お母さんと校長先生はファミレスだつてことを思い出したのか両者ともに顔を伏せて退店していた……

◇ ◇ ◇

「もう！お母さんも校長先生もはしやぎすぎですよ！恋人同士になつて嬉しいのは私も気

持ちわかるけど公共の場だからね！」

「ごめんなさい……」

私はお屋敷に帰るとお母さんと校長先生をリビングに座らせて一喝した。知り合いいなかったから良かったけどいいたらと思うととても心臓が悪い。

「まあ私からはこれ以上なんもないよ。後はお2人で楽しんでください」

「えつとエレナちゃん私から言いたいことあるんだけど」

「なんです？」

「あんまり人の恋路に入り込みじゃダメよ。まさか会って初日で告白することになるなんて思わなかったんだから」

「まあ、結果オーライって事で」

「調子いいんだから……そういう人には……ねえ佳奈知ってるエレナちゃんの秘密」

「か、佳奈!? 呼び捨て!? 紅葉さんそれすんごくいいです! これからも佳奈って呼んで下さい! って秘密ですか? なんででしょう?」

「ちよつとお母さん? それ私も被害被らない?」

お嬢様の秘密と言ったら同性が好きぐらいって事しかお母さん知らないと思うんだけど……

「あーそれは大丈夫よ、心配しないで」

「ならいいけど」

「話が逸れたわね。実はエレナちゃんってあんなに普段は強気なのにドMの変態さんなんだよ？昨日たまたま掃除してたらそっち系のエッチなビデオ見つけちゃって驚いたんだから。ねえエレナちゃん？」

昨日……お母さんに見られてた……被害被らないやり方にくれたのはいいけど  
実の親に彼女との行為見られるってどうなのよ……それでお嬢様はと言うと……

「な、なに言ってるんですか紅葉さん。私はどちらかというところsなんですけど、やめてくださいよ私がドMだなんて」

「認めないんだ」

「認めません」

「楓」

「なーに」

「ちよつと耳貸しなさい」

「ん」

私は嫌な予感がしてたまらなかつた。その予感的中することとなる。

「エレナちゃんに楓の足舐めさせる事出来たらご褒美に原宿で限定3食しか売ってないロールケーキ買ってきてあげる。もちろん佳奈には口封じしておくから。どうかしら」

「あ、あのロールケーキ!? うわそれは物凄く悩む……」

原宿のロールケーキとは学生達の中でも話題沸騰中の幻のロールケーキと言われていたものだった。食べたら他のロールケーキが美味しく感じなくなるほどやばいと巷では噂だった。しかも発売日が平日だけとあり私とお嬢様は学校で買いに行くのは不可能に近かったのだ。

「どう? 後30秒以内で決めて」

「うう……わかったよ! その代わり絶対買ってきてよね!」

「交渉成立ね、ふふ。後は任せたわよ」

これはロールケーキのため。これはロールケーキのため。私は心の中で念じ続けお嬢様の元へと向かった。

「お姉ちゃん……あのね……お母さんと紅葉さんが恋人同士になったでしょ? 私お姉ちゃんとした初めての事思い出しちゃって……その身体の疼きが止まらないの……ダメ?」

ああ!!! 校長先生がガン見してるよ! もう私変態な子に見られてるよ絶対……でもロールケーキ、ロールケーキのためだもん……

「ちよ! ちよつと楓!?! 校長先生いるの忘れてるの?」

「いいじゃんどーせ後でバレるんだし。校長先生、私達実は付き合ってるんです。だか

らお姉ちゃんは一人で大学に行くのを物凄く拒んだんです。今からその証拠見せますね。目瞑つてお姉ちゃん」

「いや、ちよつと楓？紅葉さんに何吹き込まれたの？あ、ちよつと！……ぷはあ……」

お嬢様の顔色がいつものスウィッチが入った顔になったのを確認して私はいつもの台詞を言った。

「じゃあ舐めてくれるよねお姉ちゃん。一緒に気持ちよくなる？」

「はい……」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「かえでえ！流石に許さないわよ今のは!!」

「ごめんなさいい！でもロールケーキ食べたかったんですう!!」

お母さんと校長先生の目の前で足を舐めたお嬢様はその後すぐに我に返って顔を真っ赤にして私を自室へと放り込んだ。校長先生は口をポカーンと開け放心状態になりお母さんは笑いをこらえるのを必死に見ていた。

「ああ……もう校長先生に合わせる顔がない……今まで通りの態度で接したら絶対にバラされるよ……」

「バラさないわよ月村さん」

「校長先生!?!」

何もノックをせず私達の部屋に校長先生とお母さんが姿を表した。

「別に人の性癖だもん気にしないわよ。それに私と同じように同性を好きになる人が近くにいるって安心したわ。まあ学校ではお互いこの事は内緒ね。私と紅葉さんはもう帰るから大学の準備はしつかりしておくこと！いいわね？」

私とお嬢様は無言で同じように頷いた。

「それじゃあね楓、エレナちゃん。エレナちゃんもこれで懲りたと思うからこれ以上はあーいうことしちやだめだからね」

「はい……」

そう言うとお母さんと紅葉さんはお屋敷を出ていった。

「なんだか嵐のような一日だったね……」

「そーだねお姉ちゃん……もう疲れちゃったよ……お風呂入って寝よ」

「そーしましよ」

私とお嬢様はお風呂から上がって10分もたたないうちに眠りについてしまった。

◇ ◇ ◇

「さゆり、私達すっかり忘れられてるけど全部聞いちゃったけどいいのかな？」

「よくはないと思うけど……もう聞いちゃったし後でエレナさんには伝えとこ。もう寝ちゃったみたいだし明日ね」

「そーだね、じゃあ私達ももう寝ようか」  
「うん」

## 入学式前夜

「月村さん背筋が曲がつてるわよ。ただでさえ飛び級なんて特別扱いされてる子が、新入生代表の挨拶する事になったんだから、どこか一つでも欠けてたら同級生の子に何言われるか分らないし、私の威厳にも関わるからしつかりお願いね！」

「後半部分が本音でしよ絶対……」

「なんか言った？」

「いいえ！」

「佳奈あんまり厳しくしないの、エレナちゃんだつてやりたくて新入生代表の挨拶なんてやるわけじゃないんだからもつと丸くやる？」

「お姉様がそういうなら……じゃあ一旦休憩しましょうか」

「このバカツプル……」

お嬢様が冷たい目線をお母さんと紅葉さんに送っていた。まあもう校長先生はお母さんにデレデレで何故か呼び方か紅葉さんからお姉様が変わつてるし、この1週間の間に何があつたのだろうか……

お母さんと校長先生が恋人同士になってから1週間がたった。どうやら2人の恋路



は順調そのものみたいだった。そしてお嬢様が新入生代表の挨拶をすることが決まり、今は、校長先生の家でスピーチの猛特訓中だ。

「お疲れ様お姉ちゃん、大変そうだね……」

「ほんとそれよ、紅葉さんいなくなったらもつときつかったわ。それに何よお姉様って……いつの間に呼び方変わってるし……」

「まあ、順調そうでいいじゃん、なんていうかどつちが責めかもう分かったけど……」

「紅葉さんが貴方のお母さんってよくわかったわよ……」

「んー何も言えない……」

「はい休憩終わり！月村さんやるわよ！」

「はーい……」

この後なんだかんだ2時間近くもスピーチの練習をさせられたお嬢様は家に帰ると死んだように寝てしまった……

◇ ◇ ◇

練習2日目にもなると流石月村エレナとでも言うのだろうか。お嬢様は前日に注意された箇所をほぼ完璧に治し校長先生を驚かせていた。

「凄い……もうこれなら大丈夫そうね」

「まあ私ですからね。もう帰っていいですか？せつかくの休み期間なのに楓と全然遊びに

行けてないんですけど」

「うーんそーね……」

「私もこれ以上エレナちゃん縛るのは可哀想だし解放してあげてもいいんじゃないかな？それに佳奈も学校始まつたらあんま時間取れないでしょ？私も遊べるうちに佳奈と遊びたいな」

「お姉様……」

茶番か。思わず私は突っ込みそうになった。お嬢様も呆れた顔をしていた。校長先生はお母さんに弱すぎるよ……いったいいつのまに主従関係っていうか上下関係が成立したのだろうか……私はお母さんにそれとなく聞いてみた。

「あのお……お母さん、聞いてもいいかな？」

「ん？なあに楓」

「あのお……何で校長先生にお姉様って呼ばせてるの？」

「あーその事。別に呼ばせてないわよ？なんか気付いたらお姉様になってたわ。ねえ佳奈？」

ええ……何それ……って私がポカーンとしている間に校長先生が口を開いた。

「だって前に読んだ小説にお姉様って呼んでるの見てそれが羨ましくて……」

「なんじゃそりや……」

最初に口を開いたのはお嬢様だった。普段のお嬢様からは出ないような口調で私もびつくりした。

「お姉ちゃんなんじゃそりやはないでしょ……」

「あーごめんなさい、ついぼろっと」

「ちよつと！まるで私がおかしいみたいじゃない」

私とお嬢様はおかしいよ。つて言う言葉を飲み込んでそつぽを向いた。

「まあまあ、私は可愛いと思うよ、佳奈いらっしやい」

「お姉様！」

校長先生はお母さんの胸に飛び込んで顔を埋めていた。お母さんはそれを笑顔で見つめて髪を撫でていた。

「なんだか猫みたいだね、髪撫でられてすんごい幸せそうだよ」

「そーね、あのバカツプルは置いておいて私達は帰りましょ。明日の入学式のスーツも決めなきゃいけないし」

「あ！スーツで思い出した！前かけてた赤いメガネかけてスピーチしてよお願い！より知的に見えて美人になるから！」

私は前にお嬢様がメガネをかけて調べ物をしていたのを思い出していた。あの時の

お嬢様は普段もかっこいいけどそれを更に引き立てていて本当に素敵だった。

「んー、まあそんなに楓が見たいならいいけど」

「やったー！早くお屋敷帰ろ！ほらお姉ちゃん！」

「もー、そんなに慌てないの！」

私はお嬢様の手を引いて急いでお屋敷へと戻った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「んー、入学式だからやっぱり目立たないような感じの方がいいよね」

私はお嬢様を着せ替え人形みたいにして色々なスーツを合わせていた。お嬢様の服をひん剥いてやっていただけどまあいいよね。

「ちよつと恥ずかしいんだけど……別に下着にならなくてもいいじゃない」

「しよつちゆう全部見られてるくせに恥ずかしがらなくてもいいよー。ほらほらこれなんてどう!？」

「なんでそんな生き生きしてるのよ……」

お嬢様のスーツ選びは長期戦となり結局1時間かけ決まったものは……

「うん！これ！お姉ちゃんほんと綺麗！はあ……見とれちゃうよ」

「そ、そんな褒めないでよ恥ずかしいって」

私は結局シンプルなスーツを選んだ。よくあるタイトスカートの膝下ぐらいの長さ

のものにした。ズボンでもよかったんだけどやっぱりお嬢様の綺麗な足を隠しておくのは勿体無いと思ひスカートにしたのだ。

「それじゃ皺になっちゃうといけなから着替えるわね」

お嬢様はスーツを脱いでハンガーに綺麗に畳んで掛け直した。もちろん今お嬢様は下着一枚。私は我慢が出来なかつた。

「なーに楓、ちよつと着替えるから用事ならつてキャツ！かえ、で？何で私はベッドに押し倒されているのかしら……？」

「だってここ最近ずつとスピーチとかで忙しくてしてなかつたじゃん。下着一枚で平然と話しかけてくるとか誘つてるとしか思えないよお姉ちゃん」

「いや下着一枚にしたのはかえ、ひゃん……んあちよつとダメだつてシャワー浴びてな  
よ」

「お姉ちゃんの体で汚い所なんてないよ。ほらこことか綺麗なピンク色じゃん」

「んあ！楓……もう仕方ないわね……」

「仕方ないわね？じゃないよねお姉ちゃん？」

私はお嬢様に跨り上から蔑むような視線でお嬢様の顔を見つめた。

「やっぱりその顔いい……早くいじめてください……仕方ないわね、なんて上からの物言ひした私に罰を下さい」

「じゃあ、汗かいちやっだし、拭いてもらえる？もちろんお姉ちゃんの舌でね？」

「え!?いつもと違う」

「何か言った？」

ボソボソと喋るお嬢様に少しキツめな言い方をして反抗の余地を与えなかった。何で私がいつも見たく足を舐めなさい! って言わなかったというと……単純にワンパターンスズギで面白くなくなってきたからだだった。そこでネットで調べたら汗を舐めとつてもらおう、なんて高度なプレーが書いてあったので実践して見たくなったのだ。

「ううん、じゃあ失礼して」

「んん……くすぐりたい、でも気持ちいい……」

お嬢様は最初に私の脇を舐めた。ネットでも脇から舐めていたのを見たし、すでにお嬢様は見ていたのでは……と思わざるを得なかった。

そしてお嬢様は私の体の上から下までじっくり堪能した後一言だけ漏らした。

「はあ……エレナ感激……」

もう、笑いませんからね……その後はいつも通りお互いの気が済むまで交じり合い入学式に備えた。

## 入学式とジエシカさん

「ではこれより、第49回聖チエリチヨウ大学の入学式を開催します、新入生入場」

司会の大学の先生の一声により私達は入学式の間所となる体育館へと入場した。お嬢様は新入生代表の挨拶があるため、先頭での入場が決まっていた。この学校も高校と同じように、お嬢様とメイドの組み合わせがほとんどなので、お嬢様の後ろにはそのメイドが入場する事が決められていた。つまり私は2番目に入場するのだ。自分でもわかるぐらいに心臓がドキドキしていた。

「緊張すぎよ、すっかり私の後についてくれば大丈夫よ」

お嬢様はそう言うのと体育館へ向けて歩き出した。ほんとカッコイイなあ……新入生代表まで務めてるのに私の事まで見てくれてるなんて。

よし！行こ！

私もお嬢様の後に続いて体育館へと入場した。歩いている最中にお母さんがこっちに手を振っているのに気付き、私はそれに対して笑顔で返した。

「はあ……緊張した」

「もうやめてよ、楓の緊張がこっちにまでうつつちやうじゃない」

「うう、ごめんなさい。あんまり慣れてなくて」

新入生全員が入場したことを確認すると司会の先生がまた声を上げた。

「新入生着席!では、改めて、これより第49回聖チエリチヨウ大学の入学式を開催する、では最初に校長先生お願いします」

横からトントンと肩を叩かれ振り向くと、綺麗な青髪の子が私の事を見つめていた。

「あ、あの何か?」

「いやあ可愛い子だなあとと思って。席順的に隣の黒髪の女の子のメイドさんでしょ?」

「えと、ありがとうございます。そうですね」

「その地味なお嬢様より私のところおいでよ。メイドの仕事なんてしなくていいからさ、どう?貴方可愛いから私のメイドにしてあげる」

地味……?お嬢様が?何を言ってるんだらうこの人は。相手にするのも馬鹿馬鹿しいと思ひ私は無視を決め込むことにした。それに今は入学式。私語をする場所でもないしね。

「ちよつとむしー?あつそう……」

やつと諦めてくれたか。と思つたのだが……

「キャー!ちよつとどこ触ってるんですか」



「え？大きなおっぱいだなあと思つて。ふーんその反応はまだエッチしたことなさそうだねえ……ますます欲しくなつちやうなあ」

私も我慢の限界だった。どこのお嬢様か知らないけど流石に失礼すぎる。

「ちよつといい加減に「ジェシカ、あんた私にまた潰されたいわけ？」

「お嬢様……？」

お嬢様が私の発言を切つて横から助け舟を出してくれた。それにその口ぶりだと知り合いなのかな？つてか目が怖いですつてお嬢様。ナンパ事件ばりの目してますつて！

「げ！月村!?なんであんたがこんなところに！私より歳下のはずでしょ!？」

「どつかの馬鹿に飛び級しろつて言われて渋々来たのよ。それで？私が地味？挙句の果てに楓へのセクハラねえ。どうしよつかなあ。中学の時に二度と私に逆らうなつて言つたはずなんだけど？忘れちやつたもしかして？」

「あ、えつと……ごめんさい。メイドさんも……もう二度と舐めた口効かないので許してください」

「ふん、最初からそう言いなさいよね」

「あ、あのお……横の方とはお知り合いですか？」

「まあね、そろそろ私の出番だしその話はお屋敷戻つてからよ」

「はい、頑張つて下さい」

校長先生の話が終わつて在校生代表の挨拶が終わりいよいよお嬢様の出番になった。

「それでは新入生代表月村エレナさん。壇上までお越しく下さい」

「はい」

お嬢様が立ち上がった瞬間周りの雰囲気が変わつた。あれが有名な月村家の当主？  
だとか綺麗な人だとか感想はもろもろだった。隣のジェシカさんは悔しそうにそれを見つめていた。

「新入生代表月村エレナです。この度は新入生代表としてここに立てることをとても嬉しく思います」

お嬢様のスピーチはそれはとても見事なものでした。周りの人から見ても歳下のはずなのに堂々としていて、聞いている人を虜にしてしまうんじゃないかと思うぐらいの力リスマ性でした。上級生の席辺りからは絶対うちにサークル入れる！って言った声も上がっていました。

「それでは新入生退場！」

お嬢様のスピーチが終わると入学式の全行程が終わつたみたいだった。

「はあ……疲れたわね、早くお屋敷帰りましよ」

「一応後は自由下校ですけどサークルとか見なくていいんですか？」

「はあ？入るわけないでしょめんどくさい」

「まあですよね……お迎いの車校門に待たせておきますね」

「車？そんなものいつのまに用意してたの？」

「お母さんが来てくれます。歩くのも面倒ですし乗つけてくれるなら乗っちゃいましょ」

「そーね」

まあ案の定体育館の出口にはお嬢様を自分のサークルに迎え入れようとした先輩の集団に囲まれて簡単には帰してもらえなかったが……

「あーもう！めんどくさいわね！」

「まあまあ……まあよく耐えたと思うよ」

サークル勧誘からなんとか逃げ切ったお嬢様はお母さんの車に乗り込むと毒を吐き散らしていた。昔のお嬢様なら……ううん。考えるのやめよ。悲惨なことになってた気がする。

「なんで入らないって言うてるのにあんなにしつこいのかしら……」

「それだけお姉ちゃんが魅力だからだよ、そーいえばジエシカさんのお話聞かせてよ」

「あーそーいえば言っただけだったわね……ええと確かあれは中学二年生の頃だったかしら、ほら、まだ3人ぐらいメイドが残っていた時よ」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
 「お嬢様、ロシアからの留学生の方がお見えになつて居るのですが……通してよろしいでしょうか？」

「はあ？ いやよ。なんでせつかくの日曜にわざわざ面会なんてしなきゃいけないのよ。めんどい、出ない」

「は、はあ……では体調が悪いと言うことにおきますね……」

「ふん」

全く……なんでわざわざ日曜の昼間に私が出なくちゃなんないのよ。ロシアのぼんぼんになんて興味ないわよ。ドーせ月村つて名前に噛み付いてきただけでしようが。

「いや、ですが！ 困りますよそれは！ いえ！ かし！ わかりました、少々お待ちください……」

なんだか玄関の辺りが騒がしい。全くまだ追いついていないのかしら。使えないわね。

「楓ちゃん言つてきてよ、私これ以上怒られたくないよ」

「ええ!? 私ですか!? 勘弁して下さいよ……」

「お願い！ 今度何か奢るから！」

「もー……今回だけですからね」

コンコンコン

「失礼します、お嬢様宜しいでしょうか」

「なによ楓。まだ追い返せていないの?」

「い、いやあれがその……」

「なによ、はつきりしなさいよ。私がそういうの嫌いってわかってるでしょ」

「わかりました。言われたことをそのまま伝えます。決して私達の言葉ではない事をわかってください。ゴホン……『どんなやつかと思つて来てみれば私に会うのが怖くて出てこれないのね!月村の名も落ちたもんじゃない、この引きこもり!後10分待つて出てこなかったら、全世界に月村がこの私、ジェシカ・バッティから逃げたつて伝えてあげるんだから!!』とのことです……」

その瞬間私の中で何か弾けた。

「あつそう……ここに連れてきなさい」

「宜しいので?」

「いいから早く。二度と日本の地踏めるなんて思わなくさせてやる」

「は、はいいい!今お通しします!」

随分舐めた口聞いてくれるじゃない。誰に向かって口聞いていると思つてんのよ。私は月村エレナよ?

「全く大人しく最初から通してくれればいいのに。どーも。私はジェシカ。ジェシカ・バツティよ」

「あんたの名前なんてどうでもいいわよ。さっきの文章は何？今すぐに発言を取り消してくれたらこのまま帰してあげるけど？」

「あつそ、日本の引きこもりお嬢様の癖に反論ぐらいは出来るのね、って何？何で無言で近付いてくるの!?!っていったああ!!あんた何すんのよ!国家反逆罪よ!私はロシアの姫なのよ!」

気が付けば私はジェシカとやらの青髪に関節を決めヘッドロックで意識を落としていた。

「はあ、汗かいちやっただじやない。ジェシカのメイドはいないの?」

「はい、私ですが……」

「あなたのお嬢様がヨダレ垂らして気絶してる写真ばらまかれたくなかったら、二度とこの家に来ないで。わかった?」

「は、はい!本当にこの度はご迷惑をおかけしました!失礼します!」

それだけ言ううとジェシカのメイドは気絶するジェシカを引きずり家を後にした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「あー!あの時の人!思い出した!」

「まさかまた会うことになるなんてね。クラスとか一緒だったらそれこそ面白いんだけど。私の奴隷にしてあげるわ」

目が笑っていないよ……この人本気だ……

「ま、まあジェシカさんも反省してる事だと思えますし……」

「どーだか。まあいいわ。お屋敷ついたらゆつくりしましよ。お母さんも一緒にどう？」

「あー嬉しい提案だけど佳奈と約束があるのよごめんね」

「順調そうで何よりです。じゃあ楓、帰ったらお茶入れてもらえるかしら？」

「りよーかい」

こうして入学式はちよつとした騒ぎもあつたが無事に終了した。明日は、クラス発表に講義とかを決めたりで私はとても楽しみだった。

## ヤキモチ?

「楽しみだねえクラス発表」

「まあ別に私と楓は離れない事ないしあんまり気にしてないわよ、あー……でもジェシカと一緒にするのは勘弁して欲しいかな……」

「あーそーいえば……」

そんな話をしながら私達は大学へと向かった。大学までは徒歩で20分ほど。他のお嬢様は車で登校しているがお嬢様は別に20分ぐらい歩くわよって言うので歩いて登校する事にした。私にしてはお嬢様とこっそり手を繋ぎながら登校出来るのでとても嬉しかった。

◇ ◇ ◇ ◇

大学につくと、門の前では人だかりが出来ていた。その人だかりの中心にいたのは、なんとジェシカさんだった。

「なんでジェシカさん注目集めてるんですかね?」

大学に入った為、私は呼び方をお姉ちゃんからお嬢様に戻しメイド相応の対応に変えた。



「さあ……つてかあんなところに人だから出来てるんじゃないじゃない。裏から行きましょ」

「ですぬ……」

裏へ回ろうとしたら恐らく新入生であろう子達がジエシカさんの噂をしていた。

「あの人つてロシアのお姫様なんでしょ！私達もサイン貰いに行きましょ！昨日綺麗な青髪で可愛い子だなあとか思ったらまさかお姫様とかやばいよね！」

「ほんとほんと！マジでやばいよね！身長ちっちゃくつて可愛いし抱き枕にしたい！」

「お嬢様……もしかしてお姫様に関節決めてヘッドロックしてたんすか……」

「あはは……確かに国家反逆罪とか言われたっけ……」

「今後やめてくださいいね」

「承知しました」

私達は驚愕の事実を知り、裏門からクラス発表のプリントを教師から貰い自分のクラスを探した。

「あ！楓見つけたわよ、私達はAクラスみたい」

「あ、ほんとだ！お姉ちゃんジエシカさんも一緒だよ……」

「マジで……？」

「マジです……」

「なんでこーなるのよお！」

お嬢様の絶叫が校舎内に響き渡った事をジェシカさんは知る由もなく……

「とにかく楓。基本的に関わらない。この作戦で行くわよ」

「わかりました、じゃあ行きますか」

「ええ」

学校の見取り図を見るとどうやら私達の教室は本館の3階みあいだった。高校同様全校人数は少なく1クラス15人ぐらいで組まれていてそれが3クラスの4学年という感じだ。設備などはしつかりしていて本館、新館、サークル棟と3つの校舎があるみたいだった。

「あれ？お嬢様入らないんですか？」

いつもはなんの気にもせずズカズカと入っていくお嬢様だったが何故か教室の入り口で立ち止まっていた。

「いや……なんて言えばいいのかわかんないけど緊張しちゃって……あのロシアのお姫様にどんな顔して会えばいいのかわかんなくなっちゃった」

初めてお嬢様が困っている顔を見たかもしれない。子犬みたいな表情を見せるお嬢様を堪能していたかったがここはメイドとして主人を助けることにした。

「わかりました、私から入りますよ」

私はお嬢様が入りやすいようにと先に教室に入ることにした。

えっと、私とお嬢様の席は……あつた！窓側の後から2番目！悪くないじゃん！

「お嬢様、こちらになります」

「ありがとう」

この時私は上下の人の名前を確認していなかった。まさかジエシカさんが私達の後ろの席だったとはこの時は知りもしないお嬢様と私だった。

入学して2日目だと皆緊張しているのか誰一人として声を発する者はいなかった。私もその1人で時計の針を見つめるばかりだった。

その時教室の扉が大きな音をたてて開いた。この緊張しきつた空間でよく出来るな……と思ひ扉の方に視線を向けると私とお嬢様が警戒していた人物、ジエシカさんが立っていた。

「あー！月村！同じクラスだったのね！」

まあそういう反応すると思いましたよ。よくこんな緊張感ある場所で声を荒らげられましたね……流石は一国のお姫様とでも言うのだろうか。

「ジエシカ……貴方周りを見て何も思わないの？KYよKY」

「けーわい？なんだそれは？日本語で頼む」

「ロシア人の貴方が日本語で頼むとか言ってるんじゃないわよ。とにかく座りなさいな、

「周りの子が困ってるでしょ」

「あーそれはすまない。皆ごめんね」

あれ、素直に謝れる子なんだ。根は優しい子なのかな？なんて呑気なことを考えていると……

「よりによつて月村の後ろか……まあ仕方ない」

「ため息つきたいのはこつちの方よ。まあこれから4年間一緒なんだから宜しくねジェシカ」

「お、おう、どうしたんだ昨日とは態度が全く違うじゃないか」

「うっさいわねこつちにも色々事情があんのよ。それでこつちはメイドの楓よ」

「エレナ様のメイドの橘楓と言います。これから宜しくお願ひしますねジェシカさん」

私はジェシカさんに思いつきりの笑顔を見せて挨拶をした。悪い印象持たれたら最悪だしね。

「……………可愛い。いやごめん何でもない！ジェシカよ！宜しくね！」

そう言つてジェシカさんは私に握手を求めてきたので私もそれに応じるように握り返した。

「柔らかい……………それに何でこんなに胸がドキドキするの……………」

「あのお……………お顔が赤いようですけれども大丈夫ですか？」

「だ！大丈夫！ただちよつと熱いだけだから！そういうえば私のメイドも紹介するわね、ソフィよ」

「ソフィです。お嬢様はこんな性格で迷惑をかけるかと思いますが宜しくお願いします」  
「宜しく願いますソフィさん」

自己紹介が終わつたところで教室にうちのクラスの担任だろうと思われる人が入つてきた。

「みんな表情が固いなー。リラックスだよりリラックス！私は濱田ナツ、これから4年間皆と成長して行きたいと思うから宜しくね！じゃあ質問ある人？」

なんだか明るい先生が来たなあ。リラックス、リラックスつてそんな簡単に言つてもな……

「はい！」

私の後ろの席から手が上がった。どうやらジェシカさんみたいだ。

「はい、ジェシカさん」

「先生つて何歳ですか？」

いきなり聞きづらいどこいったよジェシカさん……お嬢様より度胸あるんじゃないのかな？いや、ただのバカか……いやいや、お嬢様にバカとか間違つても言っちゃいけないよね！

「27よー、まだまだ若いんだからねこう見えても」

いやあこう見えてもって言うより身長はつかさちゃんと変わらない上に童顔だから同年代に見えますよ……

「まあいいや、とにかく今は皆の緊張解くために自己紹介からやろうか!」

濱田先生の提案で今日の授業はコミュニケーションを中心としたものを行った。何か2人ペアを作る授業ではジェシカさんからの熱いアプローチのせいでジェシカさんとやることになったけどお嬢様怒ってないかな……いきなり私楓とやる!なんて言われたからびつくりしちやったよ……ソフィさんも申し訳なさそうにお嬢様と組んでたし、ジェシカさんは本当に何を考えているのかわからないな……

午前中みつちりと、コミュニケーションの授業をやり終え今日は解散となった。

「あの、楓、ちよつといいかな……?」

「なんですかジェシカさん?」

「よかつたらアドレス教えてもらえないかなって……楓、月村と違って優しいし友達になつてくれると嬉しいなって……それに私の事はジェシカでいいよ!それに敬語もいらない!仲良い子は皆そう!」

「え、ええと……ソフィさん大丈夫なんですか?」

「大丈夫ですよ、お嬢様は気に入った人には逆に敬語で呼ばれたくないタイプなんです

よ」

「そういうことなら……分かった、じゃあジエシカ宜しくね！これ私のアドレス」

そう言つて身近にあつた紙にアドレスを書いてジエシカに渡した。

「ありがと！家帰つたらメールするね！」

それだけ言つたとトコトコとジエシカはソフィと一緒に教室を出た。黙っていたら本当に可愛い子なんだけどな。青髪のショートカットで天真爛漫。それに童顔で小柄だから大学生と言うより中学生に見えるぐらいだよ。

「楓、行くわよ」

「あー！はい！今行きます」

今、なんかお嬢様の言葉に棘があつたのは気のせいだろうか……いや、気のせいだよ。別に怒らせるようなことしてないし。

「ちよつとお姉ちゃん歩くの早いよ！どうしちゃつたの？」

「別に、お屋敷戻つたら着替えて私の部屋に来てちょうだい」

「え、うん……」

何かおかしい。流石に長い時間お嬢様と一緒にいるからわかる。これじゃまるで前のお嬢様だ。こんなに冷たく突き放されたのはいつ以来だろうか……

その後お屋敷まで一言も喋らず私とお嬢様は帰宅した。私は言われた通り部屋着にサクツと着替えるとお嬢様の部屋へ向かった。

「お姉ちゃん? 私だけど」

中から返事は無かったが私はノックをして部屋に入る事にした。

「どうしたの? おねえちゃ!?!んー!! けほっけほ! ちよつとお姉ちゃん!?! 痛いって!」

「うるさい」

私はいきなりキスをされ抵抗出来ないままベッドに押し倒されてしまった。ほんとうにどうしちやっただの???

「ちよつと痛いよお姉ちゃん……んぐ……もー! ダメだつて!」

まだ秘部が濡れてもいないのにお嬢様の指は先を求め続けてきたのでこのままでは行けないと思ってお嬢様を突き飛ばした。

「なんなの!?! 言いたいことがあるならちやんと言つてよ! 分かんないよ!」

初めてのお嬢様に対しての本気の怒り。本当にわけがわからなかった。いきなり私の事を求めてくることはあつても、こんな風に強引にしてくることは、今までに1度もなかった。

「だって……だって! ジェシカに取られちゃうかと思つたのよ! ずつとジェシカと楽しそうに話してるし、最後はアドレスまで楽しそうに交換してるし! こんな気持ち私だつ



て、初めてでどうしていいかわからないのよ!!」

お嬢様は目尻に涙をためて反論してきた。そういうことだったんだ……ヤキモチかな。独占欲は元から強かったもんね。ゴメンね気付いてあげられなくて。

「もう……大丈夫だよお姉ちゃん。私はこれからもずっとお姉ちゃんのもものだって。ジェシカとはただの友達だからこれ以上は何もないって」

「本当?」

「本当。そんな泣きそうな顔しないでよ、ほんとに嫌われたかと思っただから」

私はそう言うのと泣きそうになっているお嬢様を抱きしめた。カリスマ性に溢れた人でもこういうことには物凄く脆いんだな……

「ごめんね楓……痛かったよね。私も考えずにただしようとして……ほんとにごめん……」

「もう謝らないで。お姉ちゃんの気持ちわかったから。だからさっきの続きしよ?」

「楓……大好き」

「私もだよお姉ちゃん……」

私達は長いキスをした。今までにしたキスでそれは一番長かったかもしれない。お嬢様が不安定になった時は私が支えてあげよう。私はこの時強く思った。

## ジェシカの初恋

なんなんだろうこの気持ち……橘楓の事を考えると胸がドキドキして下腹部の部分がキュンと切なくなるのがわかった……最初に見かけた時可愛い子だなあ、とは思ったけどこんなに意識するとは思わなかった。

「お嬢様、お風呂の準備が出来ましたよ」

「ありがと、今入るわ」

お風呂に入っても頭の中は楓の事でいっぱいだった。あの笑顔は今すぐにも見たい。あの柔らかい手の感触をまた味わいたい。それにその先だって……

「ああ!!なんなのよこれ!ちよつとソフィ!いるんでしょ!?!来て!」

「なんです?いきなり大きな声をあげられたのでびっくりしましたよ」

本当にソフィはどんな時でもポーカーフェイスだと思う。今まで私と接している時に表情を崩しているところを見たことがないかもしれない。

「ちよつと話があるの。この私のモヤモヤの解決策を見つけて頂戴」

「はあ……」

私はソフィに先程考えていたことを全て包み隠さず話した。するとソフィはすぐに

わかったみたいで口を開いた。

「あのお……失礼ですけどお嬢様は誰かを好きになったことはありますか？」

「は？そりやあるよ。お父様にお母様それにソフィの事だつて大好きだよ」

「いや、そういう好きではなくてですね……」

「はあ？何が言いたいのか」

「聞き方を変えます。ドラマとかはよく見られてましたよね？恋愛的に人を好きになつたことはありますか？」

「……ないかも」

「そういうことです。お嬢様は楓さんの事が好きなんですよ。だからドキドキしたりするんです」

「でも楓は男じゃないよ？同性だよ？」

「好きになるのに性別は関係ないんですよ、世の中同性婚だつて増えてるんですから」

「マジかあ……私が楓を好き……ああダメだよソフィ、考えるだけで恥ずかしい」

「良かったじゃないですか初恋がようやく出来て」

「ど、どうしようソフィ！私これからどうしたらいいの!？」

「それはご自分でゆっくり考えて告白やら行動を起こせばいいかと。大学生の4年間は始まったばかりなのでですから」

「わかった！私絶対楓に好きって言う！それで恋人同士になってお父様とお母様に紹介するんだ！」

『お父様とお母様がぶっ倒れなければいいのですが……』

「はあどうしよう……明日から楓に会ったら顔に出ちやうかなあ……どうにかして気づかれないようにしなきゃ。それに一番警戒しなきゃいけないのは月村だ。メイドに出そうとしてるなんてバレたら何されるかわかったもんじゃないし……私らしくもない！とにかくやるぞお!!」

こうしてジェシカの初恋は動き出したのである。

## 体力測定

「お姉ちゃん起きて！朝だよ！」

「んー……だるい……行きたくない……」

「ちよつとー！まだ大学始まって2日目だよ!？」

「うーん……」

まあ、お嬢様の気持ちはわかる。あの長いキスの後私達はお互いの気持ちを確認しようように交わり続け寝たのは深夜の3時を回った頃だった。

「お姉ちゃんお風呂沸かしたから入ってきちゃって！朝ご飯そのうち作っておくから」

私はお嬢様の布団を強引に剥がしてお姫様抱っここの形で浴室まで運んだ。流石に2日目からお嬢様をサボらせるわけにはいかないしね。

さて……かく言う私も全然準備出来てないんだよね……とりあえず朝ご飯はトーストだけで我慢してもらってその間に髪とかとかさなぎや。

私はトーストを焼いてお皿に盛り付けた後すぐに大学への準備を始めた。

◇ ◇ ◇ ◇

「なんとか間に合った……」

「まさか朝から全力疾走するとは思わなかったわよ……ありがとうね楓」  
「いえいえ……当然ですよ」

私達は息を切らせながら教室へと入った。するとすぐに青髪を短く切り揃えた女の子が私の元へ駆け寄ってきた。

「楓遅いよー！今日来ないかと思っただじゃん！メールは帰ってこないしさー！」

「あー！ごめんねジェシカ、昨日携帯の充電落ちちゃってさ」

「ごめんね、流石にお嬢様との事は言えないから嘘ついちゃって……」

「そーだったんだ、まあとにかく来てよかったよ、ほら、行こ行こ」

「ちよ、ちよつと慌てなくても大丈夫だよ」

「楓さんおはようございます、それにエレナさんも」

「あ、ソフィさんおはようございます」

席につくと真後ろに座っているジェシカのメイドのソフィに声を掛けられた。相変わらず表情を崩さないなあ、なんて思いながら私は朝の挨拶を返した。

先生を待っている間に何を思ったのかお嬢様はこっそり私の小指を握ってきた。私がいコンタクトで??って感じで送ったら言葉では言わず携帯にメッセージが届いた。お嬢様の方をチラッと見ると頬が真っ赤に染まっているのがわかった。

『ジェシカばかりずるいからこのぐらいいさせてよ。先生来るまででいいから』

なにこのお嬢様。ジェシカ来てから私に対して甘々だったのがもつと甘くなつたみたいだ。私はこの文書を読んだ時顔がにやけないように平静を保つのでいっぱいだった。

「はい、皆おはよう」

お嬢様が私の手を握って5分ほどたつて濱田先生が教室に入ってきた。朝のHRでは今日の予定を軽く確認して終わった。講義決め↓体力測定の流れだった。それが終われば帰れるとのことで私とお嬢様は早く帰りたいね、なんて話をしていた。大学では高校と違い講義によつて教室が変わることなどを言われた。うちは4年生でそんなに単位もきつくないから気楽にね、とだけ言われた。必修科目で8単位、選択科目で8単位取得する事が出来、4年で40単位取ればいいとのことだった。

「お嬢様、授業何取ります?」

「必修だけでいいわ、無理して毎日大学行きたくないもの」

「いやいや……必修だけじゃ足りませんって。選択科目ちよつとは取らないとどうあがいても40単位に届かないんですから……」

「うーん……ああいいの見つけたわ、体育と調理にするわ。身体動かすのは好きだし料理も日頃の生活に使えるからね」

「わかりました、ではそれで申請しておきますね」

「楓は何かやりたい事とかないの？」

「私はお嬢様と一緒にならなんでもいいですよ」

「そう、ありがと」

笑顔で私がそういうとお嬢様は少しだけ照れたような顔をしていた。ほんとわかりやすく可愛いだから。

講義決めが終わると私達は事前に持ってきた運動着に着替えると体育館に向かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

体育館につくと私達のクラスはAクラスということもあり一番最初に受けることになった。

「月村！全競技で私と勝負よ！」

「はあ？つてか何よあんたその格好……」

「え？日本ではこの格好が普通じゃないのか？」

ジェシカは体操着にブルマという特定の人にはストライクゾーンと真ん中の格好をしていた。見た目ロリっ子にブルマはいけないんじゃないかな……他のクラスのジェシカのアンは携帯片手にキヤーキヤー騒いでいるのが分かった。

「まあ、いいや。それで勝負？なんで私がわざわざ体力測定ごときに本気出さなきゃいけないのよ」



「へえ、逃げるんだ。私に負けるのが怖いんでしょ？ やっぱり日本のお嬢様は引きこもりなのね、このひつきー！ 月村ひつきー！」

あーあ、私しーらないつと。お嬢様は私と天音様が高校生の時に屋上で向けられた目に変わっていた。

「あんたその言葉覚えてなさいよ」

「やーつとヤル気になったみたいね！ それじゃ行くわよソフィー！」

「あ、お待ちくださいお嬢様」

ジェシカとソフィーは最初の種目である握力検査の方へと姿を消して行った。

「ちよつといいんですか？ 負けでもしたら」

「負けるわけないでしょ。私が小さい頃どれだけ運動やらされたと思ってるのよ。行くわよ」

「はあ……」

私達もジェシカを追うように握力検査の場所へと向かった。体力測定の競技は全部で4種類。他の学校とかに比べると大分少なくなっていた。

・握力

・ハンドボール投げ

・50メートル走

・20メートルシヤトルラン

「私運動はそんなに得意じゃないんだけどなあ。お嬢様はそれなりに出来るから羨ましいや」

それなりに。私はそのぐらいの認識しかなかったがこの後お嬢様はとんでもない記録を叩き上げる事になるとはこの時は何も知らなかった。

「楓！握力終わったよー！」

「お疲れ様、何キロだったの？」

「16キロ！」

「へ？」

「16キロ！凄いでしょ！」

あれ？16キロって凄いんだっけ……まあ本人は喜んでるみたいだし凄いんだろう。

「凄いじゃん！じゃあ私もそろそろ順番だから行っていくね！」

「頑張つてね！」

やっぱり普通にしてれば可愛いなあ。さて、私も久々の体力測定だし気合い入れなきやー！

「じゃあ最初に橘さん」

「はい」

測定員の先生から名前を呼ばれ私は握力測定器を思いつきり握った。

「ふん！あれ？24キロ？ジエシカ軽く超えちゃった……」

「平均が17・8キロぐらいよ。良かったじゃない」

「あーそうなんですか。お嬢様も頑張って下さい」

「任せなさい」

「じゃあ次、月村さん」

「はい……ん！42キロか。まあこんなもんね」

測定員の先生の顔が青ざめているのがわかった。この間見たテレビでプロ野球選手が握力測った時もそんなもんじゃなかったっけ……

ってことは握力はお嬢様の圧勝って事か。ジエシカ悔しがらるだろうなあ。

「月村！私は16キロだったぞ！ふふん」

自信満々に胸をはるジエシカ。それに対してお嬢様は……

「まあ結果発表は最後のシャトルランの後にしましょ」

「ま、それでいいわ。それじゃ次行くわよ」

この後もお嬢様は凄かった。

・ 握力 42キロ

・ ハンドボール投げ 48メートル

・50メートル走 6.8秒

・シャトルラン 108回

もーなんていうか……勝負する意味あったのかな。規格外すぎるといふかなんといふか。完璧すぎですよお嬢様。非の打ち所のないってこういうことを言うんじゃないかな。容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群。神様は不公平だよほんと。あ……1個だけ残念なところあったね。性癖除けば完璧だったよ。エレナ！感激です！が無ければ完璧だったよ。

「月村これが私の結果よ。楓も見て！私頑張ったから！」

「じゃあ失礼して……」

ジェシカ・バツティ

・握力 16キロ

・ハンドボール投げ 8メートル

・50メートル走 7.1秒

・シャトルラン 37回

んー……お嬢様どうするんだろこれ。普通にお嬢様の結果見せたらぶっ倒れるんじゃないかな。

「楓、貴方の測定の紙貸しなさい」

「え、はい」

「私はこんな感じよ」

お嬢様は用紙の橘楓の名前を隠してジェシカに測定結果の紙を見せた。

・握力 24キロ

・ハンドボール投げ 28メートル

・50メートル走 7.8秒

・シャトルラン32回

「2対2か。まあ月村も中々やるじゃない！次は負けないんだからね！じゃあ楓バイバイー！」

「あ、またねジェシカ。ふふ、お嬢様優しいんですね」

「別にそんな事ないわよ。ただ流石に可哀想かなって……」

「優しくなかったらわざと同点なんかにしないでしょ。それじゃ私達も帰りましょ」

「そーね」

◇ ◇ ◇ ◇

「はあ……やっぱり運動した後はお風呂だよ」

「そーね、後もう少し楓も体鍛えてみたら？私はジェシカに勝つつもりだったんだけど

「？」

私達はお屋敷に帰ると汗をかけたこともあり、1番にお風呂に入った。

「いやあ……やっぱり体力ないんだよね。シャトルランの時だってお姉ちゃんと2人ペアで走ったからすごい恥ずかしかったんだから、まさか100回超えると思わなかったわよ」

「待ってる楓が可哀想であれでも切り上げたのよ？多分130はいけるよ」

「化物じゃん」

「化物って何よ……胸についでる脂肪が邪魔してるんじゃない？」

「あーそっか、お姉ちゃん胸に脂肪ないから楽なんだね、羨ましいなあ」

ちよつとだけお嬢様をからかってみた。これ天音様が言ったら秒で怒るんだろうなあ。

「へえ……触れない約束だったはずんだけど？忘れちゃったの楓ちゃん」

「最初に喧嘩売ったのお姉ちゃんだもん」

「そういう子にはこーだ！」

「ちよつとお姉ちゃんくすぐったいって！キャハハハ！」

お嬢様は私の脇をくすぐってきた。衣服など身につけていないため直で弱い所を触られて笑い泣きするかと思った。

「今後触れないこと。いいわね？」

「うん、わかったよ72センチさん」

72センチとはお嬢様のバストサイズだ。もちろんお嬢様もその数字にはすぐに気付いたようだ。

「かーえーでー!!」

「キヤー!」

私は浴室から逃げ出した。結局その後捕まって私が言わない約束をするまで離してはくれなかった。

## 百合ツプル会議

チエリチヨウ大学の入学式が水曜日だったこともあり今日は土曜日で久しぶりの休みだった。

お屋敷には朝からお母さん、佳奈さん、天音様、さゆりと賑やかなメンバーが集まっていた。

「楓に叩き起されたと思ったたら……なんで休みの朝にあんた達がいるのよ！時間みなさいまだ8時よ！は、ち、じ!!」

「まあまあ……大学始まってあんまり会えないからってわざわざ会いに来てくれたんだから」

「そーだよエレナ。感謝される事はあっても罵倒される覚えはないぞ」

天音様が私に続けてお嬢様に言うが、それは逆に怒られるんじゃないぞ……

「ごめんねエレナちゃん。私も佳奈もあんまり会えないからさ」

「まあ、お母さんが言うなら……」

どうやらお嬢様もお母さんには弱いらしい。お嬢様をコントロール出来るのはもしかしたらお母さんだけかもしれない。歳上の包容力ってやつだろうか。



「それにしても、久々ねこんなに人が集まるのわ。それで何しに来たの?」  
「ん?特に用事はないよ」

「は?用事なのにこんな朝っぱらから集まったの?」

「紅葉さんが明日行くって言うから私達も暇だし行こうかなって。まあいいじゃん百合ツプル会議みたいで」

ニヤニヤしながら言う天音様。お嬢様は何言ってるんだこいつ、とばりの顔をしていたが……

「え!?!緒方さんって伊集院さんと付き合ってたの!?!」

一同「知らなかったんですか……」

「全然知らなかったわ……お姉様は知ってたんですか?」

「え?知ってたよ」

「ええ……」

佳奈さんはまさかという顔をしていた。まあ身近に同性のカップルが2組もいると思わないよね。

「天音どうしたのそんなに笑いこらえたような顔して」

「さゆり突っ込まないで……だってあの冷徹な校長先生がお姉様って……ププ」

「お母さんの前ではデレデレなんですよ佳奈さん」

「へえ、なんでそれ学校でもやらないんです？はつきり言いますけど皆怖がってますよ」  
「私も分かってはいるんだけどね……どうも学校だと気張っちゃって。まあこれから変えていくわよ」

各々色々な話をしているが結局話題がつきしばしの沈黙が訪れた。沈黙を嫌ったのか天音様がお母さんに爆弾にもなる質問を投げかけた。

「紅葉さん紅葉さん、ちよつと気になることがあつて仕方ないんですけど質問してもいいですか？」

「ん？なーに？」

「校長先生とどこまでいったんですか!？」

ぶふっ!!

「ちよつと天音!？」

お嬢様と佳奈さんとさゆりが同時に飲んでいた紅茶を吹き出しそうになっていた。佳奈さんに関してはおわかりやすいようにソワソワしているのがわかった。

「んー。佳奈言ってもいいの？」

「お姉様がいいなら私はなんでも……」

「えつと期待させてるところ悪いんだけど……キスすらまだなのよ」

一同「ええええ!!！」

「嘘でしょそんなにデレデレなのに!?!もう最後までいつてると思ってた」  
「私も思ってた」

「紅葉さんが手早そうな気がしたんだけどなあ」

「以外でした……エレナさんと楓が早かったからもうとつくの昔かと……」

おいさゆり最後のは聞かなかったことにしとくね。各々意見は違ったがやっぱり最後までいつていると思っていたのだろう。だってあんなに佳奈さんデレデレなら自然とそういう感じになるかなあと。

「もー、そんなに手早くないわよ!皆が私をどうという目で見てるかわかったわこれ。だって佳奈ったら私といるだけで満たされるとか言うんだもん。そんな中で手出しずらいでしょ」

「ちよ!ちよつとお姉様!?!別に私はいつでも……」

「あーもうここで惚気ないで暑苦しいわ。楓、寝室に夜までこの2人閉じ込めない?」

「いや流石にそれはダメでしょ……」

「それいいねーエレナ。ここで卒業させちゃおうよ」

「でしょー?別に覗くわけじゃないしねー」

それ覗くって言ってるようなもんですよ……

「ちよつと月村さんも緒方さんも!別にここにそういう事しに来たわけじゃないんだか

らー!」

「でもやりたいんでしょ?」

「そーだよ、やりたいならはつきりやりたいって言わないと紅葉さんが可哀想だよ?」

あー。捕まっちゃったよ。こうなるとお嬢様も天音様もうん。ていうまで聞かないからなあ。

「捕まっちゃったね校長先生……」

「もーあーなったら無理だよね」

さゆりも察したようで私に話しかけてきた。お母さんは成り行きを見守るようで紅茶を飲んでいた。

「お姉様助けて……」

「諦めなさい、そうなったらしつかりと言わないと2人とも離してくれないわよ」

助け舟を出したがすんなりと断られ更に佳奈さんは追い詰められてしまった。

「さあさあ」

「どーします!?!」

悪魔2人が佳奈さんを壁際まで追い詰めていた。あーあ可哀想に……

「わかったわよ! わかったから!」

どうやら覚悟を決めたようでお母さんの元へと近づいていった。

「お姉様、宜しいですか？」

「なーに？」

「その……ここじゃあれなので私の家に行きませんか？」

「えー？今美味しい紅茶飲んでるんだけど。どーして佳奈の家に行かないの？」

「どうやら悪魔は2人だけじゃなかったらしい。3人目がまさか身内にいるとは……」

「えつと……その……私も1歩先に進んでもいいかなって思つて、だから……」

もう佳奈さんは恥ずかしいあまり泣きそうだった。それを見たお母さんは……

「あーもうごめんね！佳奈があまりにも可愛いからちよつといじめすぎちゃった、もーこれ以上は言わなくていいからね」

そう言つて優しく佳奈さんを抱きしめていた。多分2人はこんな感じでこれから先に行かないんだろうなあ。佳奈さんはお母さんに甘えてるだけで満足しちやつてるんだらうなあとお私は思った。

「ちよつとお姉ちゃん、天音様、さゆり行きますよ」

私は2人にこれ以上悪いと思ひりピングから皆を追い出すことを決めた。

「ちよつと楓？」

「いいから！ほら！天音様も突っ立ってないで動いてください！」

「ええこれからが面白いのに!!」

「さゆりお願い！」

「もー、わかったよ。天音行くよ」

「ええ!!」

私とさゆりは2人でお嬢様と天音様をリビングから追い出して私達の寝室へと押し込んだ。

「ちよつと楓！なんてことしてくれんのよこれからだつて時に！」

「あのねえ！お母さんなんだよ相手は！誰が実の親のそういう所見たいと思うわけ!？」

「あー後ちよつとだったのにい！」

お嬢様は子供のようにベッドの上で悶えていた。

「別にいいんだよ？幼馴染いる前でエレナ感激です！つて言ってもらっても？」

それを言うとお嬢様はすぐに真面目な顔になり……

「すみませんでした、大人しくしときます」

「宜しい」

一方さゆりは天音様を羽交い締めにして必死にリビングに行かないように抑えていた。

「駄目だつて！」

「行かせてさゆり！アダルテイな絡みなんて滅多に見れないんだから！」

「絶対ダメ！あと3時間は出さない！」

「はあ……はあ……わかつたわよ、疲れた」

「ほんとに天音はそういう話題に食いつきすぎなの」

「だつて面白いじゃん」

「はいはい、それじゃここで4人で遊ぼーね」

どうやら天音様の説得にも成功したらしい。

「エレナ何か遊ぶものある？」

「ない」

「は？」

「だから無いって。ここはほんとに寝るだけなんだから、つて事で私は寝るから」

そう言うのと本当にお嬢様は布団を被つて寝てしまった。その間30秒。

「まあ今朝早かつたのでそれでかと……」

「全く客人がいるつていうのに……このベッド普通に4人ぐらい寝れそうじゃない？」

「体寄せれば4人寝れると思いますよ」

「じゃあ皆で寝よ！最初に寝たのエレナだし文句言われないっしょ！ほらさゆり！」

「ちよつと天音！苦しいって！」

天音様はさゆりを強引にベッドに押し倒すと抱きつく形でお嬢様が寝ているのとは逆の方に陣取った。

「ほらほら逃げなさんなって。たまにはいいじゃん」

「ダメだつて楓もいるんだから」

さゆりが必死にベッドの中で逃げているのがわかった。流石に真横でおっぱじめないよね……

しばらく様子を見てみると10分もすると2人も朝早かったのか、天音様がさゆりを抱き枕にするような形でスヤスヤと寝息を立てていた。

「じゃあ私も少し横になろうかな……」

私は少ないスペースを強引に入ってお嬢様に抱きつく形で横になった。そうでもしなければ眠れなかったし。別に好きで抱きついてるわけじゃないし。

心の中ではそう思っているにも実際お嬢様に抱きつくくと修学旅行以来の安心感が体にポカポカと巡ってくるのがわかった。

「あつたかい……」

私はお嬢様の温もりを感じながら眠りについた。





## side 紅葉

「お姉様あつたかいです……」

「佳奈もあつたかいよ、それでこれからどうする？ 楓が気使ってくれたけど？」

「もう我慢出来ません……キスして欲しいです……」

そう言ってくる佳奈はとても色っぽくて、私の中で何かが弾けた。

「うん……遅くなってごめんね、歳上なのに気付いてあげられなくて……ん……」

「!? はあ……幸せです……ん！ お姉様！ 好き！」

佳奈は私を更に求めるように舌を絡めてきた。私もそれに応えるように佳奈を求めた。

「んちゅ……お姉様……お姉様が欲しいです」

そう言つて佳奈は気付けば私の胸を触ってきた。佳奈も何処かでリミッターが外れたみたいだった。

「いいよ、最後までしよ」

「お姉様！」

この後は私は久しぶりに感じた体の快感に我慢出来ずに何回も何回も佳奈の前で絶頂に達してしまった。佳奈の方もあまり経験がないせい或少し触ると甘えた声を出していた。声を聞かれないのか時折私の肩に噛み付いて声を我慢していた。

「はあ……幸せでした……ごめんなさい肩……跡ついちゃいましたよね……」

「いいのよ、私も本当に幸せだったから。大好きだよ佳奈」

「私もですお姉様……」

私達は最後に長いキスをして2人してソファーに横になりそこで眠ってしまった。

## エレナと紅葉

「ん……ふぁー……なんだこれ……」

私は目を覚ましてベッドの上を見ると何故かダブルベッドに私も含め4人が寝ているのにびっくりした。途中で身体に重さ感じたのは楓が抱きついていたからだったのね。

「楓、起きて。貴方が掴んでいるせいで起きれないわ」

「……………zzzz」

あーあ……完全に寝ちやつてるよ。まあいつか。私も少し寝よ……あれは!!

「楓それは誘ってるのよね？」

楓の部屋着のボタンが第3ボタンまで外れていて白いブラと豊かな胸が少し顔を出していた。

ゴクリ。いいよね？ちよつとぐらい触るぐらいなら。

「はあ……はあ……柔らかい……あーダメだこれ以上触ってたら私の方がおかしくなっちゃう」

「んあ……」

プツン。楓の甘い声を聞いて私の理性はどこかに行ってしまった。

「楓！好きいい！」

ピシヤリ！

「え？」

楓に思いっきり抱きつこうとした時楓の手が私を阻んだ。

「お姉ちゃん……何してるの」

「い、いやその……部屋着がはだけたから治してあげようかなって……」

やばい……怒ってる時の声だこれ……

「へえ……治してあげようって言って息荒げながら胸触って理性抑えられないなんて猿じゃないんだからしつかりしてよお姉ちゃん」

「はい……」

反省してる風とは裏腹に私は楓に罵られる事で興奮してしまっていた。こういう時本当に自分の性癖が嫌になる……好きな人に怒られるたびこんな状態になっちゃってたらこの先どうなるのよ……

「次は無いからね、おやすみ」

「うん、おやすみ」

なんとか楓にはバレないですんだみただった。どうにかならないかなほんと……

私は一人ベッドから出てお風呂場で熱を冷ました。

リビングへ戻るとお母さんと佳奈さんがテーブルでお茶をしていた。

「あら、起きたんだ。ごめんね気遣わせちゃって」

「ううん、全然大丈夫だよ」

「なんか暗いけど楓と何かあった？」

「あー……うん、ちよつとお母さんに相談なんだけどいいかな？」

「ん？もちろんよ」

「いやあその……言いつらいんだけど、私ってその、ちよつとマゾ体質じゃん？それでのままでいいのかなって……」

「ふふ、ごめんね笑って。そんな悩む事じゃないわよ。楓が言ってたことそのまま言うね。もちろん楓には内緒よ？『私はあーいうちよつと残念なお姉ちゃんもかっこいいお姉ちゃんも全部含めて好きだよ』って言ってたわよ。それにそこが無かったら完璧すぎて怖いぐらいって言ってたのよ。だからエレナちゃんはエレナちゃんらしくていいのよ、気にすることなんてないわ。一時期あの性癖治そうとしたんだけど無理に治してお姉ちゃんの可愛いところなくなっちゃうかも、って辞めたらしいしあの子。それにね、

佳奈だってマゾよ？だから気にすることなんてないのよ」

「お母さん……ありがと。楓もそんなふうに思ってたんだ……素直に嬉しいや」

「なんか私に飛び火したような……」

まあ佳奈さんは私と同類な気がしてたし……ごめんね佳奈さん。まあ内緒にしとくよ。多分楓にはバレてるけどね。

「まあそんなことより！お腹すいたよね？私皆の分作るから台所借りてもいい？」

「あ、全然大丈夫だよ、それなら私も手伝うよ」

「いいのいいの、たまには母親らしいことさせてよ」

「ならお願いしよっかな、ありがとお母さん」

「はーい」

本当に楓のお母さんがいい人でよかった。私は心からそう思った。

## エレナ様いじり

「楓、楓起きて、紅葉さんがご飯作ってくれたんだって」

「ふえ？さゆり……？」

「ふえ？じゃないわよ、もう夕方よ。皆寝すぎだわ……天音は知らない間に起きてたみたいけど。とにかく紅葉さんが手料理振舞ってくれるみたいだから着替えてリビング来てね」

「うん……」

寝すぎて体がだるく、私はさゆりに一言断りを入れてシャワーを浴びさせてもらった。全く体が動く気がしなかったのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「んー！気持ちいい！それにしても寝すぎはよくないね……体が全然動かなかったよ……」

「そーだよ、寝すぎは体に毒だよ楓ちゃん」

「天音様？いらしたんですか？」

「んーさつき2人が寝てる時に目覚めてね。目覚ましも兼ねてお風呂入らせて貰ってた

の

「そーだったんですね」

「つてかびつくりしたなあ楓ちゃんがエレナの手ピシヤリと払った時わ、横でやり始めると思ったのに」

ん？私がお嬢様の手を払う？いつの話だ……

「えつと……身に覚えがないんですが……」

「ええ!?じゃああれ寝ながらやってたの!?エレナが楓ちゃんの部屋着はだけててそれに欲情して胸触ってたんだよ?それも知らない」

何してんのお姉ちゃん……勘弁してよ、横に天音様とさゆりいるのに。

「全然知らなかったですけど教えてくれてありがとうございます。後できつく言っときます」

「いやあ結構強めにその後言つてたよ……?その後理性飛んだエレナが、楓ちゃんに抱きつこうとした時に、楓ちゃんがピシヤリと手払って『息荒げながら胸触つて理性抑えられないなんて、猿じゃないんだからしつかりしてよお姉ちゃん』つて。いやあなんていうか、すんごい冷たい口調で言ってるからエレナの事だから逆に興奮してそうだけど」

ええ……私そんな事口走ってたの。まあ確かに他の人いる時とかはやらならないからね



とは言ってるけどさあ。いや流石のお嬢様でも真面目に怒ってる時に興奮は……否定できない……

「全然記憶にないです……流石のお姉ちゃんも怒られてる時に興奮しなですよ、つて言っただけであつたんですけど否定出来ないのは辛いですね」

「まあそこも含めてエレナじゃん？」

「間違いないですね」

私と天音様はお嬢様のドMっぷりに笑うしかなかった。まあそこが可愛いところだしね。

◇ ◇ ◇

リビングにつくとすでに天音様と私を除く4人が食卓を囲んでいた。

「ごめんお母さんお待たせ」

「ううん、それじゃ頂きましようか」

一同「頂きます！」

今日の晩ご飯はシンプルにカレーだった。お母さんのカレーは食べるのが初めてだったしとても楽しみだった。

「美味しい……」

「うん！お母さんすんごい美味しいよ！」

「紅葉さんうちのシェフやりません!? 今まで食べたカレーの中で一番美味しいです!」

「あ! それいいね! 楓貫つてくね紅葉さん!」

「ほんと美味しい……流石お姉様です」

各々お母さんのカレーを堪能していたみたいだった。もちろんお母さんはあげないけどね。

「皆褒めすぎよ。美味しそうに食べてもらってほんと嬉しいわ。おかわりもあるからね」

一同「はい!」

「美味しいわね楓」

お嬢様が私に話しかけてきた。私はちよつとしたイタズラ心が芽生えた。人が寝ている間にイタズラした仕返しだよ。

ふい。

「楓……? 美味しいよね?」

ふい。

「あ、ごめんね……」

天音様の方を見ると笑いを堪えているのが目で見てわかった。そろそろ可哀想だからやめてあげようかな。

「お姉ちゃん、怒ってないよ。ごめんね、ちよつと仕返ししてみただけ」  
「……ひつく……ぐすん」

「え？」

「もう……ほんとに嫌われたかと思つたじゃない……」

「あー！楓ちゃんがエレナ泣かしたあ！」

「え、いやその、そんなつもりはなくて、あのほんとごめんお姉ちゃん。そんなに思つてると思わなくて」

「冗談よ、お嬢様にイタズラする悪いメイド焦らせたかつただけよ」

お嬢様は舌をこちらにべーつと出して笑つていた。

「もー！驚かささないでよ！お姉ちゃん滅多に泣くことなんてないんだから心臓に悪いよ  
！」

「騙される方が悪いんだよーだ」

「先に人が寝てる時にイタズラしたのが悪いんでしょ！」

「それは楓が誘つてたからじゃない！あんなに肌露出させてこつち向いてたらそういう  
ことですよーがー」

「はあ!?何言つてんの！寝てる間にはだけただけじゃん！お姉ちゃんのドM猿」

「んな!?ちよつと言つていいことと悪い事があるでしょー！」

「ドM猿……ぶふっ！アハハハハ！やばい！いいよ楓ちゃん最高！」

天音様は腹を抱えて笑っていた。お嬢様がすることじゃないですけどまあ今は笑っておきましょう。

「天音うるさい！」

「いったあ！なんで私だけに手出すのよ！言ったのは楓ちゃん！」

「大切な彼女に手出すわけないでしょ！その分あなたにならいくらでも出せるわよ！」

お嬢様と天音様のいつものものが始まったので私達は被害を被る前に食器を下げて避難した。

その後お屋敷の中を駆け回ってお母さんに叱られてしゅんとしている天音様とお嬢様は仔犬みたいで可愛かった。さゆりに関してはわざわざ携帯を取り出して写メを撮っていたぐらいだった。

「楓変わったね」

さゆりからふとそんな事を言われた。

「そうかな？」

「前まであんな声荒らげてエレナ様と言い争いしてるところなんて見たことなかったからさ。お互い信頼しあってるから言い合えるのかなって」

「信頼、されてるといいな。確かに前に比べたら私もお姉ちゃんも笑っている時の方が

多くなつたかもね。それもこれも私を選んでくれたお姉ちゃんのお陰だからさ」

「これ以上聞くと甘くて溶けちゃいそうだから聞くのやめる」

「自分から聞いたんじゃない」

「ふふ、これからも仲良しでいようね、私達もエレナさんとも」

「当たり前じゃん！」

私とさゆりはハイタッチをしてにっこりと笑った。

## アルコール

「え？月曜日なのに取った講義のおかげで休みなの？」

「そーよ、私達が取った講義は合計10個。火曜日、水曜日、木曜日の3日にまとまってるから月曜日と金曜日は休みなの。だから私はあまり講義取らなかつたのよ」

「なんか不思議。大学ってそんな感じなんだね」

「そーよ」

お母さん達が帰って、私は明日の大学の準備をしようとしたのだが、どうやら講義の関係で私達は明日休みらしい。友達から大学は楽しいよ？って聞いてたけどこういうことだったのかな。

「ってか誰かに怒られるなんて久しぶりだったわ……お母さん亡くなってから叱られるって事が無かつたからお母さんに廊下で正座させられた時はすごい久しぶりの感じがしたわよ」

あーそうか。お嬢様のお母様は確かに厳しかったっけ。亡くなってからはずっとメイドと暮らしてきたもんね。

「怒られてるお姉ちゃんなんて確かに新鮮だったもん。私に怒られても逆に喜んじやう

でしょ？」

私はお嬢様をからかうように言った。お嬢様の方をじっと見ていると頬がほんのりと桜色になり無言の肯定をしているようだった。

「黙ってちやわかんないよお姉ちゃん？」

「楓の意地悪……」

「ふふ、ごめんねお姉ちゃん。もーそういうところほんと可愛い」

そう言っただけ私はお嬢様に抱きついて髪を撫でた。いつ見ても綺麗な黒髪。手ぐしですいてみるとその綺麗さはより分かった。

「ほんと調子いいんだから、ん……」

「ん……もう、そうやってすぐキスで誤魔化すよね」

「もー！今日の楓変よ!?いつもこんなにからかってこないじゃない」

「いいじゃんたまには思いつきり甘えたって」

「まあ構わないけど……」

また赤くなつた。こんなに表情わかり易い人も珍しい気がした。お嬢様の髪の毛の匂いを嗅いでまた抱きついて頬ずりして、それから……

◇ ◇ ◇

「はあ……なんだったの今日の楓は……」

私は楓が寝入った後で1人浴室でため息をついていた。今日の楓の行動を思い返してみると本当にわけがわからなかった。今までこんなに甘えてきてからかっただけいな事はなかった。本当にどうしたんだろう……まあただ甘えたくなくなったっただけならいいんだろうけどどこか体調とか崩したんじゃないよね。それに何か変な食べ物とか……あ!?!もしかして!?!

私は佳奈さんが差し入れに持ってきたチョココレートの箱に目を通した。

「やっぱり……アルコールが入ってるチョコ食べておかしくなったのね……思い返せば確かに顔がほんのり赤かったわね。もう金輪際楓にアルコールが入ってるものを食べさせるのやめなきや……楓はともかくとしてずっといじられてる私の身が持たないわ」  
私は、そつとチョココレートの箱を自室に隠した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

気持ち悪い……ついでに昨日さゆりと別れてからの記憶が無い。きつと佳奈さんが持ってきたアルコール入のチョココレートのせいだろう。小さい時にメイドの先輩から同じようなものを貰った時も、フラフラしてしまって、仕事に身が入らなかったのを思い出した。

「う……あーダメだ……吐きそう……私どんだけアルコールに弱いのか……たかが小さなチョコ2、3個食べただけなのに……!?!」



「あー楓起きたの、って！顔真つ青じゃない!?ちよつと！戻しそうなもの!?待って！ここで吐かないで！あああ!!!……………はあ……………拭くもの持つてくるわね」

「うう……………ごめんなさい……………」

私は見事にダブルベッドに汚い日本地図を描いてしまった……………朝からなんて事を……………

「とりあえずそのゲロゲロの服やら何やら洗濯物に入れてお風呂入ってきなさい。後は私がやつといてあげるから」

「でも……………お姉ちゃんいいよ、私後全部やるからさ」

「もー、遠慮しないの！ほらほら行った行った」

「ほんとごめんね……………」

私は申し訳なきでいっぱいそのまま一人で浴室へと向かった。

「あ……………ダメだ。頭がグルグルしてる……………」

しばらくお湯につかっていると浴室のドアがガラガラと音を立てて空いた。

「調子はどう?」

「全然ダメ……………ほんと迷惑かけてごめんねお姉ちゃん」

「大丈夫だつて。貴方の変化に気づけなかった私が悪いわ」

そう言つて私の髪を撫でて励ましてくれた。優しすぎるよお姉ちゃん……………一緒に寝

てる所にゲロぶちまけられたら普通の人ならブチ切れてるって。

「ありがと……ちよつとくつついていい?」

「それで楽になるならそうしなさいな、体調良くなるまでは横にいてあげるから」

「ありがと……」

◇ ◇ ◇ ◇

「すう……すう……」

「寝ちゃったか、そんなに私の抱き心地いいの?ふふ、まさか朝から戻すとは思わなかったけどさつきよりは顔色よくなってよかった」

さてと……このまま楓を浴室で眠らせるわけにはいかないのです。私は眠る楓を脱衣場まで運び、風邪をひかないように綺麗にタオルで体を拭きパジャマを着せて客人用の寢室のベッドに寝かせた。

## 制服デート？

「んん……あれ、ここは？」

私は体の怠さを感じながら目覚めた。確か朝起きて……思い出したくもない。橘楓  
一生の黒歴史になること間違いなしだねこりや。その後お姉ちゃんにお風呂入ってき  
な、って言われて……あ！お嬢様に体預けてうとうとして寝ちゃったんだ……私運ぶの  
大変だったよねごめん。

私はベッドから身を起こすとお屋敷のリビングへと向かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

リビングに着くと、お嬢様はテーブルに座ってお茶をしていたみたいだった。

「お姉ちゃん」

「起きたのね、体調はどう？」

「まだちよつと怠いけど朝よりは良くなったよ。ほんとごめんねお姉ちゃん」

「いいのよ、ごめんねはいらないわよ。楓からありがとうって一言言われるだけで私は  
嬉しいんだから」

本当にこの人は……お嬢様のお言葉に甘え、私はこれ以上は何も言わなかった。

「ちよつと表出ない? ずっと家に籠りっぱなしってのもあれだし少し家の外お散歩しに行きましょよ!」

「お散歩? うん、もちろんいいよ。じゃあ着替えてくるね」

「じゃあ私はここで待つてるわね」

「え? その格好で表出るの?」

「え? そうだけど?」

今のお嬢様の格好は薄いワンピースにパーカーを羽織っただけで、なんていうかメイドとしてそんなラフな格好で主を表に出していいのか? という疑問と、外は4月とはいえまだ涼しくその格好では風邪を引くかと思っただからだ。

「んー……あ! いいこと思いついた!」

「ん? どんなこと?」

「ふふーん、こつちきてお姉ちゃん」

「え、ええ (なんでこんな楽しそうなのかしら……)」

私はお嬢様を連れてスーツや洋服がしまつてある衣装室へとやつてきた。

「えつと……確かこの辺に……あつた! お姉ちゃん一緒にこれ来て歩こうよ!」

私がお姉ちゃんに着せようとしたのは……

「え?! 高校の時の制服じゃない? なんで今更?」

「今ぐらいしか着れる時ないじゃん、それにお姉ちゃんと制服デートとかだつてほんとはしたかつたし」

付き合つてから、まともにデートなんてしたことすらなかつたかな、言われてみれば。他の人に見られたら何言われるかわからないし、だいたいお屋敷の中だったしね。今の時間は丁度高校生の下校時間の16時。これなら手繋いで歩いてたつて仲良しな学生にしか見えないよね？

「そーね。制服で一緒にデートか……悪くないかも……それにその後……」

「お姉ちゃん？」

「ううん、何でもないわ。じゃあこれで行こつか」

「うんー」

私はお嬢様との初めての制服デートに心が弾んだ。

「それじゃ着替えちやうから楓も支度しちやいな。ほんとに体調は大丈夫なのね？」

「お姉ちゃんと制服デート出来る！つて思つたら気だるさなんてどっかいっちゃつたよ」

私の言葉に嘘はなかつた。制服デートつて考えた時に顔が自分でニヤニヤしちやうのもわかつたし今、お嬢様に体調大丈夫？つて言われるまでさつきまで自分が体調悪かつたことまで忘れてしまつていたぐらいだった。

「あーほんとに楽しみ！高校生の頃は完全にメイドとお嬢様だったから1歩引いてお嬢様の後ろにいたから、横に並んで歩ける日が来るなんて思いもしなかったよ。それに多分お姉ちゃんなら手繋いでいい？って聞いたら顔真っ赤にして『いいわよ』って言うてくれるんだろうなあ」

この時楓は、自分を主とした争いが起こるなんて思いもしなかった……

## 制服デートだったのに……

楓とエレナが制服デートに行こうとしている中、ジェシカ・バツティはと言うと、高校時代の友達とカフェに来ていた。久しぶりの再開にジェシカは、ついに私にも好きな人が出来た！って会って早々暴露し詳しく！と友達数人が強引にジェシカをステイベックスというカフェに連れ込んだのである。

「それで！どうしたのよいきなり！高校生の時告白されてもずっと振ってたあんたに、好きな人とか信じられないんだけど」

笑いながらジェシカが初めて高校で出来た友達の高橋香織に突っ込まれていた。派手に染めた金髪で友達も多い。いわゆるギャルってやつだ。転校初日のジェシカに真っ先に話しかけにいつてジェシカの心を開いたのももちろん香織だった。

「はは、香織相変わらず言い方きつすぎ」

「だってあのジェシカが好きなんだよ!? 恭子もびっくりしたでしょ?」

「まあね、それでどんな人なのか教えてよ、写メとかかないの?」

恭子と呼ばれたのは八神恭子。この子は小学生の頃から香織と仲が良かったとか。髪色は香織と違って、今まで染めたことがなく綺麗な長い黒髪だった。活発的な香織と

は違い普段は大人しく、高校生の時はクールビューティとして同学年からとても人気があった。

「どんな人……優しくくて可愛い子だよ。写メとかはないや、ごめん」

「へえ、可愛い子なんだ。つてきり超イケメンとかお金持ちの貴族だとかそんな風  
思ってたよ。ジェシカもお姫様だしね」

興味津々に話しているのは香織。ギャルつて恋バナめっちゃ好きだもんね。

「え？女の子だよその子。優しくて可愛いほんとに。入学式で一目惚れしちゃつて  
さ」

顔を赤くして話すジェシカは、恋する乙女そのものだった。

「「え!?女の子!」」

普段は表情一つ変えない恭子もこれには、めっちゃくちや反応していた。まあそれは  
びっくりするよね。その反応に対してジェシカはと言うと……

「え?そっだよ?」

なんでびっくりするの?ぐらいに返していた。

「いやいやいや、当たり前のように言ってるけど同性だよ!?!友達として好き!とかじゃ  
なくて?」

「ううん、そういうのじゃない。私、香織と恭子の事大好きだけどそれとは違う好きだも



ん」

それを言うと香織は少し照れたような顔をして……

「なんか悔しいなあ、あーしらのジエシカ取られた気分。そーだ！今から突撃しよーよその子の家！知ってるんでしょ！アタックよアタック！」

「それ乗った、行こジエシカ」

香織の発言に恭子の乗りジエシカは引くに引けなくなつてしまった。

「ええ……月村のとこ行くの……まあもう2人行く気満々だし仕方ないか……」  
「何か言つた？」

「ううん、じゃあ行こつか。こっから歩いて20分ぐらいだからさ」

「おっけー！さあどんな子かなあ」

楽しむ香織と恭子とは裏腹にジエシカは、月村に楓のことが好きつて気付かれないか心配で仕方がなかった。

◇ ◇ ◇

一方その頃月村家では……

「お姉ちゃん準備出来た？」

「おっけーよ。なんだか不思議な感じ。卒業したのに制服着てお出かけなんて」

「だよね、私も違和感しかないもん」

「あー、楓に1つお願いがあるのだけれど」

「ん?なに?」

「その、せっかくの制服デートだし……たまにはお姉ちゃんじゃなくてエレナって名前  
で呼んで欲しいなって。それにそっちの方が下校してる仲良い友達って思われると思  
うし」

お嬢様は少しだけ顔を赤くして照れくさそうに言った。エレナか……呼んでみた  
かったんだよね。やっぱり恋人同士だし、名前で呼びあつて手繋いで買物とかしたり  
したかったんだよね私も。まさかこんな感じで呼んでいいことになるとは思わなかつ  
た。

「ほんとに!?いいの!?私ずつと呼びたかったんだよお姉ちゃんの名前。恋人同士だし名  
前で呼びあつたりするのいいじゃん」

「え!?そーだったの?ごめんね気付いてあげれなくて。なら今度からお姉ちゃんじゃな  
くてエレナでいいわよ」

「やったー!じゃあ行こエレナ」

「……うん(やばいめちやくちや可愛い……楓が本当に喜んでるのが分かるし今すぐ  
にでも抱きしめてお互いの名前呼び合いながらキスとか……)」

「ん?どうしたの?急に固まって」

「うん、何でもないので、それじゃ行きましょ」

そして私達は家の近くの河川敷を散歩する事に決めた。そこなら人もそんなに通らないし、知り合いに見られることはないと思つたからだ。

「こうして2人で並んで歩くつて新鮮ね。大学の登校までの短い時間とかでならあつたけどゆつくりするのは初めて」

「そーだよね、まさかエレナとこんな風に歩けるなんて思わなかつた」

エレナ！あーほんとこの響き好き！こんな事ならもつと早く呼んでいい？つて聞けばよかつた。

「うん……楓、手繋いでもいい？」

「うんー」

私はお嬢様の手を取るとわざと普通の手繋ぎではなく恋人繋ぎをした。これも私がやりたかつた事。好きな人と恋人繋ぎで歩く。なんて幸せなんだろ……余韻に浸つているとお嬢様は私の恋人繋ぎに驚いたのか、びつくりした様な顔をしていた。

「びつくりした？」

「え、ええ。まさか恋人繋ぎされるとは思わなかつたわ。でも嬉しい」

「私もすんごい嬉しいし幸せ」

「そつか、じゃあもつと先の方に行つてみましようよ。あそこの橋からなら夕陽が見れ

「そうじゃない?」

「うん、そーだね。それじゃ行こー!」

私達は数百メートル先にある橋に向かって歩き出した。

◇ ◇ ◇

「な! な! なによあれ!?! 月村と楓が手繋いで歩いてるうう!?!」

ジェシカと香織と恭子は月村家を目指して歩いていたので……幸か不幸か分らないが、恭子の人が少ないからそつちの方向なら町の中じゃなく河川敷歩こうよ? という提案から人の少ない河川敷から行くことにしたのだった。

「うわ! びっくりした……どうしたのよジェシカいきなり声なんてだして」

「だ、だって月村と楓が……」

香織はなんで女の子2人が仲良さそうに歩いているのにそんなに驚いているのか不思議で仕方がなかった。

「香織、もしかしてあの二人のどちらかの事をジェシカが好きだったんじゃないの?」

「え、ジェシカほんと?」

「うん……あの茶髪の子。橘楓っていうの。横にいるのは月村エレナ。聞いたことない? 月村って名前」

「もしかして、あの有名な月村? 超お金持ちの」

博識な恭子は知っていたらしくその名前に反応を示した。

「うん。それで月村のメイドさんが楓」

「ならお嬢様とメイドが仲睦まじく歩いてるだけじゃないの?」

「だといいんだけど……」

「もー! うじうじしてても仕方ないでしょ! 直接聞きに行くよ!」

「あ! ちよつと待ってよ香織!!」

ジエシカは駆け出す香織を追いかけ月村のいる方へと向かった。

◇ ◇ ◇

「ね、ねえエレナ。なんかこっちに走ってくる女の子いるんだけどその後ろの子ジエシカじゃない?」

私は橋の近くから金髪の女の子が走ってくるのを目にしその後ろを青色の髪の女の子が追走しているのに気が付いた。青色の髪なんてこちら辺じや滅多に見ないしまさかと思ってお嬢様に声をかけた。

「え? そんなまさか。こんなとこにあいつがいるわけ……嘘でしょ……」

「ど、どうしますお嬢様? もしかしたらバレたかも……」

「テンパりすぎて口調がメイドの楓になってるわよ。大丈夫よ。仲が良いお嬢様とメイドにしか見えてないって」

「そ、そうだよね」

私はお嬢様の言葉を肯定するも内心は不安で仕方がなかった。天音様にポロツと言ってしまった辺りお嬢様の口は堅くない。なんとか誤魔化してくれればいいんだけど……

1分もしないうちに金髪の女の子は私達の前まで来てそこで足を止めた。

「はあ……はあ……あー！疲れた！あ、ごめんね急に。あーしはジエシカの友達の高橋香織。それでジエシカが「あー！！あー！！ちよつと香織！！」

香織と言う女の子が話している最中にジエシカが言葉を遮った。もう私達には何が何だかわからなかった。

「どうしたのジエシカ？」

「はあ……えつと……今日はいい天気ね楓」

「え、まあそうだけど……」

もう夕方だけどその言葉はどうなんだろうか……と私が思っていると、

「もー！ジエシカはつきりしてよ！じゃないと私が聞くよ？」

「わかった！わかったから！えつとね、その……月村と楓つてもしかして恋人同士だったりするのかなって……」

やっぱりその事かあ……いや、そうだとは思ってたけどさ……

「まさか、ただ外を散歩してただけだよ、ですよねお嬢様」

「そーよ、それに私達同性よ？まあ手繋いでたから勘違いしたのよね。あんまり言わないで欲しいんだけど私達って結構仲良くよくこんな風に出掛けるのよ」

ナイスですお嬢様。このままいけば乗り切れますよ。

「あ、そ、そーなんだ。だよねえ……ごめんね、それだけなんだけどさ、あはは」

「私にはそうは見えなかつたけどな」

「恭子？」

「あ、ごめんね。私は八神恭子、宜しくね。それで話し戻して悪いんだけど、恋人繋ぎしてたよね？普通に仲良いぐらいじゃないと思うんだけどな。それにさっきから月村さん？でいいのよね。彼女の顔見てたら視点はブレてるしで怪しいよ」

頭の良さそうな子……お嬢様何してるんですか。校長先生との面談でも動揺しなかつた貴方が何故こんなところで！

「あーしも怪しいと思つてた。それじゃ月村さん聞くけどその首元のキスマークは何？」

「え!?!嘘!!」

「ちよつとお嬢様!!」

そんな風に確認したらそういうマークがつくような行為してます。つて言ってるよ

うなもんだよ……

「え?どうしたのよ楓」

「い、いえ。何でもありません」

何でもあるよ!今ので絶対バレたよ!

「へへーん、ちよろいねえ月村のお嬢様わ。ジェシカどうするの?」

「はあ!?!誰がチョロ口いつて?」

「あんたに決まつてんでしょ」

お嬢様は少し怒ったような顔をして香織さんに迫っていた。香織さんの方もなんだよと言わんばかりにお嬢様に詰め寄っていた。

「ちよ!ちよつと香織!そんなに言わなくても!」

「お嬢様も落ち着いて下さい!」

「はあ?ジェシカに嘘ついてたんだよこいつ。それで少し言うぐらいいいでしょうが」

「舐められたまま私が帰さないってことぐらいこれだけ付き合っただけわかるでしょ。」

「下がりなさい」

こうなるとお嬢様は引き下がらない。目付きからしてもめちやくちや怒っているのがわかった。香織さんの方も喧嘩慣れしているのかお嬢様の表情に怯えた様子はなく好戦的な態度を取っていた。どうしよう、どうしようと悩んでいた時だった。



「かー！えー！でー！ちゃーん!!」

「ふえ？つて痛いですよ！」

「何なに？この面白そうな展開。おじさんも混ぜてよ」

何故か天音様がそこにはいた。とりあえず抱きしめられて苦しいから離してくれないかな……

お嬢様と香織さんはポカーンとした表情になっていた。香織さんに関してはいきなり知らない人が現れたんだからそれは驚くだろう。

「いや、なんでいるんですか……」

「いやあ、さゆりがなんか補修受けてて暇だからエレナの家行こうとしたら制服姿の2人が出ていくんだもん。そりゃこっそり後つけるよね」

「いや、声掛けてくれればいいのに……とにかくお嬢様止めてもらえませんか？ちよつと色々あります」

私は天音様にこうなつた原因を説明した。

「楓ちゃんのお望みとあらば喜んで、それでそのギャルは、何でエレナに詰め寄つてんの？」

「はー？あんた誰よ。関係ないやつは黙つてて」

「全く……最近のギャルは怖いねー。私は緒方天音。あんたが詰め寄つてるやつの親友

であり幼馴染よ」

「あつそ、じゃ消えていいよお疲れ」

香織さんはだから何?と言った感じで天音様を全く相手にする様子はなかった。

「もー!香織もいって!帰ろ!」

ジェシカも必死に香織さんを止めようと必死だった。それでも香織さんは引き下がる様子がなかった。

「ちよつとエレナ。いい加減にしなよ。あんたが喧嘩するのは勝手だよ。でもそれを見て楓ちゃんはどう思うの?多分アంతタのことだからあんなパギャルには負けないでしょうよ。でもどこかしらに体に傷はつくんだよ?」

「あーもー!わかったわよ、気分悪いわ、帰る」

「ちよ!ちよつとお嬢様!?待ってください!ごめんねジェシカ!また明日!」

「う、うん!私こそごめんね!」

私は早足で歩くお嬢様を追いかけた。

## 制服○○○

「ちよつとエレナ！待ってよ！」

私は早足で歩くお嬢様に強引に追いついて、手を握った。お嬢様の手は怒りからか震えておりこちらを見ようとはしなかった。

「私だつて分かつてはいるの。でも……！あんな風に舐められたら、私のプライドが許さないの。本当にごめんなさい。せっかく楓が提案してくれた制服デートなのに……」  
「エレナ……でも最後は私の事考えてくれたんでしょ？大丈夫だよ。いつだつて制服デートは出来るんだしさ。それじゃお屋敷戻つてゆっくりしよ？」

「ありがとう楓、うん。絶対今日の埋め合わせはするから。それと天音、まあ聞かなくても来るとは思うけどうち来る？一応あんたの言葉のおかげで踏み止まったしお茶ぐらいい出すわよ」

私の後ろで成り行きを見守っていた天音様にお嬢様が声をかけた。今回はたまたま天音様がいてくれたお陰で事を大きくせずすんだし本当に感謝しなければならないと強く思った。

「なんかエレナに素直に感謝されると気持ち悪いよ……まあお邪魔させてもらうけど

ね」

「たまには私だって素直にお礼ぐらい言うわよ」

私達はお屋敷へと戻った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ジェシカごめんって！いい加減機嫌直してよ」

「知らない！香織のバカ！」

ジェシカ・バツティは怒っていた。それも今までに香織と恭子が見たことないぐらいの怒りだった。

「仕方なかったんだって。真実知りたがってたじゃんジェシカも」

「あんな煽ること無かったじゃん！月村はどうでもいいけど楓にだって迷惑かかってるんだよ？それ分かってるの？それに香織が喧嘩したら私だって嫌な気持ちになるんだからね。それに月村なんかと喧嘩したらただで返してくれないよ？あいつめちやくちや強いんだからあー見えて」

私は最初に月村と会った時の話を香織にした。

それにしたってあの時の香織は絶対に許せない。一人で突っ走ったと思ったら楓に私の気持ちばらしそうになるわ、煽るわでいくら香織が友達だからって許されるわけがない。

「マジで……？あいつそんなに喧嘩強いんだ……」

「はあ……このままジエシカにへそ曲げられても困るしちゃんとかあーしから謝りに行くよ。そしたら許してくれる？」

「今から行くよ。でないと今後二度と口聞かないから」

「りよーかい、そうと決まったら行きますか。恭子はどーする？帰り何時になるかわからないけど」

「あー……もう5時か。ごめん、私バイトあるから帰るわ。明日結果聞かせてよね」

「おけ、それじゃね」

「うん」

ジエシカと香織は急ぎ足で月村家に向かった。

◇ ◇ ◇

「天音様、紅茶でいいですか？」

「いいよー、アールグレイあるならアールグレイ頼める？」

「かしこまりました」

私は紅茶が入っている戸棚からアールグレイの茶葉を取り出しお湯を注いで天音様へとお持ちした。

「お待たせしました、先程は本当にありがとうございました」

「ありがとう、いいのいいの、エレナと言い争えるなんて私と楓ちゃんぐらいしかいないんだしさ」

「調子に乗らないの天音。まあたしかに天音ぐらいよね、私に何か言ってくるのって」

お嬢様の機嫌もすっかり直ったみたいで表情には笑顔も見えた。これで一安心かな……なんて思った矢先だった。

ピンポーン……ピンポーン

「あ、私出ますね」

「お願い」

誰だろ、さゆりが天音様迎えに来たのかな？なんて思ってインターホンのカメラを覗いてみると、綺麗な青髪の女の子と派手派手しい金髪の女の子が並んで立っていた。

「ええ!?もう終わったんじゃないの……とりあえず要件だけは聞かないとだね」

私は深呼吸をしてインターホンに向かい合った。

「はい、月村ですが」

「楓、ジェシカよ。さつきは本当にごめんなさい。香織と謝りに来たからよかったですら月村に会わせて貰えないかしら?」

「今お嬢様に聞いてくるからちよつと待っててね」

うーん……会ってくれるのかなお嬢様……あの金髪の女の子にはめっちゃくちゃ怒ってたし。

「ん？楓誰だったの？」

「ジェシカと金髪の女の子。謝りたいからエレナに会わせて欲しいって……どうしようか？」

「別にやりあう気なければいれて構わないわ。通して頂戴」

「わかった」

「以外にもあっさりだったな。絶対会わない、って言われるかと思ったのに……」

「鍵開けたから入っていいよ」

私は玄関の鍵を開けジェシカと香織さんをリビングへと案内した。

「うわ……ひつろ……」

香織さんはお屋敷に入るやいなや驚きの声を隠せない様子だった。まあそれはそうだろう。部屋が10個以上あって東京ドーム以上の広さのお屋敷だもん。

「こちらでお嬢様はお待ちです」

私はジェシカと香織さんをリビングの中へとお通しした。

「月村、会ってくれるとは思わなかったよ。本当にさっきは私の友達が失礼な事を言っ

てごめんなさい」

ジェシカはお嬢様の目の前に立つと大きく頭を下げた。友達のために一国のお姫様が頭を下げるなんて普通ならありえないことだった。

「私もごめんなさい！ちよつと調子乗りすぎました！」

続けて香織さんも頭を下げた。それを見たお嬢様はと言うと……

「あー！もういいわよ！ジェシカに頭下げられたら私も何も言えないわよ。こつちも嘘ついて悪かったわね」

お嬢様もジェシカが頭を下げるとは、思っていなかったのだろう。参ったといった感じに頭を上げてというジェスチャーをしていた。

「許してくれるのね……ありがとう月村。それでやつぱり楓とは……その……付き合ってるの?」

もうこれ以上の誤魔化しは無理だと判断したのかお嬢様は正直に答えた。

「ええ。私と楓は恋人同士よ。隠してたのは同性だし他の人に何言われるかわからなくて怖かったのよ」

「そつか……私は絶対に言わないから安心してくれていいよ。今回のお詫びもあるし。それじゃ香織行こー！じゃあね楓！月村！」

「え!?ちよつとジェシカ!？」



ジェシカは香織さんの手を取ると早足でお屋敷を後にした。

「はあ……疲れたわ楓、お風呂沸かして貰える?」

「わかった、天音様も入っていきますか?」

「私はそろそろさゆりが寂しがるから帰ろうかな。それと、ついに楓ちゃんもエレナって呼ぶようになったんだね」

「制服デート持ちかけた時に名前の呼び方でちよつと話し合つてこうなつたんですよ」

「なるほどね、それじゃまたね! さゆりもまた連れてくるから」

「はい! お送りしますよ」

「いいっていいって、それよりエレナが何か言いたそうだから構つてあげて! それじゃ!」

そう言うと天音様はリビングから早々といなくなりお屋敷を後にした。

「構つて欲しそうには見えないんだけど……」

お嬢様の様子はただぼーっと椅子に座つて紅茶を飲んでいただけだった。

「エレナ?」

「どうしたの楓」

「いや、天音様がエレナが構つて欲しそうにしてるって言うから声掛けたんだけど……」

「はあ? 構つて欲しいなら普通にそう言うわよ。よくわからないわ。そう言えばまだ制

服着たままだったわね」

お嬢様はヒラヒラと自分のスカートを触って何故か、自分が制服を着ていることを主張していた。

もしかして……いや、でも考えすぎかな。

「ごめん、私がいやらしい子だとか思わないで欲しいんだけど、制服着たまましたいとか思ってる?」

「ぶーけほーけほーそ、そんな事思ってるわけないじゃない!」

お嬢様は飲んでいた紅茶を吹き出し顔を真っ赤にして抗議してきた。でも何も考えしていない時のお嬢様は表情一つ変えずに『は?そんなわけないじゃない』と軽く返すのがいつものお嬢様だ。私はカマをかけてみた。

「私はしてもいいなあとか思ってたんだけどな……」

「……楓がしたいのなら私は構わないのだけれど」

本心は結局分らないがお嬢様はやる気になったようで顔を赤くしたまま寝室の方へと向かって行った。

「ええ……まさかこの流れで?ムードも何もあつたもんじゃないけどいいのかな」

まあそれも私達らしいかと思いい私もお嬢様の後を追って寝室へと向かった。

その後寝室からは2人の甘い声が響き渡っていたとかなんとか……

## 作戦会議

「ジエシカ!? どうしたのいきなり飛び出して? ジエシカ……? なんぞ泣いてるの……?」

私は月村と楓が付き合っているという事実を知った時から胸が苦しくて仕方がなかった。あのままお屋敷にいたらまずいと思つて香織を半ば強引にお屋敷の外へと連れ出したのだが……そこから冷静になつて私は失恋したんだ……つて事実に気付くと涙が止まらなかつた。恋がこんなに悲しいものだつて初めて知つた。好きな人が私じゃない違う女の子と手を繋いでいたり抱きしめあつてたりしてたらと思つと息が詰まりそうだった。私の初恋……終わつちやつたのかな……

「ちよつとジエシカ! 大丈夫!」

私はそこで香織に声を掛けられていることに気が付いた。

「かお、り……香織!! 私の初恋もうだめだよ……うわああああん!!」

私は香織にしがみついて声が続く限り泣いた。今までにこれほど泣いたことがあつただろうか。まだ楓とは会つて1週間しか経つてないのにこんなに自分が好きだとは思わなかつた。

「ジェシカ……まだ終わったわけじゃないよ！諦めちゃっていいの!」

香織が私の目をしっかりと捉え強く話しかけてくる。

「ううん……諦めたくない!だって好きなんだもん!」

「よく言った!全力であーしも協力するから!だからもう泣くのやめよ?あーしはジェシカの一番似合う表情は笑顔だと思ってんだからね」

そう言うとき香織は私を優しく抱きとめてくれた。香織は外見と言動はやんちゃだけど中身はしっかり優しい女の子だと言うことも私は知っていた。海外から日本に来た時に右も左も分からない私にとっても親切にしてくれたのだから。

「ありがとう香織、私ももう少し頑張ってみるね!」

私は精一杯の笑顔で香織に言った。

「でも協力って?学校も違うし実際かなり難しいと思うんだけど……」

「あー……んー……まあなんとかなるっしょ!とりあえず学校終わったら楓を遊びに誘う!そこから始めよ!」

「うん、わかった。明日誘ってみるよ。でも月村は?楓誘ったら絶対付いてくるよ?それに楓もメイドだし基本的には主人の月村についてなきやでしょ?」

「それは任せといて!あーしが月村の気を引いてるうちにジェシカは楓にちよつと話しあるから来てって場所変えればその流れでいける!お嬢様が……とか言ったら香織が

遊んでるって言えば大丈夫だよ」

「大丈夫かなあ……でもやるしかないよね！よし！じゃあまた明日ね！」

「おうよ！じゃね！」

香織はパタパタと手を振って私とわかれた。手を振ってる時も派手な金髪は手の動きに合わせて揺れていた。

## 告白

「んん……ああ……もう朝か……つて!?!もう後30分で一限始まるじゃん!エレナ!起きて!もう間に合わないよ!」

私はカーテンから差し込む光で目を覚ました。時刻は8:30。一限開始が9時。どう足掻いても間に合わない……初講義から遅刻つてどーなのよ……

「ふえ?・何言ってるのよ時間割見なさいよ」  
「え?・時間割?」

私はiPhoneに保存してある時間割の写メを確認した。火曜日、1限?……え?ないの?

「あーよかった……私あるものだと思ってたよ」

「ちゃんと確認しないからよ、あれ?私達昨日着替えて寝なかつたつけ……」  
「いつも通りだよ……エレナ毎回こーじゃん」

私は行為の後、しっかりとシャワーを浴びて着替えて寝たが、お嬢様は毎度の如くいった後気絶するケースが多く、制服のまま眠ってしまった。こりやアイロンっていうよりクリーニング出さなきゃ……

「自覚はしてるんだけど……楓が上手すぎるのが悪いわよ！」

「いやいや……とにかくお風呂呂入ってきなよ。私ご飯作っておくから」

「そーさせてもらおうかな。制服はクリーニング出しておくわね」

「うん」

そういうとお嬢様は寝室を出て浴室へと向かった。

◇ ◇ ◇

一通りの支度を済ませて私とお嬢様は大学へと向かった。二限からっていうだけでこんなに楽なんだなと実感した。高校で8：30起きなんてしたら絶対に間に合わないからね。

「じゃあ行きましようか」

「うん！」

私はお嬢様の手を取り大学の近くまでは昨日と同じように恋人繋ぎをしていた。相変わらずお嬢様は照れていたみたいで、手を繋いでいる時はただ顔を赤くするだけで一言も喋らなかつた。

「楓、そろそろ」

「寂しいなあ……ではお嬢様鞆お持ちしますね」

「うん、ありがと」

私は気持ちを切り替え、メイドとしての自分に戻った。

教室につくと真つ先にジェシカが近付いてきた。

「おっはよー!」

「おはよジェシカ。今日も元気だね」

「まーねー、月村もおはよ」

「おはよ」

綺麗な青髪を揺らして走ってくるジェシカはなんだかとても可愛く見えた。大学生っていうより中学生みたいだなんて思ったのは内緒だけどね。

二限が終わりあつという間に私達が取っていた講義の4限までが終わった。

「あー終わった……ほんと座学嫌いなよね。帰ってゆつくりしよつか」

「そうですね、私も疲れました。お茶したいです」

そう言つて私達が帰ろうとした時だった。

「あ、あの! 楓、ちよつといい?」

「ん? なに?」

何故か緊張した表情のジェシカが私に話しかけてきた。

「( )じやなんだしちよつと外でもいいかな?」





「あーやつぱり……今ジェシカからも誘われたんですよ。楓と遊びたいって。それでは各自遊んで帰りますか？」

『そーしよつか。帰りは迎えの車で私は帰るから心配いらなから。京都の時の人に車出してもらうわ』

「わかりました。では、それで」

そこで電話は切れた。まあお嬢様の事だし大丈夫か。

「ジェシカ遊び行けるよ。どこ行きたいとかあるの？」

「ほんとに!? よかったあ……えつとね、カフェとか行ってお茶とかどうかな？」

「おっけー！ 私駅前に美味しい紅茶飲めるとこ知ってるよ。そこ行ってみる？」

「うん！ 楓についてくね」

私はジェシカと一緒に駅前のカフェへと向かった。

◇ ◇ ◇

「それで、私と楓を離して何する気なの金髪さん」

私は、不審に思っていた。昨日の今日で会いに来て、いきなり私と遊びたいだなんて思わないでしょ。ジェシカは、ここじやなんだからなんて言ってお楓連れ出したし。

「い、いやあーしは月村ちゃんと遊びたいって素直に思ってるよ」

「じゃあどこ行くのよ？」

「んー、お屋敷行きたい！美味しい紅茶飲ませてよ」

「まあそのぐらいならいいわよ。いらつしやい」

「はーい！」

とにかくお屋敷ついて紅茶入れたら真相聞かなきゃ。あからさまにおかしいもん。

私は金髪さんを連れてお屋敷へと帰った。金髪さんが歩くのめんどくさいと駄々をこねたので車を出した。近場なのにほんとごめんなさいね……あんまむやみやたらに呼ぶと迷惑かかると呼んでなかったのよね。

リビングに案内すると、金髪さんは玄関からずつと広いなあ……いいなあ……と口にしていたが私はそれを無視して黙って案内した。その感想皆言うから聞き飽きたのよね……

「はい、一応家にある中ではそれなりの値段する紅茶よ。砂糖かなんかいる？」

「うわあ美味しそう……ううん、このまま貰うよ」

金髪さんは一口紅茶を飲むと信じられないといった表情をした。

「うわなにこれ!? すんごい美味しい！ありがとう月村ちゃん」

「このぐらいならいつでも出してあげるわよ。それで本題。なんで私と楓離するような離すような真似したの？」

「しつこいなー、一緒に月村ちゃんと遊びたかっただけだつて」

「あつそ……もう一度聞くわよ。なんで私と楓離すような真似したの？これはお願いじゃないの、命令よ」

「はー？だから私が……ジエシカが楓の好きだからアタック出来るようにあーしが月村抑えとけばなんとかなるかなって」

「そういう事だったのね……もう帰っていいわよ」

「え、あ、お邪魔しました」

「少し悪いことしちゃったかしらね」

私は紅茶に自白剤を混ぜて金髪さんに渡したのだった。あの子の性格じゃ口を割らないと思つたから強硬手段を取らせてもらつたわ。それにしてもまさかジエシカがねえ……楓に限って浮気なんてするわけないと思うし大丈夫だとは思うんだけど……

「彼女を信用出来ないなんて最低だわ私。大丈夫、楓がジエシカに振り向くわけない。信じて待つ。私がやるのはそれぐらいよね」

私はポットにお湯を沸かして椅子へと座り直した。

◇ ◇ ◇

「どう？」

「うん！すごい美味しい！私こんなに美味しい紅茶飲んだの初めてだよ」

ジエシカは紅茶を一口含むと太陽のような笑顔をこちらに向けてそう話した。

「なら誘って正解だったね。でもどうしていきなり？びっくりしちやったよ」

「えつと……その、楓、月村と違って優しいし可愛いし仲良くなれたらいいなって思っ  
て」

「え?!いやいや私可愛くなんてないよ、ジェシカの方が可愛いよ。でもありがと、素直に  
嬉しいよ」

私がそういうとジェシカは照れくさかったのか、顔を真っ赤にしてテーブルに顔を  
突っ伏してしまった。

「もう、他の人からも散々可愛い可愛い言われてるんだから照れる必要ないでしょ?」

「う、うん、でも楓に言われる可愛いは、その、色々違って……」

「ん?どうして?」

「いや、その……」

なんでジェシカがこんなに真っ赤になって照れているのか私には全くわからなかつ  
た。普通に友達同士で可愛いとか言い合うのに慣れてないのかな?結構うぶなのかな  
?なんて考えると普段の態度とは180。違って新鮮だな、なんて思っていた時、ジェ  
シカが口を開いた。

「あ、あのね!楓に聞いて欲しいことがあるんだけど!」

「ん?なに?」

「ここだと、その、あれだから外でもいい？あんまり他の人に聞かれたくないんだ」

「おっけー、相談事とかって事ね、りよーかい」

「ま、まあそんな感じ！」

会計をする時、私がお財布を出そうとしたらジェシカが一言、「ここに請求しておい  
て」って言ったたら店員が青ざめてたけど一体どこに連絡したのかな……

「ジェシカごちそうさま！私がここ誘ったのに奢って貰っちゃってごめんね」

「ううん、私のが歳上なんだし気にしないで。じゃあ行きましょ」

「行くってどこに？」

「昨日の河川敷。あそこから見る夕焼け綺麗なんだよ！って香織が教えてくれたの」

「わかった、それじゃ行こっか」

私達は喫茶店を後にして河川敷へと向かった。

◇ ◇ ◇

河川敷への道のりの途中、ジェシカは一言も喋らなかつた。よっぽどの相談事なのか  
な……私に解決出来ることならいいんだけど。

「やっとなら……」

「結構駅から歩いたね……」

喫茶店があつたところから実に20分程歩いて目的の河川敷へと辿り着いた。これ

ならバスに乗っても良かったかもしれない。

「それで楓、話なんだけど……」

「うん、解決策出してあげられるからは分からないけど、私でよければ話しならいくらでも聞くよ」

「うん……その……ごめんちよつと待って！」

ジェシカの顔はみるみるうちに真っ赤に染まっていった。相談事でもしかして好きな人かな？人から恋愛相談なんてされるの初めてだよどうしよう……

「うん、ジェシカがちゃんと話せるようになるまで待つから大丈夫だよ」

私はジェシカの緊張を取ってあげようと思いきや優しく語りかけた。

しばらくしてジェシカは覚悟を決めたようで顔を上げてこちらに向き直した。

「楓！こんなに早く言うつもりはなかったんだけど、もうこの気持ちを抑えられないからはずつきり言います！私、ジェシカ・バツティは橘楓の事が好きです。ううん、大好き。月村とのことはわかってるけど……でも好きなの！付き合って下さいとは言えないけど、このまま楓を好きな私でもいいですか？」

ジェシカは恥ずかしさで真っ赤に染めた顔を、こちらに向けていた……

## 楓の気持ち

「私はなんて答えたらいいの……」

ジェシカから告白され、私は少し時間を貰ってもいいかな？と一言だけ残し逃げるようにお屋敷へと戻り、お嬢様と付き合い出して以来久々に自分のベッドに入り、これからどうしたらいいのかを帰ったきりずっと考えていた。

「まさか私だなんて思うわけないじゃん……」

人生でお嬢様を除いて初めてされた告白。それも相手が一国のお姫様。多分香織さんも知っててお嬢様と私を離れたんだと思うけど……それにただ、付き合って下さい。なら私もごめんね、今エレナとお付き合いしてるんだ。で返せるんだけど、ジェシカの口から出てきた言葉は、『このまま楓を好きな私でもいいですか？』

「なんなのそれ！かつこよすぎるでしょ！だって付き合えないって分かっているのに、私の事をその、好きなままなんでしょ？私なら絶対に耐えられないよそんなの……学校じゃそんなに付き合ってる風には見せてないけど、その後家帰ってイチヤイチヤしてるんだろ？うなあとか考えたら胸が張り裂けそうになるに決まっているじゃん……」

私がベッドの上をゴロゴロと転げ回りながら悩んでいると、自室の扉が静かに空い



た。

「それでどうするのよ、ジェシカに告白されたんでしょ？」

そこにはネグリジエ姿のお嬢様が立っていた。でもなんで知っているんだろう……私がそんな顔をしたからかは分からないが、私が口を開く前にお嬢様は、話を続けた。

「香織に白白剤飲ませて聞いたのよ。どう考えてもおかしいもの。それで帰ってきたと思つたら急に自分の部屋に閉じこもる楓がいた。ああ告白されたのね？ つてなるでしよ。それで何て言われたのよ？」

「いや……でも流石にそれはジェシカに悪い気がして……」

「もう一度言うわ。何て言われたの？」

お嬢様の性格を良く知る私はこれ以上の抵抗は無駄だと思い、言われた言葉を嘘ひとつなくお嬢様に伝えた。

「なるほどね……あの子も可愛いところあるじゃない。それに私に氣遣つたのか知らないけど付き合つて下さいって言わなかったのは、ちよつとだけ見直したかしら。てつきり月村より私と付き合つて下さい！とか言うと思つてたわ」

どうやらお嬢様もジェシカの告白の言葉に少し驚いたみたいだった。でも半笑いで言わないでよ……私は、笑いたくても笑える立場じゃないんだから。

「だからどう返事したらいいかわからなくて……単純に付き合つて下さい。つて言われ

たらごめんね、今お付き合ひしてる人いるんだで終わったんだけど、好きなままでいいですか？はちよつと返事に困るよ……私がいいよ、つて言ったらジエシカはずつと私を好きでいると思う。でもそうしたら大学生活中苦しい思いしちゃうと思うんだ……好きな人が他の子と一緒に歩いてたり、抱き合つてるとことか想像しちゃうたら私なら耐えられないつて思つて……」

「なんだ、もう答え出てるじゃないの。それを明日言つてあげたらいいと思うわよ」

「うーん……こんなに告白される側が辛いと思わなかつたよ……」

「まあ経験つて事でいいじゃない。それより」

「なに？」

「半日も楓取られて私は怒つてるのよ？彼女が他の子と一緒にいていい気はしないつて楓も分かつてるわよね？」

「あー、うんごめん。でもエレナだつて香織さんと一緒だつたじゃん」

「だからこうして謝りも兼ねて来たんじゃない」

「まあ気にしてないけどさ。じゃあ私疲れたから寝るよ？」

「え、ちよつと待つてよ楓。この格好見て何も思わない楓じゃないでしょ？」

「まあわかつてたよ……」

お嬢様のネグリジエは、すつけすけのやつだった。部屋に入つてきた瞬間から気付い

てはいたがそんな気分じゃないことぐらいわかって欲しいんだけど……

「そんな気分じゃないからやだよ」

「そんな気分だからこそじゃない？半日も楓取られた気にもなつてよ」

「はあ……私は寝るからね」

「え?!ちよつと待つてよ楓!」

「あーなんか私の彼女最近わがままなんだよなあ……ジエシカちゃんに乗り換えようかな」

私は、わざとお嬢様に聞こえるように言った。少し口は悪いけど今日の所はほんとに帰って欲しかった。空気読めなさすぎだよほんと。KYにも程があるって……

「わかったわよ……おやすみ楓」

「うん、おやすみエレナ。ちゆ、これで勘弁してね」

「明日頑張りなさいね」

「ありがとう」

私はお嬢様の頬に軽い口付けをして心身疲れていたのか、すぐに眠りについた。

◇ ◇ ◇

『ええ?!もう告つたの?!早すぎじゃない?!』

「もー!わかってるよそのぐらい……でも気持ちを我慢出来なくて……」

『それで楓はなんて?』

「少し時間を貰ってもいいかな?」って。ああどうしようほんと。明日楓の顔見れないよ……」

『いい報告聞けるようにあーしは祈ってるよ。明日早いからそろそろ寝るね、おやすみ』  
「うん、おやすみ香織」

楓に告白してから数時間後、私は自室で今日の告白を思い出して、いても立つてもいられなくなつて香織に電話をかけた。少しでも気を紛らわしたかったのだ。

「もう言っちゃったもの言っちゃったものだし仕方ないよね。いつ返事貰えるかわからないけどゆっくり待てばいいか。くよくよしてるのも私らしくないしね」

私は気持ちを切り替え、明日の準備をしてベッドに入った。

## 答え

「よし……頑張れ楓。しつかりジエシカに言うんだから」

私は朝早く起き、シャワーを浴びて今日のジエシカへの告白をしつかりする事を決意してお嬢様を起こしに行つたのだが……

「エレナ……何その格好……」

寝息を立てて幸せそうに寝ていたお嬢様は服を着ていなかった。前に私、寝る時何も身につけないのよ。って言われてから風邪を引かれると困るので私が今度からちゃんと着て寝てねって言ったのに……一日一緒に寝ないだけでなんでこうなるの……

「ちよつと起きて！朝だよエレナ！」

「ん……すう……すう……」

ビクともしなかった。昨日いつたい何時まで起きてたんだろ……普段なら軽くゆるるだけで起きるのに。

「ちよつとエレナ！間に合わなくなっちゃうって！」

お嬢様には申し訳ないが強く揺すって起こす事にした。遅刻はしたくないし、遅れてクラスに入ると目立つからやなんだよね……

「んん……あ、さ……?」

「そうだよ朝。ご飯作ったから早く起きてよ、冷めちゃうよ?」

「待って……身体が動かないのよ昨日遅くまで起きてたせいで……」

「もー、1日一緒に寝てないだけでダラダラしちやダメだよ。何してたの?」

「えっと……まあ色々やることあったのよ」

「後、裸で寝ないですよ? って言ったよね私。風邪ひかれたら困るって」

「その、好きで裸で寝てたわけじゃないんだけど……」

その言い訳は無理があるでしょ……それに何故かお嬢様の顔が少し赤くなっているのも気になった。もしかしてほんとに風邪引いたんじゃないよね?」

「エレナ顔赤いよ?ほんとに風邪ひいてないよね?」

「え、楓何するの?」

「いいから動かないで、今見てあげるから」

私はお嬢様のおでこに自分のおでこを合わせて熱を測った。

「よかった。熱はないみたいだよ?ん?なんでそんなに真赤なのエレナ?」

「それ天然でやつてるのは恐ろしいわね……なんでもないわ。じゃあ朝ご飯頂くわね」

「ん?はいはい」

眠たい目をこすりながらお嬢様は、ようやくベッドから抜け出しリビングへと向かつ

た。

「ちよつと服！いつまで寝ぼけてんの……」

「あーごめん……着るの忘れてたわ……」

どうやらまだ目が覚めていないみたいだった。ほんとに夜遅くまで何をしていたんだか……

私は朝ご飯を食べ終え各自支度を済ませると学校へと向かった。

「ほんとに私ついていかなくていいの？」

「うん。だってジェシカもソフィ連れてこないで一人で私に言ったんだよ？それなら私もしつかり返事返さなきゃ」

「それもそうね、頑張ってるね」

「ありがとう」

ダラダラ歩いてるうちに気付けば大学は目の前だった。

「どーしよ、緊張する……」

私は教室の前で足が止まってしまった。昨日までならドアを開けてお嬢様をエスコートする事なんて簡単だったのに……

「ちよつと楓？どうしたの？」

「いや、ちよつと入りづらくて……」

「もー、緊張する事ないわよ。ジェシカなら多分堂々としてると思うわよこういう時」  
「まあそうだろうけど……わかりました。お嬢様どうぞ」

私は意を決して扉を開けた。すると……

「あ、楓おはよー！」

一番に私の方に挨拶をしてくれたのはジェシカだった。昨日の事なんて無かったかのような可愛い笑顔だった。

「お、おはよジェシカ」

「講義始まつちやうよ、早く座りなよ」

「そーだね」

私はジェシカとの会話の時ちやんと笑えていただろうか、そんな事ばかり考えてしまっていた。席に着くと私はジェシカに昨日の事で声をかけた。

「ジェシカ、昨日の返事なんだけどね」

私は誰にも聞こえないような小さい声で後ろの席のジェシカに話しかけた。

「うん」

「今日の放課後同じ場所で待ってるから来てもらってもいいかな？」

「わかった」

ジェシカは顔色一つ変えずに返事をした。とても昨日赤面しながら話していたジェ



シカと同一人物には見えなかった。これがお嬢様のキモの座り方なんだろうか……

それから講義中、休み時間もジェシカと話すことは無かった。私は、ただ放課後の事で頭がいっぱいでお嬢様のエスコートすらしつかりする余裕すらなかったのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

キーンコーンカーンコーン

私の受ける講義が全て終わった。お嬢様には先に帰っていてもらい、私は一人ジェシカとの待ち合わせの場所の河川敷へと向かった。

「綺麗……こんな綺麗な夕焼け久しぶりに見たかも」

私はジェシカを待つ間、橋からの夕焼けを眺めていた。今日の天気は快晴で雲ひとつなく、太陽が沈んでいく様子がしつかりとわかった。

「ほんと綺麗だよね。私も初めて月村の家行つた時の帰りにここからの眺め見てびっくりしちゃったもん」

「ジェシカ……」

気が付けばジェシカは私の横に立ち、同じように夕焼けを眺めていた。それから何分経つただろうか。気が付けば完全に日が落ちて辺りは暗くなっていた。

「ジェシカ、いいかな？」

「うん、ごめんね。悩ませちゃって……」

「ううん、びっくりしたけどジエシカからの気持ちはほんとに嬉しかったよ。私今まで告白された事とか無かったし、それで返事なだけど……ごめんなさい。やつぱり私の事好きなままでいるのはダメだと思う」

「え!?なんでよ!?月村にも迷惑かけないようにするから!お願い楓……じゃないと私……私……ぐすん……」

ジエシカは先程までの冷静な態度とは打って変わって動揺しているのがわかった。目には涙も見えないくらいだった……

「ごめんね、でもダメなの!だって私はエレナが好きなの。今だけじゃなくてこれからもずっと、この気持ちは変わることがないと思うって言いきれないくらい好きなの。ジエシカが私の事を好きなままだったら絶対傷付いちゃうと思うんだ。私もわかるんだもん。好きな人が誰かと一緒にいただけで胸がズキズキするし、なんで私には見せないような顔見せるのって……」

「……そこまで考えてくれたんだ。ほんと優しすぎるよ楓……」

「ジエシカ?」

ジエシカは私に倒れるように体を預けてきた。

「ごめん。ちよつとだけこのままでもいいせて」

「わかった」

それから少しするとジェシカは私から身を引きこちらを向き直した。

「はあ……なんで私叶わない恋なんてしちやっただらうね。覚えてなさい楓！あんたが振った事絶対後悔させてあげるから！それじゃまた明日！また友達として仲良くしてよね？」

ニコツといつもの太陽の様な笑顔を向け、ジェシカはピースマークを作って言った。

「うん！また明日！」

これでよかつたんだよね？なんだか疲れちゃった……人から告白されるってこんなにも大変だなんて知らなかったよ。お嬢様に昨日冷たい態度取っちゃったし、今日は少し構ってあげようかな。なんて考えながら私はお屋敷へと戻った。

◇ ◇ ◇

「もしもし香織？ジェシカだけど」

『遅いよー！心配したんだからね!?!』

私は家に戻ると真つ先に香織に電話をかけた。今回の結末を聞いてもらうためだった。まさか好きでいてもいいですか？って言ってダメです。なんて言われると思わなかったよ……でも、それも楓が私を傷つけないから選んでくれた選択だっていうのがわかつてとても嬉しかった。どうせ好きでいいのも今日までだったし、私は思い切つて楓に身を預けた。私の心臓はもうバクバクで破裂しちゃうんじゃないかなと

思ったぐらいにうるさかった。でも楓の胸に手を置いてみても心音は一定だった……やっぱり私は恋愛対象じゃないんだなって思ってたのできっぱり諦めようと決めた。これ以上駄々をこねても楓を困らせてしまうだけだしね。

「ごめんね香織。でももう大丈夫！私新しい恋探すから！また手伝ってよね香織」  
『無理してない？もちろんあーしはジエシカのためなら何でもするからさ』

「ありがと、ほんとに大丈夫だから。でも月村が本気で羨ましく思っちゃった。私の知らない楓の表情とか知ってるんだろ？なあとか思うと悔しいよね。まあもう終わった事！とりあえずヤケ食いたいかも！明日空けといてね香織！それじゃー！」

『え!?ちよつとジエシカ!?!』

私は携帯をオフにしてベッドへと放り投げた。

短い初恋だったなあ……でもこんなに真剣になったのっていつ以来だろ……

「え……どうして……」

私は気付けば涙を流していた。

「なんでよ……もう終わったんだよ。なんで涙が出てくるのよ……ソフィ！いるんでしょー！」

「どうかしましたかお嬢様？ってお嬢様!?!どうしたんですか!?!」

ソフィは私の泣いている表情なんて見たことが無かったんだろう。いつものソフィ

からは考えられない慌てぶりだった。

「わからないのよ！ただ失恋しただけでどうしてこんなに涙が出てくるのよ……もうわかんない！」

私は駄々をこねるようにソフィに感情をぶつけた。それをソフィは全てを受け止めようとするかのように、私を優しく抱きしめた。

「お嬢様、ここはお嬢様の部屋で他のものは何一つこの事を知りません。だから泣きたい時は思いっ切り泣いていいんですよ。私はお嬢様の気の済むまでここにいますから」  
「ぐず……うわあああん!!ソフィ!!ダメだったよおお!!」

それからどれだけ泣いただろう。もう人生でこれほど泣く日は無いかもしれない。私は思った。涙を出し切り疲れたのか私はソフィに抱きしめられたまま眠気で意識が遠のいていくのがわかった。

「ここで寝ては風邪を引きますよ。今お運びいたしますね」

「ごめんねソフィ……ありがとう」

「お嬢様のメイドなんですから当たり前ですよ。おやすみなさい」

「おやすみ」

私は精一杯の笑顔をソフィに向けて言った。

## 一段落して

「ただいまー」

私はジェシカとの話を終えお屋敷へと戻った。ようやく悩みの種が解消されてゆくり出来るようになった。

「おかえり楓。もうすぐご飯出来るからちよつと待つててね」

「え!? エレナの料理久々だよね! 楽しみにしと……く……あのさ、ほんとに危ないからその格好辞めてもらってもいい?」どこの世界に揚げ物作る時に裸エプロンするバカがいるの? 火傷したら大変でしょ? 私がやるからどいて」

昨日の夜からお嬢様の行動がいつにも増して酷い……人生で裸エプロン見る日が来るなんて思わなかったよ……最近相手してあげられなくて溜まつてるのはわかるんだけどそれでも酷い……クールな頃のお嬢様緊急帰国してくれないかな……

「楓が喜ぶかなって思ったんだけど……ダメ?」

「エレナが普通に料理作ってくれてたならすごい嬉しかったよ。ほんとに危ないから服着てきて」

「でも楓喜ぶかなって……」

「はいはい、夜ちゃんと相手してあげるから服着て来て」

「言ったわね？」

「言いました」

そういうとお嬢様は、先程まであんなに楽しそうにしていた料理を放り投げて後は宜しくね！と一言だけ行って自室へと戻っていった。

「ほんとクールなお嬢様どこ行つたの……結局私が作るんじゃない……」

私はお嬢様が放置していった揚げ物を綺麗に揚げお皿へと盛り付けし、テーブルへと運んだ。

「エレナ、ご飯出来たよ？何してんの？」

「あーごめん、ちよつと待ってて」

「わかつたー、冷めちやうから早くしてね」

ほんとに何してんだろお嬢様。部屋着に着替えるだけならそんなに時間かからないと思うんだけどな……

リビングで待つこと5分。ようやくお嬢様が姿を現した。

「遅いよエレナ、何してたの？」

「ちよつと準備してたの」

「準備？なんの？」

「それは後でのお楽しみってことにしましょ。頂きます」

「頂きます……」

嫌な予感しかなかったが、私は気にせずにご飯を食べた。

ご飯を食べ終えらるとお嬢様が作ってくれたお礼に後片付けをしておくから、お風呂入ってきなつていうことで先にお風呂に入ることにした。

「んー……なんか疲れちゃった。ジエシカ明日になったら元気な顔見せてくれるといいんだけど……なんだかんだで今回の事で以外にすっかりした子っていうのもわかったし繊細な子っていうのもわかったしね。泣きそうになつてた時どうしていいかわからなくなつちやつたよ」

「湯加減はどう？」

「丁度いいよー」

「なら良かった。お風呂上がったらいつもの場所で待つてるわね」

「ただだけ待ちきれないんだらうあの人……それがカップルなら普通なのかな？ 私にはよくわからないや。」

「そろそろ出ようかな。あんまり待たせるのもあれだし」

私は浴室で体を拭いて脱衣場へと向かったのだが……



「え？私の着替えがない……なにこれ……」

そこには一通の手紙とネグリジエのようなものが置いてあった。

『新しい服買ったからそれ着ていらっしやい。楓の着替えはタンスに閉まっておいたから。エレナ』

「もう……しかもこれこの間お嬢様が来てたスケスケのネグリジエじゃん……まあいつか私達しかいないんだし。って下着用意してないの!?勘弁してよ……私に露出の趣味なんてないよ」

裸のまま出るわけにも行かず仕方なくネグリジエに袖を通したのだが。

「……恥ずかしすぎるんだけど」

本当に服の意味があるのかってぐらい肌色は見えてるし丈も短いから下はちよつと動いたらめくられて見えてしまいそうだった。よくこんなものお嬢様は普通に着てたな……

「エレナ入るよ」

「どーぞ」

私は恥ずかしさを隠しながら寝室へと入った。

「やっぱり用意しておいてよかった。物凄く似合ってるわよ」

「勘弁してよ……恥ずかしさで死にそうなんだけど」

「恥ずかしさで真っ赤になつてゐる楓可愛いわよ。こつちいらつしやいな」

私はお嬢様到手招きされるままベッドの中に入った。別にこうして肌を重ねようとするのは初めてじゃないのに何故かとても緊張していた。

「楓どうしたの？何か緊張してない？」

「エレナがこんな格好させたせいだよ。普段と違うから調子狂うじゃん」

「ふふ、ほんと可愛い。ジェシカなんか絶対上げたりしないんだから」

「ちよ・ちよつと髪の毛の匂い嗅がないで！そんないい匂いしないよ」

お嬢様は私を後ろから抱き抱えたと自分の顔を私の頭にすりすりとしていた。こんな甘え方をされたのは初めてだったから私も少しびびりしてしまった。

「たまにはいいじゃない。ほんと可愛い……」

お嬢様は次は私の髪を撫で、まるで人形を可愛がるかのように長い時間髪を触っていた。それもずっと可愛い、可愛いって言いながら。

「恥ずかしすぎて死にそうなんだけど……いや、嬉しいけどほんとどうしちゃったのエレナ」

「だってジェシカに好かれるつてことは改めて私の彼女はこれだけ可愛いんだなって透き通るような綺麗な肌にこんな可愛いものもつけて」

「きゃーちよつとエレナほんと恥ずかしいから」

「ふふ、そんなに顔真っ赤にしちやつて可愛いんだから、こっち向いて楓。ん…はあ…好きよ楓」

こっち向いてなんて言いながらも私はお嬢様になつちり頭を固定されて強引にキスされてしまった。こんなに甘々なお嬢様は初めてかもしれない。よつぽどジェシカに取られて寂しかったのかな。

「エレナ…私も好き。絶対離れないから心配しないで」

私はお嬢様にキスを返し身体を預けた。スケスケのネグリジエだから胸がこすれてくすぐったかった。お互いの体温を確かめるように私達は長い時間抱きしめあつていた。

「楓、我慢出来ないの、いいよね？」

「うん、私もエレナとしたい……」

私達は無言で服を脱いでいつものようにお互いを気持ちよくすることだけを考えた。……それからしばらくして突然お嬢様が立ち上がり、道具を取ってくると席を外した。

「もう……まだエレナに足舐めてもらつてないのに。なんだか今日のエレナすんごい責めてくるんだけど……私の方が押されちゃつてるよ」

「ごめんね待たせて」

「エレナそれって？あれだよね」

「うん。楓とひとつになりたかったの。なんて言っただけなこれの名前」

「あーぺに「そうだ！友情の証！そういう名前で売ってたもの」

怒られますよ……

それから私達はその友情の証を使って明け方近くまで甘い声を出し続けた。体がだるく今日の講義は欠席することが決まった。お嬢様も気絶してしばらく起きそうにな  
いし……

「でもほんとエレナ変わったなあ……あの頃はほんとに近寄り難かったし……まあいいかなんでも。おやすみエレナ」

私はお嬢様に軽いキスをして布団に入り眠りについた。

## 過去編　メイドがいなくなった日①

## 過去編

私は物心ついた時には母親の顔を見知らず、月村家のメイドとして働いていたのは皆さんも知っている事だと思います。お嬢様のメイドとしての自覚が出てきた中学生の時のお話をしようと思います。

「楓ちゃん！エレナ様起こしてきて貰える？」

「また私ですか……」

「申し訳ないけどお願い！そのまま学校も一緒に行くんでしょ？」

「はい……」

私はあまり自分の主である月村エレナ様を好きになれていなかった。小さい頃は歳も一つ違いということによく遊んでいたりしたが、私がメイドになってからというもの遊んでいた頃の、優しさや笑顔がどこかへいつてしまった。

コンコンコン

「エレナ様、楓です。入っても宜しいでしょうか？」

余談だが何故かお嬢様はお嬢様と呼ばれるのを嫌っていた。お嬢様のお母様が亡く

なつてからというもののお嬢様はやめて、エレナ様にして。というご通達があつて以来私達メイドはエレナ様とお呼びすることにしました。

お嬢様の部屋からは何も返事がなかつた。返事が無いということは肯定の合図の為、私は気にせずに中に入った。

「エレナ様朝ですよ」

どうにもお嬢様は朝が弱かつた。今まで私達が起こさないで起きた日は片手で数えられるぐらいしかなかつた。

「ん……楓？」

「はい。楓です。おはようございますエレナ様」

「あーよく寝たわ。朝食の用意は出来てるの？」

「はい。リビングの方にご用意してます」

「そ」

それだけ言うとお嬢様は私を手振りだけでもう出てついでいいわよと合図されたので、私は頭を下げ部屋から出た。

「はあ……今日は何もなくてよかつた……」

お嬢様は寝起きが悪く、起こしただけで怒られるという理不尽な事がよくあり、メイドが誰一人として近付きたがらなかつた。1番年長者なメイドの滝さんが、どうやら楓

ちゃんが起こしに行く時だけ怒る確率が極端に少ない気がするから、という訳の分からない理由で最近私が起こす役目を担っている。

「お嬢様黙ってればほんとに美人なんだけどな……なんていうか残念というか……」

お嬢様は10人の男性とすれ違えば10人振り返ると言っているぐらいの美人だった。学校でも既にファンクラブが出来ているぐらいだった。しかも女子校である。男の子から好かれるのは普通にわかるんだけど女子からも人気があるのは異常としか言えなかった。

「楓ちゃん！そろそろ学校行く準備しなきゃでしょ？お屋敷の事は私達やっておくから準備しちやいな」

「あー！そうでした！詩織さんありがとうございます！」

「はいよ！行ってらっしゃい！」

私と1番歳の近い先輩の中村詩織さん。23歳でメイドとは思えないような派手な金髪にたわわに実った2つの果実が特徴的なお姉さん。メイドの中では1番仲がいい人かな。

「滝！朝はバナナじゃなくてぶどうにしなさい！って言わなかった？何度言ったらわかるの？」

「すみませんエレナ様……私の落ち度です。お叱りはしっかり受けますので」

「もういいわよ。ほんつと使えない」

始まった……通称エレナ節。とにかく何かしら気に入らない事を見つけて罵倒する。天性のドSなのかそれとも単に性格が悪いのか私にはお嬢様の考へてることが全く読めなかった。

香里奈様がいらしていた時には15人もいたメイドが今は、滝さん、詩織さん、私だけの3人になってしまったのも、メイドがお嬢様の罵声に耐えられなくなつてのものだった。

「楓何ぼーつとしてんのよ。行くわよ」

「あ、はいー!」

お嬢様は、滝さんを罵つた後膨れつ面のまま、学校に行く用の鞆をひつたくつて玄関へと向かった。

「どうぞ」

「ん」

私は迎へのリムジンにお嬢様をエスコートすると学校までは何一つ会話もなく辿り着いた。

◇ ◇ ◇ ◇

聖チエリチヨウ大学附属女子中学校。今私達を通っている大学の付属校だ。設備は



相変わらずのお嬢様仕様。全校生徒は300人ほどと少なかった。

「やつほー！楓ちゃん！エレナ！」

「あ、天音様おはようございます」

緒方天音。お嬢様の数少ない友人だ。とにかく明るくてメイドの私にも毎回元気に挨拶をしてくれる優しい人、っていうのが印象だった。

「相変わらず可愛いなあ楓ちゃん！あれ!?また胸大きくなったんじゃない？おじさんに見せてみなさいよ、ほらほら」

「ちよ、ちよつと勘弁してください……」

天音様は私の少し膨らんだ胸を揉みしだいてきた。これも毎朝恒例になってきたことだった。いい加減やめて欲しいけど、立場が上の人だから何にも言えないんだよね……他の人より少し発育がいいみたいでクラスの子より大きくて、ちよつとコンプレックスなんだよねこの胸……

「あはは、ごめんね楓ちゃん。相変わらずあんたは表情固いわね。もう少し明るくしたらっ」

「あんたには関係ないでしょ。行くわよ楓」

「あーちよつと待ってくださいエレナ様！」

私は、早足で階段を登るお嬢様に付いていくのでいっぱいだった。

◇ ◇ ◇ ◇

教室に入ると、まず私はお嬢様の椅子を引くところから仕事が始まる。それから授業前にはその授業の教科書を準備するっていう仕事もあった。本当は友達とか作って遊びに行きたいが私はそういうわけにはいかなかった。天音様のメイドのさゆりもそこは同じみたいで、中々遊びに行けないよねっていう話をしたばかりだった。

「楓、ちよつといい?」

「どうしたの?」

隣の席のさゆりから小声で話しかけられた。大抵小声で話す時は主人の愚痴を言ったりする時なので私は、お嬢様に最新の注意を払いさゆりに近づき、次の声を待った。

「あのね、メイドの先輩から聞いたんだけど滝さんと詩織さん今日中にお屋敷から逃げ出すみたいだよ……滝さんが一番仲いい人から聞いたから間違いないと思う……楓一人になっちゃうよ……どうするの?」

「ええ!」

私は動揺の余り素っ頓狂な声を上げてしまった。

「楓、声が大きいい。ただでさえ3人で休みも取れてないのに大丈夫かなって……滝さんも楓に早く逃げた方がいいとだけ……」

「大丈夫なわけないでしょ……ただでさえ文句と毒しか吐かない人のお世話でいっぱい

いっぱいなのに、お屋敷の掃除とかまで手回るわけないじゃん。つてか詩織さんいなくなるのシヨクすぎる……可愛がつて貰つてたから最後に会いたかつた……」

「だよね……とにかくお屋敷帰つたら確かめてみる……もういなくなつたら諦めるよ……」

「うん……また明日学校で聞かせてね」

滝さんと詩織さんがいなくなる？冗談じゃない。皆辛い我慢してきたじゃん……詩織さんだつて今日笑つてたのに……これから私どうしたらいいの。

「楓、何かあつたの？」

「い、いえ。何でもないです」

「そ」

お嬢様は何も知らない顔をして済ました顔で小説を読んでいた。ブックカバーをかけるので何の小説かはわからないが。

その後の授業は全く頭に入らず、お嬢様の支度とかをすることだけに頭を全力で動かし、他は家に帰つたら2人がいるのかどうかだけが気になつて仕方がなかつた。

今日の授業が終わるとすぐに迎えの車を呼び、私達はお屋敷へと戻つた。

「楓、この後のスケジュールは？」

『滝さん、詩織さん……お願いだよ……私ひとりぼっちにしないで』

「ちよつと聞いているの!？」

「ひゃい!?ごめんなさいぼーつとしました……」

「全くしつかりしてよね。それでこの後の予定は？」

「今日は特に予定は、ありません」

「そ、ならお屋敷戻ったら一番に紅茶入れてちよーだい。お茶菓子は今日はいいわ」

「承知致しました」

車を数分走らせるとすぐにお屋敷へと付いた。

「エレナ様、着きました」

私はお嬢様を先に下ろして玄関のインターホンを鳴らした。お屋敷にまだいるなら出てくれるはず!

「おかしいわね。あの子達何してるのかしら」

「もういないか……エレナ様私が持つてる鍵で開けます」

「ん?ああお願い」

スペアキーを使いお屋敷に入ると中は真つ暗だった。人の気配が全くしない。いつもならお嬢様が帰ったら一番にお出迎えをするはずなのに……

「はあ……またなのね。もういいわ」

お嬢様はリビングで何かを発見したみたいだった。手には一枚の手紙を持っていた

⋮

## 過去編 メイドがいなくなった日②

「エレナ様、なんですかその手紙……」

「見て見ればわかるわよ。貴方も自由にしていいわ」

「は、はあ……」

お嬢様はそのまま自室へと消えていった。それに自由にしていいよってどういうこと……？

とりあえず私はお嬢様から手渡された手紙を読むことにした。読まないことには全く自体の収集がつかないと思っただからだ。

「やつぱりそーだよね……」

手紙の中身はこんな感じだった。

『エレナ様と楓へ。』

こんな形でお屋敷を去りたくはありませんでしたが、エレナ様の横暴な態度に私達は限界です。申し訳ありませんが今日限りで退職させていただきます。楓ちゃんもまだ年齢としては中学1年生なんだから少し考えてみたら？この先ここにいてもいいことないよ？

## 滝、中村』

「私これからどうしたらいいの……」

私は絶望感のあまり床に座り込んでしまった。ただでさえ馬鹿みたいに広いお屋敷に3人しかいなくて部屋の隅済みまで掃除が終わらないというのにそれを1人で!?無理に決まってるじゃん! プラスあのお嬢様だよ? 過労死するに決まってるじゃん。私まだ13歳だよ? どうしろって言うのよ……

「だからエレナ様は自由にしていいわよって仰られたのか……でも私には親もいないし帰るべき家もここしかない……あーもう! やるわよ! 私は逃げない! あの人に立ち向かってやるんだから! そうと決まればすぐに夜ご飯の準備しなくっちゃ!」

私はやけくそみたいになって夕飯の準備を始めた。今思えばここで逃げ出していたらお嬢様と恋人同士になることもなかったし、これで良かったのかもしれない。



月村エレナは悩んでいた。母親の香里奈様から、厳しくメイドはしつけるようにと。習っていたはずなのに、どうしてお母様がいた頃はメイドが減らず、笑顔だったのに私の代に変わってからこうなってしまったのか……

「私だって本当は笑顔で話したいんだよ……お祖母様からメイドと必要最低限以外話す

な、って釘刺されてるから無理なんだって……」

祖母の言葉の釘が私の棘の理由だった。月村家は、由緒ある家柄。だから住む世界が違うメイドとは必要最低限以外話さず私物として扱う事。この教訓を小さい時から嫌という程叩き込まれたエレナは、普通の態度が取れなくなっていたのだ……

「多分楓も辞めていくわよね……新しいメイドさん雇わなきゃ……結構可愛いくて好きだったんだけどな……エレナ様！エレナ様！って明るい笑顔で話しかけられてどれだけ表情和らぎそうになったと思ってるのよ。はあ……ひとりぼっちか……夕飯でも作りに行きましようかね」

私は、もうメイドはいないものだと思います、部屋から出ようとした時だった。

コンコンコン

私の部屋をノックする音が自室に響き渡った。

「エレナ様！今日のお夕飯なんですけど、あまり冷蔵庫の中がなかったので軽くしちゃったんですけど大丈夫ですか？」

楓？何で？私、自由にしていい？って言ったのに……お金も小学生の時からここで働いているんだからたくさんあるでしょ？なんでまだ私なんかの為に夕飯作ってるのよ……

「私、自由にしているわよ。って言ったはずだけど」



私は楓がまだいてくれることに安堵して泣きそうになりながらも、いつもの冷たいお嬢様を扉の前で演じた。もう目尻には涙が溜まっていて、今にも流れ出しそうだった。

「何言ってるんですか！私ほどエレナ様の事知ってる人いないんですからね！今後とも宜しく願います！私は絶対このお屋敷からいなくなったりしないのでご安心下さい。それでは失礼しますね」

「そ……ありがとう」

ありがとの部分は楓に聞こえないように小さく呟いた。

「私もそろそろ変わらなきゃね。楓は頑張ってくれてる。頑張つてないのは、私だけじゃない……あ、もしもし天音？聞きたいことがあるの」

この2年後、現在の優しく、ちよつと変な性癖を抱えた月村エレナになることをエレナ本人はまだ知らない。

## 詩織さんとお嬢様

「あ、もしもしジエシカ？どうしたの？」

『どうしたの？じゃないわよ！何も連絡無しに休んだもんびっくりしちゃったじゃない』

時刻は15時。ほんとうなら私達が大学に行つて講義が終わる時間だった。ジエシカは私が何も連絡無しで、休んだのを心配して電話をしてくれたみたいだった。

「普通に寝坊しちゃったんだよね……明日はちゃんと行くから」

『もー、すっかりしなさいよね！じゃあまた明日ね！』

「うん、また明日ね」

「ジエシカから？」

「うん、わざわざ電話してくれるなんて優しいよね」

「ジエシカは貴方にぞつこんだからよ。そーいえばお砂糖切らしちゃったんだよね。これから買い物行かない？」

「私買つてこようか？」

「ううん、私も行くわ」

「わかった。じゃあ着替えて玄関に集合ね」

「りょかい」

私は部屋着から適当にジーンズとTシャツにパーカーを羽織って玄関へと向かった。一方のお嬢様は、色を黒で統一したコーディネートだった。スラットしたスタイルに合う黒いズボンに少しかだけ胸元が空いているシャツを着ていた。

「カラスみたいだよエレナ」

「この方が一般人に見えるのよ。変にオーラ出して2人一緒にいるとこ見られる方がまずいでしょ？手だって繋ぎたいし」

「オーラって……まあせっかく一緒に出かけるなら手ぐらい繋ぎたいのは私もかな。じゃあついでにこれもつけてよ」

私が渡したものは、前にお嬢様が付けていた紅い眼鏡。もう付けることはないかもって事で私が預かっていたのだった。

「まあいいけど……楓そのメガネほんと好きよね。もしかしてメガネフェチ？」

「うーん、そういうわけじゃないよ。ただエレナによく似合ってるからさ」

「ありがと、それじゃあ行きましようか」

「うん！」

私とお嬢様は駅前のスーパーを目指して歩き始めた。行く途中に私達を変な目で見

る人がいたけれども、気にせず恋人繋ぎをしながら歩いた。やっぱり同性で恋人繋ぎは周りから見たらおかしいって考えが普通だもんね……だから学校とかでは、私達は絶対に付き合ってるってバレないようにしているんだけどね。

「やっぱり見られるわね」

お嬢様も同じ事を思っていたのか小声で私に耳打ちしてきた。流石に月村エレナだということとはバレていないと思うけど気まずいよね……

「うん……仕方ないねこればかりは……」

私達は少し沈んだ気持ちで目的地のスーパーへと辿り着いた。

「あれ……」

「どうしたの?」

「勘違いかも知れないけどあの金髪のおっぱいって……やっぱり!詩織さん!!」

私はお嬢様の手を払って駆け出した。お嬢様は何が起こっているのかわからないような顔をして、私のあとをついてきた。

「え?もしかして楓ちゃん!」

「はい!楓です!お久しぶりです!」

「うわあ久しぶりだねえほんと。背少し伸びたんじゃない」

詩織さんは久々の再開からか私を抱きしめて、自分が最後に見た時の私と今の私を比

べているようだった。

「そりや最後に会ったの中学二年生ですよ？少しは伸びなきや困りますよ」

「ふふ、それもそーだね。そちらの方は？」

「え？お嬢様ですよ詩織さん」

それを言った瞬間詩織さんの表情が変わった。

「まだあそこにいるの楓ちゃん……あれだけ辞めた方がいいって言ったじゃない……  
だつてひとりぼっちのメイドさんなんだよ？どれだけ仕事押し付けられるかわからな  
いじゃない……ごめんねほんとひとりぼっちにして……」

詩織さんは目に涙を浮かべながら再び私を抱きしめ、髪を撫でた。

「全く、私も悪く言われたものね」

お嬢様は先程までしていたメガネを外し、こちらに歩んできた。

「あんだだけ私達をいたぶってよくそんな事が言えたわね。滝さんなんて鬱になつて大変  
だつたんだから……楓ちゃんにまだそういう事してるなら絶対に許さない。それと私  
が楓ちゃんを引き取る」

詩織さんの表情は鬼のようだった。両手の拳を力いっぱい握り、怒りに震えているよ  
うだった。

「……じゃなんだからお屋敷に1度顔を出してもらえない？流石にこんな所で言い争い

はごめんだわ」

「いいわ。楓ちゃんも何か買いに来たんでしょ？それ買ったら3階の駐車場に来て。お屋敷まで私が送っていくわ」

「それは助かるわ」

お嬢様の言葉を聞く前に詩織さんは買い物かごをつんだカートをレジの方へと動かしていった。

「ちよつといいの!?!詩織さん本気で怒ってたよ?」

「いいわよ。私が招いた事だから楓は何も口出ししないでちょうだい」

「でも……」

「でももくそもないの。とにかくお砂糖早く買っちゃいましょう」

「うん……」

私は目当ての砂糖を買い終えたとすぐに駐車場へ向かった。

「楓ちゃんこつちこつち!」

「あ!今行きます!」

駐車場の奥の方から声がして、そこに行ってみると……

「うわ、なんですかこの車!?!昔テレビでやってた走り屋が乗ってるような車ですよねこれ?」

「そう！R35！かっこいいでしょ！お金だけは無駄にあったから買っちゃった。さ、乗って乗って」

「お嬢様どうぞ」

「ありがとう」

私はお嬢様を後ろの席へエスコートすると、詩織さんの希望で助手席に座ることになった。それからお屋敷に着くまでは誰一人として口を開かなかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「うええ……酔った……」

「そーいえば楓ちゃん乗り物酔い酷かったんだったごめんね」

「い、いえ。すみませんご迷惑おかけして……」

ほんとこの乗り物酔いの弱さなんとかならないかな……

「詩織、入っていいわよ」

「ドーも。お邪魔します。……何も変わってないわね」

詩織さんはリビングへ入ると、周りを見渡して、働いていた頃のお屋敷と見比べていたみたいだった。

「ええ、貴方がいた時から何も変わってないわ」

「早速本題だけど、まだ楓ちゃん虐めてるの？私達をいたぶったように。言っとくけど

貴方の言葉は信用しない。楓ちゃん、悪いんだけど真実を教えてください。悪いけどこの人の言うことの10割信じられないの」

お嬢様の顔が少しだけ引きつったように見えたが気の所為だろうか……ここまで言われて黙っているお嬢様を見るのは初めてだった。それほど自分のしたことに反省しているんだろう。今私がお嬢様が変わったことを証明しますから待って下さい。

「いいよねエレナ?」

「楓……そんな話し方したら……」

「いいの。私はこれ以上エレナが傷付くのを見たくない」

もう詩織さんには誤魔化しながら話すのは無理だと思い、私は包み隠さず言うことを決めた。

「楓ちゃん……?今お嬢様をエレナって……?どういう事なの?」

詩織さんも信じられないと言った顔をしていた。それはそうだろう。皆が恐れている。た月村エレナ様を呼び捨てで読んでいるのだから。

「詩織さんと滝さんから出て2年間弱の間私はひとりぼっちでした。その間ももちろんお嬢様の罵倒が止むことはなかったです。何回も何回も、辞めよう。って思ったことはもちろんありました。でも、私はお嬢様の優しさに気付いてしまったんです……これはお嬢様には言ってませんが、高校の帰りに捨て猫を見つけて拾った事があるんで



す。今は緒方さんの家にいますけどね。その時のお世話をするお嬢様の顔はとて優しく微笑んでいました。だから根はとて優しい人なんです。それを知ってしまった日から私はお嬢様に、この笑顔を私にも向けて欲しい。その気持ちだけで仕事をしていました。そう祈り続けたら願いは叶ったんです。ある日突然お嬢様から今までの行いを謝られました。メイドももうやらなくていいと……そして今は……エレナ、こつちに來てもらえる？」

「え、ええ」

私はお嬢様を横に呼んでそつと抱き寄せた。

「私の自慢の彼女なんです。それ以来罵倒された事もありませんし、常にお嬢様は私を第1優先で考えてくれるとても優しい人ですよ。もうあの頃の月村エレナはいません。私からは以上です」

「嘘……嘘よ！そんなの有り得ない！楓ちゃん言わされてるんでしょ！じやなきやおかしいよ！それに女同士で恋愛なんて有り得ないって！」

詩織さんの言葉に胸がチクチクと痛むのがわかった。女同士で恋愛は有り得ない……か。それはそうだよね……普通の人の価値観ならそう言われても仕方がない。

「でもそれが真実なんです。受け入れてもらうしかありません」

「もういいよ楓ちゃん。なら月村。土下座して私に謝って。そうしたら今までの事も水

に流すとは言わないけど楓ちゃんに免じて少しは許してあげる」

「貴方がそう言うなら私はもちろんやるわ」

「エレナ!?ちよつとそんな事しなくても!」

「いいのよ。これは私の過ち。皆の人生めちやくちやにしたのは私なのよ……」

お嬢様は泣いていた。私以外の人前では滅多に見せない涙を浮かべて詩織さんの前に立つと……

「本当にごめんなさい……私がした事は到底許されることじゃないと思う。でも私には謝ることしかできないのよ……本当にごめんね詩織」

お嬢様の涙はカーペットを濡らしていた。見ている私まで泣きそうになる……詩織さんの反応は……

「なんでよーなんで今更……もう遅いわよ……こんなはずじゃなかったのに!あんたは今までの横暴なあんたでいなきやダメでしょ!そしたら楓ちゃんだって自由にあげてあんた困らせようとしたの!なの……どうしてよ……」

詩織さんもその場に崩れてしまった……どうやら本当にお嬢様に土下座させる気はなかったみたいだった。

「ごめんなさい……今更改心したって言っても遅いわよね……」

「もういいわよーなら私もここに復業する」

「え……? どうして……もう貴方は自由なのよ? わざわざ嫌いな人のお世話をする理由なんて」

「勘違いしないで。私がお世話するのは楓ちゃんよ。それでたまたまあなたのお世話をしちやつた場合は仕方ないわ」

「詩織……戻つて来てくれて本当に嬉しいわ。また宜しくね」

「ふん、ただ車をチューニングするお金が欲しいだけよ」

「詩織さん! また一緒に働けるんですね! やつたあ!!」

私は子供のようににはしゃいだ。好意を持つていた先輩とまた一緒に仕事出来るのは本当に嬉しいからだ。

「それに楓ちゃんのお世話するんだから今日は久々に一緒にお風呂入ろつか。懐かしいなあ。小さい頃膝の上に乗せてあげてたっけ」

「ホントですか!?! じゃあまた膝の上に乗りますね」

「あらあら、甘えん坊なんだから。エレナは1人で入つてよね」

「え、でも楓とは毎日一緒に入つてたし……」

「ダメよ。付き合ってるのは分かっているけど私の目がある間はイチヤイチャなんてさせないからね。健全に付き合つてもらおうから」

「そんなあ……詩織それだけは許して……」

「絶対やだ。じゃあ楓ちゃんお風呂行こっか。バイバイエレナ」

「はい！行きましょう！それじゃねエレナ」

「ちよ、ちよつと待つてよお！」

結局駄々をこねるお嬢様を無視して私達はお風呂場へと向かった。

## お風呂にて

「詩織さんの腕の中久しぶりだなあ……あつたかい……」

私は詩織さんの膝の上に乗って詩織さんの大きな胸を枕にお風呂場でくつろいでいた。やっぱり人が増えるのは嬉しい。詩織さんがいてくれればお屋敷も明るくなるだろうしね。

「ほんと変わらないわね楓ちゃんわ。娘のように愛でてきたから、すぐに分かったよ」

「あ！娘で思い出しました。ついにお母さんと会えたんですよ」

「え!?!ほんとに？大丈夫だったの……」

「はい。お母さんがなんで私をここに預けたのかも全てわかったのです。今はとっても仲良しですよ。今度紹介しますね」

「そーなんだ。なんだあ、楓ちゃんのお母さんがフラッと現れたらぶん殴ってやろうとしてたのに」

「それはやめてあげてください……」

詩織さんなら本当にやりそうだから怖い……

「分かっているって。しっかし楓ちゃんも胸大きくなったねえ。抱き抱えてて何か違和感

あると思ったたらその胸だよ。エレナにはもう吸わせたの?」

「な!何言ってるんですか詩織さん!そ、そんな事は……」

「赤くなっちゃって可愛いなー。わかり易すぎるよ楓ちゃん。エレナもこんなに可愛い彼女いるなんて幸せものじゃん。後さつきはごめんね。女同士の恋愛なんて有り得ないなんて言っちゃったじゃん? 2人が幸せならなんでもいいよね」

「からかわないで下さいよお! いえいえ、わかつてますから大丈夫ですよ。でもイチャイチャ禁止は困ります……」

「えー!? 楓ちゃんからイチャイチャ禁止辛いつて言われると思わなかったよ。そんなに好きなんだエレナの事」

「はい。それだけははつきり言えます。だから今回、詩織さんと話した時エレナ守るために、付き合ってること隠しても良かったのに、普通に詩織さんに話したんですよ」

「なるほどねえ。でもイチャイチャするのはだーめ」

「詩織さんの意地悪……」

「ふふ、ほんと好きすぎでしょ。ちよつと嫉妬しちゃうよ。そろそろ出よつか」

「好きじゃなきゃ付き合いませんよ。ですな」

私達はお風呂場から出てリビングへと向かった。

「エレナお待たせ」

「あー出たのね。そういえば詩織、荷物とかはどうするの？」

お嬢様は一人寂しそうに紅茶を啜っていた。ちよつとだけ可哀想な事しちゃったかな。

「え？もちろんエレナに手伝つて貰うけど？貴方力だけはあつたでしょ」

「ほんま？」

「ほんまほんま。わざわざ業者呼ぶのも面倒だし、それにここに持つてくるものは洋服と日用品ぐらいだから35の後ろに乗せちゃうわ」

「わかつたわよ……」

「さつすがエレナ様！お心が広いようで助かります」

「あんたいい性格してるわね……私が逆らえないことわかつて……」

「エレナほどじゃないよ」

「ははは……」

この2人大丈夫なのかな……

「じゃあ私も行きますね」

「ううん、楓ちゃんはお留守番してていいよ。後部座席にも荷物乗せるだろうしさ」

「ですが……」

「エレナならちゃんと私が見とくから大丈夫だよ。一応メイドなんだから」

「わかりました。エレナをお願いしますね」

「メイドにこき使われる私って……」

「なんか言った？」

「なんでもないわよ。それじゃ明日大学が終わった後でね」

「りよーかい」

そう言うとき詩織さんは1度家に帰って荷物の整理してくるって言うので私達は、詩織さんを見送りまた2人だけのお屋敷に戻った。その際にお嬢様からお屋敷の鍵を渡して、明日の昼まで大学でいないから勝手に入って、と一言だけ添えた。

「よかったねエレナ。また詩織さん帰ってきてくれて」

「そうね。私は、ぶん殴られるかと思ったわよ……それがまさか復業だなんて思わないわ」

「私もどうなる事かと思ったよ……穏便に済んで良かった。エレナが土下座するなんて思わなかったんだと思うよ。お嬢様のプライド知ってる詩織さんだからこそ、その行為で本気だつてわかってくれたんだと思う」

詩織さんがいた頃のお嬢様は、絶対に人に頭なんて下げなかったし、自分が悪くても詫びの1つもいれない人だったからね……

「まあ……私もほんとにあの頃に関しては謝るしかなかったから……それより問題なの



が……」

「ん？問題？」

「詩織の目があるうちは私達エッチどころかキスすら出来ないのかもしれないのよ！」

「ぶふっ！あーそこ……もう紅茶こぼしちゃったじゃん……」

私はお嬢様の発言に飲んでいた紅茶を吹き出した。まあそういう人ってのはわかってたから身構えていなかった私が悪いねうん……

「あーシミになっちゃやう。パジャマ洗濯機入れてくるね。よいしょつと」

私はシミにならないように着ていたパジャマの上下を手早く脱ぎ洗濯機に入れようとしたのだが……

「ちよつとエレナ？なんで腕掴んでるの？あー……うん。いいよ。今日頑張ったご褒美あげる」

お嬢様の意図を察した私は、お嬢様の目の前に足を差し出した。

「こういうこともしばらく出来なくなりそうだから今日はたくさんしようね楓」

「うん、明日の講義に支障が出ないレベルでね」

「うん……じゃあ楓、お願いします」

私は一呼吸置いていつもの台詞をお嬢様に叩きつけた。

「私の足を舐めなさい！」



## 精神崩壊したエレナさん

「わ、私の楓ちゃんが楓様になってる……それでエレナが下僕みたいに……ど、どーなってるの……」

「詩織さん落ち着いてください！これは、あの……えーつとどうしようエレナ」

「私に聞かれても……」

思いつきり私達の行為を、詩織さんに見られてしまった。ただでさえ同性同士のお付き合いなのに、こんなアブノーマルなプレイ見たら詩織さんもそりやびつくりするよね……

「と、とりあえずお茶しながらでもこの話は……」

「そーね。楓、悪いけど入れてもらってもいい？」

「いや……そうしたいのは山々なんですけどこの足で動くのは……」

「あ……私が入れるわ……足洗ってきていいわよ……」

「うん……お願い」

お嬢様が足を舐めていたことで、私の足は唾液でびしょびしょだった。流石にこの状態でリビング内をうろうろしたくはなかった……

私は急いでリビングを後にしてお風呂場へと向かった。

「どーしよ……まさか詩織さんに見られるなんて。恋人同士ってことだけは言えるけど、この事だけは秘密にしておこうと思ったのに」

私は浴槽の中で一人頭を抱えた。まさか、スペアキーを渡したのがこんな形で最悪なパターンになると思わなかった。

「この状態でエレナー人にさせるのは可哀想だしもう出よ。この後なんて説明したらいいんだろ詩織さんに」

お風呂場から出るとリビングはお通夜の如く重たい空気が流れていた。お嬢様は明日の方を見て紅茶を飲んでるし、詩織さんは、見た出来事を信じられないとばかりに頭をくしゃくしゃとしていた。

「お待たせしました……とりあえず詩織さんには、話しておかないとダメですね」

「え、ええ。とりあえず楓様になってたのはなんでなの？」

「いいよねエレナ？」

お嬢様は言葉には出さなかったが首を縦に振った。

「えつとですね……さっきのは、実はエレナってすんごいDMなんです……」

「は？え？エレナがDM？DSの間違いじゃなくて？」

詩織さんはわかりやすいように動揺していた。傍から見たらDMっていうよりはど

う考えてもドSだからね。

「はい。私も最初見つけた時はびっくりしましたよ。それからというものやる時は毎回私がエレナ見たく罵倒したりで完全に立場逆転みたいになってます……」

「以外すぎるわ……つてことは楓ちゃんもsなんだ」

「私も自分がそんな性癖あるとは思ってなかつたんですけど、エレナにそういうことやらせてる時楽しくて仕方なかつたんですよ……言い訳できないぐらいSになつてるかも知れません」

話を聞いて少しだけ落ち着いたのか、詩織さんの表情はいつものものとなつていた。お嬢様は相変わらず明後日の方を見て会話に参加しようとはしないみたいだったが……

「まあ……人それぞれ好きなことはあるわけだしね。この件に関しては私も悪いし見なかつたつてことで！それじゃ私忘れ物取つてまた行くから」

そう言うのとパタパタと詩織さんは、部屋から出ていった。一方のお嬢様は、心ここに在らずといった感じで、相変わらず明後日の方を見ていた。

「エレナ。おーいってば！無視しないでよ」

話しかけても全く反応がないので、私はお嬢様の目の前に行つて、とりあえず話をしようと思つた。

「こいつ……死んでやがる……ちよっとしっかりしてって！おーい！殴るよ？いいの？」

お嬢様は私を視界に入れながらも全く反応する素振りを見せなかった。よつぽどシヨツクだったんだろな……

「ひつぐ……だつてただでさえ詩織に逆らえない立場なのにあんなどこ見られたらもう私生きていけないわ……」

「そんな弱み握って脅すような人じゃないよ詩織さん」

「楓ママ……このお部屋怖い、エレナおうち帰る」

「はいはい、怖かったでちゆねー」

……このお嬢様どうしたらいいんだろ……

## 精神崩壊したエレナさん②

「ちよつとエレナ、おーいエレナさーん」

「ああ見てよ楓。空つてあんなに青かったのね」

「曇つてるよ！つてか夜だよ！」

詩織さんに行為を見られてからというものお嬢様は完全に上の空だった。話しかけてもうんともすんとも言わないし、完全に魂が抜けている状況だった。こういうお嬢様は、初めて見たからどう対処していいかわからなかった。ちなみに、揺すつてみる、頭を叩く、あえて突き放してみたりしたがなんの効果もなかった。流石にこのまま放置して寝るわけにもいかず、私は、天音様に電話をかけ、解決策を何かないか聞いてみることにした。

『もつしー。珍しいね楓ちゃんから電話なんて、エレナ絡みかな？』

「もしもし、すみません夜遅くに。ですネ。エレナの事でちよつと……」

私は、起こったことをありのまま天音様に伝えた。

『そりやまた大変だね……つてかおっぱいさん戻ってきたの!?今度またおっぱい触らせてもらいにお屋敷行かなきゃじゃん!おっと、ごめんね話逸らして。そうだねえ……キ

スでもしてみたら？もうそれでも放心状態なら舌入れちゃえ。多分なんらかの刺激とええないと戻らないと思うよ。頭軽く叩くだけなんて甘いよ楓ちゃん。私ならぶん殴ってる』

「キスですか？わかりました。ちよつとやってみますね。また電話するかもですごめんなさい」

『大丈夫よー。それじゃ頑張ってるねー』

そこで電話は切れた。それにしてもキスして……まあ確かに体に刺激与えるのはありかもしれない。とにかくやれることをやってみよ。

「エレナ、いい加減にしないとキスするよ？キス写メ詩織さんに送ってもいいならそのままでもいいから？」

天音様の意見に私のアレンジを加えた作戦。今一番恥ずかしい姿を見られたくないのは詩織さんのはず。これで少しは反応してくれたらいいんだけど……

「はあ……なんで空つて青いんだろうね。私も鳥みたいに翼があればあの青に近付けるのかな……」

誰だよお前……もはやお嬢様のおの字もなかった。なんかポエマーみたいになってるよ……仕方ない。ホントにキスしてみよ。

「ん……んちゅ……ダメだこりゃ……こんな抵抗もしなければ求めても来ないお嬢様な



んて初めてだよ……」

一回目は軽く、2回目はお嬢様の唇全体を吸うようなキスをしてみたけれど、お嬢様はただ、私を見ているだけで何の反応もなかった。それにしてもこんな間近でお嬢様の顔を見たのは久しぶりかもしれない。だいたいお嬢様に恥ずかしいからあまり見ないで、とそつぽを向かれることがほとんどだったので、この機会に見ておこう。そう思った楓だった。

「やつぱり綺麗だよね……」

溜息が出るぐらいの美人。目は二重でぱっちりしていて、鼻と口もパーツが整っているというかなんというか……とにかく綺麗な人。そこら辺の芸能人とは比べ物にならないもん。

「観察してるだけじゃ何も変わらないしなあ……もう0時近いからいい加減私も寝たいし……」

『舌入れちゃえ』

いや流石に……向こうから求められないキスなんて切なすぎるでしょ……1人で強引に舌絡ませても虚しくなりそう……

「でもやるしかないか……試せることは試してみるって決めたしね。エレナ、ちよつとごめんね。ん……はあ……んん!？」

今一瞬だけどお嬢様が私を求めて舌を絡ませて来た気がした。ただの条件反射だろうか？私は、もう一度だけやってみることにした。

「エレナ、楓だよ。いい加減目を覚ましてよ……はあ……ん……ん!? えれば、はげし……」

「私は何をしてたの……? つか楓いきなりキスなんてびっくりするじゃない。まあ私もやり返したからそれはいいんだけど」

戻った……まさか天音様の最後の手段で戻るなんて思わなかった。やっぱり身体に刺激与えるのって大事ってことだね。壊れた電化製品を叩く感じと一緒かな？

「なんか今すんごい失礼なこと考えたでしょ……」

「気の所為だよ。つか詩織さん来てから記憶ないのエレナ?」

「いやそれが全然ないのよ……詩織に見られてショックだったところまでは覚えてたんだけど……気が付いたら貴方に襲われてたわ」

どうやら完全に意識をどこかにやってしまっていたらしい。嫌な事は忘れる。流石お嬢様とでも言うんだろうか……

「襲ってないよ! あまりにも上の空だったから天音様にどうしたらいいか聞いて、身体に刺激与えてみれば? つか言われたから強引に唇奪って舌入れたただけだもん」

「それは、だけって言っているのかしらね……まあまた迷惑かけちゃったみたいね、ごめ

ん

「ううん、元に戻ったならよかったよ。それじゃおやすみ」

「待って楓……やっぱりさっきの続きしたい……詩織が来る前の最後の夜だもん」

お嬢様は上目遣いで私にお願ひしてきた。その顔はずるいですよお嬢様……断れる人がいたら逆に見てみたいですよ。

「わかった。私もエレナと最後までしたかったし、でも講義に支障出さない程度だからね」

「うん……じゃあお願ひします」

「私の足を舐めなさい！さっきまで迷惑かけた分綺麗にしなさいや許さないからね！」

その後結局寝たのは日が上がってからだだった2人だった。講義には楓がエレナを強引に引つ張ってなんとか出席したんだとか。

## 胸の話はしないで。

「ちよつとエレナ、顔死んでるけど大丈夫なの？」

「ええ……これぐらいなんてこといわよ……」

身体のだるさを言い訳に大学を休もうとしたのだが、楓はそれを許してくれず強引に大学に行かされ、今は詩織の車で詩織の家の荷物を取りに向かっていた。昨日の約束で、それを断るわけにもいかず動かない体を強引に動かしていた。

「全く……あの後イチャイチャしてるからこうなるんでしょ。しっかりしてよ月村家主」

「何も言い返せないわ……少しバケツト後ろに倒して寝てもいいかしら」

「いいよ。着いたら起こすね」

「ありがとう」

そう言うのと私の意識は闇の中へと消えた……

◇ ◇ ◇ ◇

「うーん……楓ちゃんってスレンダーの人の方が好みなのかなあ。この小さな胸触っても虚しくなるだけなんだけど私からしたら」

何か身体を触られてるような感覚がして、私は目を覚ました。なんか胸の辺りを触られてる気がするような……

「まあ確かに綺麗なピンク色だけどね。うーん……でも楓が小学生の時に、楓大きくてふかふかな詩織さんのおっぱい大好き！って言ってたけどなあ……」

「……………何触ってんのよ詩織」

「あー起きた？中々起きないからちよつとイタズラしてたのよ」

服を脱がして胸を触るのがイタズラですむなら警察はいらないわよ……

「あんたねえ……それにさつきなんて言った？小さいだとかなんとか言ってなかった？」

「え？だって小さいじゃん。だから楓ちゃんこんな貧相な胸触ってて楽しいのかなって、って何すんのよ危ないわね」

受け止められた……？結構強めに腹パンしたつもりなんだけど……私の胸に関してとやかく言う人には毎回これで黙らせてたのに……

「う、うるさいわね。別に大きけりやいいってもんじやないでしょ」

「気にしてるんだー。へえ、エレナも可愛いところあるじゃん。おっと！危ないなあ当たったら痛いじゃない」

「当てに行ってるんだけど？なんで避けれるの？今まで避けた人いなかったんだけど」

「そりゃ高校の時にやんちゃしてたし、あんたのへろへろパンチなんて当たるといけないじゃん。ホントのパンチはこーやるんだよ。えい！」

可愛い掛け声とは裏腹に私の顔のすぐ近くを鋭い鉄拳が通り過ぎた。35のバケツトには、重たい衝撃の証にまだ跡が残っていた。

「う、嘘でしょ……これじゃ永遠に胸の事いじられるじゃない……」

「ん？何か言った貧乳お嬢様」

今すぐにもぶち殺したい衝動に駆られた。でも……

「勝てない……桁違いの怪物をバトルの相手に選んでしまった……」

「ふふーん。もう私には喧嘩売らない事ね」

「最初に売ってきたの詩織じゃない……とにかく早くやっちゃいませよ。楓待たせたら可哀想だし」

「ん？もう終わったけど？後ろ見てみなよ」

「え……」

私は後部座席を見ると、そこには大きな鞆が3個ほど無造作に置かれていた。つてか元から3個なら私いらなかったんじゃない……

「私いらなかったよねこれ……」

「うん。まあ口実作って今のエレナと1度話がしたかったんだ、ごめんね。私知って

るエレナはもつと酷い人だったからさ。今のエレナはどんな感じなのかなんて思つて」  
なんていうか……少し嬉しいかもしれない。詩織の方から私に歩み寄ってくれるとは思つてもいなかった。過去にあんなに酷い事をしたのに、笑つて話す詩織を見ていると逆に心が痛くなつて仕方がなかった。

「ほんとにごめんなさい……つていつた！なんで叩くのよ！」

「いや、謝るとこじゃないでしょそこわ」

「わかつてるわよ。ありがとう詩織」

「宜しい！ほんとに心入れ替えたのもわかつたし、胸の事気にしてることわかつたしやっぱりゆつくり話せてよかつたよ」

「後半部分は聞かなかつたことにしておくわ。こちらこそまた戻ってきてくれてありがとう。昨日も言つたけどまたこれからも宜しくね」

「宜しくエレナ」

私と詩織は笑顔で握手をして、楓が待つお屋敷へと向かつた。





「遅くなっちゃったわね……楓寂しがってないかしら」

「エレナじゃないんだから楓ちゃんなら大丈夫だよ」

「誰のせいで遅くなったと思ってるのよ……高速乗って早く帰ろうって言ったのは詩織なのにあたかだか煽られただけで向きになって追いかけるからこんな時間になるんじゃない」

「わかってないわね、走り屋は喧嘩売られたら買うのが仕事なのよ。ってか怖くなくなつたんだ。あの時200キロ近く出てたよ？」

「あんたの表情の方が怖くてそれどころじゃなかったわよ。あ、楓かな。誰かこつちに向かって走ってきてる」

「ほんとね、私達も早いところ荷物持って出ちやおつか」

私達が楓に伝えていた時刻より2時間ほど遅くなったのには、原因があつた。まあ完全に詩織の落ち度だが……

私と詩織は、お互い楓にあまり寂しい思いをさせたくないと理由で、行きは使わなかつた高速道路で帰ることにした。それが逆に遅くなつたのにはわけがある。高速道路を表定速度で走っていたところに、後ろからレーシングカーに煽られ、詩織の闘争心に火がついてしまったのだ。

「エレナ、ちよつと飛ばすよ。怖かつたら言つてね」

「は？って詩織！これスピード出しすぎだつて！」

私は、自分の体に襲いかかるGを感じながら詩織の表情を見た。そこには、目の前のレーシングカーを煽ることしか考えてないのか、彷彿の表情をしていた。なんでこんなスピードを出しているのに詩織は笑顔なの……

「さあさあ！32の癖に35煽つてんじやねーぞこらあ!!もつとスピード出してみろや！」

もうやだこんなメイド……その後もしばらく前の車との追いかっこが続き、気付けば千葉の方まで来てしまっていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

あ、やつぱり帰ってきてた。私は見覚えのある車が駐車場に止まっついて安心して。それで天音様はどこに……

「おっばいさーん！お久しぶりでーす！」

「え？お、お……」

物陰に隠れていた天音様は、詩織さんが車の中から出てくると一目散に詩織目掛けて飛び込んだ。詩織さんは何が起きたかわからないような感じで、あたふたしていた。

「やつぱりおっつきーなあ……ずっと触っていたいもん」

「楓ちゃんこの子はだーれ？いきなりおっばい触られる間柄の子なの？」

顔を胸に完全に埋めているせいかな詩織さんは、まだ誰かわかっていないようだった。

「何してんのよあんたは……とりあえず落ち着きなさい」

「いったあい！何すんのよエレナ！ここにいる人胸あるからって妬いてんの？」

あ……天音様死んだわこれ……

「くっ……とにかく一度離れなさいよ……」

「あれ？」

私と、天音様は同時に声を上げた。お嬢様が胸の事をいじられて怒らない……？どうなってるのいったい。

「エレナには私が怒らないよう矯正したから大丈夫だよ。もしかして天音ちゃんかな？緒方さんとのこの」

「そーです！お久しぶりですおっぱいさん！」

ようやくわかったみたいで、詩織さんは天音様との抱擁を交わしていた。するとその横からお嬢様が申し訳なさそうな顔をしてこちらにやってきた。

「ごめんね遅くなって……寂しかったよね」

そう言ってお嬢様は私を抱いて髪を撫でてくださいました。別にそんなに気にしてなかったけど、こうされるのは悪くないかな。

「別に大丈夫だよ。おかえりエレナ」



私は、ニツコリと天音様に微笑んだ。

## ヤキモチ

「エレナ、お待たせ。詩織さんと天音様もどうぞ」

「ありがとう」

今、リビングには私、お嬢様、詩織さんに天音様がくつろいでいた。私は、お茶菓子と紅茶を用意して席についた。

「しっかしほんと久しぶりですね詩織さん」

「ほんと何年ぶりかしらね。またここに戻ってくるなんて私も考えたことなかったわ」  
「でもどうして戻ってきたんです？」

「あーそれはねえ」

「楽しそうだね2人とも」

「そーね。ほんとどうして最初からこーでできなかったのかしら……」  
「まあまあ……」

ピンポンピンポン

各自談笑を楽しんでいる中お屋敷にチャイムが鳴り響いた。

「ん？お客さん？」

「あー私が呼んだの。入っていいよ」

リビングの扉を開けて入ってきたのはさゆりだった。表情は、少し不機嫌そうな顔をしていた。それには理由がある……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

詩織さんがお屋敷に帰ってくる少し前のこと……

びん。

「ん？メッセ？さゆりからだ」

『天音そっちに行つてないかな？なんか急に家出てったつきり帰つてこないんだよね……』

え、天音様さゆりに何もなしに出てきちゃったの……しかも詩織さんとは言え、何も言わずに他の女の人に会いに行くなんて知ったらさゆり良い気持ちはしないんじゃないや……

『天音様ならうちで、私と一緒に詩織さん待つてるよ。覚えてないかな？昔うちのメイドやってた金髪のおっぱいさん』

『もー、また勝手にエレナさんのお屋敷行つて……私も今から行つてもいいかな？』

『全然いいよー！待つてるね』

『はーい』

天音様には、ちよつとだけ話盛つて伝えようかな。なんかそつちの方が面白そうだし。おっぱいに抱きついて幸せそうな顔してたつてだけで怒りそうだもんさゆり。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「天音！何回も言ってるよね！出かける時は、一言声掛けてつて！心配したんだから！」  
「にやはは、ごめんごめん。そんな怒らないでよさゆり」

「怒るよ！もう何回言ってると思ってるのよ！緒方家の次期当主つてこともう少し自覚してよね」

「はーい……」

さゆりに叱られ、天音様は、少しだけ反省の色を見せているみたいだった。まあ、天音様の性格上またやりそうなのは間違いないが……

「後ちよつと来て。話があるから」

「ええ……せつかく詩織さん来てるのに」

「いいから！エレナさん、ちよつと客間お借りしてもいいですか？」

「え、構わないけどどうしたの？」

「ちよつと天音に話があるんで。失礼します！」

そう言うのと、さゆりは天音様を連れてリビングから出ていった。詩織さんは、何かを



察したのかニヤニヤしていた。

「若いつていいわねえ。私ももう少し恋愛とかしたかったなあ。どつかの誰かさんのせいで恋愛どころじゃなかったしね」

詩織さんは、お嬢様の方を向いて笑っていた。ちよつとした嫌味のつもりなのだろう。お嬢様はそれを無視して、私に話しかけてきた。

「え、ええ……楓、貴方何か知つてそうな顔してるわね。どういう事？」

「ただのヤキモチだよ。詩織さんにベタベタしてるのが嫌だったんじゃない？さゆりつて結構独占欲強いみたいだしさ」

「あーなるほど……」

お嬢様は、納得したように苦笑いをしていた。

2人が戻ってきたのは、それから30分もした後だった。天音様は、とても疲れきつていて、さゆりは、ニコニコとしていた。何をしていたのかは、怖くて聞けなかったが、さゆりのことを怒らせてはいけないんだな、という事だけはわかった……

## エレナ様は逆らえない

「それでは、私と天音は帰りますね。ほら天音いつまでも落ち込んでないの、行くよ」  
「はい……またね」

さゆりが天音様を説教してからしばらくだったが、まだ天音様の顔色は暗いままだった。本当に何を言われたのか……

天音様とさゆりがお屋敷からいなくなると、私達は、夜ご飯の準備を始めた。

◇ ◇ ◇

夜ご飯を食べ終え、詩織さんが後片付けをやってくれろと言うので、私とお嬢様は一緒に風呂に入ろうとしたのだが……

「ちよつと！エレナも楓ちゃんも何普通に一緒に入ろうとしてんのよ？私の目があるうちはつて言つたわよね」

キツチンから詩織さんの声が飛んだ。いつも通り普通にお嬢様とお風呂入ろうとしちゃったよ……別にそういう事しようとか思ってたわけじゃないんだけど……まあお嬢様は、すぐ気が変わるから確実には言えないけど……

「別に何もしないわよ！行くわよ楓」

お嬢様は、詩織さんの制止を聞かず、私の手を取りお風呂場へと歩き出した。

「よかつたの？まあ詩織さんもあれ以上言つてこなかつたし大丈夫だとは思うけど」

「大丈夫よ。別にそういう事するつもりなんてないんだから。それにしたとしても私達は恋人同士だからこれ言われる筋合いはないわ」

「まあそうだけど……」

さつきまで詩織さんにビクビクしてなかつたつけ……詩織さんいる前といたくない時じゃ全然違うんだね。私は、思い切つてお嬢様に聞いてみることにした。なんかもややさせたままにしたくないしね。

「ねえ、なんで詩織さんを怖がつてたの？さつきと態度が全然違うくない？」

それを言つた瞬間、お嬢様の体がビクツとなつたのが分かつた。

「な、なにもないわよ。ほら、そんな事より早く入っちゃいませよ」

隠してる。お嬢様は、隠し事が絶望するぐらい下手なのはもうおわかりだと思つても出るし、声には焦りの色がある。でも詩織さんと2人で出掛けて一体何を……待つて……詩織さんつてもしかしてエレナの事好きなんじゃ……心変わりしたエレナに惹かれてそれで、私の目があるうちはつて……確かにお嬢様は、見てくれだけはパーフェクトだし、詩織さんが惚れてもおかしくはない。え、どうしよう。9割9分そんな事はないと思うけど残りの1分で引つかかてしまつて仕方なかつた。

お嬢様が身体を洗っている間も、私は、お嬢様の変化が気になって仕方なかった。身体を洗っている時にも同じ質問をしたら、聞こえていないふりをされるしこうなったら……私は、碌でもない事を思いついた。別に私がやりたいわけじゃないから、お嬢様が言ってくれないのが悪いんだから。そう言い聞かせ私は、思いつきを行動に移した。

「あれ、楓まだ浸かってたの？早く身体洗っちゃいなよ」

「うーん、ちよつとそんな気分じゃないんだよね。エレナこつち来てよ。たまにはお風呂場でゆつくり話そうよ」

「べ、別に話したら後で出来るんじゃないかしら……ほら、詩織だって待ってると思うわよ」

逃げようとするお嬢様を、私は逃がさなかった。

「エレナ、話したいって言ってるんだけどな……ダメかな……」

私は、沈んだ表情を作って、お嬢様を見上げるような上目遣いをした。どうやらそれはお嬢様には、効果大だったようで顔を赤らめていた。お嬢様が私の目を見る時に必然的に、谷間が見えるからね。やつぱり照れてるお嬢様は可愛い。そんなことじゃなくて！とにかく今は、詩織さんと何があつたのか聞かなくっちゃ。

「えつと、ダメって事はないけど詩織がいるし……」

「エレナ何言ってるの？別にいやらしいことしたいなんて言ってるじゃないよ。私は、話したいなって思っただけ」

「あ……ごめん、私何考えてんだろ。今そっち行くね」

こうなれば私のペースも同然だった。顔を真っ赤にしたままお嬢様は、私の横にちょこんと座った。

「まあ、そういう事したくはないんだけどね」

「え、ちよつと楓！それは……あつ……」

私は、お嬢様に笑いかけると座るお嬢様を抱いて私の膝の上へと乗せた。こうしてお嬢様を捕まえてしまえば、話をするまで逃げられないからね。

「なに？別に恋人同士なら普通の事じゃない？エレナ好きだよ」

私は、お嬢様を後から抱きしめ、そつと耳元で呟いた。

「そ、そーよね。このぐらい普通よね。私も好きよ楓」

「ふふ、ならなんでエレナはお湯じゃない液体を私の膝の上に垂らしてるか聞いてもいいかな」

「そ、それは……楓それ以上虐められたら私……」

もうお嬢様は、口では普通にしていても体の変化で発情している事がわかった。さてと、仕上げだね。

「じゃあなんで詩織さんの事怖がってたか教えてよ。そしたらたくさん虐めてあげる」  
「そ、それは……わかりました……隠さずに言います……」

もう私と何回も身体を重ねているお嬢様は、完全な私の下僕になっていた。DMが故に断れない。DMモードのお嬢様は、私には逆らえない。全て思うがままだった。

「えつとね……詩織って若い頃レディースの頭とかやってたんだって。それで逆らったら怖いなって……いつもは高飛車なお嬢様やつてるから恥ずかしいじゃない……」

ええ……そんな事だったの……ならすぐにも言ってくればよかったのに。無駄にこつた演出作る必要なんてなかったじゃん。

「なんだそんなことだったんだ。てつきりエレナが浮気したかと思ったよ。ありがと教えてくれて。それじゃ上がろっか」

私は、膝の上に乗せていたお嬢様を横に下ろしてお風呂を出る振りをした。この後のお嬢様の行動が目にとつて見えたからだ。少しだけ意地悪した方がお嬢様の可愛い所見えるからね。

「あの……虐めてくれるって約束は……私もう我慢出来なくて……」

ほらね。顔を真っ赤にしてモジモジしてるお嬢様は、写真に撮っておさめたいぐらい可愛かった。

「仕方ないなあ。じゃあ何して欲しいか言ってみて」

私は、嫌なふりをして冷たい口調で言い放った。本心では、今すぐにもお嬢様を虐めたくて仕方がなかった。

「私を、いえ、楓様の下僕な私をたくさん虐めてください……ん……はあ……楓様の足美味しい……」

お風呂場には、ぴちやぴちやといやらしい音が響いていた。もちろんその後、詩織さんにはこっぴどく怒られました。私が虐めすぎたせいでお嬢様は、詩織さんがいるというのに快楽に身を任せ大きな声を上げて、何かと駆けつけた詩織さんに見つかりました……この事件のせいでこれからお風呂は、3人一緒に入ることが月村家で決定した。

## 夏季休暇の予定

季節は進んで、少し肌寒さを感じさせる春から蒸し暑さを感じさせる夏へと変わっていった。大学生活にも慣れてきた私達は、夏季休暇の予定を私、お嬢様、詩織さん、ジェシカ、天音様、さゆり、お母さん、佳奈さん（校長先生）の8人で決めているところだった。これを提案したのは天音様で、せっかくの夏休み家に籠ってばっかじゃつまらないでしょ。とのことだった。初顔合わせのジェシカと天音様もすぐに仲良くなって、話はトントン拍子に進むかと思っただけが……

「海行こうよ！やっぱり夏なら海でしょ！」

「嫌よ。なんでわざわざ暑いところに出なきやいけないの？北の方行つて海鮮とか食べに行きましょ」

「はー!?これだから引きこもりはダメなんだよ」

「誰が引きこもりですって？」

「あんたにきまつてるでしょ」

「ああ!？」

「ちよつと2人ともやめましょーよ！」



この通りお嬢様と天音様とで意見が2つに割れていた。私達は、正直どこでもよかつたから特に何も言わなかつたんだよね……個人的には海の方がいいかな……お嬢様の水着姿なんて中々見れないし……

「月村は、相変わらずだね楓。どう？いつでも私は、楓の事待つてるわよ」

ジェシカは、私の手を取り微笑みながらそう言った。おかしいなあ……ちゃんとお断りしたんだけど。まあ冗談だろうけどね。

「ジェシカちゃんその冗談はちよつと……もう多数決取つた方が早いかもね」

「連れないなあ。あーそれいいかもね。ちよつと月村！天音！もう拉致あかないから多数決取るわよ！いいわね？」

ジェシカがそう言うと、お嬢様と天音様は、渋々それを了承した。

「お母さんとかもそれでいいよね？」

「いいわよ、佳奈もそれでいいよね？」

「はい、もちろんですお姉様」

佳奈さんも変わったなあ……お母さんと付き合い出してから、私達のクールな校長先生っていうイメージはどこかに消えてしまった。今では、私のお母さんをお姉様と呼んでいて、一緒にいる時は常にくっついていてるぐらいだった。

「詩織さんも大丈夫です？」

「大丈夫よー。それとエレナも天音も子供じゃないんだからもう少し静かにしなさいな」

「はい……」

詩織さんが復帰してからもう2ヶ月がたった。今では、すっかりお屋敷のお母さんみたいになっていた。お嬢様も詩織さんの言うことには、ほとんど反論せずに、いいまとめ役となっている。

「それじゃまず、エレナの意見の方がいい人！」

……誰一人として手を上がらなかつた。それを見たお嬢様は……

「ええ!?なんで!?楓も海の方がいいの?」

お嬢様は泣きそうな顔をしながら私に助けを求めてきた。

「いやあだつてせっかくの夏休みだし、エレナのお母さんが亡くなってからプライベートビーチ使つてないじゃん。もったいないよ。それに私は、エレナの水着姿とか見たいなって思つただけだ」

それを言うとお嬢様が照れたように、顔を赤くして顔を逸らした。ホントにちよつとこういうこと言うとお照れちゃうんだから。

「わかつた……じゃあ海に行きましょう。私だつて、楓の水着姿見たくないわけじゃないし……」

最後の方は、ボソボソと話していた。天音様とジエシカからは、頭をはたかれて、そのぐらいで恥ずかしがんなよ！こつちが恥ずかしくなるじゃん！つてツツコミを受けていた。間違いないねほんと……

「じゃあ8月の15〜18でエレナのプライベートビーチ使つて旅行つて事で！各自ちゃんと準備するんだよ？1ヶ月なんてすぐなんだからね！」

「なんで天音が仕切るのよ……別に用意なんて特にないし大丈夫よ。ねえ楓？」

「それは違うよエレナ。エレナ水着つて高校の時授業で着てたスクール水着しか持つてないでしょ？もしかしてそれで行く気？」

お嬢様は、水着を持ってない事を思い出したようで、めんどくさそうな表情をしていた。

「あー……まあ適当に通販で買うわよ」

「それはダメ。ちゃんとしたの選ぼうよせつかくんだから」

「ええ、だつて面倒じゃない。私が服とか見て歩くの嫌いだつて知ってるでしょ？」

そう。お嬢様は、基本的な面白い物を全てネット通販で済ませるほど、ウインドウショッピングとかがお嫌いな人だった。私は、お嬢様とショッピングを楽しみたかったからある作戦を取った。

「いいの？通販なんかですませて？私が注文しちゃうけど」

「え？別に楓が選んでくれたのなら喜んで着るわよ」

この言葉を待っていた。優しいお嬢様ならそう言ってくれると思ってたよ。  
「じゃあさ……」

私は、お嬢様の耳元で囁いた。

「紐だけの水着とかでもいいんだよね？DMのエレナなら他の人にそういうの見られて興奮するでしょ？それが嫌なら私と一緒に水着見に行こ。どうする？」

それをお嬢様に言った瞬間顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった。

「楓ちゃん何言ったの？エレナ急に顔真っ赤にしてるけど」

天音様が珍しいものを見るような目でお嬢様を見て、私に問いかけてきた。普通に話してたのにいきなり顔を真っ赤にしたのだからまあ当然疑問ではあるだろう。

「ちよつと、説得しただけです。それでどうするのエレナ？」

「買いに行きます……」

「なーに？聞こえない」

「楓と一緒に見に行くわよ！」

お嬢様は、未だ顔を赤らめたままだった。ほんとちよつと虐めるところなつちやうんだからホントに可愛い。

「そっか、残念だなあ」

「もう！楓の馬鹿！」

天音様だけは、察したのか顔をニヤニヤとさせていた。他の皆は、ポカーンとした顔をしていた。

## お出かけデート

「エレナまだー？」

「ごめん、ちよつと服が決まらなくて……」

「もー！行こうとしてた時間から30分も経ってるよ!!」

旅行が一週間後に迫っている日差しが強く差し込んでいる早朝に、私とお嬢様は、水着を買いに行くためにシヨツピングモールに行こうとしたのだが、何故かお嬢様の外出用の服が決まらなかった。前にお砂糖買った時なんてカラスみたいな服着てたのに今回は、なんでそんなかかってるんだらうか……

「楓お待たせ！ごめんねほんと」

「ううん……大丈夫」

私は、お嬢様の変身に一瞬見とれてしまった。普段はお化粧なんてしないのに、今日は軽く化粧をして、服装は黒で統一したスーツみたいな服だったんだけど、下がミニスカートでお嬢様の綺麗な足がしっかりと見えちゃった。普段足とか出さないお嬢様だったからホントに新鮮だった。カラスみたいな服つちや服だけど今回は、ただ黒いだけじゃなくてしっかりとオシャレになっていた。

「やつぱり私がスカートなんておかしいかな」

お嬢様は、自分のスカートの裾を抑えて少し暗い表情をしていた。もう少し自分の容姿に自信持つててくださいな。多分世界中の誰よりも今の姿は可愛いから。

「そんなことないよ。私一瞬見とれちゃったんだから。自信持ちなよ。今の裾抑えて心配そうにしてるエレナすんごい可愛かったよ」

私は、心配そうなお嬢様の綺麗な髪を撫でた。きつとお嬢様なりに、デート楽しみにしてくれてたんだろうな、とか思うと本当に嬉しかった。

「うう……そういうところずるいよ楓。女ったらしっばい」

お嬢様は、顔を真っ赤にして言った。こういうところが私のドS心にすんごい響くんだよね。詩織さんがいなかったら今すぐにも押し倒したいぐらいだもん。あ、詩織さん……

「やつと気付いたみたいね……楓いつのまにそんな言い回し覚えたの……見てるこつちが恥ずかしいわよ。ほら早く行ってきなさいな」

「はい。エレナ行こ。ってなんで座り込んでんじやうの……ほら行くよー」

「詩織いる事すっかり忘れて顔真っ赤にしてたなんて……詩織忘れてよね今日の事」

どうやらお嬢様は、詩織さんに恥ずかしいところを見られたのがショックだったらしい。まあ私も詩織さんいないものだと思つて恥ずかしい事言っちゃったしお互い様だ

よね。

◇ ◇ ◇ ◇

「んー！流石に暑くなってきたね」

「そーね、黒い服着てこなきやよかったかしら」

季節は夏ということもあり、今日の日中の温度は28。日照りがさしていても暑く感じられた。お嬢様の全身黒の服装では、体感温度はもつと暑くなっているだろう。

「ほんと黒好きだよね。流石に歩く気しないね。タクシー呼ぼうか？」

「好きっていうか、お母様がよく黒い服きてたから私も。って感じが強いかな。そーね、流石にこの暑さの中歩きたくないわ。タクシーじゃなくて待機させてるドライバーいるからすぐ呼ぶわ」

そう言うとお嬢様は、カバンからiPhoneを出すとどこかに電話をしていた。その3分後に登場したのは……

「あれこの車……」

私は、目の前の車に見覚えがあった。っていうか毎日のように見ている車。R35。詩織さんの車だった。案の定運転席からは、詩織さんが出てきた。

「ほら乗って楓。私の優秀なドライバーさんだから心配しないで」

「アホか。全く駅前ぐらい歩いていきなよ。突然電話が来たと思ったら、駅前のデパー



トまでお願いなんて言われると思わないわよ」

私が後部座席に乗ると、詩織さんは車を発進させた。文句を言いながらもちゃんと乗つけてってくれるなんて優しいよね。

「あー！なんでこんな平日の道でこんな混んでんのよ！道開けなさいよ！」

あはは……ほんと車乗ると詩織さん人が変わるんだから。きつとこの前お嬢様が遅くなった時は大変だったんだろうな。

「うるさいわよ！少しは静かに運転出来ないの？」

前では、お嬢様と詩織さんが言い争いをしていたが、私はそれを聞いているとどつと疲れが増す気がしたから耳にイヤホンをさして音楽を聴くことにした。

◇ ◇ ◇

「楓、着いたわよ」

「ん……あれ寝ちやつてたんだ私」

「ええ……着いたわよ……何故か木更津のアウトレットモールにね……」

「え？なんで木更津？」

「あんたは寝てたからわからないけど、ドーセ運転するなら遠くまでに行きたいとか言い出して路線変更して高速乗ってここに着いちやつたのよ。まあ洋服とかはたくさんあるし行きましょ」

「まあそうだね。詩織さんありがとうございます」

「はいはい。それじゃ服買い終わったら戻ってきてね。私ちよつと寝てるから」

そう言うと、詩織さんはバケツトシートを倒して眠ってしまった。

「ほんと自由なんだから……」

いや、それお嬢様もでしょって言う言葉を、私はしまい込んでアウトレットモールの入口へとお嬢様と一緒に向かった。

## 試着室にて

「広すぎでしょ……」

私は、目の前に広がってる光景に驚きの声をあげた。それにこの人混み。私が思った事は1つだった。

「楓、帰りましょ。こんな空間にいたら私死んじやう」

私は、楓の手を取り詩織の車に戻ろうと促したが、楓はそれを許してはくれなかった。「せっかく来たんだから行こーよ！エレナが人混み嫌いなのは知ってるけど、絶対今後人混み行くことになるのは間違いないだからさ」

「うう……分かったわよ……でも水着買ったらすぐ帰るからね」

「はいはい。少しは慣れなきやダメだよ」

楓は、子供をあやすようにポンポンと私の頭を叩いて、手を引いてアウトレットモールの中へと入った。本当に私が歳上だっけ言うことを忘れそうになるわね……

「えっと、水着売ってるお店は……凄いよエレナ！10店舗以上あるみたい！全部見ようね！」

「1店舗だけでよくないかしら……」

「だーめ！ほら早く早く！」

楓ってウインドウショッピングとか好きな子だったんだね……こんなに目を輝かせてお店を見てはしゃぐとは思わなかった。そりやメイドしてて、ウインドウショッピングなんて出来なかったもんね。

「ちよーちよつと走ると危ないってば！」

子供のようにはしゃぐ楓を見るのも初めてだったし、こうやって出掛けてみると色々な発見があるものね。私としては、早く帰りたいかったけどたまには楓の好きにしてあげてもいいかな。

「えへへ、なんだか楽しくって」

「子供じゃないんだから慌てないの。ちゃんと全部付き合ってあげるからゆっくり行きましょ」

「ほんとに!?ありがとうエレナ！」

嬉しそうな笑顔で話す楓は、本当に可愛かった。この笑顔が見ただけでも付き合っていてあげるかいはあったかな、なんて思っていたのだが……

「疲れた……」

「ほらエレナ次はあっち！」

既に7店舗を回っていて私は、楓の着せ替え人形のようにさせられていた……エレナ

これ似合いそう！って言って私に水着の試着をさせてくれるのはいいんだけど、毎店舗それをやられると、普段試着などしない私は、疲れてしまつて仕方がなかった。それに、同じように楓も水着に着替えるから、どんどん私の欲望も我慢出来なくなつていた……だつて本当に可愛いんだもん仕方ないじゃない。普段は、肌を露出させることを好まない楓が、似合うかな？ってちよつと恥じらいながら見せてくる楓を想像してみなさいよ！やばいでしょ！3店舗目の赤のビキニとか見せられた時は、思わず抱きしめかけたわよ！ああ……もう無理、早くこの着せ替え人形大会終わつてくれないかしら……

「あつた！ここだよエレナ」

「凄い人ね……」

「1番人気があるお店みたいだよ。芸能人が作った水着が置いてあるつて話題沸騰中なんだつて」

「なるほどね……」

お店の中に入ると、中は人でごつた返していた。私達と近い年ぐらいの子がほとんどで、お目当ての水着を買いに来たようだった。

「エレナ、これとかどうかな？黒の水着なら着るんじゃないかな？」

楓が、私に勧めたのは黒のビキニ。シンプルながらもパンツにはフリルがついていて、少し可愛さもある水着だった。

「ビキニかあ……うーん……」

私は、思わず自分の胸を見てしまった。ビキニと違って、結構胸がある人が来てるイメージがあった。私なんか平坦な胸の人間が着ていいものなのかしら……天音と詩織にこの水着着ている所を見られたら、あれ？エレナさん胸についてるべきものがないんじゃない？とか言われかねないし……

「ダメかな？私も白の色違い買ってお揃いにしようかと思っただけだな」

楓とお揃いの水着！それは、すんごい惹かれる提案だけど、でもビキニかあ……なんで私の胸は成長しなかったのよ！お母様はそれなりにあつたと思っただけど！？はあ……虚しくなるだけだわ、やめましょこんなこと考えるの……

「とりあえず試着して決めてみない？あんまりビキニと違って似合わないと思うから楓に見てもらって決めるわ」

「大丈夫だよ絶対似合うって！」

「まあとりあえず行きましようか」

「うん！」

試着室へと行くと、そこには長蛇の列が出来ていた。店員さんのアナウンスを聞いていたら、御家族でお越しの方は、申し訳ありませんが2名様ずつ入って頂けると助かります。っていうアナウンスをしていた。これだけ多いと人を捌くのも大変なんだろう

なあ、と思つていたところだった……

「あ、店員さん！お姉ちゃんと来てるので私達一緒に入りますよ！」

「あ、ほんとうですか!?!本当にご迷惑おかけしてすみません。こちらへどうぞ」

「ちよ！ちよつと楓!?!」

「しー！バレちゃうでしょ。行こお姉ちゃん」

どうやら2人で入ると優先的に試着室に入れるみたいだった。楓は、時間短縮の為にと思つて店員さんに嘘をついたんだと思うけど……まっつて、水着って裸になるわけよね？無理無理無理！絶対我慢出来なくなっちゃうつて！ただでさえムラムラしてるとこに、目の前で楓が「お姉ちゃん、着替えてるとこ恥ずかしいから見ないで」なんて言われたら……

「お姉ちゃん……変な事考えてないよね？」

「ふえ!?!ま、まさかそんなことないわよ！」

楓に、見透かされたかは、分からないが、とりあえず私達は試着室の中へと入った。やはりと言うか、当たり前なんだろうけど、元から一人用で作られている試着室は、2人で入るととても狭かった。幸い、試着室には扉が付いていて、間違えて楓を押し出したりとかはないからいいんだけどね。カーテンとかの試着室なら絶対はみでちゃったよ。

「久しぶりにお姉ちゃんって呼んだ気がするね」

少し照れくさそうに楓が言った。お互い吐息が当たるぐらい近い距離に顔があるから、楓の照れ顔の破壊力は、10倍増しになっていた。我慢よエレナ……楓は、そういう事したいと思ってるんだから。ここで手出したら本当に嫌われると思いなさいエレナ。

「確かにそうね。びつくりしちゃった」

「ごめんね、こんな狭いと思わなかったよ。じゃあ私着替えちゃうから向こう向いて貰ってもいい？流石に見られながら着替えるのは恥ずかしいからさ」

だから顔を赤くしながら言わないでえ!!もうほんと天然なんだからこの子は……

「う、うん。着替え終わったら言ってね」

私のすぐ後ろで楓が裸になっている。それだけで私の心臓は壊れそうなくらいうるさくなっていた。乾いた布切れの音が響く度にドキドキが止まらなかった。

「エレナごめん、後ろの紐縛って貰ってもいい？狭くて手伸ばせなくて」

「大丈夫だよ。ちよつと待っててね」

もちろん楓の紐を結ぶにあたって、私は、体制を変えなければいけない。今の私の精神状態で楓の素肌を見ても大丈夫なのか……私は、自分の頭の中で2つの意見がぐるぐ



ると回っていた。

『意識しなければ大丈夫よ。ちやっちやつと楓の紐結んであげなさいな』

『楓だつて彼女の私に迫られて悪い気はしないって。だから紐結ぶついでに軽く触つちまいなよ』

白と黒。私の頭の中で2つの感情がぶつかりあつていた。どうしよう……どうしよう……でもやっぱりいくら扉があるからつて、大勢の前でそんな事したらいくら優しい楓でも……そーだよ！そういう事は家帰ればいくらでも出来るじゃない！

「エレナまだ？」

「ごめんなさい、今結ぶわね」

180。方向を変えると私の目は楓の白い背中に完全に奪われた。ほんとに汚れひとつ無い綺麗な肌……つて違う！早く結ばなきや！

「えつと……あれ、上手く結べない。ごめんね楓、ちよつと待つてて」

私は、緊張と焦りのあまり手汗で上手く紐を結べなかつた。いつもは、こんな紐簡単に結べるのに……

「焦らなくて大丈夫だよ」

「うん」

頷いてすぐの出来事だつた。

「あー！エレナ今こっち見ないで！」

「え!? 楓その格好……」

「あう……エレナが遅いからパンツの紐適当に結んでたせいで落ちちやつたじゃん！エレナ？ちよつと何で無言で近付いてくるの!？」

目の前には、前屈みになってピキニを必死に抑え、可愛いお尻が見えている楓の姿があった。私の理性は、そこでぷつんと切れた。

「ごめん、もう我慢出来ない。楓が悪いんだからね……」

「ちよ!? こんな所で!?!ん!?ら、らめだつて！」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「もうエレナなんて大嫌い!!しばらく口聞いてあげないからー」

「ごめんなさい……」

私は、お嬢様に迫られキスをされた所で、悪いとは少しだけ思ったが、脳天にかかと落としをして気絶させた。主人に手なんて上げてくはなかったが、流石にあんなところで発情されても困る。お店の人には、熱中症見たいで……つて言つて商品をすぐに買い、逃げるようにエレナをおぶつて詩織さんの車に逃げ込んだ。

「全く何してんだか……エレナはもう少し自制心持ちなさいよ。楓ちゃんもそこら辺にしてあげなさいな。それじゃお屋敷に戻るからね」

「知らない!!」

私は、詩織さんの言うことを無視して車内でバケットシートを後に倒して完全に寝る体勢へと入った。

「うう……詩織助けて……」

「今回は10割あんたが悪いわよ。しばらく反省してなさい」

「はい……」

35の車内では、すすり泣く声と規則正しい寝息だけが聞こえていた……

## 仲直り

今日は待ちに待った皆での旅行の日。楓の機嫌はまだ斜めなままで旅行までの1週間、事務的な事以外では口を聞いてもらえず私は、ずっと気持ちが悪くブルーのままだった。予定では、詩織の車に私と楓とジェシカ。佳奈さんが運転する車に天音、さゆり、紅葉さんが乗車して、月村家のプライベートビーチに行く予定だったのだが……

「エレナ狭いんだけど。なんであんたがこっちの車に乗ってるのよ」  
「そ、それはちよつと色々あつて……」

佳奈さんの車は、軽自動車。軽自動車に5人乗っているから少し狭く感じられた。後部座席に私、天音、さゆりの順に座っていて横の天音から苦情が入った。それはそうだろう。私がいなかったらこんなにぎゆうぎゆうになる事もなかったし、彼女と後部座席でイチヤイチャだつて出来たかもしれないのに……

「その色々は、なんなのよ。まさかあの優しい楓ちゃん怒らせたの?」  
「まあそうなんだけれども……」

「はあ!?あの天音みたいな優しさしてる楓ちゃん怒らせたの!?一体何したのよ?」

天音は、私の肩に両手を置いて揺するるように私の言葉を待った。そりゃいつもニコニ

コしてる楓怒らせたって言ったらびっくりもするか……

「でもお母さんもいるし……」

「私も聞きたいなあ。一体何したのよエレナちゃん」

助手席に座っているお母さんから言われて私は、逃げ場がなくなってしまった。言うまでもずつと言われるし私は、覚悟を決めてこの間の出来事を包み隠さず話した。

「あんたねえ……」

「エレナちゃん場所はわきまえなきやダメよ」

「エレナさん流石にそれは……」

「月村さん……」

四方から避難の目を受けて、更に私は、心が痛くなった。本当に何してんだろ私……車を1時間ほど走らせ、私達は目的のプライベートビーチへと到着した。

「じゃあとりあえず荷物置いちゃおうよ！部屋割りは前にエレナの家で決めた通りね！水着に着替えてまた集合って事で！ほらエレナいつまでも死んでないで動いた動いた」

部屋割り……そうだ。私楓と2人部屋じゃん。前に皆で集まった時にジェシカと詩織には悪いけど恋人同士は、恋人同士の部屋にしたのだった。無駄に広い別荘を今は恨むしかなかった。

別荘というより、1つのアパートみたいな外装をしたアパートに各自2人1組になっ

て次々に部屋へと入っていった。ちなみにジェシカは、詩織さんとのペアで一緒の部屋になっていた。楓は、もう私達の部屋となる101号室に向かって歩いてる姿が見えたので私も後を追った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

話は、お屋敷を出る前に戻る。

「それじゃ皆忘れ物はないよね!？」

天音様がリビングで集合した皆に声をかけていた。旅行を出発する時の集合場所に月村家にしたから、今は皆がキャリーバッグ片手に月村家に集合していた。各自楽しみをしていたみたいで皆の表情は明るかった。私とお嬢様を除いてだが……この間の事件以来なんだか言葉が簡単に交わしたら、すぐに許したみたいに見えるとも思っ言葉をお交わすのをやめた。しかし、それが逆効果だった。お嬢様は目に見えて私を避けるようになり、私もどこで許しを出せばいいのかわからなくなってしまった。

「楓、私はお母さんの方の車に乗るね……」

そう言うとお嬢様は、自分の荷物を佳奈さんの車へと乗せてそそくさと乗り込んでしまった。

「もう……エレナの馬鹿。このまま話せなくなってもいいって言うの」

「ほら楓ちゃん行くよ。車の中でエレナの事は聞くからさ」

「すみません……ありがとうございます……ごいませす詩織さん」

私は、キャリーバッグを持つとお嬢様が乗る車とは違う詩織さんの車のトランクへと放り込んだ。

お屋敷を出て車を走らせると横の席のジエシカに早速なんでエレナは別の車なの？とツツコミを受けてしまった。まあそりやそうだよな。付き合つてて別の車なんて普通は有り得ないし……

私は、ジエシカに何故こうなったのかを説明した。

「え？普通じゃない？私も好きな子がそんな姿してたらどこにいても襲いたくなるわよ」

「ええ……いや、普通じゃないよ。ちゃんと場所ぐらいわきまえてくれなきゃ困るつて。別に家でそういう事されても拒まないよ」

「そーなのかしら。ロシアじゃまあまああることだと思っただけれど」

んー、海外わからない……

「まあとにかくせつかく絶好の仲直りのチャンスなんだから現地ついたらちゃんと話すこと。部屋割りだつて同じなんでしょ？なら荷物置く時に話し合い終わるまで出てきちゃダメだから。もし出てきても気まずい雰囲気見つけたらエレナの事ぶん殴るからね？彼女が殴られたくなかつたらちゃんと言合ふこと？いいわね？私から皆にあの

二人は少し時間かかるからって言っておくから」

詩織さんの殴るはシャレになってないからちやんと話し合わなきや……でもそうだよね。私だってせっかくの旅行でお嬢様とイチャイチャ出来ないまま終わりたいくないもん。学業除いたら初めての恋人との旅行だよ！しっかりしなきや！

「詩織さんありがとうございます。ちゃんと荷物置いた時に話し合いますね」

「その意気よ。私もこの旅行中にそのぴよこぴよこ動く青髪ちやんとイチャイチャしてるからさ」

「何言ってるんですかおばさん。私は、楓一筋ですよ」

「ジエシカ!？」

「誰がおばさんですってえ!?今夜覚えてなさいジエシカちゃん」

「ひいひい!!」

詩織さんの目は、マジで人を殺せそうな目をしていて、私達はこれ以上詩織さんを怒らせたらずいと思ひ、現地につくまで一言も喋らなかつた……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

話は元に戻る。

「んあああ!!入りづらい!でも楓は普通に入ってたしもしかしたらもう許してくれたのかな……ああでも!んー!!わかんない!!」



「何してんのよエレナ」

私が扉の前で5分ほど悶えていると水着に着替えた天音が隣の部屋から出てきた。赤いビキニは、天音の活発そうなイメージによく似合っていた。豊満な胸は、ビキニからこぼれ落ちそうで少しだけ羨ましかった。じゃなくて！

「ちよつと入りづらくてね……」

「もー！あんたらしくもない！とつとと仲直りしてきなさいよ！」

そう言うくと天音は、私達の部屋の扉を開けると、私を強引に押し込んだ。

「ちよーちよつと天音！あ……楓」

部屋の中にはダブルベッドが1つと机が置かれただけのシンプルな部屋となっていた。恐らくお母様は、一人一部屋の予定で作られていたのだろうなと思った。そのダブルベッドの上にちよこんと楓が座っていた。

「遅いよ」

「ごめんなさい、ちよつと入りづらくって……」

私は、楓の顔がまともに見れなかった。こんなに緊張したのはいつぶりだろうか……。「あーもう！もう怒ってないし！エレナはこのままでいいの!?!私はやだ。なんでそんなに責任感じてんの？いつも通り楓おはようって言うてくれたら私だっておはようって言ったよ。なのに勝手に避けて、それで私も話しづらくなって……とにかくもう怒って

ないから!」

楓の方を見るといつもの笑顔の楓がそこにいた。勝手に避けてそれで話すのを避けてたのは私だったのか……ほんとかわかってあげられなくてごめんね。歳上なのに何も歳上らしいこととしてあげてられてないや……

「本当にごめんさい。私があの時我慢してたらそもそもこんなことにならなかったもんね……それじゃもう私の事許してくれるの?」

「もう、そんな小犬みたいな目で私の事見ないですよ。もう怒ってないって言ったでしょ。でも簡単に許すのも面白くないか……ねえエレナ。ご主人様に勝手に手を出した悪い犬にはお仕置が必要だよね?」

楓は、正座をしている私の目の前に立ち蔑むような目で私の事を見つめてきた。ダメ……そんな目でお仕置きなんて言われたらもう私……

「はい……たくさんお仕置きしてください。もう二度とあんな事をしようと思わないぐらいに」

「ふふ、じゃあ皆と合流するのは大分後になっちゃうね。まあ詩織さんには遅くなるってこと伝えたからいいか。それじゃ自分がどうしたらいいかわかるよね?」

「はい……たくさん楓様にご奉仕させていただきますね……」

私は、楓の右足を自分の体に寄せ、それを口へと寄せた……

結局その日、楓とエレナは海へと行かず皆と合流したのは夜遅くだったとか……だいたいの事情を察していた皆は、2人を囲んで労いの言葉をかけていた。

## 泥酔エレナ様

「エレナ、まだ着替え終わらないの？パーベキュ―始まつちやうよ？」

「ごめん、ちよつと待ってて」

私達は、仲直りの儀式を終えた後そのまま私服で外に行つたのだが、天音様にせっかく海でパーベキュ―するんだから水着で来なさいよ、との提案を受けたので急いで水着に着替えていた。それにしてもお嬢様が遅い……普通に目の前で着替えればいいのに、恥ずかしいからお風呂場で着替えるつて言つてから20分は経つていた。そんなに着替えにかからないと思つただけどな……

「お待ちせ楓」

「ううん……大丈夫」

私は、お嬢様の水着姿に目を奪われてしまった。この間、お嬢様とお揃いで買った色違いのビキニ。黒のビキニはスレンダーなお嬢様にとても似合つていた。何が私似合わないのかも……だよほんと。世界中の誰に見せても全員が綺麗つて言うに決まつてんじゃん。

「やつぱり変かな……ごめん着替えてくる！」

お嬢様は、顔を真っ赤にして元いたお風呂場へと戻ろうとしたので私は、腕を掴んで引き止めた。

「何言ってるのエレナ。すごい綺麗なのに勿体無いよ。今のエレナ世界中の誰よりも綺麗だって。ほら行こ」

ちよつとくさすぎたかな。それでも私は、嘘を言っているつもりは全くなかった。お嬢様の手を引いて私は、天音様達が待つ砂浜へと向かった。

砂浜へと着くと、お母さんと佳奈さんがバーベキューの準備をしていた。

「お母さん私達も何か手伝うよ。何かやることない？」

「あら、やっと着替え終わったのね。楓もエレナも可愛いよ。自慢の娘って感じだわ。そーね。ならそのテーブルに人数分の箸とお皿並べてもらってもいいかしら？」

お母さんは、白いビキニにパーカーを羽織っていた。ほんとまだまだ若いんだから……一方の佳奈さんは、ワンピース型の水着がよく似合っていた。

「うう、恥ずかしい……なんで皆平然とこんな着て歩けるのかわからないわ」

お嬢様は、顔を未だに赤くして挙動不審になりながらお皿をテーブルに並べていた。そんなに水着が恥ずかしいのね……ってか他の人がいるならともかく皆知り合いじゃん……

「もう……まだ慣れないの？周りの人全員知り合いなんだからそんなに恥ずかしがらな

くても……」

「だって下着と変わらないわよこんなの！」

「はあ……つてかエレナ。私の水着姿見て何か感想ないの？」

私は、少しだけだけどエレナに水着姿を褒めて欲しかった。やっぱり気合い入れて準備した好きな人には可愛いとかって言ってもらいたい。

「えつと……エロいです……じゃなくてめちやくちや似合つてて可愛いわよ！」

ほんとにこの人は……頭の中それしかないの？この間の一件で反省したかと思つたのに根は何にも変わつてないじゃん……まあそれがお嬢様だつてわかつてるからいいんだけどね。

「もう……まあありがと。でも部屋戻つたらお仕置きだからね」

「え!? いやでも隣の部屋天音だし……」

「お仕置きつて言つたんだよ? わかつたエレナ？」

「はい……」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
全くこんな事してる場合じゃないよ。早いとこバーベキューの準備進めなくっちゃ。

「それじゃ! エレナと楓ちゃんも無事仲直り出来たことだしぱーつとやろーね! あ! お酒はダメだからね! 佳奈さんと紅葉さんとおっぱいさんには用意してありますので!

それじゃ乾杯！」

一同「乾杯！」

バーベキューの準備が出来ると、天音様が乾杯の音頭を取った。各自グラスに飲み物を注いで近くのもの乾杯しいバーベキューは、始まった。

「あ、お母さんお酒注ぐよ」

「あら、ありがとう楓」

私は、お母さんのグラスが空になったのを見て近くにあった缶ビールを空けお母さんのグラスへと注いだ。横の佳奈さんも早々にグラスを空にしていた。こんなペースで飲んで大丈夫なのかな……一方大学生組のテーブルに座っていたエレナは、何故か皆に囲まれていた。

「さゆりどうしたの？エレナなんかした？」

「それが天音が悪ふざけでジュースに見えるようなお酒エレナさんに注いじやって……それでエレナさん急に黙り込んじやって……楓も声掛けて貰ってもいい？二口ぐらいしか飲んでないから急性アルコール中毒とかではないと思うんだけど心配で……後で天音は、私がぶん殴っておくから」

流石天音様と言わなければならないか……ほんとに抜け目がないというか何かしら問題を起こすというか。とにかく私もこのままお嬢様に倒れられても困るし、声掛けて見

なきや。

「天音様……何してるんですかほんと……」

「ちよつとした悪ふざけだったんだけどねえ……ごめん!」

天音様は、私に向かつてぶんぶん頭を下げた。頭下げられても困りますよほんと……

「とにかく私達は何言っても反応しないんだよ、声掛けてみてよ楓」

ジェシカからも声をかけられ、どうやら私が起こす以外解決策がないらしかった。

「わかったよ。エレナ、大丈夫? 体調悪いならちゃんとお部屋戻ってから寝よ」

私は、お嬢様の肩を揺すりながら声を掛けた。繰り返し声を掛けたが、全く反応がなく、ダメかと思ったその時だった。

「かえ、で、さま?」

「エレナ!? 私だよ! 楓! 大丈夫?」

「今楓様って言わなかった……?」

「ジェシカちゃん知らない方が幸せな事もあるんだよ……」

「なるほど……」

外野が何か言っていたが私は、声を掛けるのを続けた。

「お仕置きですか……? それではたくさんご奉仕させてもらいますね……」



「エレナ？つて！ちよつと待つて待つて！」

恐らく泥酔しているのだろう。お嬢様は、目の焦点があつていなかった。そして、お嬢様は恐らく無意識だろうが、私の右足を舐め始めた。まさか泥酔してDMスイッチが入るなんて……

「エレナダメこんなどこで！ほかの人だつているんだから！」

そう言い私は、右足をお嬢様の手元から引っこ抜いた。

「ふえ？なんれれれすか？お仕置きつてさつき言つてたのに……あ！ほうちぶれいですね！エレナかんげきれす!!……zzz」

「寝ちやつたよ……天音様どうしてくれるんですかほんと……ジェシカがすごい顔してますよ」

「あはは……ごめんなさい……」

「私は何も見てないから！ほんとに！それじゃ私詩織さんのところ行つてくるから！」

ジェシカは、お嬢様の豹変した姿を見ると一目散に走り去つてしまった……まあ、そりやそうなるよね……エレナはと言うと、完全に砂浜の上で爆睡していた。部屋まで運ばなきや……

「それじゃ私は、エレナ部屋に置いてきますね。明日はやめてくださいよほんと……」

「はーいー！」

ほんと返事だけはいいんだから天音様……私は、熟睡してるお嬢様を起こさないようにゆつくりと部屋まで運び、布団へと寝かせた。

## エレナとジエシカ

「ん……あれ、私確か浜辺でバーベキューしてたんじゃないか……なんで部屋のベッドで寝てるんだろ。ってか今何時だろ、え!? 2時!? いつの間にか日付け変わったっちゃってるじゃん何してんだろ私。でも急に記憶飛ぶっていうか布団に入っているのはなんでなんだろ……そういえば天音のやつに家から持ってきた高いジュースあるからって飲まされてから記憶が曖昧なような……でも、私別にお酒に弱い覚えはなかったんだけどな……あれ? もう楓……心配してくれてたんだらうけど何もかけずに風邪引いちやうよ」

私のベッドの前に椅子を置いて、楓は眠っていた。その姿はまるで眠れるお姫様にも見えた。きっと私が目を覚ますまで起きていようとしてくれたのね……ほんと優しい子なんだから。

私は、楓を抱っこして先程まで自分が寝ていたベッドに楓を寝かせた。そこで、自分が水着のまま寝ていることに気付いた私は、シャワーを浴びるついでに着替えようと、お風呂場へと向かった。



「汗とか流したかったんだけどこの時間に浴びたのは逆効果だったかしら……もう目が覚めちゃって仕方ないわ。夜風にでも当たろうかな」

考えてみたら熱いシャワーなんて浴びたら眠気なんて無くなるのは当たり前だった。それに今の今まで眠っていたこともあり、再度ベッドに戻る気分でもなかった。こうした理由もあり、私は、備え付けの屋上へと向かった。

「あれ？ジェシカじゃない。どうしたのこんな時間に」

私しかいないと思っていたが思わぬ先客がいた。いつもはツインテールにしている髪型をおろしていた。お風呂上がりだろうか。普通にストレートにしてもジェシカは可愛かった。つてかストレートでもいいんじゃないかな……

「げ!?月村!」

私ジェシカに何かしたつけ……そんなに蔑まされるような目線向けられる覚えはないんだけど……あ、言っておくけど全く興奮してないからね?私のそういう対象は楓だけ。

「なんでそんなに嫌そうな目をしてるのよ。私何かしたの気を失ってる時」

「あんた覚えてないの?」

怪訝そうな顔でこちらを見つめてくるジェシカ。そんなに私は酷いことをしたのだろうか。

「それが天音にジューズ注がれた時までしか記憶が無いのよ。よかつたら教えてくれない？」

そこで、私は自分の失態をジェシカから全て聞いた。まさか皆がいる前でDMモードになってたなんて……死にたい……

「ほんとに記憶無いみたいね……まあ私以外知ってたみたいだからそんな気にしなくてもいいんじゃない？ 楓も最初は焦ってたけど月村寝かせた後は普通に皆と遊んでたよ」

楓はメンタル強いなあ……まあ確かに私がDMだって知らないのはジェシカだけか。そう考えるとそこまで気を落とすことじゃないきもする。

「確かにそーね。この事は他の人は内緒でお願いね。流石の私もこれだけは広められたら厭しいものがあるわ」

「まあいいけど……じゃあ少し私と話そうよ。寝れなくて困ってたんだ」  
「別にそのぐらい構わないわ」

ジェシカから話そうよ、と言うのも珍しいし、私は二つ返事でこれを了承した。  
「それで話つて言うのは楓の事なんだけど」

「じゃないかなとは思っていた。私と共通の話題といえば楓ぐらいのものじゃないかな？ とは思っていたからね。」

「うん」

「楓には、好きでいてもいいですか？って告白したのは知ってるよね？」

ジェシカは、表情を一つ変えずに淡々と話していた。こういう時私なら絶対恥ずかしくなると思う。それを考えるとキモが座っているのか、告白した事なんて小さなことなんだろうか。

「まあ、楓から聞いてるわ」

「そーだよ。結局まだ私って心の中で楓の事諦めきれないみたいだし……今日も月村が倒れた時すんごい必死に声掛けてさ。もうそれだけでなんか胸がギューツとなるのが分かったんだ……おかしいよね。彼女いる人好きになつて嫉妬してるなんて。早く諦めなきやつて思ってるのに私の心は、楓をずっと見てるの……どうしたらいいと思う？」

「いやいやいや……それを当の彼女に言いますか普通……なんて答えたらいいかなんてわからないわよ。私個人としては、ジェシカが楓の事を好きでいようがいまいがどっちでもいいと思ってるけど、楓は、ジェシカが辛くなるのがわかるからつて言つて。否定派だし……話つてもつと軽い話かと思つたわよ。いきなり原爆級の爆弾投げられるなんて思わなかつたわ。」

「えつと……それを私に言うかな……めっちゃくちや答えづらいんだけど」

「いやまあそうでしょうけど……なら質問を変えるわ。楓は、私の事でなにか言つてた

？好きになられて迷惑とかそういう事」

「言うわけないじゃない。あのめちやくちや優しい楓がそんな事言つたとしたら次の日自然災害の嵐よ。楓が優しいのはジエシカも分かつてるでしょ？」

「まあそうだよね。んー、やつぱり月村とは楓の事で話すべきじゃないね。じゃあ私寝るね。おやすみ楓の飼いい犬さん」

「誰が飼いい犬よ。おやすみジエシカ」

そう言うどジエシカは、先に自分の部屋へと帰っていった。私も戻ろう。楓が起きた時に私がいなかったら心配するかもしれないしね。

## たまにはこんな夜も

時刻は午前4時。ジェシカと話していたせいもあり、完全に寝るタイミングを逃してしまった。明日と言うより今日の事を考えると少し憂鬱だったが、仕方ないか……自分  
の部屋へと戻ると楓の姿がない事に気が付いた。

「あら？どこ行ったのかしら」

ふと、私の後ろで動く影があった。

「それはこっちの台詞だよエレナ」

眠たそうに目を擦りながら楓は、私に話していた。

「いや、寝れそうにないから夜風にでも当たってこようかなって。それとごめんなさい  
……また楓に迷惑かけちゃったみたいで」

それを言うと楓は、ため息をつきながら。

「別に大丈夫だよ。エレナの奇行にも最近慣れてきたし。それに今回は天音様が悪いも  
ん。だからそんな泣きそうな顔しなくても大丈夫だよ」

奇行って……まあ確かにここ最近の私の行動といったら酷いものがあるのは確かだ  
けどさ……



「ありがとう。でも奇行はちよつと言いきすぎじゃ……」

「少し言い過ぎぐらいじゃないとエレナわからないかなって思つて。今日つか昨日か、いきなり皆の前で足舐めてエレナ感激です！はやばいって、ふふ、ごめん思ひ出したらなんか笑えてきちゃつた」

楓は、お腹を抱えて笑うのを我慢しているみたいだつた。

「もう、でも怒つてないならよかつた。楓、ほんとにありがと」

「どーしたのエレナ？そんなに改まらないでも大丈夫だよ。私達の仲じゃん」

「それもそつか。じゃあこれからも宜しくね楓」

私は、精一杯の笑顔で楓に抱き着いた。やつぱり楓の前だけは、素の自分でいられる。本当に大好きで信頼してゐるって事がそれだけでわかつた。

「こちらこそだよエレナ。私も大好き。ねえキスしよ」

「私も楓が欲しい。今度は酔いで舐めるんじゃないやなくて、私の意思で舐めさせて……」

「もう、キスつて言つたのに」

楓は、クスクスと笑つていた。どうしようもないねエレナは、つていうのが伝わつてきた。楓の前ではそんなつちやうんだよ。

「楓知つてる？太腿へのキスは忠誠の証なんだつて。ん……」

「ひやあ!?!くすぐりたいよエレナ！つかキスつて言いなながら舐めてるじゃん！」

もう私は、止まらなかつた。楓は、本当に嫌な時強引にでも私の前から逃げるようにいなくなる。でも今は、顔を赤くしてただ、私が楓の足を舐めているのを見ているだけだった。

「ごめん、もう私我慢出来ないわ」

「ひゃ!?!ちよつとなんで舐めながら押し倒さないで」

「ほんと可愛い。絶対他の誰にもあげたりしないんだから」

今夜は、私達にとって珍しい夜となつた。私が最後まで主導権を握つた事なんて今までにあつたかな。楓を絶頂の渦から逃すこと無く、ずっとベッドに拘束していた。

「はあ……もう、覚えておいてねエレナ。主人に逆らつたんだから明日の夜きつちりお返しするから」

「楽しみにしてるわ」

私達は、クスクスと笑いながら軽いキスをして抱き合いながら眠りについた。

## 最終日

「いつまで寝てるの楓。ほら起きて！もう夕方だよ！今日の夜には帰るのに寝て終わっちゃっていいの？」

誰かが私の身体を揺すっているみたいだった。そういえば、昨日はお嬢様と……思い出すとなんだか恥ずかしくなった。初めてお嬢様に触れられた夜みたいなのに、ずっと主導権握られっぱなしだったっけ。DMの癖にちよつと生意気かな。

「ちよつとどんな夢見てるのよお！ニヤニヤして気持ち悪いよ」  
「んー!!さゆりおはよ」

「おはよ、じゃないよ……ずっと起こしてるのに全然起きてくれないだもん楓ったら。エレナさんは、もうとつくの昔に起きてジエシカさんや天音と海で泳いでるよ？」

「起こしてくれてもいいのに……まあ私が寝ていたから気を使ってくれたんだと思うけど。」

「すぐ着替えて私も行くから先行っていいよ。でももうそろそろ皆戻ってくる時間かな？」

「少し気温も落ちてきたからそろそろ戻ってくると思うよ。寝巻きのままだとあれだか

ら軽く着替えて待つてゐるぐらいでいいと思う。そしたら夕食の準備手伝ってもらおうと思ふから」

「わかった。それじゃ待つてゐるね」

私がそう言うのと水着姿のさゆりは、海へと戻つて行つた。

もう帰る日なんだ。なんだかんだお嬢様とは仲直り出来たし、海でも泳げたし楽しかったな。でもお屋敷にいる時と変わらさずお嬢様はお嬢様だったな……旅行中こんなに体重ねるつもりは正直なかつたんだけど。まあ天音様辺りはわかつていそうだけど。

「楓起きたのね」

「エレナ。起こしてくれたら良かったのに」

扉の前には、黒いビキニを着たお嬢様が立っていた。きつとさゆりが私が起きたつてことを伝えてくれたんだらう。お嬢様の肌は濡れていて、すぐに来てくれたんだなつて事が分かつて少し嬉しかった。

「1回は声掛けたのよ？でも起きないし、気持ち良さそうに寝てたからそのままにしてあげようかなつて」

「そーだったんだ。まあありがと」

「うん。それじゃ夕飯の準備しよつか。昨日は迷惑かけたみたいだし私が夕飯の支度することにしたから。手伝ってくれるわよね楓」

「もちろん！」

私は、お嬢様が差し出した手を握って、別荘の一室にある調理場へと向かった。

◇ ◇ ◇

「んー……何にしよ……夕飯係に手を上げたのはいいんだけどカレーはお母さんより美味しいもの作れる気がしないし……」

「最終日だし、しつかりとしたもの作りたいよね」

「そーねえ……あー夏と言ったらってものがあったわ！確か紅葉さんが買っていてくれたはず」

そういうとお嬢様は、冷蔵庫の中を探り始めた。何にするつもりなんだろうか。

「これよ楓！海でする事と言ったらこれでしょ！」

お嬢様は、冷蔵庫の中からスイカを取り出して、私に見せつけていた。なるほど。確かに夏らしいね。

「あー！スイカ割り！でもそれだけじゃお腹一杯にならないよ？」

「もちろん。主食はそうめんにするわ。それもただのそうめんじゃなくて流しそうめんよー！」

大きな声でどーだと言わんばかりに宣言するお嬢様。流しそうめんって言っても流す機械とか何か準備してきたのかな。

「いきなり流しそうめんって言われても、準備とかどうするの？今から何か用意してたら間に合わなくなっちゃうよ」

「ふふん。私を誰だと思ってるのよ？月村エレナよ。楓、砂浜へ行ってみなさい」

「え？うん……」

いきなりカリスマ力見せられても困るんだけど……まさか私の寝てる間にこうなること予測して準備してたのかな。でも1人で出来るのかなそんなの。

「うわ……ホントに流しそうめんっぽいやつ出来てるし。やる事早すぎるでしょ」

でもこの量を1人で？いや、有り得ない。流しそうめんっぽい機械は、最低でも3人以上はいないと運べないような大きさをしているしきつと誰かに手伝ってもらったんだろう。

私は、調理場へと戻ると、鼻歌を歌いながら素麺を茹でているお嬢様へと話しかけた。

「あの機械誰がやってくれたの？」

「ん？あれなら前に楓の事助けてくれた人達いたでしょ？あの人に頼んだら快く引き受けてくれたの。今度会ったらお礼言っておいてね」

あ……エレナのお母さんの代からのspさんだっけ。前に強姦にあいかけたとき助けてくれた人だ。あの時は本当に怖かったな……

「何でもできるねあの人たち……」

「そりやお母様のSPだもの」

その一言で片付けていいのかな……

それから時間はあつという間に過ぎた。流しそうめんの機械に誰が麺を流すかで天音様とエレナが揉めて、結局2人は引かずに間をとってお母さんがする事となり、天音様とエレナの戦争は、まだ終わっておらず麺の取り合いをしてお母さんに2人まとめて怒られていた。そりや食べ物で遊んでたら言われるよね。

スイカ割りになると、今度はジェシカが私が割りたい！と言って手を挙げた。どうやらロシアには、スイカ割りなんて文化はないみたいだった。ジェシカのヤル気とは裏腹にスイカは、全く割れず代打エレナが見事にスイカを割った。ジェシカは、悔しそうにあんたがスイカになって楓に叩いてもらえばいいじゃないなんてことを言うから、天音様が悪ノリして私にバットを持たせてエレナを追い回した。昨日の仕返しと思つたら私も楽しくなってしまったのだ。

そして、食事の片付けが終わると最後に皆で花火をする事になった。各自好きなように花火を楽しんでいる中私はエレナに誘われて線香花火をゆつくりと2人だけで楽しむ事にした。

「あつという間だったわね」

エレナが少し寂しそうな表情で呟いていた。本当にあつという間の旅行だった。でも人生でこんなに笑ったりして遊んだのは初めてだったかな。エレナのメイドをしていた頃ならこんな遊びなどは出来なかっただろうし。

「そーだね。楽しかったね。私こんなにはしゃいだの初めてだったよ。提案してくれた天音様に感謝しなきゃだね」

「そーね。天音のおかげでこうして楓とも仲直りできたんだし。あ……落ちちゃった」  
「私のもだ」

2人の線香花火は、同時に火をなくして夜の砂浜へと落ちた。

「皆の所に行きましようか」

「そーだね」

私達は、手を繋いで皆の騒ぎの中心の天音様の元へと走り出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ジェシカ side

「全く……少し妬けちやうわね」

旅行の帰り道、詩織さんの車の中で楓と月村は、寄り添うようにして後部席で眠っていた。よつぽど疲れたのだろう。最後の花火では、今まで見たことの無い程に楓も月村もはしゃいでいたようにみえた。



「横でそんな悲しそうな顔しないの。でもホントに幸せそうだねこの2人。起こさないようにゆっくり走ってあげるか」

幸せそうだね。ホントにその通りだった。手を繋いでお互いに寄り添うように寝て、2人の顔は、本当に幸せそうだった。

「随分優しいんだね」

「まあ私は、楓の親代わりみたいな事もしてたからね。娘に優しくするのは普通でしょ？」

「まあそうかもね。あー！私もあんな風に寄り添ってくれる恋人欲しいなあ……」

自分で言っていて少し悲しくなる。初恋の相手が後ろで幸せそうに寝ている目の前で言ってるのだから尚更虚しくなった。

「あんたぐらい可愛いならそのうち出来るでしょ。なんなら私が立候補してあげようか？」

「私おばさんには興味ないんだけど……」

「なんですって!?!」

「ちよ！ちよつとハンドルハンドル!!」

そうだった……詩織さんにこの言葉は禁句だった……でも詩織さんみたいに自由奔放って感じの人と一緒にするのも面白いかもね。

「あんたがおばさんなんて言うからよ。全く回りはリア充だらけなのに、なんで私は運転手なんてしてんだろ」

「そろそろ婚期が気になつてくるもんね」

「決めた。やっぱりあんたにしよ。あんたみたいなジャジャ馬乗りこなせるの私ぐらいしよ?」

「ふふ、楽しみにしてるね」

「何言ってるんだかねほんと」

私と詩織は、おかしくなつて2人で笑い合つた。

## 幕間 2人のお母さん

時は流れて1年後、天音様ときゆりも無事に大学へと進学して、大学にも慣れてきた頃突然の報告が入った。

その日も特に何もなく1日が終わろうとしていた。

「夜ご飯何にする?」

「そーねえ。確か冷蔵庫にお母さんが作っておいてくれた野菜炒めあったからそれでいいんじゃない?」

「そーしよっか」

こんな風にたわいもない会話をして、また明日がやってくるとばかりに私は、思っていた。

p r

「ん?電話?お母さんからだ」

「なんだろうね。夜うちに来るとかかな。とにかく出ちやいなさいよ」

「うん。もしもーし。どうしたの?」

『ちよつと楓とエレナちゃんに大切な話があるから今からお屋敷行ってもいいかな?』

「え？うん、大丈夫だと思うよ」

『わかった。じゃあ30分後ぐらいくるね』

そういうとお母さんは、電話を切った。なんかそわそわしてた気がするの、は気の所為だろうか。

「お母さん何だつて？」

「何か大事な話があるからお屋敷来るつて」

「うーんなんだろうね。嫌な話じゃなきゃいいんだけど」

お嬢様は、少し心配そうな顔をして、お屋敷の扉を見つめていた。

◇ ◇ ◇

「お邪魔します」

玄関から声がする。どうやらお母さんが合鍵で入ってきたみたいだった。そのままリビングへと足音が近付いてくる。よく耳をすまして聞いてみると足音は2つあるみたいだった。

「ごめんねー急に。ホントに今さっき決めた事で早く楓とエレナちゃんに教えてあげたくてさ」

「あ、佳奈さん」

もう一つの足音の招待は佳奈さんだった。それと、お母さんの表情からして大事な

話っていうのは、悪い話では無いということがわかった。

「久しぶりね。あの旅行以来ずっと会ってなかったっけ」

「ですね。やっぱり教師ってあんまり休みとかってないんですか？」

「まあ、そーね。えっと、紅葉。どう話そうか」

「紅葉!」

私とお嬢様は、同時に声をあげた。それもそのはず、去年の旅行までは、佳奈さんはお母さんの事をお姉様と呼んでいた。それに敬語だったのがタメ口に変わっていた。

「ああ呼び方変えたのよ。確かに年齢差は少しあるけど恋人同士なんだし敬語もいらな  
いって私が言ったの」

「なるほどね。ごめん話脱線させちゃって。それで話って何？」

「そうだったわね。まあ畏まって言うほどでもないんだけどその……私と佳奈は、結婚する事にしたの。お互いいい歳だし、そろそろいいかなって昨日の夜にプロポーズして佳奈に指輪受け取ってもらえたってわけ」

「おめでどうお母さん! ホントによかったね!」

「おめでどうございますお母さん、佳奈さん! それなら昨日教えてくれればよかったの  
に。私、何が悪い話とばかり思ってたわ」

「ごめんねホントに急になっちゃって」

「ううん全然！式とかって挙げるの？」

「うーん。とりあえずは、婚姻届だけだしに行こうかなって思っただけでね、佳奈、自分の口から話したら？」

「そーだね。そーする」

何の話だろうか。突然佳奈さんの顔が緊張を帯びた顔に変わっていた。私の方に近付いてくると一言。

「今日から私も楓のお母さんになるから宜しくお願いします。突然で受け入れてもらえるかはわからないけれど、ゆっくり時間をかけて仲良くなれたらって思うから、それからその……」

私は、思わず佳奈さんの態度に笑ってしまいそうになった。私達が一番最初に会った佳奈さん（校長先生）は、もっと感情を表に出さない人で、滅多に笑わない人だった。それが今の佳奈さんはどうだろう。最初の方は、真顔で話していたのにゆっくり時間をかけて仲良くって言うてるあたりから表情が崩れて、顔を真っ赤にして恥ずかしいがっていた。それに何を言ってるんだらう。もう十分に仲良くなってると思うんだけどな。一緒に旅行だって行っただし、何度もご飯も一緒に食べてるじゃん。

「な、なんかおかしかったかな？」

「ううん。どんどん恥ずかしくて可愛くなって思っただけで。それにもう十分仲良しじゃ

ん。これから宜しくね佳奈お母さん」

私は、いつも使っている敬語を外して、佳奈さんに言葉をかけた。少しだけお母さんって呼ぶのは恥ずかしかったな。まさか高校生の時は、校長先生がお母さんになるなんて思いもしなかったよ。

「えつとその……宜しくね楓」

「(こちら)そ宜しく!」

その日は、夜遅くまで佳奈さんと2人でお互いの事を話したり、お母さんやエレナの話をしていた。ホントに佳奈さんと親子関係になったんだなって思うと、なんだか嬉しかった。でも女の人同士だから子供は出来ないから妹や弟が欲しかったから少し残念かな。

「楓、そろそろ寝ようか。今日は、紅葉から2人で寝ればって言われたから良かったら一緒に寝ない?」

「初めて親子になった日だし記念にもなりそうだね。喜んでだよ佳奈お母さん」

「それじゃ行こっか」

「うん!」

寝室に入って、大きいベッドに2人で入ると、佳奈さんは私の手を握ってきた。

「佳奈お母さん?」

「子供が出来たらやってみたかったことなの……迷惑だったかな？」

「ちよつと恥ずかしいけど、佳奈お母さんがしたいなら全然いいよ」

「ありがとう。楓も何か欲しいものとかあったら言つてね。エレナに比べれば全然だけど、私だつて社会人なんだから欲しいものあれば買つてあげるから！」

欲しいものなんてもうないよ。エレナもいてくれる、お母さんだつている。それだけで私は幸せ。あ……ちよつと無理言つてみたらどうなるか試してみようかな。

私は、少し佳奈さんに意地悪を試してみたくてこんな事を言つた。

「佳奈お母さん。私ね、妹が弟が欲しいな……」

「え、えええええええ!!」

案の定佳奈さんは、顔を真っ赤にして俯いてしまった。きつとお母さんは、毎回こんな感じに佳奈さんをいじつて遊んでるんだろうなあ……

「それじゃおやすみ佳奈お母さん」

「え、あ、おやすみ。つてちよつと、妹や弟なんて無理よおお!!」

横で悲鳴をあげてる佳奈さんをスルーして私は、眠つた。

「そーよね……私だつて子供欲しいもん。紅葉に相談してみよ。待つててね楓」



## 幕間 子供が欲しい

「ちよつと相談があるんだけどいいかな？」

「ん？どうしたの？」

楓に弟か妹が欲しいと言われた夜から数日、私は、紅葉にその事で相談しようと思っていた。楓が弟か妹が欲しいと言われる前から、私は結婚したら子供が欲しいと小さい頃から思っていた。小さい時の将来の夢は、お嫁さんだった。それから長い年月をかける事にその夢は、薄れて校長先生に気付いたらなっていた。紅葉と付き合っている時にそう言えば小さい頃は、結婚したら子供は、2人ぐらい欲しいなんて考えていたっけなと思ひ出した。そしてこの前の楓の言葉。私は、決心を決め紅葉に話すことにした。

「その……子供が欲しいなって。女同士で出来ないことぐらい分かるけどそれでも欲しいの。それで私なりに色々調べた結果人工授精とかどうかかって……困るよねいきなりこんな事言われても」

「子供欲しいって言うのは私も思ってたよ。でも絶対人工授精はやだ。佳奈は一生懸命考えて人工授精って答えを出してくれたんだと思う。それに自分が身籠るって考えてなかった？」

「うん。紅葉1回出産経験してるし、次は私かなって思ったし、学校もそれなりに融通聞くと思ったからさ。紅葉も仕事大変でしょ？」

「私の仕事何してるか知ってるでしょ？ 孤児の子の面倒見てるって。それに何で人工授精が嫌だかもわかってないよね」

「うん……正直そんなに真つ向から反対されると思ってた。お金とかの心配？ それなりに蓄えはあるよ。お嬢様学校の校長先生ついでだけで結構貰えるのよ」

そう言うとき紅葉は、私の頭をペシッと叩いて何を言ってるんだこいつはという目をしてた。

「ぜんっぜん違うわよ！あのね！人工授精って知らない男の精子入れるんだからね？可愛い佳奈の身体に知らない男の汚いものが入ったとか思いたくないの！行為自体はもちろんしてないってわかってるけど嫌なものな嫌！私の佳奈に触っていいのは私だけよ。わかった？」

ストレートに好意というかなんというか思いをぶつけられてしまった……まさか紅葉がそんなに私の事を思ってくれとるとは思ってた……少し恥ずかしかった。

「紅葉……ごめん。そんなに思ってくれてるなんて思わなくて。確かに知らない男の子供になるもんね……でも子供は欲しいなって思ってるのは本気。どうしたらいいのかな……」

そうなると後は身寄りのない子を引き取るぐらいしか選択肢がないよね……あれ、そういうえば紅葉の仕事って……

「やつと気付いたみたいね。でもそんな簡単に引き取ります！とはいかないの。色々都合もあるしね。私は、もう楓みたいに親の愛情を知らずに育つ子供は見たくないの。施設にいる子がどれだけ私や、他の職員さんに懐いてくれても本質的には親を求めている。だから私達が預かる子は、言い方悪いけどまだ身体的にも精神的にも何も分かってない子だけよ。でないとどこかで気を使ったりするからね。今の施設にいる子の大半が気を使ってくれてるのが痛いほどわかるの。だから赤子を引き取って、私達が両親だと思ってもらおう。まあ大きくなったらお父さんいないの？って言われちゃうかもだけだね」

そこまで考えてくれてたんだ……そっか、紅葉は、楓ちゃんの一件があるから孤児を預かる施設に……それで自分が引き取って育てる機会があれば、親の愛情を教えてあげようとしてたんだね。

「ありがとう紅葉。うん！そーしよ！じゃあ名前考えようよ！いつになるかわからないけどさー！それといつ赤ちゃん来てもいいように色々揃えておこうよ」

「もう気が早いんだから。でも名前はもう決めてるの」

「え？どんな名前？」

「男の子なら若葉、女の子なら若奈にしようかなって。完全に私個人の好みだから佳奈の意見も聞かせてね。紅葉、楓って名前だから、次は若い葉っぱのイメージにしようかなって。若奈の奈は佳奈の奈から取ったの」

若葉に若奈か……何故だかはわからないけどすんごいしっくりくる。いつになるかはわからないけど、紅葉となら立派な大人に教育出来ると思った。

「すんごいいいと思うよ。それで賛成!」

私がそう言うのと紅葉は、笑顔で言葉を返した。

「ならよかったわ。ありがとう佳奈」

「じゃあ子供決まったら一番に楓とエレナちゃんに教えてあげようね」

「もちろんよ! 楓に妹か弟見せたらきつと喜んでくれるもん。楓の笑顔が見られるためならなんだったってするわ」

「楓の笑顔可愛いもんね。この間一緒に話した時表情豊かでホントに可愛いなって思ったもん。ってあれ?なんでそんな目で私見られてるの?」

「なんか楓だけ可愛いって言われててずるい……私佳奈から最近可愛いって言われた覚えはないんだけど」

「何言ってるのよ。紅葉が可愛いくなかったら結婚なんてしてないって」

「なら証明してよ」

そう言つて紅葉は、目を瞑つて私の方に顔を近付けてきた。

「ん……大好きだよ」

私達は長いキスをした。どんな子供が来るのかな、どんな子に育ててくれるのかとても楽しみだった。

その3ヶ月後、紅葉が生後1ヶ月の女の子を預かることが決まった。橘 若奈。新しい私達の家族となった。これからもっと頑張らなくっちゃ！

## 妹

「かわいいいい!!ねえ抱っこしてもいいの!?!」

「もう、そんな慌てないの。ほら、ゆっくりね。頭を支えてあげて」

「う、うん!」

突然お母さんと佳奈さんが赤ん坊を連れてお屋敷にやってきた。お嬢様は、天然なのか馬鹿なのかはわからないけど、お母さんと佳奈さんどっちが性転換したの……なんて頭のおかしい事を抜かしてたけど、話を聞いてみると施設の子供を預かったらしい。生後半年だとかなんとか。本当は、もっと早くに見せてあげたかったんだけど、施設で保護されたからだろうか、しばらくお母さんにも佳奈さんにも懐いてくれなかったらしい。でもこの子が私の妹になるんだ……そう実感すると、もう目の前の赤ちゃんが可愛いくて仕方がなかった。名前は、若奈ちゃんって言ってみよう。

「柔らかい……赤ちゃんってこんなにぶにぶにしてるんだね……」

若奈ちゃんは、眠っているみたいだった。私は、起こさないようにゆっくりと抱き上げた。

「エレナ写真撮って。もう可愛いすぎてやばい」

「ふふ、もうぞつこんなのね。ちよつと待つてね。撮るわよ、はい、チーズ」

カメラのカシャつて言う音がしたからだろうか。閉じられていた若奈の目が空いて私の方を見ると……

「びえええええん!!びえええええん!!」

「お、お母さん!若奈ちゃんが!ど、どうしよう」

「あらあら、起きちゃったのね。そのままゆつくり大丈夫だよつて言いながら揺らしてあげて」

「う、うん。ほら若奈ちゃんお姉ちゃんですよ。大丈夫だからね」

私の気持ちとは、裏腹に若奈ちゃんは、一向に泣き止む気配を見せなかった。

「お母さん、私も抱っこしてもいいかしら?」

「いいの?今泣いてるところよ?」

「私の方が楓よりお姉ちゃんしてる所を見せてあげます」

そう言うとお嬢様は、私から若奈ちゃんをひよいと取り上げると自分の胸の中へと抱き上げた。

「ほら、安心して?私は、貴方のお姉ちゃんのエレナつて言うの。何も怖がらなくてもいいわ」

私と同じように若奈ちゃんに声をかけながらゆつくりとあやしていると……

「えへへへ。えれにや、えれにや」

ぱあつと今まで泣いていたのが嘘みたいに若奈ちゃんが笑っていた。

「よしよし、エレナが付いてますからね。はあ可愛い……お母さんこの子私に下さいな」  
「ダメに決まってるでしょ。でもびっくりしたわ。私でも若奈ちゃん泣き止むのに時間かかるのに……ちなみに佳奈が抱き上げるとずっと泣いちゃうから抱っこ禁止にするわ」

佳奈さん……でも何でお嬢様が抱き上げたらすぐに泣き止んだんだろうか。同じ事をしているだけなのに。

その後もお嬢様が抱き上げるとニコニコ笑っていて、私が抱き上げると不機嫌そうに「えれにや！」って言われてお嬢様に若奈ちゃんを返していた。

「何がそんなに違うの……」

「包容力の差かしらね。赤ちゃんも気付いてしまったのよ私のカリスマ性に」

何を言ってるんだこの人は……昔のお嬢様ならカリスマ性はあったけれど今となつては、ただのドMのお嬢様だからね……まあ確かに時々かっこいい時はあるけれども。

「逆に若奈ちゃんと同じぐらいの歳だと思われたんじゃないの？エレナ理性とかないじゃん」

「んな!?若奈ちゃんあのお姉ちゃんにパンチしなさい。手をグーに握ってえいってやる



のよ」

お嬢様は、若奈ちゃんの右手を優しく握ると私に顔にぺちんと当ててきた。すると若奈ちゃんは、どうやら私の顔を叩く事にハマってしまったらしい……ぺちぺちと叩いては満足そうな顔をしていた。

「はあ……ホントに可愛いなあ……お母さんまた若奈ちゃん連れてきてくれるよね？」  
「もちろんよ。楓の妹なんだから当たり前でしょ」

笑顔でお母さんは、私に話す。そっか。ホントに妹が出来たんだ……お姉ちゃんとしてすっかりしなきゃだね。とにかくお嬢様みたいに曲がって育たないようにしなくっちゃ。

「ちよつと楓、なんか今とても失礼な事想像してなかったかしら？」

「何も考えてないよ」

「ならないけど……」

危ない危ない。お嬢様って特別勤が鋭いんだった。ホントにここまで心を読まれるってエスパーカーか何かじゃないかな……

「それじゃそろそろ若奈ちゃんお昼寝の時間だから失礼するわね。ほら若奈、楓お姉ちゃんとエレナお姉ちゃんにバイバイして」

お母さんがそう言うのと若奈ちゃんは、私達に向かって小さな手を一生懸命に振って

た。マジで萌え死ぬと思ったよ。小さい子ってなんであんなに可愛いんだろうか。

「バイバイ若奈ちゃん。またね!」

そう言うとお母さんと若奈ちゃんは、お屋敷を後にした。

「はあ……ホント可愛いかったね若奈ちゃん! 目クリクリしてて小さな手でバイバイされた時なんてもう可愛いすぎて死にそうだったよ」

「楓は、本当に子供が好きなのね。確かに若奈ちゃんの可愛いさは、反則レベルだったわ。楓の小さい頃もあんな感じだったんだろうね」

「どうだろうね。小さかった時の記憶なんてほとんどないもん。そういうエレナだつて小さい頃の事なんて覚えてないでしょ?」

「そーねー……気が付いたら月村の後を継いでたからね。私もほとんど無いわね。強いと言うなら楓と遊んでたぐらいだったかな。でも今回で1つはつきりしたわ」

「ん? 何が?」

「私達も結婚したら子供欲しいね。楓と一緒に立派な大人に育てて月村の跡継いで貰わなくっちゃ」

「け、け、結婚って!?! そ、そんな事急に言われても恥ずかしいよ……」

いきなり結婚だなんてびっくりさせないでよ……そりやエレナとは結婚したいと思ってるけどでもまだ私達19だし、いやでももちろん早く結婚して子供欲しいし、

あーもー！なんでそんな平然と恥ずかしい事言えるのよこの人は！

「顔真つ赤にしちやつて可愛いんだから。若奈ちゃんよりよっぽど楓の方が可愛いよ」

そう言うとお嬢様は、私を抱きしめて、さつき若奈ちゃんにした様に頭を撫でたとつても恥ずかしかつたけど、それより幸せな気持ちの方が大きかつた。この人とずつと一緒にいたい。それがお互い確認出来て本当に幸せだつた。

「エレナ……大好き」

「私もよ」

この日の夜は、お互い赤ん坊になつたみたいになつたみたいになつたけどね……ちよつと子供の頃に戻ろうつて話したのにすぐこれだもん……まあそういう所も含めてお嬢様が大好きなのは、間違ひなかつた。これからも宜しくね、私のたつた一人の王子様。

## 単位

ピンポーン！ピンポ！ピンピン！ピンポーン！！

「ああ！うるさい！楓、天音だから通してあげて。全く秋季休暇初日の朝になんだってのよ」

季節は秋。私達は、大学に入って2回目の秋季休暇に入ったばかりだった。2年生へと進学した私達は、無事取っていた単位の全てを落とすことなく一学期を終え、一息付いていたところだった。ちなみにジェシカもフル単位を取り、このまま行けば一緒に卒業出来るね。なんて話をしたばかりだった。それにしても天音様はなんの用だろうか。去年の夏みたいはどこかへ行こうっていう相談かな。1年生の夏期休暇の時に、私と天音様やらで、お嬢様の別荘へ遊びに行つた時は本当に楽しくて幸せな時間だったな。

「天音様鍵開けましたよー」

そう言うのと天音様は、すぐに扉を開け、発した言葉は……

「エレナア！楓ちゃん助けて！！さゆりに殺される！」

「ちよ！ちよつと落ち着いて下さい！エレナ来て！」

いつもとは違う天音様の様子に、私はお嬢様をすぐに呼んだ。いつもはニコニコしている天音様だったが、今は、病人のように顔面蒼白で、今にも泣き出すんじゃないかなっていうぐらい瞳に涙を溜めているのがわかった。それに殺されるってどういう事……

「全く何よ騒々しいわね……げ!?何その顔!?ちよつと何があつたのよ天音」

お嬢様も天音様の顔色を見ていつもと違うと思つたのか、少し慌てたように天音様に駆け寄っていった。

「うぐ……単位が……単位があ……」

天音様は、ついに瞳から涙を零して吐き出すように言葉が続けた。

「単位が……0単位だったのお!!!どうしてよ!私テスト全部満点だったのに!」

「あの……天音様講義には出られてましたか?」

「つ!?デテタヨ?」

出てなかつたんですね……お嬢様の方を見ると、同じように頭を抱えてそりや単位貰えるわけないでしょうよ、と呟いていた。

「それで何でさゆりに殺されるんです?さゆりなら許してくれそうですけど……」

「えつと……まあ色々ありまして……」

詳しく話を聞いてみると、単位を2人同じものを取ろうと言つたさゆりの言葉を断つたらしい。その条件として講義への出席と、取る単位の半分以上を取ることを約束した

のだという。

「でもなんでさゆりと同じ講義取らなかつたんです?」

「だつてさゆりいたら講義出ろつて言われるじゃん……私寝たいし。つてか何でテスト全部満点なのに単位くれないのよおかしじゃん!」

「いや、まあそれは講義出ないとダメですよ……」

「楓の言う通りよ諦めなさい。さゆりちゃんはまだこの事知らないのよね?」

「うん。さゆりには、単位取れたつて嘘ついて成績表見せなかつたから……」

「またそんなすぐバレるような嘘ついて……とにかく正直にさゆりちゃんに言つて許してもらおうようにお願いするしかないじゃない」

ピンポーン。ピンポーン。

「ん?」

お嬢様と天音様が話していると玄関のチャイムが鳴つた。もしかして……

「はい、月村ですが」

『あ、楓? さゆりだけど天音来てないかな? 今朝、突然朝ごはんも食べないでどこかに行っちゃつたんだもん。それで心配になつてここじゃないかなつて思つてきたんだけど……』

さゆりの口調からとても心配しているのがわかつた。私もエレナに同じ事されたら

心配するもん。天音様にはちゃんとこの事も含めて謝って貰わなくっちゃ。

「心配しないでさゆり。天音様来てるよ。今開けるね」

『よかったあ……ホントにここにいなかったらどうしようかと思つたよ』

「天音様、さゆり来ましたよ。ちゃんと何も言わずにここに来たことも謝って下さいね」  
「ええ!?!さゆり入れちゃつたの!?!」

「謝って下さいね」

私は、普段エレナを見下す時に使っている目を失礼だとは思つたが天音様に使つた。なんだかお嬢様のスイツチが入つたのは気のせいだろうか……いや気のせいだよ。そういう事にしておこう。

「わかつたよお……」

すぐにさゆりが扉を開けて入ってきた。天音様の元へと駆け寄つていった。

「もう!いきなり飛び出さないでよね!何かあつたと思つたじゃん!天音に何かあつたと思つたら私……ぐすん……」

「あーあー、天音がさゆりちゃん泣かしたあ」

お嬢様がからかうように天音様へと言葉をかけていた。ホントに泣いちゃつたよ。よつほど心配してたんだろうな……確かに好きな人が急に家飛び出したら心配するよね……

「ご、ごめんてさゆり！もうこんな事しないから！ね？だから泣かないで」

泣いているさゆりの天音様は頭を撫で、必死に慰めていた。なんだか、親子を見ているみたいだった。私が泣いていた時もお嬢様は、ああやって頭を撫でてくれたっけな。

「約束だからね……でもどうしていきなり飛び出したの？」

「えっと……さゆり怒らない聞いて欲しいんだけど……」

天音様は、さゆりにことの経緯を全て話していた。それを聞いたさゆりはと言うと……

「……天音。次の単位一つも落とさない事約束して。じゃなかったら別れるから」

「ひ、一つも!?流石にそれは厳しすぎないかな？」

「ダメ！じゃないと大学卒業出来なくなっちゃうかもしれないんだよ!?それでもいいの!?私は、天音と一緒に卒業したい。それで卒業した後は、2人で一緒に暮らしたいって思ってるんだよ。だからお願い天音」

事実上のプロポーズだった。さゆりは、顔を真っ赤にして天音様の返事を待っていた。

「さゆり……そこまで考えてくれてるなんて思わなくてごめんね。ん……」

「!?ちよ、ちよつと楓とエレナさんいるのに！」

私達の目の前だと言うのに天音様は、強引にさゆりの唇を奪い、舌をさゆりの唇をの



中に入れていた。よっぼどさゆりのプロポーズが嬉しかったんだろう。

「楓、私達お邪魔みたいだし寝室に行きましょ」

「そうだね。じゃあさゆりお幸せに」

「ありがと……」

顔を真っ赤にしてさゆりは、私とお嬢様にお礼を言うとお天音様に向き合い、自分から天音様に甘えていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「あの……何でこういうことになるのかなエレナ」

「さっきの天音に向けた目でスイッチ入っちゃったみたいで……ダメかな……」

寝室に行きましょって言う言葉で大体は察せたがホントにこうなるとは……寝室に入るやいなや、お嬢様は地面に座り込み虐めてほしいと、顔を赤くしながら私に頭を下げていた。それはそれは綺麗な土下座だった。仮にも月村エレナは、いいところのお嬢様である事を思い出して欲しい。そのお嬢様が私の目の前で、それに理由が虐めて欲しいから。お嬢様の奇行には慣れてきたつもりだったが、流石の私も今回ばかりは少し引いてしまった。

「土下座は勘弁してよ……仕方ないなあ……そんなに虐めて欲しいの？」

「はい……楓様の足を舐めさせて下さい……」

もうこうなるとどうしようもなかった。そんな気分ではなかったが私は、仕方なくお嬢様を虐めてあげることにした。ホントに仕方なくだからね？

「ほら、これがいいんでしょ？しつかり綺麗に舐めてよね」

「はい……いっぱいご奉仕させていただきます……」

結局その「虐め」は、夕方頃まで終わることがなく、リビングに戻った私達を見て天音様が笑っていた。

## 幕間 ジエシカのメイドの詩織さん

「暇だねえ」

「そうねえ……なんでこうも大学生つて〇〇休暇とかつて言うのが多いのかしら。まあうちの学校は、少し特殊な所も多いのかもだけれど」

秋季休暇が始まって1週間がたった。私達は、この1週間で本当に何もせず、お屋敷でダラダラと過ごしていた。天音様ときゆりを捕まえようとしたが、彼女らは、この前のさゆりのプロポーズ紛いの言葉を受けて、この秋季休暇中に天音様のお母様に結婚したいという有無を伝えると言っていた。私は、それを聞いて本当に凄いなと思った。私もいずれはお嬢様と結婚したいと思ってるのは確かだ。でも障害は沢山あると思う。1番の問題の親の事は、お母さんも同性と結婚してるし、祖父と祖母は、既に亡くなっているからだ。おじいちゃん、おばあちゃんが生きていて、お嬢様と結婚する事になりましたとか言ったらどんな反応してたんだろうなあ。それに比べて天音様のご自宅は、緒方財閥のお嬢様。跡継ぎだつて欲しいって考えるのが当たり前だ。それに、しっかり血を受け継いだ人がいいというのが当たり前だと思う。2人はどうやってご両親を説得するのだろうか……

「どうしたのよ急に固まって」

「ちよつと天音様ときゆりの事考えてた。大丈夫なのかなって」

「天音の事なら大丈夫よ。なんだかんだやる時はやる子だもの。なんとって私の親友よ？それぐらい押し切って貰わなくっちゃ困るわ」

お嬢様と天音様は、小学生の頃からの幼馴染だった。言い方は悪いが自分勝手に横暴なお嬢様に声をかけたのが天音様だけだったのだ。他の人は、月村っていう名前に惹かれ下心だけで寄ってきた人しかいなかった。今思えばお嬢様の事をちゃんと見てきた人って私除いたら天音様しかないんじゃないのかな。

「ふふ、そーだね。あの頃のエレナと友達になれるぐらいの人だもんね」

「あー聞こえない聞こえない」

「全く……詩織はどこに行つたの？最近見かけない気がするんだけど。ちよつと買い物かてらドライブでも行こうとしたのに」

「え？エレナ知らないの？詩織さんジェシカに気に入られてこの秋季休暇中ずっとジェシカの側近として働いてるんだよ。ほらこれ手紙。てつきりもう読んだのかとばかり」

私は、お嬢様に詩織さんから預かっていた手紙を渡した。っていうか1週間近く詩織さん見ていなかったんだからもっと早く気付いてもよかつたんじゃないや……

「えつと……『楓ちゃんとエレナへ。ジェシカのメイドのソフィのお父さんが体調が悪

くなつてロシアに帰らなくちゃいけないみたいで、メイドがいらないから来てくれつて言われたからジエシカのとこ行つてくるね。エレナには楓ちゃんいるしいいわよね？それじゃまた帰る時連絡入れるから。詩織』適当すぎじゃないかしら……まあ詩織らしいっちゃ詩織らしいけどさ。でもジエシカのメイドつて大変そうな気もするけど大丈夫かしらね」

「全盛期のお嬢様の相手するよりはマシじゃないですかね」

「う……それを言われちゃうと困るわね」

「ふふ、ごめんねエレナ。詩織さん今頃何してるのかなあ」

「そーねえ……」

◇ ◇ ◇ ◇

「ちよつと詩織！貴方月村家のメイドだったのよね！何よ朝ご飯がインスタントラーメンつて！?!おかしくない!?!」

「文句あるなら食べなくていいわよ！私は、料理担当じゃなかったんだから仕方ないでしょー！」

私のメイドのソフィが家庭の事情で、一時的に帰国する事が決まった後、私は月村のこのメイドの詩織に一時的にうちで働いてもらえないか？という電話を入れていた。ソフィの代わりに他のメイドに頼んでも良かったんだけど、自分のメイドと言うのは、

やっぱり顔見知りでそれなりに交流があった人の方がいいと思ったからだ。流石に楓に頼むわけにはいかず、詩織に頼んだと言うわけだ。しかし、どうやらそれが失敗だったみたい……一般的なメイドの服装を思い出して欲しい。それに対して詩織のメイド服は、土方のおじさんが着ているような作業服だった。最初はふざけてその格好で働いていると思っていた。何日経っても作業服で働いているから、いい加減すっかりした服着なさいよ。と言ったところ、エレナのお屋敷ではずっとこれでやってきたからのことだった。月村のやつ、メイドの教育一切してなかったでしょ。出なかつたら作業服で料理も出来ないメイドなんて聞いたこともないわよ。

「分かったわよ食べればいいんでしょ食べればー」

人生で初めて食べたインスタントラーメンは、意外にも美味しくてびっくりした。インスタントと言うともっと美味しくないと思っていたからだ。

「美味しい……」

「だから食わず嫌いするなって言ってるのよ。まあ流石に一国のお姫様にインスタントラーメン食べさせたってバレたらめっちゃ怒られるかもだけどね」

「そりやそうでしょうよ……」

一緒に過ごして1週間。詩織さんという人がようやく掴めてきた。前に夏の旅行で同室になったことはあったけど、こんなに大雑把というかがサツな人だとは思わなかつ

た。つてかほんとに何で月村は、作業服でメイドさせてたのよ！普通注意するでしょうよ！

「ねえ聞いてもいい？」

「なーに？」

「何で作業服なの？月村に注意とかされなかったの？」

「あー……前はメイド服だったよ。でも昔からヒラヒラしてるのとかフリフリしてるやつ嫌いで仕方なかったから、エレナに作業服の方が動きやすくていいからそっちじゃダメ？つて聞いたたら二つ返事で好きにすればいいわ。つて言われたから作業服でやってるのよ」

「なるほど……つて！それで月村納得しちゃダメでしょ！うちではメイド服着てほしいんだけど」

詩織は、少し悩んだ後でこう答えた。

「まあジェシカがそっちの方がいいつて言うならそうするよ。でも私のサイズの服あるの？」

「スリーサイズ教えてよ。それに近いものあると思うから」

「えーつと……上から96・62・90だったかな」

あれ……私のスリーサイズつて72・53・76とかだったような。何でこんなに

差が出るのよ。私だってもう20歳なのに……なんかイライラしてきた。私だってもっと女の子らしい体型になりたいのに。

「死ね！何よその羨ましい数字！そんなボンキュッボンに着せるメイド服なんてないわよー！」

「はあ!?!自分から聞いといてそれ!?!いいだろ肩もこらないし、そういう胸ない人が好きだって言う人も最近増えてきたみたいだよ？」

それただのロリコンだって前に誰かに言った気がするな。つてか巨乳に気使われたの今？私の気持ち何にもわかんなくせに！

「うるさい！うるさい！うるさい！巨乳に貧乳の気持ちなんてわからないわよー！」

「こっちだって好きに胸でかくなつたわけじゃねーよ！育ちちまつたんだから仕方ねーだろ」

「あーもういいいわよ作業服で。あんたにメイド服なんて着せて歩いたら歩く18禁になりそうなもの」

「なんだそりや……まあ作業服でいいって言ってくれるならそれでいいや」

詩織は、私が悪態をついたというのに何一つ気にしていない様子だった。もっと噛み付いてくるかと思っただけ以外に大人しいというか、素直なんだなと思っただけだ。

「何も言わないのね。もっと噛み付いてくるかと思っただけだ」



「御所望なら嘯みつきましようか？まあ、エレナの毒に比べたらジェシカのなんて可愛  
いもんだからね。楓ちゃんと付き合う前のエレナにあんたも会ってるでしょ？あの人  
のそばに何年もいたらジェシカの毒なんて鼻くそみたいなものよ」

詩織は、笑いながら話していた。当時の月村エレナか……確かにあれは酷かった。

「女の子が鼻くそとか言わないの。まあ少し休みなさいよ詩織も。今紅茶持ってきてあ  
げるわ。私がメイドに何か出すなんて珍しいんだから感謝しなさいよね」

「何よその言い方。もしかしてジェシカ私に惚れてんの？よくツンデレが言いそうじゃ  
ん？なにになにだからなにになににささいよね！って。案外あんたも可愛いとこあんじゃ  
ん」

それを言われた瞬間自分の顔がかーっと赤くなっていくのがわかった。

「ば！バカ言ってるとおげないわよ！私には楓って心に決めた人がいるんだから！」

「はいはい。早くしてよジェシカちゃん」

「もー！雇うんじやなかったあ！」

そんな事を言いながらも詩織との会話に心地良きすら感じていたのを本人は自覚し  
ていなかった。

## 秋季休暇の2人

幕間 秋季休暇

「ねえエレナ？」

「ん？そんな難しい顔してどうしたの楓」

時刻はお昼時。お屋敷のリビングで私は、お嬢様と2人でご飯を食べていたのが、大  
学も秋季休暇中で相も変わらず寝てはご飯を食べてダラダラと日常を過していて、この  
ままでいいのだろうかと思いはじめたのだ。残りの秋季休暇も、気が付けば残すところ今  
日と明日の2日間だけだし、このままダラダラしてるのはもったいないと思うしね。

「いやさ……私達この休み中なんもしてないよねって……このままダラダラ過ごしてて  
いいのかなって」

「なんだそんなこと。難しい顔してるからもつと違う事考えてるのかと思つたじゃな  
い」

「いやそんな事じゃなくてさ。何処か遊びに行こうよせつかくの休みなんだよ！課題も  
終わらせたし何処か行こうよー！」

「嫌よ面倒くさい。私が外で遊ぶの嫌いなもの知ってるでしょうに」

つまらなそうにお嬢様は、そつぽを向きながらお茶を啜っていた。

そうだった……この人引きこもりお嬢様だったわそう言えば……でも休みにずつとお屋敷いてもそれこそ時間の無駄遣いだと思うんだけど。

「ならいいよジエシカ誘ってジエシカと遊んでくるから。もしかしたら泊まりとかになつても知らないからね」

ジエシカ・バツティ。私が大学に入ってから出来た友人だ。ご存知の人も多いと思うが、私に好意を向けてくれてる数少ない女の子。それにロシアのお姫様というブルジョワっぷり。未だに私に好意を向けてくれていて、言い方はあまり良くないが、私と二人つきりで遊びに行かない？と言われたら、用事がない限りは二つ返事でOKを貰えるだろう。

「ちよつと!?それとこれとは違うでしょ?なんでジエシカなのよ?」

先程まで興味が全くなかったお嬢様も、こればかりには、反応を示してくれた。私は、この好機を逃すまいと立て続けに畳み掛けた。

「だってエレナ外に出たくないんでしょ?私は出かけたらいんだもん。それじゃジエシカに連絡取ってくるね」

そう言つて、リビングから出ようとした時だった。

「わかつたわよ!行くから!何処か遊びに行きましょう!」

やっぱりちよろいなあ……そういう所も可愛いんだけどね。

「ありがとうエレナ。それでどこ行こうか？」

私は、お嬢様に満面の笑みで返した。

「ずるいわよ楓……」

「えへへ、大好きだよエレナ」

「はいはい」

軽いやり取りだけけど、少しだけ顔を赤くしたエレナを見るのは悪くないなと思いがら、私は話を戻した。

「それでどこ行こうか？エレナ行きたいとことかないの？」

「室内。それ以外は勘弁して……私死んじゃう」

流石に外に出るのを付き合わせちゃってるからそこは、エレナに合わせてあげようかな。んー室内かあ……室内ってなると結構絞れるよね。

「あ！楓私行きたいところ見つけたわ！」

突然お嬢様が顔を上げニヤニヤとこちらを見ながら声を上げた。なんかやだなあのニヤニヤ顔。変なところ連れてかれなきやいいんだけど……

「ちなみにどこ？」

「内緒！今詩織呼んだからすぐ迎え来ると思うよ」

「え、何も準備してないし部屋着なんだけど」

さつきまで外出を渋ってた人間の態度とは180。違うんだけどほんとにどこ連れてかれるの私……

「ちよつとホントにどこいくの!?なんか怖いよエレナ」

「まあまあ行つてのお楽しみよ。それとサプライズにしたいからこれ付けててね」

そう言つてお嬢様が手に持つていたのは、前にプレイにも変化が必要よね?とか言つてふざけて買った目隠し用のアイマスク。まあ結局1度も使つてないんだけどね……

「変なところ連れてつたら怒るからね」

「大丈夫よ。ほら早く」

「もうわかつたからそんなに慌てないですよ」

お嬢様からアイマスクを預かると、それを身に付け、周りが何も見えなくなつた。なんだかちよつと怖いな。目が見えなくなつたらこんな感じなのかな……

ピンポーン、ピンポーン

「あ、詩織来たみたい。それじゃ私がリードするからついてきて」

「わかつた。ちよつと早い!早いって!めちやくちや怖いんだからね!」

いつも通りの歩くペースで私をリードするお嬢様を叱りつけ、渋々車の中へと入つた。車中では、珍しく詩織さんが何も喋らず黙つて運転していたみたいだった。この時

点で気付いていればあんなことにならなかったのに……

車を走らせてどのぐらいたつただろうか。どうやら目的の場所についたらしく、お嬢様が私の肩をとんとんと叩き、車の外へと案内した。

「もう少しだからまだ取らないでね」

「うん……ちよつと怖いよエレナ」

ずつと視界を奪われたままで、私のメンタルは想像以上に参っていた。

「ごめんね。でも大丈夫だから。もうすぐよ」

エレベーターだろうか？ピンポンという音が聞こえ、上に参ります。という機械的な声が私の頭に鳴り響いていた。

エレベーターを出て少し歩いたところで、お嬢様は立ち止まった。

「お待ちせ楓。目開けていいわよ」

「うん……」

そして私が目を開けた先に広がっていた光景は……

「信つじらぬ!! ホントにバカなんじゃないの!!! 目隠してて長い間怖い思いして目開けてどんな素敵なところかと思つたら、なんでダブルベッドが1番に視界に入ってくるの!!!」

「いや、その……たまには志向を変えて見ようかなって……」

お嬢様は、私がかこまで怒るとは思っていなかったのだろう。あからさまに顔色は悪くなっていた。自分の失態にどうやら気づいたみたいだ。

「はあ……もうほんつとにエレナって頭の中エツチする事以外考えてないんじゃないの？この性欲魔人。ってか何で普通に立つてるわけ？謝る態度じゃないよねそれ」

「そ、そこまで言わなくても……」

「うるさい。早く正座して」

私は、お嬢様を軽く突き飛ばすとベッドの上に座り、お嬢様を見下ろす形となった。

「はい……すみませんでした……」

結局こーなるのか……私は、言いたいことを言ったせいもあつてか、怒りなどは消えていた。もうお嬢様もDMモードに入っちゃったし、もう流れに身を任せようかな……

「ちよつと？何いきなり人の足触ってるの？汚い手で触らないで貰える？」

「いや……いつもみたいにやるのかなって思ってた……」

言葉は弱々しいが、お嬢様は息を荒らげ今すぐにでも私の足にしゃぶりつきたくて仕方なさそうだった。ちよつと今回はせつかく私がわざわざ目隠しのために使ったアイマスクがある。私は、それを使うことにした。

「エレナ、これつけて」

私は、お嬢様にアイマスクを差し出した。

「え？アイマスク？」

「え？じゃないよ早くして」

「はい……」

お嬢様は、これからどんなことをされるか期待してか、頬は赤く染まっただけで、相変わらず吐息は荒々しかった。どうやら早く虐められたくて仕方がないみたいだった。

「エレナ、私の膝の上座っていいよ。ほら早くして。真っ直ぐ進むだけなんだから猿でも出来るよ」

「わかりました……」

お嬢様が恐る恐る私のひざの上に腰を下ろした。

「それじゃどーしよっかな。エレナは、どう虐められたい？」

私が耳元で小声で囁くとお嬢様は、体を震わせながらモジモジと膝を擦り合わせていた。

「焦らさないで……お願い楓……」

「仕方ないなあ。でもまだ触ってあげない」

そう言っただけで私は、お嬢様の耳元をべろっと舐めた。

「んー!!これやばいっ!」



どうやらお嬢様にアイマスクは、効果は抜群だったみたいだ。いつも以上に感じているのか、私の膝がお嬢様の愛液で湿ってきているのが分かった。

「可愛いよエレナ。もっと壊れていいからね」

そう言つて私は、お嬢様の敏感な所のすぐ側を指で軽くなぞつてお嬢様の反応を楽しんでいた。

「もう勘弁して下さい……あたひ壊れちゃいましゅ……」

流石のお嬢様も限界なのか、滑舌も怪しくなっていて、目が虚ろになっていた。

「そーだね。ここまで頑張ったご褒美上げるからもうアイマスク外していいよ」

そう言うとお嬢様は、アイマスクを外して私の膝から崩れ落ちるように床へと座り込んだ。ずっと焦らされていたからか、まともに立てなくなっていた。

「かえれ……欲しいの……」

「何が欲しいのか言ってくれなきゃわかんないよ」

「足が……舐めたいです……」

「いいよ。エレナの好きにして」

私は、何も身につけていない生足をお嬢様の前に差し出した。

「楓……」

いつもみたいにしゃぶりつくかと思つたが違うみたいだった。お嬢様は、私の右足を

持ったまま、私を見つめていた。まるでそれは、犬が飼い主の命令を待っているみたいな光景だった。

「ふふっ。そういう事ね。ごめんね気付いてあげられなくて。私の足を舐めなさい！」

「はい！エレナ感激です!!!」

「だからそれはやめて……」

私は、笑いを堪えながらお嬢様が一生懸命になって足を舐めているのを見ていた。

## 番外編 七夕祭り 前編

番外編

七夕の2人

「もう少ししたら夏季休暇だねエレナ」

私は、部屋のリビングで紅茶を飲んでいるお嬢様に話しかけた。季節は春から夏に姿を変えようとしているところだった。今年の6月は梅雨らしくない6月でほとんど雨も降らずにいい天気が続いていた。

「そーね。まあそんなに暑くならないといいけども……去年は家から出たくなかったもの」

お嬢様は、台所で夕食の片付けをしていた私の方へ体を向けて返事を返した。

「家から出たくないのはいつものことじゃん。私が誘った以外で家から出たことないでしょ?」

「そ、そんなことないわよ!私だって家から出る時ぐらいあるわよ!」

少し顔を赤くして反論するお嬢様。自分の中に思うところがあつたのだろう。

「ふーん？なら今度の夏季休暇は、たくさん外で遊ぼうね！海に山に川に！「ちよ！ちよ」と待ちなさい！そんなに出掛けるとは言ってないでしょ？」

話を遮られてしまった……やっぱり家から出たくないんじゃないんじやん……

「じゃあ他の女の子と遊んでくるけどいいよねエレナ？」

「別にいいわよ」

「わかった！じゃあジェシカと泊まりで！」

「それはダメ！」

「ん？なんで？」

「いや……だって……別に浮気とかは疑ってないけど泊まりって言うときそういう雰囲気になりにかねたり……」

小声でボソボソと喋るお嬢様。私をどんな目で見てるのか少し分かった気がする。いったいどこをどう見たらそういう雰囲気になるって言うんだろう……

「なるわけないでしょ……なに？そんなに私がたらしにでも見えるの？」

「そういう訳じゃないけど……とにかくダメ！ジェシカと遊ぶなら詩織でも連れてけばいいでしょ」

「はいはい。まあ何処かしら行こーね。せつかくの夏季休暇なんだからさ」

「わかったわよ……」

お嬢様は、バツが悪そうにそっぽを向いてしまった。ホントにこの人は……

翌日、6月30日、私達は夏季休暇前最後となる講義を受けに大学へ向かっていた。

「おつはよー!!エレナ!楓ちゃん!」

「あ、天音様おはようございます」

緒方天音様。お嬢様の数少ない友達の1人である。数少ないって言うより3人ぐらいいるうちの1人かな……お嬢様友達とかいらないうって言う主義だからね……

「今日も可愛いねー!あれ?シヤンプー変えた?いつもと違う匂いがする気がする」

「え?なんでわかったんです?」

「毎日楓ちゃんに抱きついててわからないじゃないじゃん!」

それを胸を張って言われても困るんですけど……天音様とは中学校の頃から学校と一緒に居ており、何故か毎日のように私に抱きつくのが日課らしい。

「ちよつと天音。楓が困ってるじゃない。離れなさいな」

すかさずお嬢様が天音様から私を離す。これをやり始めたのはお嬢様と付き合った高校二年生の時から。その時天音様はめちやくちや驚いてたっけな。いつもは気にもしない絡みを止めたせいで1発で私達が付き合ってるってバレたよね。まあ言ったのはお嬢様なんだけど……

「はいはい。ん？もしかしてエレナの匂いかなこれ。楓ちゃんとエレナ同じ匂いがするよ。もしかして朝から……」

「してないわよ！たまたま楓のシャンプー切らしちゃってたから、貸しただけよ」

「ホントかなあ？エレナ時間と場所弁えずにそういう事するじゃん？んで楓ちゃん、朝からエレナのDMに付き合ってたの？」

ニヤニヤしながらこちらを向いて話す天音様は、本当におじさんみたいだった……その手の話大好きだからなこの人……

「本当の事ですよ……買い忘れちゃってエレナの借りたんですよ」

「なーんだ。でもさ、私と同じ匂いがする……とか言ってエレナに迫られたりはしたでしよ？」

「まるで見てみたいに言いますね……確かにそれは仰る通りです……昨日も全力全開で大変だったんですよ……まあ朝からこんな話しても仕方ないので早く学校行きませしよ」

「だねー。もうエレナお猿さんだもん。さゆりも何顔赤くしてるの？もうエレナのあれには慣れたでしよ？ほら行くよ」

「え?!別に赤くなんかしてないもん!」

まだまださゆりは純粹らしい。私もこんなはずじゃなかったんだけどな……

「ちよつと楓！」

顔を真つ赤にしたお嬢様が何か言いたそうだったが、私はそれを無視して学校へと向かった。

学校へ着くと天音様達は1年生の教室へ。私達は2年生の教室へと向かった。飛び級した私達とは一学年差があるからね。

「楓おはよー!!それと月村」

教室へ入ると小柄で水色の髪をツインテールに結んだジエシカが私の方へと駆け寄ってきた。髪がびよこびよこ跳ねてるみたいですね。身長と体格のせいか大学生というより中学生に見えちゃうのは仕方ないよね？

「おはよジエシカ」

「おはよ。なんで私がついでみたいになつてるのかしらね……」

「別にそんなことないよーだ！あ！楓は七夕祭り行くの？月村と行かないなら私といこーよー！その日はウチに泊めてあげるからさー！」

「え？七夕祭り？」

「もしかして楓知らないの!?近くの神社で7月7日にやるんだって。なんでもカップルで短冊に同じ願いを書いたらそれが叶うんだとかで有名なお祭りなんだってソフィが

言ってたよ」

そんなお祭りがあつたんだ。去年の七夕の日何してたっけな……

「そーなんだ。エレナどーする？ 私ちよつと気になるから行つてみたいんだけど」

私は、横に座つて講義の準備をしているお嬢様に声をかけた。

「え？ 私？ 嫌よ。お祭りなんて人混み行きたくないわ」

「ならジェシカと2人で行くけどいいよね？ 夜も泊めてくれるつて」

「はあ!?! ダメよ！ なんてそういう話になつてるわけ!?!」

この人全く話聞いてなかつたな……

「聞いてなかつたの!?! 七夕祭りつていうのがあるんだつて！ それでジェシカから誘われてたの!」

「そーいーこと！ じゃあこの日楓貰うからね月村」

「あーもー……なんでこうなるのかしら……ジェシカそれはダメよ。どうしても楓と行きたいなら私も連れてきなさい。ついでに天音ときゆりちゃんも誘つて行くわよ。お祭りも大勢で行つたほうが楽しいと思わない?」

お嬢様にしては、まともな意見だなと思つてしまった。まあ普段は超がつくほどのカリスマ性の持ち主だからねお嬢様。私が絡むとポンコツになるけども……

「ま、まあ確かに……いいわ！ じゃあ7日の夕方に月村のお屋敷に集まりましよ！ それ



でいいわね？」

「なんで私の家なのよ……まあ別にいいけども」

こうして、なんだかんだでお嬢様を外に引つ張り出すことに成功した。こうでもしないとお嬢様ホントに動かないからなあ……それにしても七夕祭りかあ……楽しみだな。浴衣用意しなくっちゃ！確かクローゼットの中にあつたと思うんだよね。

時は流れて七夕祭り当日の朝。私は、朝早くから浴衣の着付けの練習をしていた。

「エレナどーしよお！浴衣なんて普段着ないからどうやればいいのかわかんない！」

未だ布団で寝ているお嬢様を叩き起してやり方を教わろうとしたのだが……

「んー……もう何よ朝から……え？浴衣の着付け？知らないわよ。私浴衣なんてお母様がいた時にしか着たことないわよ。それじゃ夕方方になつたら起こしてちよーだい。おやすみ」

「え？ちよつとエレナ!?!嘘でしょ?」

「すー……すー……」

既にお嬢様は、二度寝を決め込んだようで規則正しい寝息が聴こえていた。

「どーしよ……せつかくのお祭りだし浴衣着たかつたんだけどな……あーそーだ」

私は、着付けが分かりそうな人に電話をかけてみた。

「もしもしお母さん？ちよつと聞きたいことがあるんだけど今大丈夫？」

『ん？別に大丈夫よ』

私が電話をかけたのはお母さんだった。もしかしたらお母さんなら知ってるかもと思いい電話をかけたのだ。

「実は今日エレナと七夕祭りっていう所に行くんですけどせつかくだから浴衣着ていこうかなって思ったんだけど着付けのやり方がわからなくて……それでお母さんなら知ってるかもって思って電話したんだけど……」

『なるほどね。浴衣の着付けね。わかった！仕事終わってからなら行けるから15時とかでも大丈夫かな？それでよければやりに行くよ』

「ホントに!?ありがとうお母さん！じゃあ待つてるね！」

『はい！それじゃまたね』

そう言つて電話は切れた。

「暇になつちやつたな……私も少し寝よう……」

私はお嬢様が寝ているベッドに潜り込んで仮眠をとることにした。夏季休暇に入つたことだし少しぐらいだらけてもいいよね。

「楓、楓起きなさいってば！」

「うーん……」

頭上からお嬢様の声がする。もうそんなに時間経ったのかな……

「うーんじゃないわよ！もう15時前よ。そろそろ支度しないと間に合わいんじゃない？」

「ふえ!?もうそんな時間!?お母さんも来るし危なかった……ありがと起こしてくれて」

「お母さん?」

「うん。浴衣の着付けしてもらうんだ。エレナもどう?」

「うーん……浴衣って動きづらい印象しかないのよね……私は楓の可愛い浴衣姿見れたら満足だし遠慮しておくわ」

せつかくのお祭りなのにお嬢様は、相変わらずみたくだった。私もお嬢様の着物姿見たいんだけどな。黒髪ロングに着物とか絶対似合うもん。それに浴衣って勝手なイメージだけと胸ない人の方が綺麗に見えるんだよね。清楚というかなんていうか表現しづらいけども。

「私もお嬢様の浴衣姿みたいなの……絶対似合うと思うよ。ダメ……かな?」

私は、上目遣いでお嬢様の目を見詰めた。こういう時毎回使ってきた必殺技だ。なんだかんだちよろい人だからいけるはず。

「そんな頼み方したって嫌よ」

「そっかしてくれるんだね。ってえ!?!ダメなの!?!」

「いつもそれで通せると思っただら大間違いよ。今日の私は意思が固いの」

それがダメなら……あまり使いたくなかったんだけど最後の手段使おうかな……

「はあ……あのね……恥ずかしいけど聞いてもらってもいいかなお姉ちゃん」

私は、わざとエレナと呼ばずに付き合いたての頃呼んでいた「お姉ちゃん」というワードを使った。

「ん?何よ」

私は、お嬢様の耳元でこう囁いた。

「一緒に御願い短冊に書いて、その後家帰って来たら浴衣で……っしてしてみたかったんだけどごめんね。お姉ちゃんそういう気分じゃないんだもんね……」

「へ!?!か、楓今なんて。えつと……わかったわよ。私も浴衣来てあげるからそんなに悲しそうな顔しないで」

計画通り。

「ホントに……?」

「ホントによ。じゃあ私も浴衣探すからリビングで待っててちよーだい」

「わかった!」

「楓……」

気が付けば部屋の前にお母さんがいた。どうやら話に夢中になっている間に合鍵で入っていたみたいだった。

「あれ?お母さんいつの間にいたの?」

「貴方がエレナちゃんの耳元で何か言ってた辺りからかな……娘のそういう所は見たくなかったわね……一体誰に似たんだけか」

「お母さんに似たんじゃない?佳奈さんにも同じようなことした事あるでしょ?」

「そう言われると……ま、まあその話は置いといて早く着付けしちやいませよ!私もこの後佳奈と予定あるからあんまり長居は出来ないのよ」

「ごめんね忙しいところに」

「いいのよ。可愛い娘のためだもん。ほら早く服脱いじやって」

「ありがとうお母さん」

私はそう言うのと部屋着を脱いで、お母さんにオレンジ色の浴衣を渡した。浴衣には楓の模様もついていて、私らしいかなと思ってこれを選んだ。

「あら、綺麗な浴衣。エレナちゃんから貰ったの?」

「うん。好きなやつ持って行っていいよって言われたからこれにしたの」

「そーなんだ」

お母さんは、私と話をしながらもせつせと着付けを済ませ、10分もしないうちに着付けを完成させてしまった。今度着付けのやり方教えてもらおうと。

「はい完成！こつち向いて」

私は、お母さんの方へと振り向いた。

「よく似合ってるわよ。それならエレナちゃんにも可愛いつて言つて貰えるよ！じゃあエレナちゃんも浴衣着るんでしょ？早く呼んでらっしゃいな」

「うん！ありがとうお母さん！エレナー！私終わったよー」

「今行くからちよつと待つてて！」

浴衣で悩んでいるのか、お嬢様はまだ部屋から顔を出さなかった。

数分後、黒い浴衣をお嬢様は持つてきた。朝顔の模様が少しいているだけでシンプルな物を選んだみたいだ。

「ごめんなさいお待たせしました。御願ひ出来ますか？」

「そんな畏まらなくても大丈夫よ。楓は、出ていきなさいな。着替えられるとこ見られるとエレナちゃんも恥ずかしいでしょ？」

「ん？わかつたー」

今更そんなこと気にする関係じゃないと思うけど、まあいいかと思ってお嬢様の着付け

が終わるまで私は、部屋の外で待つことにした。

「楓お待たせ」

「あ、エレナ……………綺麗……………」

私は、お嬢様の美しさに見とれてしまった。

ただでさえ綺麗な人が浴衣を着るとこーなるのか……………でもこんな綺麗な人が人混みなんて歩いたら男の人が放つて置かないんじゃないかな。大丈夫かな……………

「ちよつと、そんなに見ないでよ恥ずかしいでしょ。それに楓だって似合ってるわよ。可愛い」

「えつと……………ありがとう」

急にお嬢様に褒められ私も、ちよつとだけ照れくさくなってしまった。

「ふふ、良かったわね。それじゃ私は帰るわね。気をつけて行ってらっしゃい」

「ありがとうお母さん！」

私達はお母さんにお礼を言うと、リビングで他の皆を待つことにした。

「ねえエレナ」

「なーに？」

「エレナが綺麗すぎて直視出来ないんだけど……………もう少しなんとかならない？」

「はい……………？ちよつとどうしたのよ楓」

お嬢様が心配そうにこちらを見つめてくる。ダメだ……ホントに綺麗すぎて直視出来ない。ってかムラムラしてきたんだけど。何これ？これが男の人がよく言うやりたいつて感情？

冗談抜きに今のお嬢様は、彼女目線から見てもめちやくちや綺麗で可愛い。世界一可愛いと言つても過言じゃないと思う。

「いやだつて……私こんな綺麗な人見たことないもん。それにちよつと化粧してるよね？尚更ずるい。そんなフェロモンの出し方なので教わったの？お母さん？はつきり言うね。やりたくなつてきた」

「ちよ!?ちよつとホントにどーしちゃったよの!？」

私の意識がお嬢様から離れなくなつてヤバイと思つた時だった。

ピンポーン。ピンポーン。

「ほ、ほら楓。皆来たみたいだよ」

「え?あーお出迎えしてくるね……」

今私何を考えてたんだろ……すっかりしなくつちや。そういうのはお嬢様担当だよ。私じゃない。とにかく意識をお嬢様から遠ざけなきや……

「お待たせしました」



扉を開けると各自浴衣を着ていたみたいだ。

「楓ちゃん可愛い!!!よく似合ってるよ!」

「天音様もお綺麗ですよ」

天音様は赤色、さゆりは、黄色の浴衣を着ていた。

「楓はオレンジなんだね」

「うん。なんか皆色被ってなくて綺麗かも。さゆりはなんで黄色なの?」

「天音が選んでくれたからこれでいいかなって」

「なるほどね。ジェシカは……水色か。何着てもジェシカは可愛いよね。前見た私服も可愛かったし羨ましい」

いつもはツイントールにしている髪を、今はロングに変えていた。浴衣に合わせたのかな?

「えへへ。ありがとう楓。楓もとっても可愛いよ」

「ありがと。それじゃお嬢様呼んじやいますね。いい時間ですしお祭り行きましょうか」

「おっけー!」

天音様の返事を聴くと、私は急いでお嬢様を呼びに行った。

「エレナ行こ。ちよウどいい時間だから今から向かおうってなったからさ」

「わかった。楓体調とか悪くないわよね？大丈夫？」

お嬢様は、私のおでこに自分のおでこをくつつけて熱を測っていたみたいのだが

……

「え、エレナ大丈夫だから！ほら行こ!!」

「ちよつと楓待ちなさい！もう……どうしちやったのかしらあの子らしくもない」

もう何考えてるんだろ私！ちよつとお嬢様の胸元見えちゃっただけでこんなに動揺するなんておかしいよ。と、とにかく今はお祭りだよね！切り替えなきゃ！

なんだかんだありながらも私達は、七夕祭りの会場となる神社へと向かった。

## 番外編 七夕祭り 後編

「うわ……凄い人……」

「そりやジエシカでも知ってるぐらい有名なお祭りなんでしょ？そりや来るでしょーよ」

「天音私帰るね」

「待ちなさい！ねえ楓ちゃんも何か言っつてよ？あれ？楓ちゃん？」

「あーごめんなさいボケつとしちやってて。エレナ行くって決めたんだから短冊にお願い事書くまではいてよね」

「わかつてるわよ。ホントに貴方大丈夫？熱とか……」

「ないから大丈夫！行きましょ！」

「ならないけど……」

「ここまでおかしくなるなんてどうかしてる。いつもならこんな事にならないのにお嬢様と初めてのデートだつてこんなに緊張したりおかしくなったりしなかった……風邪とかそういうのでもないしどーしたんだろ。」

「楓ホントに大丈夫？いつもの楓じゃないみたいだよ？」

「大丈夫。ごめんねさゆり気を遣わせて」

「ううん。何かあつたら言つてね」

「ありがとう」

さゆりが心配そうに声をかけた。ただ単に欲求不満でこーもなるものだろうか……流石に有り得ない。ホントに変な病気とかじゃなければいいんだけど……

「ジェシカ、さゆり私行きたい所あるから一緒に来てもらつてもいい？エレナ早くここから出たいだろうし楓ちゃんと一緒に先にお願ひ事書いてきなよ。今の時間ならまだ空いてるみたいだよ？」

「そういうことならそうさせてもらおうかしら。楓、行きましょ」

「わかった。じゃあ天音様、先に失礼しますね」

「はーい！じゃあ私達は食べ歩きしましょ！」

「ちよつと天音早いつて！」

「ええ!?!私も行くのお!?!」

天音様、さゆり、ジェシカは、気が付けば人混みの中に消え、姿が見えなくなつた。

「それじゃ行こつか」

「うん。え……エレナ？」

「せっかく二人きりなんだから手ぐらい繋ごうよ。ダメ？」

「ううん。嬉しい。ごめんね何かさつきから私おかしくって」

「誰にでも本調子じゃない時ぐらいあるわよ。ほら行くわよ」

「うん……ありがとうエレナ」

お嬢様の手を握り返すとほんの少しだけ気持ちが悪く落ち着いた。周りの人から女の子同士で？みたいな反応もされてたみたいだけど、私とお嬢様は恋人繋ぎをしたままお目当ての短冊がある場所へと向かった。

「うわあ……おつきい……」

「凄いわね。私もここまで大きい笹初めて見たわ」

神社の本殿となる場所には1本の大きな笹が植えられていた。高さ的には10メートルぐらいあるのかな。そして、笹の近くに短冊を書く場所があり、そこで短冊を書いて、神社の人に渡していたみたいだった。

「これだけ大きいと飾るのは最後までいいだね」

「そうね。何か重機でも使わないと上の方は人の手じゃ届かないもの」

私は、お嬢様と一緒に短冊を書く所へと向かった。

「こちらへどうぞ。書き終わりましたら近くにスタッフの者がいると思いますので短冊を渡して下さい」

「ありがとうございます」

私とお嬢様は、係の人から短冊とマジックペンを受け取った。

さてと……なんて書こうかな。

「書けたわ」

「え!?!早くない?」

「もうお屋敷出る頃には考え終わってたのよ」

「なんて書いたの?」

「秘密。楓が書き終わったら見せてあげるわ」

秘密とお嬢様は、唇の近くに人差し指を当て私の方にニコツと笑っていた。

まただ……また変な気分になってる。どうしちゃったのよ私の身体。いけない。今は願いたい事考えなくっちゃ。

「うーん……」

いざ書いてみようとするところなのに悩むものだけ短冊って。考え込んでいると横から助け舟が入った。

「そんなに悩むことないと思うよ。直感的に思いついたものでいいのよ。短冊なんてそんなものよ」

「直感的に……なら私はこれしかないかな」

私は、いつも思っていることをそのまま短冊に願いを込めて書いた。

「じゃあいつせーのせで出しましよう。いい？」

「うん」

「じゃあ……いつせーのーせー！」

私とお嬢様は、掛け声に合わせて同時に書いた短冊をテーブルへと置いた。そこに書かれていたものは……

『いつまでも橘 楓と一緒にいられますように。月村 エレナ』

『ずっとエレナとこの先一緒にいられますように。橘 楓』

私は、この短冊を見た瞬間泣きそうになった。お嬢様も同じ事を思っていてくれた。たかが短冊。心のどこかでそう思っていたけれどここまで好きな人と同じ思いだと嬉しいんだなと思えた……

「良かった……楓も同じ事思ってくれてたんだね」

そんなに嬉しそうな顔しないで。

「私生きてきた中で一番嬉しいかも。ホントに楓が彼女で良かったよ」

そんな事言わないで……今そんなこと言われたら私……

「楓……？もう……仕方ない子なんだから」

「だってえ……そんな事言われると思ってなかったんだもん。ひつく……」

私は気が付けば涙を流していた。まさか短冊一つで号泣するなんて思わなかった。それほどお嬢様の存在が私の中で大きいってことなんだろう。

「ほら、泣いてたら短冊渡しにいけないでしょう？ 渡してきてあげるからここで待つてなさいな」

「うん……ありがとうエレナ」

そう言うとお嬢様は、係の人に短冊を渡して戻ってきた。

「少しは落ち着いた？」

「うん。ごめんね恥ずかしい所見せちゃって」

「別にいいのよ。私だって泣きそうなら嬉しいんだから。それじゃお屋敷に戻りましょうか。天音達には私から言っておくから」

優しい笑顔でお嬢様は、私に語りかけてくれる。もうそれだけで嬉しかった。そのあとは、泣いてくしゃくしゃになった顔をお嬢様の背中に隠れながらお屋敷へと戻った。

「はあ……流石に疲れたわ……やっぱり人混みはダメね」

「ふふ、さつきまであんなカッコよかったのに。今日は、ありがとうエレナ」  
「どうしたのよ改まって」

「ううん。今日は助けてもらったしね。ホントにありがとう。大好きだよ」

ちよつと照れくさかったけど私は、今一番言いたいことをお嬢様に言えたと思う。そ



れと……もう我慢出来そうになかった。

「変な楓ね。私も好きよ……ん……もういきなりなんだから……今日は、甘えん坊さんなのね。いいわよ楓。貴方の好きなようになさい」

「ん……もうエレナの事しか考えられないの。エレナが綺麗すぎるのがわるいんだからね」

やっぱり私の不調の正体は欲求だったらしい。だからお嬢様の手を握っていた時は、その症状が和らいでいた。こんな事今まで無かったんだけどな。

「ねえエレナ。最後までいいよね？私今日は、止められないと思う」

私は、お嬢様に問いかけながらも手は勝手に、お嬢様の胸を掴んでいた。

「っん……さつき言ったでしょ。楓の好きなようになさいって。ん！あ！いきなりはげしっ！」

「ありがと……じゃあエレナ。言わなくてもわかるよね？」

私は、お嬢様の前に足を差し出した。浴衣を着ているせいか、お嬢様の視線の先には、私の下着が見えてるんだと思うと、少しだけ恥ずかしかった。

「はい……エレナ感激です……」

この後月村邸では、朝まで黄色い声が響いていたんだとか……

翌朝楓の体調を心配して、お屋敷へと足を運んださゆりが、顔を真っ赤にして緒方邸へと戻ったのはこの2人は知る由もなく……

## こんな寒い日の夜は

季節は、秋季休暇の終わりの11月半ば。長袖1枚では、肌寒さを感じさせる季節へと変わった。

「楓、この寒さどうにかならないの？まだ11月だつていうのにダウン着ても寒いなんて聞いてないんだけど？」

「そう言われても……厚着するしかないんじゃない？」

今年は大寒波が押し寄せ、気温は5度近くを行ったり来たりしていた。そのお陰で衣替えを疎かにしていた私達は、急な気候の変化にめちやくちや苦労していた。

「とりあえず暖房つけてよ……家の中でダウンにマフラーなんておかしいと思わない？後何か温かいもの出して貰えると助かるのだけど……」

「わかった。ちよつと待つてね。詩織さんも何かいります？」

「うん。私は大丈夫。つてかこのぐらいの寒さで音を上げるなんてしつかりしてよねエレナ」

そうエレナに言うのは中村詩織さん。もう1人の月村家のメイドさん。秋季休暇中は、ジェシカのメイドさんが家庭の事情で帰国していたため、ジェシカのメイドをやつ

ていた。ジュシカからは、何故かも二度と寄越さないで！なんて言われたけど何かあつたのだろうか……

えーつと。暖房のスイッチどこだったけな。

「あーこれかな。まさかこの時期に暖房入れると思わなかったけど……エレナが寒いって言うなら仕方ないかな。幸い蓄えはあるから電気代も気にすることないか。えつと……あれ？詩織さん！ちよつと来てもらつていいですか？」

私は、リビングでお嬢様に紅茶を出している詩織さんと呼んだ。

「どーしたの？」

「それが暖房のスイッチが入らなくて……ちよつと私の背じや届かないので直接押してもらつてもいいですか？多分電池切れなのでその間に乾電池持つてきます」

「ん？おつけーよ。このぐらいい任さときなさい」

私の身長は150センチほど。詩織さんは170センチ。20センチもの差がある。私ももう少し身長欲しかったな……さてと、電池どこ置いたかな。確か物置の方に買つておいたやつがあつたと思うんだけど……

「あつたー！しばらく電池なんて使わないからわからなくなつちやつたよ。今後はもう少しわかりやすい所置いとかなきゃ」

お嬢様と詩織さんの元へと戻ると何か揉めているようだった。何かあったのかな？

「はあ?!壊れてるってどういうことよ!この寒い中暖房無しで過ごさせて言うの!」

「仕方ないでしょ!壊れてるものは壊れてるのよ!とにかく業者に電話してみるから今は我慢してよ」

「わかったわよ……あ、楓その電池は必要なくなつたわ」

「壊れてるんですか?」

「そうみたい。詩織が何度いじつてもつかないし、業者さんに見てもらおうしかなさそうね……後、悪いんだけど掛け布団一枚じゃ寒いから寝る前に毛布入れてもらつてもいいかしら?はあ……まさか壊れてるだなんて思わないわよ」

しよんぼりとした顔をしながら話すお嬢様。そんなに寒さに苦手なイメージはなかつただけだな。とにかく風邪引かないように気をつけなきゃだね。

「エレナ。業者さん明後日に来てくれるみたいだからそれまで我慢ね。楓ちゃんも風邪引かないように気を付けなね?私は、自分の家に帰るからさ。お疲れ様」

「わかつたわ。あれ?家?荷物うちに越さなかつたかしら?」

「ちよつと最近色々あつてね。たまに家に来てつて言われてるのよ。それじゃね」

「わかつたわ。お疲れ様。今日もありがとね」

詩織さんは、一言残しお屋敷から出ていったみたいだ。それにしても今日もありがと

う、か。私と付き合う前のお嬢様に見せてあげたいなほんと。

「何よ楓ニヤニヤして」

「なんでもないよー」

「変な子ね」

私は、お嬢様に笑いながら話すと、お嬢様もクスツと笑っていた。ホントによく笑う人になったなとつくづく思う。

「それじゃお風呂沸かしてくるね。ついでに毛布入れてきちやうから」

「ありがとう楓」

「はーい」

やる事をやった私は、お嬢様の為になんとか寒さを凌げる方法がないか自室で考えていた。

うーん……シンプルに温かいものとか作っておこうかな。特にお風呂上がりとか冷えると思うし。後は私からも厚着して下さいねって言うぐらいしかないかな。

コンコン

「楓、お風呂沸いたみたいよ。とつとつ入っちゃいましょ」

「はーい！ちよつと待っててね」

私は、自室を出るとキッチンへ向かいポットの中に水を入れ、お湯を沸かしてからお風呂場へと向かった。

「何してたの？」

「ん？お風呂上がり冷えちゃいけないなと思ってお湯沸かしておいたの。少しでも温まった方がいいでしょ？」

「ありがと。別にそこまでしてもらわなくても大丈夫よ」

「風邪引いてもらっても困るもん。キャツ！もー！いきなり胸触らないでよ！」

「ふふ、お礼よ。ほら体冷えないうちに入っちゃいませよ」

「全く……」

こういうところだけはホントに相変わらずだよ。って思うけどそういう所も含めて好きになっちゃったから仕方ないか。今度仕返ししてあげなきゃだね。

「はあ……まさか機会の故障に振り回されるなんてね。ほら楓もつとこつち来なさいよ寒いじゃない」

「手つきがいやらしいんだけど……お風呂入ってるんだから寒くないでしょ。バカ言つてないで早く体洗つちやいなよ」

「つれないんだから」

つれるわけないでしょ……こんな寒い中やったらそれこそ風邪引くよ……私も体

洗っちゃおっと。

「ねえ楓？体洗ってあげましょうか？」

ニヤニヤした顔で提案してくるお嬢様。いつもの綺麗な顔が台無しですよ……

「あのね……下心丸出しの顔で言われても絶対やだからね。そういう事ばかり考えてるならエレナ置いて先上がるからね」

「あーもー！わかったから！ごめんてば！」

「はいはい……」

私は、結局お嬢様を見捨てられず2人仲良く体を洗いっこしてお風呂からあがった。



## 寂しい気持ち

「寒い……」

「お風呂で遊ぶからでしょ……ほらココア入れたから」

「ありがとう……」

お風呂場で変に盛りあつたせいで、お嬢様は体が冷えてしまったらしい。全く……あれだけ私は言ったのに……

お嬢様は、私が入れたココアを息でフウフウと冷ましながら飲んでいた。ちよつとその仕草が可愛いなんて思いながらも、私も体を少し冷やしてしまつたせいで、寒気が止まらなかつた。

「エレナ、私先寝るね。ちよつと早いけど早く布団の中はいりたいや」

「ん。わかつたわ。私もココア頂いたら行くわね」

「うん。おやすみ」

「おやすみ」

お嬢様と言葉を交わした後、すぐに寝室へと向かつた。

「あつたかい……エレナの言う通り毛布入れて置いて正解だったかな」

布団に入ると先程までの寒気は消え、ぼかぼかと体に熱が回ってくるのがわかった。これなら夜寒さで目を覚ますとかはなさそうかな。

「ふああ……あつたかくなったら眠たくなつてきちやった。エレナまだ来てないけど先寝ちやおうかな……」

「それにしてもまさか機械の故障なんてね。私が産まれてから何かが壊れたなんてことあつたかしら……ないわね……もしかして私月村家次期当主とか言われて何もしてこなかったツケが回ってきたのかしら……明日辺りから少しずつ部屋の設備とかチエツクしなきゃダメかな。それにしても……こんなに広い部屋に1人って言うのは寂しいものね。まあ、少し前まではそれが普通だったんだっけ……」

数年前の私ってこんなひとりぼっちの中よく弱音吐かずにやれたものね。

私は、1人取り残されたリビングで、楓がいてくれたココアを飲みながら少し感傷に浸っていた。なんだかとても寂しくなったのだ。12畳もある広いリビング。照明がついているのも私が今座っているテーブルのみで他は真っ暗。心細くなるのも無理

はなかった。

「私らしくもないわね。変な事考えてるくらいなら早く寝ちやいませよ」

私は、空になったカップを洗ってから寝室へと向かった。寝室への道は常夜灯が照らしているだけで、また寂しく思えた。

「お屋敷の照明変えましょうかね……いつもならこんなこと思わないけど寒さのせいかしら。嫌になるわね」

気温の変化で気持ちも変化するとは、到底思えないが、自分が何故こんなに悲しい気持ちになっているかが分からなかった。

「楓、お待たせ。あら、もう寝ちやったのね」

寝室へとつくと、楓はダブルベッドの上で規則正しい寝息をしていた。私は、楓を起さないように静かに布団の中へと入った。

「エレナ……」

「あ、ごめん起こしちゃった？あれ？」

寝言だろうか、楓が起きているような気配はない。夢の中でも私が出ているんだな。なんて考えたらずしだけ嬉しいような気がした。

「何処にも行かないで……離れちややだよ……ずっと一緒について言ってくれたじゃん……」

「なんて夢見てるのかしら……」

楓の顔を覗くと、とても苦しそうな顔をしていた。どうやらうなされているみたいだった。

「全く……私は、どこにもいかなから安心して寝なさいな」

私は、楓の手を両手で優しく握った。楓の手は、冷や汗で少し汗ばんでいた。

「大丈夫だからね。私はちゃんとここに居るから」

手を握る力を強く込めて、語りかける。私に出来るのはこれぐらいだった。夢の中だろうと楓に、嫌なことがあつて欲しくない。楓には常に笑っていて欲しいから。

「エレナ……?」

「あら、起こしちゃったかな。大分うなされてたみたいだけど大丈夫?」

今度は寝言ではなく、ちゃんとした楓の言葉だった。目も私をしつかり捉えていた。

「よく覚えてないんだけどなんか怖い夢見てた……と思う。あ……ありがとうエレナ。手握つててくれたんだね」

先程までの苦しそうな表情とはうってかわり、楓の表情は、嬉しそうな顔をしていた。「当たり前でしょ。楓にはいつでも笑つてて欲しいぐらいに思つてるんだから。それじゃ早く寝ちやいませよ」

「うん!」

「ちよ、ちよつと楓!? 全く仕方ないわね」

楓は、笑顔で返事をする。私が握っていた手を外してそのまま抱きつくような形で私の胸に顔を埋めてきた。

「えへへ。たまにはいいでしょ?」

「別に毎日してくれてもいいのよ?」

「エツチなことするからやーだよーだ。おやすみ!」

「ふふ、おやすみ」

私は、抱きついてくる楓の背中をさすりながら眠りについた。気付けば先程まで考えていた、寂しい気持ちはどこかに飛んでいった。

## 球技大会？

「球技大会？」

「そーよ！今年からの試みなんだって！でっかく掲示板に貼りだされてたよ？見なかったの？」

「全然気づかなかった……」

お屋敷のエアコンが治って、秋季休暇明けの講義をだらだらと消化していつている中、突然ジェシカから球技大会楽しみだね楓。と声をかけられて何のことだかわからなかったが、そういうことか。でも球技大会なんて大学でやるものなんだ。文化祭とかは聞いたことあるけど球技大会か。寒い時期に体動かせてことかな。

「なんか1. 2年生だけらしいよ？3. 4年生は就活やら、家の事で忙しかったりするらしいから。ほら？ここって一応お嬢様学校でしょ？」

「あー……なんか当たり前の事すぎて皆がそういう人だって忘れてたよ……ジェシカもホントはお姫様だもんね」

すっかり頭の中から消えていたが、ジェシカはロシアのお姫様。本当なら私がタメ口なんてきいていい相手ではないのだ。まあジェシカがタメ口でいいわよ！って言って

くれたからここまで碎けた話し方してるんだけどね。

「まあそんな事はどうでもいいんだけど」

いや、良くはないでしょ。って突っ込みの言葉をしまい込んでジェシカの次の言葉を黙って聞いた。

「それで1・2年生合同で4チームに別れて2つの競技で球技大会やるって書いてあったよ。多分今日のホームルームで言われるんじゃないかな？ 同じチームだといいね！」

「そーなんだ。だねえ。皆で同じチームがいいね」

「皆じゃなくて、私は楓と二人でなら……」

「ん？何か言ったジェシカ？」

「ううん！なんでもないの！あ！先生来たみたいだよ」

ジェシカの言う通り前の扉から私達の担任の先生である濱田先生が入ってくるのが見えた。

「球技大会ね……めんどくさい……」

「お嬢様……」

どうやらお嬢様は、相変わらずのご様子だった。まあ基本的に動きたくない人だもんね。動かせたらとんでもないぐらいの働きするんだらうけど……

「皆おはよー！掲示板はもう見たかな？見てないって人も居ると思うから説明させても

らうね。冬季休暇前の2日を使って球技大会をやることになりました!なんで突然って思う人もいるかもだけどそれには理由があるの。それはね……私がやりたいから!だからだと講義受けるだけじゃ面白くないじゃない?そーよね!?!って事で早速ではあります。このクラスから2名球技大会実行委員をやってもらいたいと思います。各クラスから2人出てくるから1年生は a. b. c で6人、2年生もそれと同じだね。ってことでやりたい人!?やつてもらおう内容としては、競技決めぐらいだからそんなに難しくはないよ」

そんなのやりたい人なんているのかな……お嬢様の方をチラッと見たが、我知らずと言った感じで明後日の方を向いていた。誰もいないんだろうなあ……って感じで諦めていたら私の前の方で手が挙がったのがわかった。

「はい!私やるわ!」

手を挙げたのは青髪が綺麗な女の子。ジェシカだった。よくやるよなあ……なんて関心していた時だった。

「ジェシカちゃんありがとー!周りにもういなさそうだし、ジェシカちゃんにもう1人決めてもらいましようか!もちろんこんな可愛い子に私と……しよ?なんて言われて断る人はいないよね?」

先生も変にテンション高いなあ……まあソフィさんでもやるんじゃないかな。専



属のメイドさんだしね。

「え?! いいの?! なら楓! やろ!」

ん? 私の名前呼ばれた気がするけど気のせいだよな? 嘘だよな?

「つてことごと指名入りました! 橘さん宜しくね! 今日のお昼休みに会議室に2人で来てね! それじゃ朝のホームルームはおしまい!」

そう言うのと濱田先生は教室を後にした。

「うそでしょおおお!! なんて私!」

「え? 好きな子と2人になれるチャンス使わないわけないじゃん。それに私イベントとか大好きなんだもん。宜しくね楓!」

青髪をびよこぴよここと跳ねさせながら話すジエシカ。つていうか……

「あの……私が断った意味は……」

そう。私は、ジエシカから以前告白された時にきつぱりと断っている。好きなままでいてもいいですか? と言われ、ジエシカが傷付くと思ったから断ったつもりだったんだけど……

「あーあれ? やつぱりやめた!」

「ええ!? 私が悩んだ意味は……」

「最初は、諦めるつもりだったんだけど、やつぱり楓可愛いなあ……好きだなあつてなっ

ちやつてもーいいかなつて。えへへ、ダメ？」

少し照れながら話すジエシカは、とても魅力的で……って何を言ってるんだ私わ。もういいやなんでも……

「ま、まあとにかく指名されちゃったからにはしつかりやるけど、私運動は得意じゃないからね？」

「大丈夫！全部私がやってあげるから！あ！そろそろ一限の講義行かなきゃだから行くね！ソフイ！行くわよ」

メイドのソフイさんを連れて、ジエシカは教室の外へと出て行った。ホントに嵐か何かかな……

「貴方も面倒なのに好かれたものね」

「お嬢様……見てらしたんなら止めてくれても良かったんじゃないですか？」

話が終わったのを見計らってか席に座っていたお嬢様がこちらにやってきた。ちよつと前のお嬢様なら楓と二人つきりにさせるわけないでしょとか言つてた気がするけど、何か心境の変化でもあったのかな。

「まあジエシカに取られるとも思わないし、たまにはあの子にも譲つてあげてもいいかなつて思つただけよ。それに彼女が褒められて悪い気はしないでしょ？後なんでメイド口調？今周りに誰もいないわよ？」

最近のお嬢様ホントに甘くなつたよね。まあ優しいお嬢様も好きだからなんでもいつか。ジエシカとも最初は険悪な雰囲気だったけど最近は普通に話してるもんね。

「なるほど……大学ではこつちにしてるんです。変に気付かれても嫌ですからね。それじゃ私達も講義に向かいましょうか」

「そーね。あんまり話し込んでると遅れちゃうかもだし。鞆持つて貰えるかしら？」  
「もちろんです。失礼します」

私は、球技大会実行委員の事を頭の片隅にいれながら午前中の講義を受けていた。

『球技大会実行委員の方は会議室にお集まり下さい。繰り返しします。球技大会実行委員の方は会議室にお集まり下さい』

わざわざ放送流れるんだね。まあ忘れてる人もいるかもって保険かな。

「ほら楓呼ばれたわよ。行つてらっしゃい」

「行つてきます。お弁当は、鞆の中に入っていますので」

「私の事は大丈夫だからほら、早く行つちやいなさいな。頑張つてね」

「ありがとうございます」

お嬢様から背中を押され、私は会議室へと向かった。

## 種目決め

「あ！楓！こつちこつち！」

会議室に辿り着くと、青髪をびよこびよこ揺らして中で私をジエシカが呼んでいた。なんだか妹から手を振られているみたいで、少し微笑ましかった。

「ごめんね待たせちゃって」

「ううん、そんな事ないよ。他の実行委員の人達はまだみたい」

「そうみたいだね」

周りを見渡してみると誰一人としていなかった。少し早かったのかな、なんて思っている……

「あれ？楓ちゃんにジエシカ？」

会議室の入口から名前を呼ばれたと思い、振り返ると、そこには天音様とさゆりが立っていた。

「天音様？実行委員になったんですか？」

「なんか楽しそーだなって思っ！さゆりは、まあ半強制みたいな感じだけだね」

「あはは……そうなんですな」

「ホントに勘弁して欲しいって感じだよこつちわ……いきなり私やります！ って言っただと思つたら私の名前まで出すんだもん。メイドで断れるわけないじゃん」

さゆりは、実行委員とかそういうタイプじゃないもんね確かに。

「まあいいじゃん楓ちゃんもジェシカもいたんだしさ。このメンツなら絶対面白いって。それにしてもよくエレナがジェシカと2人なんて許したね」

「少し丸くなった……？ って言うより普通に友達として接してるとて思ったからじゃないですかね」

「まあそんなもんか。あ、先生来たみたいだよ」

天音様が言った通り会議室に濱田先生が入ってきたみたいだ。

「お待たせー！ ってあれ!? これだけ？ 残り4組来てないよね？」

「そうですね……サボリですか？」

「んー……私もお昼食食べれなくなるの嫌だからもう始めよ！ それじゃ早速だけど競技についてね。一応予定では2種目。1日で準決勝までやって、2日目で決勝戦という形になります。だから2日目は午後集合って形になるかな。これ大事だからメモしておいてね」

なるほど……ってことは1日目負けたら2日目休みになるんじゃないのかな？ いやいや流石にそういう考えはよくないよね。やるからには私だって勝ちたいし。

「それって1日目に負けちゃえば2日目お休みになるってことですか？」

前にいるさゆりが濱田先生に質問していた。きつときゆりは休みになるなら休みたいんだろうな。あんまり運動得意な方じゃないっていうのは私も知ってるし。

「なりません！そんな事にしたら皆負けに行くでしょ？負けたチームには普通に講義を受けてもらいます。これで少しはヤル気でしたしょ？それに優勝クラスには2週間講義に出なくても出席にしてあげます。有給みたいなものね」

「そんなこととしてよく校長に怒られなかったですね……」

ジェシカがぼそつと横で呟いていた。

私もそう思う……どれだけイベントやりたいんだ濱田先生。

「この生徒しつかりしすぎて、正直2週間ぐらい休んだところで留年になんてなりそうな生徒いないのよね。だから許可がおりたって感じかな。これは、皆に言っちゃダメだからね」

「まあ確かにそう考えてみると……」

「でしょ!?それじゃ競技決めよつか!!何かやりたいことある人!早い者勝ちだよ!4人しかいないんだから多数決取っても仕方ないからね」

早い者勝ち!?適当すぎでしょ……えっと、お嬢様が得意な球技……得意な球技……あれ?もしかして全部得意なんじゃあの人……

「はい！」

「お！ジェシカちゃんどぞ！」

元気よくジェシカが先生に向かって手を挙げていた。なんだか中学の頃の授業を思い出すなあ。高校からは、ジェシカみたいに元気に手あげる子いなかったもん。

「私前からドッジボールってやってみたかったの！あれも球技に入るよね？」

「もちろん！じゃあまずドッジボールと。それじゃジェシカちゃん以外で誰かいないかなあ？誰もいないなら先生決めちゃうよ？」

「んー……それはなんかやだからはい」

「お、伊集院さん。珍しいところから手が上がったわね」

私も先生と同意見だった。てっきり天音様が発言するのかと思つたが、さゆりが珍しく手を挙げていた。何かやりたいものでもあつたのだろうか。

「野球はダメですか？1クラス15人はいますしちようどいいかなつて。それに野球にしたらめんどくさがつて出てこないお嬢様引つ張り出せるんじゃないかなつて。うちのクラスには天音様がいますし、橘さんのクラスには月村さんがいます。一応この学校での発言力は、トップクラスだと思います。試合に出なかつたら貴方の家どうなるか、分かるわよね？とかいえば出てくるんじゃないかと」

「黒いよ！さゆりが黒いつて！」

横から笑いながらツツコミを入れる天音様。なんか今さゆりの黒い部分が見えた気がするよ。確かにこのお嬢様学校の中でも月村、緒方のネームバリューは凄いものだ。それ故にさゆりは、利用しようとしたのだろう。ただ、今のお嬢様はそういう事言わないと思うんだけど……

「だって私だけ天音様に巻き込まれるのはおかしいですもの。ドーせなら皆巻き込んでやった方が面白いですよね先生？」

「え、ええ。まあそうですね。じゃあ2種目は野球で決定！ちなみにチーム決めは面倒くさくなったのでクラス対抗にします！それじゃ解散！」

「ええ!?それだけですか!？」

「それだけよー。後は球技大会までにドッジボールは特にやることないだろうけど、野球の方はポジションやら打順やらルールの確認とかあるから頑張つてね！私お腹すいたからもう戻るからねー」

「ええ……」

実行委員4人は、その適当加減にため息をつくことしか出来なかった。それにしても野球はやばいなあ……多分お嬢様ピッチャーなんてやったら1人で試合終わらせちゃうと思うんだけど……

「楓！こーうしちゃいけないよ！クラスの皆に野球のこと話に行こー！」



「ちよつと引つ張らないで！ジェシカア!!!」

私は、ジェシカに腕を掴まれて強引に会議室から教室までのランニングをした……なんだか走力が上がった気がするよ……

「アハハ……ジェシカちゃん凄いやる気だね。私達も負けてられないよさゆり」  
「天音が勝ちに行くなら私も少し頑張ってみるよ」

こうして各クラス球技大会に向けて準備を始めていくのだった。

## クラス内紛争

「つてことで！ドッジボールと野球に決まったわ！球技大会まで残り3週間ぐらいしかないけど皆で協力して優勝しよーね！」

会議室から帰ってきて直ぐにジェシカは、クラスの皆に球技大会のことを話していた。講義の取得の関係でクラス全員が一緒にいることなどほとんどないため、たまたまタイミング良く全員が集まっていた今、ジェシカが皆に声をかけたのだった。

「あれ？ちよつと皆話聞いている!？」

ジェシカが教壇で話すも、周りの人は聞く耳をまるで持っていないかった。友達と話していたり、本を読んでいたり外を眺めたりとやっている事は分かれているが、これだけはハッキリしていた。球技大会に興味が無いって言うことだけは皆同じみたいだ。お嬢様も窓の外ぼんやり眺めてるし……流石にこれじゃジェシカが可哀想だよこんな一生懸命話しかけてるのに。よし。私だって実行委員なんだからちゃんとしなきゃ。

「すみません皆さん聞いて頂けませんか!?!優勝したら色々特典もあるんですよ!2週間講義に出なくていいみたいですよ!それに、1日目勝てたら、2日目は午後から決勝戦で2時間出るだけで単位貰えるんですよ?お得だと思いませんか?」

私が声を出してチラツと私の方を見てくれる人はいたが、現状は変わらなかった。

「あ、あのお！皆さんそろそろ真面目に……どうしようジェシカ。皆全然話聞いてくれない」

「やっぱり私みたいな小さい子の話なんて聞いてもらえないのかな」

ジェシカも、いつもの明るい表情から一転して悲しそうな顔をしていた。こういう時お嬢様ならどうしただろうか……あれ？お嬢様？そう言えば姿が見えないけどどこ行つたのかな。どうでもいい話だと思つて時間潰しにでも行かれたのだろうか。

「ちよつとあんた達！うちのメイドの話聞けないなんていい度胸してんじやない？言つとくけどこんな調子で勝てるなんて思わない方がいいわよ」

知らない間にお嬢様も教壇へと上がつていた。見兼ねてこちらへ来てくれたのだから。ホントに優しすぎだよ……

「何よ。飛び級してチャホヤされてるからつて歳上の私達に指図するわけ？別にどうでもいいじゃない球技大会なんて。ねえ皆？」

「だねー。第1月村当主とかなんだか知らないけど態度デカすぎじやない？」

「うんうん！そーだよね！」

どうやらこのクラスにもグループがあるらしく、恐らくカースト上位の人達だろう。最初にお嬢様に噛み付いてきたのは、綾小路由紀さんだったかな。結構な所のお嬢様つ

て聞いた。続いて話したのは乾梨花さん。この人は綾小路さんにベタ惚れしてるの  
かってぐらいいつも一緒にいたと思う。それで最後が宇田恵子さん。この人は、言い方  
が悪いかもだけど自分の意見を持ってないのかな？って思う時が結構あった。2人が  
意見を出したらそれにくつついて便乗してるってイメージしかないかな。

それでお嬢様はどうするんだらう……入学してから2年間ほとんど学校では目立つ  
ことしてないからなあ。周りの人がお嬢様をどういう風に思っているのかもわからな  
いし。同学年なら、お嬢様の怖さとかを中学の頃から知ってるだらうけど相手は歳上だ  
からなあ……

「言いたいことはそれだけかしら？」

お嬢様は、呆れたような顔をして綾小路さん達を見つめていた。てつきりもつと激昂  
するんじゃないかと思っただけでそうじゃないらしい。

「はあ!? 舐めてんの!? その態度もムカつくのよ人を見え透いたような態度。私に勝てる  
の? みたいな。ホントにうざい!」

「だよね。美少女だとかおだてられてるけどホントに人を見下してるみたいでうざいよ  
ね」

「うんうん! ホントにそーだよね!」

ホントにこの人達は……私もお嬢様をここまで侮辱されて、これ以上は我慢できそう

もなかった。

「あの一!!」楓。下がりなさい。これは私の問題よ」

飛び出そうとしたらお嬢様がすかさず右手を出して私を制止させた。

「ですが!」

「心配いらぬわ。あんな屑と言いつ争いした所で何も無いもの。もうこれ以上の争いは不要だわ。あーでも、最後にひとつだけいいかしら?」

「何よ」

「どーやらヤル気あるクラスが1ーaと2ーaだけみたいなのよね。それで私は、貴方達なんかと同じチームでやる気は無いのよ。貴方達にチャンスを上げるわ。私達は5人チームで野球もドッジボールも出てあげるわ。それ以外の子は貴方達に上げるから私に一勝でも出来たら、この学生生活私をパシりに使っていいわよ。何でも貴方達の事を聞いてあげるわ。3回回ってワンって言いなさいでもなんでもいいわよ。どうかしら?」

「アハハ!!こいつ何言ってるの!?!野球つて5人でできるスポーツじゃないんですけど!これでも私と梨花は、中学の時までバッテリー組んでたんだからね?それで勝てるわけないじゃん!もう月村が言ったこと訂正はさせないからね。受けて立とうじゃない。1ーaから誰をとるのだけ教えてよ」

「わかってるわよ。私の球にバットがかすれば勝てるかもね。緒方天音と伊集院さゆりだけ貰うわ。それ以外はいらぬ」

「っ！ホントにイライラする！覚えてなさいよ！貴方に生きてても辛いぐらいのこと命令してあげるんだから！」

そう言う綾小路さんは、教室の扉を強く閉め、外へと出ていった。

「ちよつと月村！いいの!？」

「そうですよお嬢様！少なく見ても向こうには20人超えてるんですよ！ドッジボールはどう考えても数が多い方が有利ですし、野球に至っては、どう考えても不利ですよ！」

私は声を上げて抗議した。仮に負けでもしたらお嬢様がどうなるかわかったものではない。

「うるさいわよ貴方達。何言ってるの？この学校に私と天音より運動神経いいやつなんているわけないじゃない。それに野球も私と天音に打順が多く回れば回るほどチャンスになるわ。とにかく天音とさゆりちゃんを呼んで貰えるかしら。講義なんかに出る気がなくなつたわ。今すぐお屋敷に呼んで頂戴」

「ええと……お嬢様の意思ということならわかりましたとしか言えませんよ……」

「ありがとう。ジェシカもそれでいいわね？仮に負けても責任は全部私取るから心配しないでちょうだい」

「でも……」

「そんな暗い顔しなくていいのよ。貴方は笑つてた方が可愛いんだから笑つてればいいのよ。そーとわかれば作戦会議よ。貴方もお屋敷に来てちょうだい」

お嬢様は、しゅんとなったジエシカの頭を撫でていた。ここまでお嬢様が心身ジエシカを気遣っているのは初めて見た。教壇で一生懸命に話してたのお嬢様も見てたもね。

「わかった。でも負けた時は私も一緒になって責任取るからね！お姫様舐めないで！」  
「ふふ、安心しないでいいわ。絶対負けないから」

そう言う外で待機させた詩織さんの車へと向かったのだった。

## 作戦会議

「あんたバカア!? 綾小路さんと乾さんって中学の時の全国優勝した時のバッテリーなんですけど!」

お屋敷に皆を集めると、すぐに今回のことを天音様とさゆりに伝えた。ちなみに濱田先生にこのことを伝えると、周りの人ヤル気ないし企画倒れしたくないし、なんだか楽しそうだからいいよ!と快く引き受けてくれた。まあ最後の方が本音だろうけど。

「マジで?」

「マジよ。きつとお嬢様って立場がなかったら高校でも野球の強い有名校に言ってるはずだつてメディアが言ってたもの。ちなみに宇田さんもその時の優勝メンバーの1人よ。2番セカンドで打率も4割以上残してるわよ」

「やけに詳しいわね。貴方そんなに野球好きだったかしら?」

「お父様が野球好きなのよ。その影響で小さい頃から私も少しやってたの。それでどうすんの?」

「そうね……」

お嬢様も相手がそこまでの大物だとは思っていなかったのだろう。考え込むように



解決策を探しているようだった。

「はあ……ホントにエレナって直感といつかなんといつか……バカよね。流石の私も驚いたわよ。とにかく野球の方の作戦は私とさゆりで考えるからドッジボールの方なんとかしてよね。本番までそう時間ないんだから」

「任せたわ。それでジェシカは、ドッジボールやるの初めてなんだっけ？」

「うん。ルールぐらいなら知ってるって感じかな」

「わかったわ。ちよつと自室でまとめてくるから少し待ってて頂戴。それと皆に何か飲み物出してあげて」

そう言うとお嬢様は、リビングを出て、1人自室の方へと歩いて行った。

「わかりました」

「え？楓、月村1人に任せていいの？」

「昔からなんだけど、エレナが自室で何かやる時には、声かけるなっていうルールだったの。今はもう違うと思うけど、あそこまで真剣なエレナの目見たら私達は、逆に邪魔になっちゃうかもしれないからさ」

「わかった」

私は、お嬢様に言われた通り天音様、さゆり、ジェシカに飲み物を配ってお嬢様を待た。天音様達の方も時折、口喧嘩をしながらも着々と作戦を建てているようだった。

「お待たせ。私の方はある程度固まったわ。悪いんだけど飲み物貰ってもかしら」  
「そう言うと思うて用意しておいたよ」

私は、予め用意しておいたアイステイをお嬢様へと手渡した。

「ありがとう」

お嬢様が自室から戻ってきた。手にはノートを持っていた。きつとあの中に当日の作戦が書いてあるのだろうが、どう5人で戦っていくのだろうか……

「私もなんとかまとまったかなあ……でも自信あるとは正直言えないよ」

天音様の方もある程度は固まったみたいだった。

「それじゃ天音の方からいいかしら」

「おっけー！まあポジションと打順ぐらいだけどね。それじゃ……」

天音様がノートを開くとそこには、私達5人のポジションと打順が乗っていた。

1 番シヨートさゆり

2 番キヤツチャー天音

3 番ピツチャーエレナ

4 番セカンドジェシカ

5 番フアースト楓

シヨートは予めサード寄りに守備位置を置き、セカンドはセカンドベース寄りに守

る。ファーストの楓ちゃんは、左打者の時以外はセカンド寄りに守る。極力エレナは三振狙い。

「めちやくちやくきつそうね……」

お嬢様がボソつと呟いた。それもそのはず。本来野球は9人でやるもの。それを5人でなんてやるなんて有り得ないからね。外野手は0だし、内野を抜かれれば全てランニングホームランになってしまいうギャンプル守備だった。全ては、ピッチャーのお嬢様次第と言っても過言ではないだろう。高校の時の球技大会では、三振の山を築いたお嬢様でも、相手が全国レベルとなれば話は変わってくるだろう。

「そりやそうでしょうよ……まあエレナが言ったんだから責任持つてピッチャーやりなさいよね。貴方の本気の球捕れるの私ぐらいだろうから仕方ないからキャッチャーやってあげる。後打順は、完全にエレナの前にランナーを置く作戦ね。さゆりも小さい頃私に付き合つてそれなりにやってるはずだし、少しは打てると思う。問題はジェシカと楓ちゃんかな。野球はやったことある？」

難しい顔をしながら天音様は、私とジェシカの顔を見つめた。

「私は、バット握ったことすらないかな……ごめんね。力になりそうもないや……」  
ジェシカが申し訳なさそうな顔をしながら話す。

「私も球技大会でやったぐらいですわね……」

「なるほどね……でもジェシカには身長って武器があるし、楓ちゃんは、時々すごいパワー出すじゃない？それに期待してもいいと思う」

「身長？逆に小さすぎて不利になるんじゃない？」

「ううん。ストライクゾーンって言うのは人の身長で変わるの。身長が小さければ小さいほど投げづらいものなんだよ。だから最悪ストライク、ボールの判断だけ出来るようになってもらえれば塁に出ることだって難しくはないと思う」

「そーなんだ……わかった！私お屋敷に戻ったら、誰か投げれる人いないか聞いてみる！3週間後の球技大会までにはなんとかしてみようね！」

ジェシカはどうやらいつもの元気を取り戻したみたいだった。その証拠にトレードマークの青髪がびよこびよここと跳ねていた。

「私もお嬢様に投げてもらって、少しでもバットに当てれるようにします」

「その意気だよ二人とも！それでエレナ。ドッジボールの方はどうなったの？」

「あーそのことだけだよ」

お嬢様は、そう言うのとノートを開いてテーブルの上に置くと……

一同「え？」

「ちよつとどういいう事？」

驚くのは無理もない。ノートは真っ白で何も書いていなかったのだ。

「個人のやりたいようにしてれば勝てると思ったのよ。それに今は、野球の方を優先するべきだと思ったの。覚えることは絶対野球の方が多いしね。でも一応は、聞いておこうかしら。まず楓。貴方ならドッジボールの時どんな役割をしようと思った？」

何やらお嬢様には考えがあるように見えた。お嬢様の顔には、悩みなんてなく、自信に満ち溢れたような顔をしていた。

「え？私？元外野のシステムあると思ったし最初誰かが当たるまでは、外野に来たボールエレナか天音様に渡そうとしてた」

「そう。次にジェシカ」

「私は、とにかく逃げようかなって思ってた。野球で身長が武器になるって聞いて思いついたの。私ちっちゃいし内野を駆け回れば少しは相手が混乱するかなって」

「天音は？」

「エレナにボール回しつつ私も倒せそうな子いたら弱いボールでもいいから当てて数減らそうかなって」

「さゆりちゃん」

「私は、メインのお二人を守るように動こうと思ってみました。投げた後ってどうしても隙が出来ると思いますし、最悪私がアウトになろうかなって」

「そういう事よ。既に皆綺麗に役割分担出来るのよ。これなら作戦なんていらんない

わ

「月村凄いいじゃん!!」

ジェシカが大きな声を出してお嬢様に飛びついていた。私も正直驚いていた。ここまで人を観察することに長けているとは、メイドの私でも思わなかった。

「あんだねえ……もしバラバラならどうするつもりだったのよ」

呆れたように天音様が言う。まあ奇跡に近いですもんねこんなの……

「その時は皆が野球の練習をしてる時に何か手を打とうとは考えてたわよ」

「まあいいや。とにかくこんな所かな。今日は、遅いし皆帰ろ。各自とにかくやれることやっついていこうね! エレナの為にも何としても勝つよ。まあ負けたら負けただでエレナが犬になってるの見てみたい気もするけどね」

天音様らしい冗談だなと思った。え? 冗談じゃないんですか?

「あんだねえ……まあホントに迷惑かけてごめんさい。それじゃまた明日ね」  
「楓またね! 頑張ろ!」

「うん!」

ジェシカの顔にも笑顔が戻ったみたいでホントに良かった。後は勝つだけだよ。お嬢様の事をあんな風に言った綾小路さん達に絶対負けないんだから!

そして3週間後……ついに球技大会当日となった。

## 球技大会本番

「これより第一回聖チエリチヨウ大学球技大会をここに開催します。一同、礼」

時が経つのは早いもので、あれからすぐに球技大会となった。私達は、講義に出ながらも野球を中心に練習して、なんとか形が出来るぐらいにはなった。後は、正直お嬢様の調子次第といったところだった。お嬢様の球が全国レベル出なければ抑えられないと言うのは酷な話だと思う……

「こんなだいたいのやらなくてもいいのにね。礼って言っても合わせて30人もいないのに。ってか他のクラスの人はなんで観客席に……先輩達も見に来てない？」

お嬢様の言う通り開会式が行われている球場には、私達5人と1-a、2-aの連合チームの他に人はいなかった。何故か、スタジアムの応援席だけは、興味本位だろうかは分からないが、内野席は全校生徒全員来てるのではないか？ってぐらい人で埋め尽くされていた。

「まあ確かに……応援席の方が盛り上がってますもんね……主にお嬢様とジエシカのファンでしょうけど」

応援席からは、お嬢様とジエシカに向けての声援が7割。残りの3割は天音様のファ

ンから声が聞こえていた。どうやら綾小路陣営への声援はほとんど聞こえてこないみたいだった。

「いいじゃない。ホームグラウンドみたいよ。声援があれば百人力じゃない?」  
「そうですね」

お嬢様と話をしているうちに開会式は、さくつと終わったみたいだった。最初の競技のドッジボールの為に私達は、隣にあるグラウンドへと移動した。

「ちよつとさゆり緊張しすぎ!」

「え!?私顔に出てたかな?」

「バツチリ出てるよ。ジェシカを見習いなさいな。ファン対応とかしちやつてるよあの子」

「ちよつと笑ってないで助けてよお!!!」

天音様の言う通りジェシカは、ファン対応というか、ファンの人に囲まれて身動きが取れなくなっていた。どうやら先輩方からの人気が凄いらしく、私の妹になって!、ジェシカちゃん私が大人の恋愛教えてあげる!だの誘い文句は人それぞれだった。

「「キャーキャー!!!エレナ様あ!!!こつち向いて下さーい!!!」」

お嬢様の人気も相変わらずみたいだ。高校の時のファンの人がそのまま応援に駆け付けてくれたらしい。



「全く……貴方達!!応援頼んだからね!!私達が負けたら貴方達のせいと思いなさい!!!」  
「エレナ様が声を返してくれた……???キャーキャー!!!私返事して貰ったのなんて初めて  
!!!エレナ様!私達エレナ様に罵られ隊が全力を持って応援させていただきます!!!頑  
張って下さい!!!」

「ありがとう」

「え!?!お礼の言葉!?!キャーキャー!!!」

お嬢様は、その声を後ろにグラウンドへと向かった。私も後を追うようになってい  
た。

「まったくフロントにうるさいんだから。楓、何ニヤニヤしてるのよ?」

「お嬢様がフアンの人に声を返すなんて思わないですもん。やっぱり変わりましたね」

「たまにはいいかなって思っただけよ。後敬語やめなさいな。今は別にいいわよ。普通  
にエレナって呼んで頂戴」

「りよーかい!絶対勝とうね!」

「当たり前よ」

『これより第一種目のドッジボールを開始します。登録メンバーの方は、グラウンド中  
央へとお集まり下さい』

「皆行くわよ」

一同「うん!!」

お嬢様の声と共に、私、天音様、さゆり、ジェシカの5人でグラウンド中央へと向かった。

「良かった。尻尾巻いて逃げられたらどうしようかと思つたもの」

「逃げる? 冗談じゃないわよ。精々今のうちに強がつてなさい」

敵チームのキャプテンの綾小路さんとこちらのチームのキャプテンのお嬢様は、既に火花が散っているようだった。向こうのメンバーは……14人か。それでも少ない方だろう。2クラス全員なんかに出られたら40名ほど。流星に数で押されかねなかった。

「ほらほら喧嘩しないの。ルールは、内野が全滅するか20分経過して内野に残つてる方が勝ちね。元外野は2人まで。元外野の人は、このゼッケンを着てね。それで内野に入ったら脱いで頂戴。まあそんなとこかな。質問ある人は? いらないみたいね。それじゃ元外野の人はこつち来て」

「楓、頼んだわよ」

「任せて!」

こつちのチームの元外野は私。綾小路さんチームは1年生が2人みたいだった。

「それじゃジャンプボールで先行決めるよ！代表者前へ！」

「エレナ」

天音様がお嬢様の背中を叩く。

「エレナ様」

さゆりが小さな声でお嬢様の名前を呼ぶ。

「月村」

ジエシカが祈りを込めたような目をしてお嬢様の名前を呼ぶ。

「3……2……1……スタート!!!」

先生がボールを高く上げる。お嬢様と綾小路さんが高く手を伸ばし、ボールへと喰らいつく。先行を奪い取ったのは……

「大丈夫。私達は勝てるわ」

笑顔でお嬢様がボールを手にしていた。

「キャーキャーキャーキャー!!!エレナ様!!!素敵!!!」

応援席からもエレナコールが巻き上がった。ホントにかっこいいなあ……

「皆行くわよ!!!雑魚からさっさと倒してくからね！絶対にボールから目離さないで！」

「おっけー!!!」

内野陣からも声が飛ぶ。

「1人目！」

お嬢様が1年生の子を軽いボールでアウトにし、跳ね返ったボールをまた拾って狙っていた次の子へボールを投げた。

「2人目!!」

「ナイスエレナ!!!」

まず2人簡単にアウトを取った。しかし2投目は、跳ね返った方向が悪く相手ボールとなった。

「ごめんね。もう少し削りたかったんだけど」

「何言ってるのよ！十分よ！来るよ！」

綾小路さんがボールを持ち、こちらの内野へとボールを投げる！

「甘いわね」

「つちい！皆下がって！」

綾小路さんの全力の投球を、お嬢様は涼しい顔をしてキャッチしていた。凄い……これなら勝てるかも！

「次！」

さつきやったやり方と同じようにお嬢様は、相手の内野の数を削っていった。相手陣営は、あからさまに焦っていて、まともに指示を出さていなく、混乱しているようだ

た。

「元外野！入ってきて！流れ止めるわよ！」

「は、はい!!!」

綾小路さんの声で元外野の2人が内野へと入っていった。開始5分で内野の数は元外野の私を入れて5対8まで均衡していた。ただ油断は出来ない。向こうの主力の綾小路さん、乾さん、宇田さんの1人もアウトになつていなかった。

「つち。天音、そろそろ来るわよ。気を付けて」

「わかつてる。ここからが本番だね」

ボールは向こうチームとなり、外野と内野連携してボールを回し始めた。こうなると何処からボールが飛んでくるかわからない。先程までは綾小路さんからの投球を気にしていればよかつたが、次は誰が来るか……

「天音様!!!っ！ごめんなさい」

「さゆりは悪くないよ。エレナごめんミスった」

「ドンマイよ。外野から中に球回しつつ内野復帰を考えて」

「りよーかい」

外野からの送球を天音様がキャッチミスをして、それを拾おうとしたさゆりも弾くだけで結果的にダブルアウトとなつてしまった。

「2人！ここからよ！」

綾小路さんから声があがる。向こうのチームも士気をあげてきた。

「楓！内野に入って！流石にジェシカと2人はきついわ」

「わかった！」

お嬢様の指示通り私は、外野から内野へと入った。

「くるわよ!!!」

「月村はめんどくさいけど……貴方なら!!」

「つつ!!危なかった……」

綾小路さんが投げた直球が私のすぐ横を通り抜けていった。もしコースがあつていたらなら捕れていたかどうか……

「油断しないで！外野からも来るわよ！」

「もう！なんで私ばかり！」

向こうのチームの狙いはどうやら私みただった。ジェシカは当てづらい、お嬢様に投げては捕られるリスクがある。そこで消去法で私って事か……

「これで終わり!!!」

「やばっ!?!」

外野から内野へのパス回しに翻弄されて、内野からの速球に反応が遅れてしまい、綾

小路さんからの速球が私の体に当たるはずだった……のだが。

バシィ!!!

「ふう……危なかったわね楓。反撃開始よ。貴方達露骨に狙いすぎなのよ。そんな事してたらカバーに入るに決まってるでしょ。立ちなさい楓。まだ貴方にアウトになつてもらつては困るわ」

「エレナ……ごめんありがと。ここからだよね!」

私は、相手チームに向き直りお嬢様が投げるボールを待った。

「残り5分です!!!」

審判から残り時間が少ない事が告げられた。このままじゃ内野の差で負けちゃう。どうにかしなきゃ……

「ここからは速攻で行くわよ。天音!ボール回すから雑魚から落とす!私も隙があれば投げてマイボールにする!」

「りょーかい!」

お嬢様は言葉通りに天音様とボールを回していた。

「さゆり!」

「はい!!!」

「そつちからも来るの!?!」

突然天音様がさゆりにショートパスを回してあまり運動が出来ない子を狙って見事にアウトにした。これで4vs8。

「次!!」

「キャア!!」

4vs7

「まだよ!天音!!」

「任せて!」

「綾小路さんごめんなさい……」

4vs6

「これで1人差!!!」

「うう……」

4vs5

まさに速攻だった。お嬢様が相手にぶつけたボールを自分に返って来るようにして投げ、綾小路さん達3人がカバーに回ってきたら外野の天音様に後ろから。ほんの30秒の出来事だった。それでもまだ負けている。外野の人数が居らず天音様は当てても内野に戻ってこれない。

「残り1分!!!」



審判から残り1分を切ったという合図が飛んだ。

「エレナ!!」

「わかってる!!!当たって!!」

「つつ!綾小路さん後をお願いします!」

「よくやったわ。これでボールはこちらのものよ」

「やられたわね……まさか跳ね返らせないために衝撃を殺してお腹で受け止めるなんて……痛かったですように……」

4 vs 4

同点にはなったものの残り時間わずかで相手ボール。これでこちらの勝ちほぼ無くなった。

「ざまあないわね。貴方達の勝ちは無くなったわ。これで終わりにしてあげる」

アウトにする自信があるのだろう。綾小路さんの顔は自信に満ち溢れているように見えた。

「ジェシカ、楓!私の後ろにいて!絶対私が捕るわ!」

そう言うとお嬢様は、私とジェシカの前に立った。それほど綾小路さんとの距離もなく早いスピードボールを投げられたらいくらくらお嬢様だからって捕れるとは限らない。しかし、キャッチ力の乏しい私とジェシカを狙われたらまずいのも変わりなかった。

「残り10秒!!!」

「月村あ!!!」

大きく腕を引いてのオーバーブロー。綾小路さんの全力全開のボールがお嬢様に襲いかかった。

「っ!?!」

「やった!!!」

ボールはお嬢様の胸を直撃してそのままコート後方へとボールは打ち上がった。このままもちろんボールが落ちればアウトで試合終了。こちらの負けになる。

「やらせるもんかあああ!!!」

「ジエシカ!?!」

後方へボールが打ち上がった途端ジエシカは、いち早くボールに反応して横っ飛びにボールへと飛びついた。

砂埃に隠れてこちらからは何も見えなくなった。アウトか……セーフか……

「セーフ!!!」

主審の大きな声がグラウンドに響き渡った。

「えへへ、少しはかっこいいところ見せられたかな」

「ジェシカア!!!」

ジェシカは、しつかりとボールをダイレクトキャッチしていた。倒れながらもジェシカは、ボールを最後まで離さなかったのだ。

「凄いよジェシカ!!!大好き!!!」

「えへへ、楓に褒められるなら汚れたかいあつたかな」

私は、ジェシカを力いっぱい抱き締めて感謝の気持ちを頭にしていた。ホントにあげが無かつたら負けたと思うと危なかつた……

「なーにニヤニヤしてんのよジェシカ。助けられたわありがとう」

「ううん！最後のプレー以外なんにも出来なかつたからよかつた！野球では絶対勝とうね月村！」

「当たり前よ！」

お嬢様とジェシカは、ハイタッチを交わして整列へと向かつた。私達もそれを追うようにしてグラウンドの中央へと走っていった。

「この試合同点で試合終了!!!野球は1時間後開会式のグラウンドで行います。7イニング制になりますのでそこだけ注意してくださいね」

そう言うのと審判は、下がっていった。

「うち！悪運が強いみたいね。次でどっちが上かハッキリさせてやるわ」

「何言ってるのよ。外野いなくしてたら私たちの勝ちだったんだからね。感謝しなさい」

「一々言い方がムカつくのよ。絶対潰してやるから」

言うだけ言って綾小路さんは、お嬢様の前から姿を消した。

「さてと……とりあえず1時間とあるんだから休憩しましょうか。ジェシカは、泥だらけなんだからシャワ浴びて着替えて来なさいな」

「そーだね。つてか皆汗かいてるからシャワー浴びた方がいいんじゃない？」

「私と天音は肩作るから皆は行ってきていいわよ。天音、悪いけど直ぐに野球のユニフォームに着替えてブルペン来てもらってもいいかしら？」

「りよーかい！さゆりも行ってきていいからね。それじゃまた1時間後ね」

「でもいいの？」

「いいのよ。私達は、そんなに疲れてないから。ほら時間が無くなるから行った行った」

お嬢様にそう言われたら、そうするしかないか……確かに汗でびちゃびちゃで気持ち悪かったしね。

「じゃあ私達は、シャワールームに行こっか」

「そーだね」

球技大会1種目はまさかの引き分けという形で幕を閉じた。次の競技は、引き分け  
決着にはならない。絶対勝たなきや。少しでもお嬢様の力になるんだから!!!

## インターバル

「エレナ、ホントは疲れてるでしょ。休まなくていいの？」

「天音には隠し通せないわね。正直めちやくちや疲れたわよ……体あんなに動かしたのも久々だったしね」

楓達と別れ、私達は球場の中にあるブルペンへと向かっていた。天音に指摘された通り、ドッジボールでの疲労は相当のものだった。コート内で走り回り、ボールを投げての繰り返しは、結構体に無茶をさせていたらしい。楓の前では強がっていたが、少し座って休みたいのは紛れもない事実だった。

「とりあえず30分は着替えと休憩にしようよ。疲れてて本気出せませんでした。じゃ洒落にならないでしょう？」

「そうね……ちよつとだけ横にならせて頂戴」

「それじゃ私は先に着替えてるから」

そういうと天音は、更衣室の方へと消えていった。

それにしてもさっきの試合……ホントに危なかったな。少し綾小路さん舐めすぎてたかな。最後の場面、絶対捕れるとふんで私は、ジェシカと楓を下げた。しかし結果は、

ジェシカのフラインプレーが無ければ、第2種目の野球をやるまでもなく負けが決まっていたと思うと、ホントにやってしまったなと思つた。完全に自分の力を過信しすぎてしまつていた。思つてゐる以上に綾小路さんは手強い。それだけはさっきのドッジボールで分かつたかな。しかも、次は向こうの土俵である野球。全国レベルに私の両親に教えて貰つただけのピッチングが通用するのかもしれない。でも不安で仕方がなかつた。こういう時楓がいたら、「エレナ大丈夫だよ！」なんて笑顔で言つてくれるのかな……

「消極的になつても仕方ないわね。少し横になろ……天音が帰つてきたら起こしてくれらるだろうし」

私は、ベンチで横になると意識はすぐに闇の中へと消えていった。

時刻はエレナがブルペンに入る少し前。楓と別れたばかりへと戻る。

「うひゃあ、泥で腕とかぐちやぐちやになつちやつたよ」

「学校にシャワールームがあつてホントに良かったね。でもあの時のジェシカホントにカッコよかつたよ！私、悔しいけど全く反応出来なかつたもん」

「えへへ、じゃあ今度1日だけ2人でデートとかダメかな？」

少し顔を赤くしながらジェシカは、話していた。ホントにこの子は真つ直ぐで素敵だなどと思う。お嬢様助けてもらつたお礼もしたいし今回ぐらいは許してねお嬢様。

「いいよ。エレナ助けてもらったんだもんそれぐらいならエレナも許してくれると思う」

「やっぱりダメだよね、え?! いいの!? ホントに!? やったー!!! 私野球でも頑張るからね!」  
今日は、ポニーテールにしている水色の髪をぴよんぴよんと跳ねさせて嬉しそうにジェシカは、笑っていた。分かりやすいなあ。

「うん! 私も頑張るから絶対に勝とうね!」

「私も今度は天音の手助け出来るぐらいに頑張らなきゃ。ドッジボールでは、ほとんど何も出来なかったもん。見ててね楓。私だって野球なら少し出来るんだから」

一緒に歩いているさゆりも野球に向けて意気込んでいるようだった。

「あ、ここだねシャワールーム」

「そーだね」

話しているうちにグラウンド傍のシャワールームへと辿り着いた。思っているより施設は綺麗に使われているようだった。

「私いっっちゃーん!」

「ジェシカ走らないの!」

泥んこまみれのジェシカが我先にと、走ってシャワールームへと入っていった。私達がかような行動をしたらしい歳して何してるんだろう……ってなるけれどジェシカが



それをやっているとは何故だか微笑ましいっていうか可愛いなって思えた。

「気持ちいい！楓、そっちは？」

「私も気持ちいいよー。やっぱり汗流した後のシャワーはいいよね。さゆりは？」

「なんか疲れ抜けるって感じがする。1時間の休憩あつてよかつたね」

各々ゆつくりしているようだった。でもやっぱり私は……

「ごめん皆。やっぱり先に行くね。エレナ見てくる」

「ふふ、そう言うと思つてた。じゃあジエシカと休憩したら行くね」

「わかつたー」

私は、一足先にシャワーを浴びて着替えると、急ぎ足でエレナがいるブルペンへと向かった。

「えつと……ブルペンは……球場入つて、私達は一塁側のベンチだからそこから室内にあるんだ。野球場の中なんて初めて入つたからわからないや」

誰もいないグラウンドの中を一塁側のベンチから見ると人生で初めてだった。テレビで見る野球も満員の応援席にプロ野球選手が試合をしていたからね。まさか私がかこんな本格的な球場で試合をやるなんて夢にも思わなかつたな。

「……かな」

球場の中を少し歩いた先にブルペン室と書かれた扉があった。

「エレナ、天音様いますか？あれ？まだ始めてないのかな……あ！エレナ……？やっぱり疲れてたんじゃん」

ブルペンの中に入ると、ベンチですやすやと眠っているお嬢様を見つけた。

「そんなところで寝たら体痛めちゃうよ。そーだ。ちよつと恥ずかしいけど今なら誰もいないしいいよね……？」

私はお嬢様の頭を起こさないようにそつと持ち上げると自分の膝の上へと乗せた。

「ホントにお疲れ様。次の試合もエレナ頼りになっちゃうかもだけど頑張つてね」

私は、汗で少し濡れているお嬢様の髪を撫でながら先程の試合を思い出していた。元外野から戻って、直ぐに狙われちゃったけど最後までお嬢様は、私を守ってくれた。最後は、危なかったけれどお嬢様を守ってくれなければ私が狙われて試合に負けていたかもしれない。ホントにお嬢様の背中を見ていると安心出来た。ホントにこの人になら私の全てを預けられる。そんな気がした。

「大好きだよエレナ。球技大会が終わつたらお屋敷戻つてゆっくりしようね」

私は、お嬢様の頬に軽く口づけをして、自分もベンチの背もたれに体を預けて少しだけ眠ることにした。

「楓、楓そろそろ時間よ。起きなさいな」

「ん……………エレナ？」

気付かない間に熟睡していたらしい。知らない間にお嬢様は、私の膝の上からいなくなっていて膝にはどこからか持ってきたのだろう膝掛けがそつとかけてあった。

「おはよ楓。後15分もしたら試合開始になるから貴方も軽くウォーミングアップしときなさいね。後、膝枕ありがとうね。お陰で体の調子は絶好調よ」

笑顔でお嬢様は、私に向けて話す。少しでも疲れが取れたのならそれだけで良かったなと思った。

「それなら良かった。ほかの皆は？」

「天音ならさっきまで私との投球練習に付き合ってくれてたわよ。多分今は、トイレにでも行ってるんじゃないかしら。ジェシカとさゆりちゃんならウォーミングアップ終えて、球場の中なんて滅多に見れないから見てくるってはしゃいでたわよ」

なんていうか、よくこの状況でジェシカとさゆりは、球場の中見てくるね！なんて言えたな……………きつとジェシカの家だろうけど肝が座っているというかなんというか……………

「わかった！試合開始前には私もベンチの中入るね！」

「頼んだわよ。厳密に言えば試合開始3分前ね。なんか濱田先生張り切つてて、プロ野球のウグイス嬢するような人をわざわざ呼んだらしいわよ」

「流石のお嬢様学校だね……それじゃちよつと走ってくるね」

「行つてらっしゃい」

とにかく次勝てば全てが丸く収まるんだ。絶対綾小路さん達には負けないんだから。私は、改めて自分の中で目的を明確にし、気合を入れ直し、アップに入った。

『試合開始前のシートノックを行います。両チームベンチ前に集合して下さい』

球場の外を軽く走っていたらアナウンスが入った。まだ試合開始10分前なんだけど!?聞いてた話と違うじゃん!

私は、急いでベンチへと戻った。

「ごめんなさい遅れました!!!」

「大丈夫よ。今は向こうのシートノックだからね」

ベンチへ戻ると、どうやら綾小路さんのチームが試合前のノックをしているみたいだった。お嬢様を除いた3人は、私の到着に気付かず、相手の守備練習をじつと見ているようだった。

「あ、楓戻ったんだね」

「遅いよお楓! 何処か行ったのかと思ったじゃん」

「ごめんね。それでどう？相手のチームの人やつぱり上手なの？」

野球着に着替えたさゆりとジェシカは、ようやく私がベンチ内にいる事を気付いたらしい。

「上手いとかそういうレベルじゃないよ。少し野球やってる人なら分かるけど、守備は、レフト、ライトは初心者だけどそれ以外は経験者。ううん。経験者つて言うより全国に近いレベルの人もゴロゴロいるよ。全くなんでこんなに上手い人がいるかな……配球も今更考えたって……それにいくら抑えても私が打てる保証なんてないし……やつぱり最低でもタイプブレードまで持ち込んで……」天音：「しっかりしなさい！」

きつと野球をやっていた天音様の目には分かったのだろう。到底適う相手じゃないと。天音様がここまで悩んでいる姿なんて私も始めてみた。

「何よ！今必死に考えてるんじゃない！」

「今更考えてどーこーなるような相手じゃないつてことも分かってるでしょ？なら出たところ勝負でやるしかないわよ。そんなに悩んでたら尚更普段の調子出ないわよ」

「っ！だつてこれに負けたらあんたどーなるか分かってるの？あいつらの奴隷になるも同然なのよ!？」

「分かつてるわよ。でも私は負けるだなんて思つてないわ。皆集まって、急遽だけどシフトを変えるわ」

天音様は、まだ納得仕切っていないのか、少しだけ表情を曇らせていた。お嬢様の事を考えてるからこそここまで悩んでいるんだなと思った。私も、もう少し野球がわかっていたら力になれたのに……

私達はお嬢様に言われた通り、お嬢様を囲うようにしてベンチの中に輪を作った。

「突然ごめんね。流石に内野だけじゃこれはきつそうだわ。だからセカンドのジェシカをセンターに、それで楓は、セカンドよりポジションを大きく取って頂戴。外野に打球が飛ぶケースが無いとは100%頭に来ないわ。ジェシカにはたくさん走り回ってもらうことになるかもしれない。それでもいいかしら？」

「任せて！絶対後ろにはやらないから！」

「ありがとう。天音もいいわね？」

「あーもーわかったわよ！私らしくもなかったごめん！当たって砕けろだもんね！それに負けてもエレナが綾小路さんに尻尾振るだけでもんね！それじゃ皆しばってこー！」

「全く……勝つわよ!!!」

一同「おーー!!!」

「おーい、月村ちゃん達はシートノックやらないの？」

どうやら主審は濱田先生みたいだった。審判用具に身を包んだ先生が、スパイクの音をカチャカチャと響かせながら私達のベンチへ入ってきた。

「大丈夫です。皆大会前にボールの感覚は掴めてますので。それより相手に守備力を見せたくないのです」

「おっけー！じゃあすぐに整列させちやうね！ケガだけはしないようにね！」

「ありがとうございます」

そして、濱田先生がホームベースの後ろに陣取り、塁審3人を集めた瞬間だった……

「整列!!!」

「行くわよ!!!」

一同「おおおお!!!」

いよいよ、第2種目となる野球が幕を開けようとしていた。

## 初回の攻防

「両チーム整列！礼!!!」

「宜しくお願ひします!!!」

ついに運命の第2種目がスタートした。先行は綾小路さんのチーム。後攻が私達と  
なった。

ちなみに綾小路さん達のチームはこんな感じのスターティングメンバーになっていた。  
た。○内は経歴。

1番センター 西山麻里奈

(中学生時代全国大会出場)

2番セカンド 宇田恵子

(中学生時代全国優勝)

3番ピッチャー 綾小路由紀

(中学生時代全国優勝)

4番キャッチャー 乾梨花

(中学生時代全国優勝)



5 番フアーストパティ・ソフィ

(西山と同じ。留学生)

6 番サード阿部智代

(中学生時代県大会準優勝)

7 番シヨート大園小春

(阿部と同じ)

8 番ライト雨谷奏

(未経験者)

9 番レフト青松かなみ

(未経験者)

1 番から7 番まではガツツリ経験者であつた。それも経験者の人の大多数が全国レベルで天音様が悩むのも無理ないなと思つた。対する私達のスターティングメンバーは、

1 番シヨートさゆり

2 番キヤツチャー天音

3 番ピツチャーエレナ

4 番センタージエシカ

## 5番ファースト楓

お嬢様と天音様を除けばほとんどが初心者と変わらないレベルだった。でも私達だつてこの短い期間みっちり練習したんだ。勝てる確率が0・1%でもあるなら絶対に負けない。諦めたらそれまでだもん！

『先行チーム。1番センター西山さん』

ウグイス嬢から1番バッターのコールが入った。左の西山さん。確かクラスで1番足が速かつたはず。

「麻里奈！手加減いらねいからね！1回であいつの心折つてコールドにしちゃお!!!」

向こうのベンチからも大きな声援が聞こえてくる。向こうも本気みたいだ。

「それじゃ初回!!!皆しばっていくよ!!!」

一同「おお!!!」

「プレイボール!」

主審の濱田先生から投球開始の合図が出された。気になるお嬢様の初球は……

「ストライク!ワン!」

「ナイボー!」

外角低めのストレートから入ったみたいだ。ちなみにお嬢様のMAX球速は135キロ。球種は縦に曲がるスライダー、フォーク、シュート、スローカーブの4球種と天

音様から聞いた。ホントに素人が投げれる球じゃないよね。

相手の西山さんもお嬢様の直球の速さにびっくりしていたみたいだった。

そして第2球……お嬢様が投じたのは外角低めのボールからストライクになるシュート。

その時西山さんのバッドが縦から横に変わった。セーフティバントだ。

「楓！動かないで！！私が捕るからベースに！！」

「はい！！！」

一塁線へのセーフティバント。内野が薄い所を狙うのはセオリーだろう。でもこれは読めていた。絶対何処かで狙われると思って練習していたのだ。

「アウト！！！」

お嬢様が一塁線へのゴロを綺麗に捌いて一塁へ素早く送球してアウトとなった。

「ワンアウト！」

一同「ワンアウトオ！！！」

大きな大きなワンアウトだと私は思った。このメンバーでもアウトはしっかり取れるという事実が分かっただけでもとても大きい。

『2番セカンド宇田さん』

「恵子！！ちよつと来なさい！！！」

突然、ネクストの恵子さんを綾小路さんが呼んだ。なんだろう……とても嫌な予感がする。

考える間もなくお嬢様は、セツトポジションに入った。初球を投げた！

「!? また!? 楓!」

「はい!」

また相手打者は、セーフティバントを試みたようだ。

「アウト!」

しかしこれもアウトとなる。それに2番の宇田さんは、西山さんより走力は劣っていないはず……なんでわざわざアウトカウント献上するようなこと……

『3番ピッチャー綾小路さん』

今回はないよね……しかし、私の嫌な予感的中した。カウント3ボール2ストライクまで綾小路さんは一球たりとも振らなかった。そして第6球目。

コン……………

「っ! 楓!」

「はい!!!」

3者連続一塁線へのセーフティバント。それもわざとお嬢様に取らせるような打球。アウトは取れてるが、お嬢様の消耗はあからさまだった。

「スリーアウトチェンジ!!!」

三者凡退したというのに向こうのベンチには余裕が見えた。それもそうだろう。まだ確信はないが、綾小路さん達は確実にお嬢様を潰しに来てる。

ベンチに戻るとすぐにお嬢様に相手チームの意図を伝えようとしたのだが……

「わざわざ私潰そうとしてアウトカウントくれるなんてあの子も優しいところあるじゃない。このまま2ーアウト貰って7回完封しようかしらね」

「あんたね……倒れてもらったら困るんだからきつくなくなったら言いなさいよ。こうなったらなんとしても先制点取るしかないよ。相手慌てさせて普通に攻めてもらわなきゃ」  
「ですね」

「うん」

「私も頑張るよ!」

とにかく先制点を。皆の意識はこれだけだった。仮にお嬢様が潰されたら試合が9割決定したと言っても過言ではないだろう。

『1番ショート伊集院さん』

「それじゃ行ってくる」

「さゆり頑張れ!!!」

「さゆり先頭大事だよ!!!」

「さゆりお願い！」

ベンチの皆から声が飛ぶ。お嬢様は、タオルを額にあててベンチで休んでいるようだった。ホントに大丈夫だろうか……

「エレナ大丈夫？」

「大丈夫よ。逆にアウトカウントをくれる今がチャンス。向こうはわざわざ与えなくていいアウト与えてるんだからね。ほら、私の事はいいからさゆりちゃんの事応援してあげなさい」

「わかった……」

お嬢様の事は心配で仕方がなかったが、お嬢様にそう言われてはさゆりの方に意識を向ける他ないだろう。

中学生時代の綾小路さんのデータは、ストレートは120キロとそこまで速くはない。けれども5種類の変化球を完璧にコントロールして、打者を打たせてとるタイプのピッチャーだった。確か球種はツーシーム、スライダー、チェンジアップ、シュート、スローカーブだったかな。

「ストライク！ワン！」

インローのスライダーだろうか、厳しい所に決まりワンストライクとなる。

「打てない球じゃないよ！」

綾小路さんの第2球。

カキーン!!!

インハイのストレートを綺麗に叩きつけての、三遊間をやぶるレフト前ヒットになった。

先頭打者が出た！天音様!!

「ナイスバツティング!!やるじゃん!!」

さゆりは、一塁上で小さくガッツポーズをしていた。恐らくインハイのストレートで体を仰げ反らして外角に逃げるスライダーでも投げようとしたのかもしれないけど、さゆりがそうはさせなかったのかな。いきなりランナーが出ると思わなかった私達は、一気に声援のボルテージがMAXになった。

「つたくヒット一本でギヤーギヤーうるさいのよ。梨花、もう面倒くさいからあの球使うわ。あいつら黙らせるよ」

「了解です。でもいいんですか？早すぎる仕掛けは相手に立ち直らせるチャンスを与えかねませんが」

「いいのよ。月村さえ潰せばこっちの勝ちは揺るがないわ。私達に喧嘩を売ってきたこと後悔させてやるわ」

先頭が出たところでキャッチャーの乾さんがマウンドへと駆け寄っていった。なん

で？サインの確認だろうか。嫌な予感がする。

『2番キャッチャー緒方さん』

「天音様!!お願いします!!」

「任せて!あんな遅いボールいくらコントロールが良くても怖くないよ」

「こちらにブイサインを見せて天音様がバッターボックスへと入っていった。

「さてと、天音なら心配いらないだろうし私もネクストに入らなきゃね」

「無理しないでよ」

「大丈夫よ。絶対先制点取るわよこの回」

お嬢様は、ネクストバッターズサークルにゆつくりと腰を降ろしていた。しっかりとピッチャーの綾小路さんから目を離さずに観察しているようだ。

天音様への初球。

「ボール!」

スライダーが外側へ外れてワンボール。よし。天音様は見えてる。これなら連打でお嬢様に回せるかも!

「全国レベルがそんな球なわけないよね?そんなんじや私達がワールド勝ちしちゃうよ?」

「あんま大きな口叩かない方がいいわよ緒方天音。貴方は、いえ、ここから先ランナーが



出ることはないわ」

「そんなへなちよこ球で言われてもね」

「まあ見てなさい」

ベンチからでは、何を言っているか分からないが、何やら天音様と綾小路さんとの間で会話が行われていたようだった。

そして第2球を投げる直前だった。ネクストに座っていたお嬢様が突然声を上げた。「天音！それを振らないで!!!」

ボール！チェンジアップだろうか、遅い玉がホームベース後方でワンバウンドし、ツーボールとなる。

「っ!?サンキュエレナ。もう少しで振ってたよ」

私視線だと何が起きているかわからなかった。ベンチにいるジェシカも何があったの?といった表情をしていた。

「よく見たじゃない。今のは褒めてあげるわ」

「そんな球投げれるなんて聞いてないわよ」

「私が野球から完全に手引いたと思っただら大間違いよ。次行くわよ」

何が起きたかわからないまま、綾小路さんは第3球を投げた！

「ストライク！ワン！」

また遅い球。こちらから見たら真ん中付近の甘い球に見える。しかし、何故か天音様は表情を曇らせていた。

「エレナ！なんであんなに天音様は、追い込まれたような雰囲気になってるの？それにさつきなんで声を上げたの？」

「ナツクルよ。あれは、ただ遅い球ってだけじゃないわ」

「ナツクル……？それってどんな変化球なの？」

「どんなつて言われると難しいわね……ようは、無回転ボールなのよ。空気抵抗の影響をほとんど受けないから、揺れるように落ちたりする。下方向には曲がるけどそれから、投げた本人もキャッチャーも最終的にはどこに来るかわからないの。それにあの子のナツクルは急造されたものじゃない。洗練されてるわ。ストライクゾーンに入れるのだから相当な練習が必要よ。もちろん並の投手に投げれる球じゃないからね」

「そんな……」

「でも必ずチャンスはくるわ。なんとかして突破口を見つけましょう」

「うん」

そして第4球を投げた！

カキッ……！

「やばー！」

アウトローのナツクルに強引に食らいつくが、バットの根元に当たり、力のない打球がサード前方に飛んだ。

「ファースト!!」

「アウトー！」

打球の勢いが死んでいた事が幸いして進塁打となった。これでワンアウト2塁。スコアリングポジションにランナーを置いてお嬢様との対決になる。

「ごめんエレナ任せた！想像以上にやっかいよあのナツクル」

ベンチへと戻ってきた天音様が、お嬢様に声をかけていた。でもお嬢様ならきつとやってくれる。私は、信じてバッターボックスに向かっていくお嬢様を見つめていた。

『3番ピッチャー月村さん』

「キャーーーーーー!!!エレナ様ああ!!!」

一塁側頭上に陣取っていたお嬢様のファンの人達からも歓声が大きく上がっていた。お嬢様お願いします。

いつまで経っても綾小路さんは、セットポジションに入らず、どうしたんだろうと思っていたら、お嬢様がバッターボックスで構えた瞬間に綾小路さんが右手を上げた。

「濱田先生！そいつ敬遠します！申告敬遠！わかりますよね？」

「え!? ああ! はい! いやあ月村さん一塁へ」

「つち。私がそんなに怖いのかしらね」

「別に。セオリーでしょ。わざわざ経験者と勝負する必要がどこにあるのかしら」

「天音様なんでエレナが一塁に?」

「最近できたんだけど申告敬遠ってルールがあつてね。審判に告げれば打者は四球扱いになって一塁に強引に歩かされるのよ。まあエレナと勝負して打たれるリスクが少しでもあるなら確かに正しい判断ね……」

「そんな……ジエシカ!!! 頑張つて!!!」

動揺していたのだろうか、ジエシカはネクストバッターズサークルであたふたとしていた。とにかくワンアウトランナー一二塁。チャンスには変わりないんだ。私かジエシカでなんとかしてさゆりを返す!

『4番センタージエシカさん』

「ジエシカ! ナツクルは捨てなさい! 自分が打てると思つた球だけ打つのだよ!!!」

一塁上のお嬢様からも声が飛ぶ。そうだ無理にナツクルを狙わなくてもいいじゃないか。

第一球をセットポジションから投げた!

「ストライク! ワン!」

「速い!? 球速はそんなんじゃないって聞いてたのに!」

綾小路さんが投げたボールはお嬢様と同じぐらいのスピード。球場のスピードガンでは137キロを計測していた。

「だからこれ以上打たせないって言ったでしょ!!!」

「ストライクバッターアウト!!!」

「ナイスピッチング綾小路さん! ツーアウト!!!」

ジェシカは、結局1度もボールに触れることなく3球三振となった。

「楓ごめん……」

「大丈夫。お嬢様ぐらいのスピードなら打てないこともないと思うから」

『5番ファースト橘さん』

絶対打つ。大丈夫。お嬢様のボールを1番見てきたのは私だ。そのぐらいの球速なら打てるはず。

「楓!!! 頑張つて!!!」

「絶対打つよ」

私は、主審の濱田先生に一礼して打席に入った。勝負は初球。きつと直球にタイミングが少しでもあつてると思われた瞬間変化球で責めてくるだろう。そうなれば打つのは容易ではないだろう。

綾小路さんが初球を投げた!!!

ストリート!!アウトロー!!

「お願い!!!」

カキーン!!!

「当たった!?!」

打球は快音残して右中間を破っていった。

「はあ!?!センター!バックホーム!!!」

2塁のさゆりがホームインして、1塁ランナーのお嬢様も3塁ベースを蹴って本塁に突っ込んだ!

センターからセカンドへ、そしてセカンドが本塁に送球しようとした時には悠々お嬢様は、本塁に到達していた。

「楓!!!大好きよ!!!ナイスバッティング!!!」

打てた……あの綾小路さんから。私は、嬉しさのあまり2塁上で大きくガッツポーズをして一塁側のベンチの皆へ笑顔を送った。

尚、ツーアウト2塁で打席にはさゆりが立っていた。

「さゆり打てるよ!!!」

しかし、そう上手くはいかず……

「ストライクバッターアウト!!! スリーアウトチェンジ!!!」

ナツクルは、投げてないにしても変化球と速い直球の組み合わせでさゆりは、空振り三振に倒れた。

ベンチへ戻るとお嬢様が右手を出して迎え入れてくれた。

「ナイスバツティングだったわ楓。これで後は私に任せて頂戴。守備頼むわね。きつとまたあの戦法で来るはずよ」

「わかった。エレナも無理しないでね」

『2回の表、先行チームの攻撃は、4番キャッチャー、乾さん』

まだ試合は始まったばかり。ここから綾小路さん達の逆襲が始まるとは、この時は誰も知らなかった。

## 戦う理由

「クソツ!!!なんであんなやつらに点取られなきゃいけないのよ!!!」

ベンチに戻ると、先程タイムリーツーベースを打った、ファーストの守備へついている橘楓を、これでもかとはばかりに綾小路さんは睨みつけていた。キャッチャーのポジションを務めていた私も、まさか綾小路さんがくれた前情報では、ほとんど未経験者だった橘さんに打たれるとは思ひもしなかったのだろう。恐らく前打席のジェシカちゃんの配球と同じように直球主体で来ると踏んで山を張っていたのだろう。それでもツーベースは出来すぎだと思っただけだ……

「梨花!!!作戦変更よ。皆集まって!」

未だに打たれたことが信じられないだろう、怒りを顔にしているうちのお姫様から招集がかかった。

「どうします?」

「とにかくあいつを走らせるのよ。2ストライクまでは意地でもフェイク。くさい球はカットしなさい。勝負は6回から。3巡目であいつを葬るわよ」

「わかりました」



フェアプレーじゃないとは分かってる。でもこの試合の勝利が綾小路さんの願いなら私は、全力で全うするだけ。月村エレナ。絶対貴方を倒す。

その後の試合は単調だった。

2回以降徹底して綾小路さんはお嬢様を申告敬遠。それ以外の打者でアウトを確実にとっていった。もちろん前みたいな単調なピッチングとは違い全力で私やジェシカにも変化球を混ぜてきて、バットにすら当てることが出来なかった。頼みの天音様には、ナツクルを連投して完全に封じこんでいた。綾小路さん達は、初回と同じようにひたすらお嬢様を走らせた。更に2. 3. 4番の全国トリオは、ツーストライクから露骨に粘りお嬢様に更に球数を投げさせた。そして5回終了時でお嬢様の球数は118球（だいたい1回の平均は15球とされている）まで膨れ上がっており、疲労は顔に表れ、足元もフラフラしているのがわかった。

「エレナ……もう嫌だよこれ以上苦しんでるとこ見たくない……」

私は、ベンチで肩で息をしているお嬢様に声をかけた。これ以上私の大切な人がボロボロになるところなんて見たくなかった。確かに試合には今のとかは勝ってる。残りアウトカウント6個取れば勝てるっていうのはわかるけどこれ以上お嬢様に傷付いて欲しくなかった。お嬢様と今まで暮らしてきてここまで辛そうにしていた時があった

だろうか……少なくとも私が物心ついたあとでは見たことがなかった。

「大丈夫よ。後アウトカウント6個取って笑ってお屋敷に帰りましょ」

「エレナ……」

「ほら、守備につきましょ。そんな顔しないの」

そう言ってお嬢様は、マウンドへと歩いて行つた。

『6回表先行チームの攻撃は、1番センター西山さん』

お嬢様は、3巡目から普通に打つてくると読んでいた。果たしてどうなるか……

初球を投げた。

「ボール！」

ストレートがアウトローに外れてワンボール。でも今のボールで分かつた。今西山さんは、バントの構えをしていなかった。ここからは真剣勝負という事。ここまでお嬢様を潰しておいて真剣勝負だとは、私は思つてないけどね。

「内野外野ここからは普通に来るからね！自分の役割ちゃんと覚えておいて！」

天音様も気付いたのだろう。キャッチャーのポジションから大きな声を私達に聞こえるように言った。

守備についていたジェシカ、さゆりもグラブをポンポンと叩いて役割を再確認しているような仕草をしていた。

絶対に後6個アウトを取る。これ以上好きにはやらせないんだから。

第2球はインローいっぱいにしてスローカーブが決まりーストライクーボール。

第3球はシュートが高めに外れてボール。いつもなら絶対に制球ミスなんてしないのに……やっぱり疲れてるんだ。

「エレナ!!! 頑張ってる!!!」

お嬢様は、私の声に応えるように帽子の鍔をちよこんと触っていた。

そして第4球……

「バント!?!」

投げるフォームに入った瞬間西山さんがセーフティバントの構えを見せた。まさか

まだやってくるなんて……!!

「楓! フアースト! つ!」

「エレナ!!!」

「ナイスバント!!! もうピッチャー足動かないよ!!!」

若干サードよりのバントを処理しようとしたお嬢様の足がもつれ、無情にもボールはお嬢様のグラブにも収まらず転々とシヨートのさゆりの元へ転がっていた。

「タイム! エレナ!」

キャッチャーの天音様もすかさずタイムを取り、マウンドに駆け寄った。

「エレナ。私と変わって。さゆり、キャッチャーに入って。楓ちゃんはショートについて」

「わかり「待ちなさい。私はまだやれるわ。ちよつとバランスを崩しただけよ」

肯定しようとしたその時、膝を着いてマウンドの前に座り込んでいるお嬢様が、静かに立ち上がりぴしやりと言いつつ放った。

「あんたね！これ以上やってなんの意味があるのよ！自分の体もつと大切にしなさい！！」

説得するように天音様が。

「そーだよエレナ！これ以上は見たくないよ！」

ボロボロのお嬢様を見て涙ながらに私が。

「エレナ様私も同じ意見です」

滅多にお嬢様に意見を言わなかったさゆりが。

「私もそう思う。もうやめよう月村。楓だつてこんな言つてるじゃん」

赤子を論すようにジエシカが。

「ごめんなさい。でもダメよ。楓とジエシカが一生懸命説明してたのにあの子達はそれを馬鹿にして聞く耳を持たなかった。きつとここで私がマウンドを降りて負けたらこの先もずっとあの子達は、行事とかを適当にやるわ。私も昔ならそうだったかもしれない

い。でも、今は違う。大切な人がいて、大切な友達がいて、色んな人に支えられてるって事に気付いたの。だからあの子達にもそれを分かって欲しいのよ。だから負けられない。ここは譲れないわ。分かったら散りなさい」

お嬢様は、天音様からボールを受け取るとマウンドへと戻った。

「全く……楓ちゃん、ホントに危なくなったら引きずり降ろすの手伝ってよね。ホントに人の言うこと聞かないんだから。まあ、あんなに真剣なエレナ久々に見ただけね」

「分かりました。私もです。天音様提案があるんです」

「ん？何？」

「それなんですけど……」

「ギャンブルだけどそれしかバント封じられないもんね。分かった。ジェシカ！フアー  
ストにー！」

「え!? うん！」

私が提案した作戦はこうだった。

当初の予定通り全員内野シフト。それに加えてバント処理が出来るように私がお嬢様のすぐ横に立つというものだった。仮にジャストミートされたら、痛烈なライナーが私を襲うかもしれない。それでもお嬢様がこれ以上傷付くよりよっぽどマシだ。

それに……私はあの人を信じてる。絶対に抑えてくれるって。

「楓」

「下がらないよ。エレナだつてわがまま言つてそこにいるんだから私のわがままにも付き合つてよね」

「全く……誰に似たんだかね。打球来たら捕りにいかずに逃げなさいよ。それだけは約束して」

「わかつた。でもエレナなら打たれないでしょ」

「当たり前でしょ。でも……楓、少しいいかしら」

「ん？つて!?!ちよつと皆のまえでこんな」

お嬢様からの突然の抱擁。綾小路さんチームも、一塁側の応援席もザワついているのが分かつた。

「つたくうるさいわね。疲れてるんだから楓成分少しぐらい補給させなさいよね。心配しないで。もう好きにはさせないから」

「もう……絶対抑えてよね!」

そう言うとお嬢様は、二番打者の宇田さんの方に体を向けた。

## 結末

綾小路さんチーム vs 月村さんチームの試合は0-2で月村さんチームがリードしていた。現在6回表綾小路さんチームの攻撃でノーアウト一塁。反撃が来るならここかな。しかし、これがお嬢様学校の試合とは到底思えないレベルの高さを私は、主審という立場から見せられていた。確実に勝ちに行くために相手のエースを潰す綾小路さんチーム。月村さんのワンマンチームかと思いきや初回の相手の配球を読んだ橘さんのタイムリーツーベース。本来、教師である私は試合を止めてまでボロボロの月村さんをマウンドから降ろすべきなんだとは思う。フェアプレイとはいえないエース潰しも黙認しておいて何を今更と言われるかもしれないが、私が黙認している理由は、試合前日月村さん本人からこんな事を言われたからだった。

「先生。きつと明日の試合私は狙われると思います。でも絶対に止めないで下さい。私は、絶対に試合から降りる訳にはいかないんです」と。

何のことだかはさっぱり分からなかったが、月村さんの目が真剣だということを私に訴えかけていた。だから私は、分かりました。でもホントに危険と判断したら止めるとだけ返事を返すことにした。まさかこれを読んでたつていうのかなあの子……

「ストライク！ワン！」

まあた際どいところ。2番の宇田さんに対してインハイのストレート。顔近くの球に少しだけ体が引いちやつてたね。次はどこを攻めるのかな。もしかしたら、1番この試合を楽しんでいるのは私かもね。いけないいけない。私は、主審で教師だもん。生徒の事を1番に考えなくちやだね。

「ストライク！ツー！」

外角いっぱいのおーク。ホントに何処にそんな元気が残ってるんだろ。さつき橘さんに抱きついたと思ったら、球威も球のキレも初回に戻ってる、いやそれ以上かも。もしかしたら月村さんと橘さんは、私が思ってる以上に強い絆で結ばれてるのかもね。

「ストライクバッターアウト！」

三球三振。ホントに息を吹き返したみたい。こんなにワクワクする試合を間近で見させてもらったんだもん。試合が終わったら差し入れぐらいさせてよね。

「ナイスピッチ!!ワンアウト!!」

「まずひとつね」

「うん……ここ抑えたら勝ち同然だと思う。頑張つてエレナ」

「任せなさい」



そう。3番綾小路さん、4番乾さんを抑えさえすれば次の回は5・6番を歩かせて7・8・9で勝負出来る。だからここさえ凌げばぐつと勝利が近づく事になる。

『3番、ピッチャー綾小路さん』

綾小路さんも後がないと言っているのだろう。いつもなら挑発してくる所を、何も言わずに打席へ入った。目線はお嬢様から一切動くことがなく向こうも本気なんだということが痛いほど伝わってきた。

その初球……

カキーン!!!

「ファウル!!」

インローのスローカーブを、腕を畳んで完璧にレフト方向へと打球を飛ばした。あと数センチずれていればフェアゾーンに打球が入り、ランニングホームランで同点になっていただろう。

お嬢様は、表情を変えることなくサイン交換を終えて第2球を投げた!

カキーン!!!

外側のストリートをまたもライン際に打ち返した。これも数センチズレていけば長打コースだった。緩急を使ったピッチングをしているのに完全についてきて……これが全国大会優勝者の力……

「ファウル！ ツーストライク！」

「よし！ エレナ追い込んだよ！」

お嬢様は、帽子の鏢を触るだけの返事を返した。

疲労を考えると遊び球は使えない。それは向こうも分かっているだろう。力と力のぶつかり合いになる。

第3球……

カキーン!!!

「っ!？」

「(っ)は通さない!!!」

打球は鋭いゴロとなりショートの手元でさゆりの左方向へと転がっていった。それを横つ飛びになりながらさゆりは打球をなんとか抑えた。もし抜けていたらランニングホームランだっただけに危なかった……

「さゆりちゃんありがとう。首の皮一枚繋がったわね」

「いえいえ。でも次の打者はもっと怖いですよ。歩かせるのもありでは？」

「わざわざ逆転のランナーを出したくないわね……それに5番の子も相当な実力の持ち主よ。だから逃げられないわ」

「そうですか……」

「大丈夫よさゆり。楓ちゃんにカツコ悪いとこ見せるわけないよねエレナ？」  
「当たり前でしょ。ここ抑えて後は楽に勝つわよ」

次の打者は乾さんか……まさにターニングポイントだね。

『4番キヤッチャー乾さん』

「梨花!!!そいつに引導を私でやりなさい!!!」

「エレナ!!!頑張つて!!!ここ勝負だよ!!!」

お互いのチームから大声援が飛ぶ。お互いにここで試合が決まると分かっているんだらう。

「橘さん。下がっていいわよ。バントはしないわ。約束する」

「え……?分かりました」

突然の乾さんからの深刻に半信半疑ながら私は、ファーストのポジションに戻り、ジェシカはセンターに戻った。

「梨花!なんでわざわざそんな事!」

どうやら綾小路さんの作戦でもなさそうだった。なんで自分から有利を崩したんだらうか……

「綾小路さんごめんなさい。私は真つ向から月村と勝負してみたくなりました。打てなかつた時は責任を取ります」

「分かったわ」

「いいのかしら？責任なんて軽々しく発言していいものじゃないでしょうに」

「いいのよ。貴方の疲労も限界を超えてるでしょ？こちら辺で楽にしてあげるわ」

乾さんは、バットをホームベースにコンコンと当てるとお嬢様の方に向き直り初球を待つ構えに入った。

第1球……

「ストライク！ワン！」

「ナイスボール！頑張れえ!!!」

まだお嬢様の球は生きてる。ここにきて最後のギアを入れたのだろう。電光掲示板のスピードガンは今日最速の137キロが表示されていた。

サイン交換を終え、第2球！

カキーン!!!

「ファウル!!!」

一塁側の応援席に飛び込むファウルボール。これで追い込んだ。

「エレナ!!!後1球!!!」

キャッチャーの天音様が叫ぶ。

「エレナ様決めちゃって下さい!!!」

シヨートのさゆりも声援を飛ばす。

「月村!!! 頑張れえええ!!!」

センターのジェシカも大きな声を飛ばしていた。

そして第3球のセットポジション……

「エレナアアア!!!」

私も声が許す限り全力で叫んだ。皆の声援が乗ったボールを天音様のミットに投げ込んだ。

「ストライク!!! バッターアウト!!!」

その瞬間一塁側の応援席から大歓声が上がった。抑えたんだ……これで後は下位打線。これなら!

「やったねエレナ!!! エレナ……??? ねえ……なんで倒れてるの……エレナアアア!!!」

投げ終わった後だろう、お嬢様はマウンドで息を荒くして突つ伏していた。きつと限界だったんだ……やっぱりあのとき止めておけば……

「エレナ!?! 誰か担架!!! 早くして!! 濱田先生!!!」

天音様が叫んでいた。嘘だよ……三振取ったんだよ。後4個で私達の勝ちなのに……お嬢様大丈夫って言ったのに……こんな結末だなんてやだよ。早く起きていつもみたいに笑顔を見せてよ。なん……で……こうなるのかな……

「!?楓ちゃん!!!しっかりして!!楓ちゃん!!!さゆり!もう1台!多分ショックで気絶した  
だけだと思うけど慎重にね。ジエシカもついていってあげて!」

「わ、わかった!」

私の意識はそこで途切れた。

私は夢を見ていた。これは確かまだ私が小さかった頃……

「楓ちゃんお人形遊びしよ!!私王子様役で楓ちゃんお姫様ね!!」

「えー!毎回エレナちゃん王子様じゃん!たまには楓がやりたい!」

「ダメ!楓ちゃんは可愛いんだからお姫様!私は将来なんでも出来るかつこいい大人に  
なるから王子様なの!お姫様は家で王子様の帰りを待つていれればいいんだよ!」

「ええ!それだとお姫様ずつとお家の中で可哀想だよ!お外出れない!」

「そういう時はね、王子様が連れ出してあげればいいんだよ。こういう風にね」

思い出した……確か私が3歳の時だったと思う。この時お嬢様は、確か私の腕を取っ  
て……

「エレナちゃん……」

「あら、目が覚めたかしら。それにしてもエレナちゃん。なんて小さい時の夢でも見て  
たの?」

目を開けるとお嬢様が目の前にいた。

「え？ちよつと待つて頭の理解が追いつかないんだけど。だつてエレナ倒れたんだよね？なんで今、私の目の前にいるの？病院は？つてか大丈夫なの？つて痛い！なんで叩くの！」

「貴方があからさまに慌てて収集つかなくなつてるからよ……私も確かに疲労でぶつ倒れたわ。でもね、担架に乗せられた時にはもう意識あつたのよ。まあ貴方が倒れた時には流石に私もパニックになりかけたけどね……とにかく、もう私は何ともないから大丈夫よ。心配してくれたのよねありがとう」

そう言つてお嬢様は、私の頭を撫でてくれた。ホントに何ともなくて良かった……  
「つく……」

「く……」

「うわあああん！大丈夫だつて言つたじゃん！！なのに！あんな風になつて……ひつぐ……ホントに良かったよお！！もう会えないかと思つたんだからあ！」

私は、ベッドから飛び起きてお嬢様に泣きついた。

「ごめんね楓。でもホントに大丈夫だから」

「また大丈夫つて言つたあ！もうエレナの大丈夫なんて信じない！エレナの馬鹿！胸無し！！ドM！変態！」

私は、お嬢様の胸を子供のようにポコポコと叩きながら主張した。

「ちよ、ちよつと！関係ない言葉が出るわよ！落ち着きなさい楓」

「やだ！キスしてくれなきゃ許さない!!」

「え、えつと……それは今はちよつと……」

「なに!?!いつつも勝手にキスしてくる癖にこういう時は出来ないんだ!」

「もう！落ち着きなさい!ん……」

久しぶりのキス。球技大会の練習で忙しかった私達は、自分達でルールを決め、そういう事はしつかり事が終わったらと話していた。つてか冷静になったけど私なんてこ  
と口走ってたんذارろ！私は、急に恥ずかしくなつて顔が熱くなつていくのが分かった。

「えつと……取り乱してごめん……なんか冷静になつたら私めちやくちや恥ずかしい事  
言つてなかつた？誰も聞いてないよね？」

「えつと……」

「その……」

「私達何も見てないから……」

いつから居たのだろうか、保健室の扉の前に綾小路さん、乾さん、宇田さんが顔を真っ赤にしていて立っていた。

「な、な、なんでいるつて言つてくれないんですか!!」



「だから今はちよつとつて言ったのに楓が無茶苦茶言うからでしょ！」

私達の会話を聞いていた綾小路さん達は、この光景が余程おかしかったのかお腹を抱えて笑っていた。

「そんなにおかしかったですか……？」

「ふふ、ごめんなさいね。普段の橘さんとまるで別人なんだもん。つてこんな話しにきたんじゃないや。皆、いいわね？」

「はい」

「うん」

「いったいどうしたんだろうか。試合は、もちろん私達の負けで終わっているはず。馬鹿にしに来たようではないみたいだし……」

「「ごめんなさい」」

3人が同時に私に向かって頭を下げわ謝罪の言葉を口にしていった。

「え？どうして。試合は、綾小路さん達の勝ちですよね？」

「私から説明させてもらうね。まず試合の事だけ私達が降参したわ。試合放棄して事で私達の負けよ。貴方達に気付かされたわ。私達のやつてることは、間違いだつたんだつて。たつた5人なのに真つ直ぐ立ち向かつてきて、私達、いいえ、私の汚い作戦に1歩も引かずに倒れるまで試合を続けたんですもん。それに月村さんからまともに打

てた人なんていなかったしね。だから本当にごめんなさい。野球の汚い事も、橘さんとジエシカちゃんが真面目に話しているのに適当にあしらったことも。許してなんて甘い事は言うつもりはないわ。この処罰は、どんな事でも受けるつもり」

綾小路さんがこんな人だとは思わなかった……今頃は喜んでいっていると思つてたのがこんなに真摯に謝ってくれる人だったなんて……

「顔を上げて下さい。甘いつてお嬢様には言われるかと思いますが、謝罪の言葉だけ頂ければ十分です。これからは仲良くして下さいね」

私は、綾小路さんの目の前に右手を差し出した。

「月村さんいいの?」

「楓がそう言うなら私からは何も無いわよ」

「ありがとう……宜しくね橘さん」

「はい」

綾小路さんの右手はしっかりと私の右手を掴んでいた。

「それじゃ私達はお邪魔だろうからお先に失礼するね。あの、聞いてもいいかな? 2人って付き合ってるの?」

「はい。真剣にお嬢様と交際させて頂いています」

「そっか。でも今日で皆にバレちゃったかもよ? マウンドで月村さん橘さんに抱きつい

たつていうか甘えてたでしょ？それ見てた新聞部がエレかえ尊い？とか言いながら部屋の方走つていったけど……」

そういえばそんな事お嬢様してた気がする……お嬢様の方を見ると、私は知らないとおぼかりにそっぽを向いていた。ホントにこの人は……

「お屋敷戻つたらお仕置きですからね。覚えておいて下さい」

「ちよつとそれだけは勘弁して！」

そう言うと、再び保健室には笑い声が響いていた。何はともあれ丸く収まって本当に良かったと思つた私だった。

## 一夜明けて

『それで新聞部に激写されたと……あんたも今日は散々だったねほんと。楓ちゃんから聞いたよ、綾小路さん達にキスされるとこ見られたって』

「あの子そんな事も言ってたのね……まあ丸く収まって何よりよ。冬季休暇開けの学校が少し怖いけどね」

時刻は午前1時。球技大会の疲れがあるはずなのに何故だか眠れなかった私は、数少ない友人の1人の天音に電話をかけていた。お屋敷に帰ってきたら、お風呂も入らず楓が疲れたから寝るって言い出したのを慌てて止めて、女の子なんだからそれぐらいしなきゃダメよ。って言った後、お風呂で寝始めた楓をなんとか寝室まで運んだのはいいが、今度は私が寝れなくなってしまった。まあしばらくお休みだからダラダラ夜更かりする分には問題ないんだけどね。

『元から知名度はあったのに、今回の件で更に有名人になったね……てつきり楓ちゃんといチャイチャしてると思ってたよ。こんな時間に電話来るなんて思わなかった。私  
が寝てたらどうするつもりだったの?』

天音の声からは、呆れているようなそんな感じが読み取れた。まあこんな時間に電話

してくる友達なんてそんなないしね。ましてや仮にもお嬢様って立場もあるから尚更だと思う。

「疲れていてそんな気分じゃなかったわよ。そしたら楓の寝顔でも眺めながら眠くなるのを待ってたわ」

楓の寝顔なんて見詰めてたら理性が保つか怪しいけどね……もう2週間以上そういう事もしてないし。

『あんだ達にしては珍しいわね。最近ハツキリ私に甘えてるって言うかそういう事やりたがってない？』

「まるで見てきたような言い方ね……確かに付き合いたての頃に比べたらあの子も変わったわね。でもいい変化なんじゃない？付き合ってるのにお互いに遠慮することなんてないもの。最近ハツキリ私に言いたいこと言ってるわよあの子」

『それは、エレナが暴走するからでしょ……』

「まあそれもないとは言えないけれど……」

心当たりがありすぎて天音に反論出来なかった……特に夏季休暇の時なんて酷かったから……

『まあとにかくクリスマスどこかに連れて行ってあげなよ？日頃お世話になってる恩返しも兼ねてね』

「そーね。えっと……3週間後ね。それまでには決めておくわ」

『私もさゆりに楽しんでもらうためにそろそろ計画建てなくちゃだわ。あんまりエレナの事そこら辺では言えないかな。ふあーあ。そろそろ眠いから切るよ。おやすみ』

「りよーかい。ありがとね、おやすみ」

『はいよ』

そう言つて電話は切れた。こういう会話が出来る友人も少ないし、そう考えると天音に友達になつてもらつてホントによかつたかな。私もそろそろ寝なきやな。

「まだ起きてるの？ やっぱり何処悪いんじゃないの？」

「ごめんなさい起こしちやつたかしら」

「ううん。おしっこ」

リビングの入り口に眠そうな顔をした楓が立っていた。トイレに行こうとしたらリビングの灯がついていたから見に来たのだろう。

「そ。足下気を付けてね」

「子供じゃないんだから大丈夫だよ。エレナも早く寝なね」

「うん。おやすみ楓」

「おやすみ」

とりあえず布団に行こうかな……

私は、リビングの灯りを消すと自分の寝室へと向かった。自分のと言っても一人部屋ではなく、今は楓と一緒に寝ているから2人の部屋って言うべきかな。

部屋の中に入るとまだ楓は、戻っていないようだ。楓戻ってくるまでは起きてようかしらね。と言つても全然寝れる気なんてしないんだけれども……

「体が重い……やっぱり普段から運動しなきゃだね……」

腕を軽く回しながら楓が戻ってきた。きつと球技大会の疲れが残っているのだろう。私も普段は筋肉痛なんかにならないけれども今回ばかりは体がとても重く何もする気にならなかつた。

「筋肉痛？」

「あれ？いつの間にかいたの？うん。流石に疲れちゃった」

「マッサージしてあげようか？」

「やだ」

そんなに早く否定しないでもいいじゃん……まあ私がマッサージとか言ったらそういう風に取りられてもおかしくないけど……

「そんなに食い気味に断らなくても……」

「だってエレナすぐエッチなことするもん。今日はそういう気分じゃないからやだよ。」

私寝るね」

「今日はいよいよはあ……日頃の行いってやつね。おやすみ。私も寝るわ」

横になって目を瞑っていると自然と眠気が体中を包み込んでいった。私の意識は、気が付けば夢の中へときえていった。

「ん……ふぁーあ……今何時かしら……」

体のだるさと共に目が覚めた。どうやら私も全身筋肉痛になってしまったみたいだった。ベッドの上から手を伸ばして時計を確認しようとしたが、体がバキバキで言うことを聞かなかった。

「んー!! ああーもうー! このぐらいで筋肉痛になんかなってるんじゃないわよ。そんなに私ぬるい鍛え方してないはずなんだけど。なんだまだ9時なのね。もう1人眠りしようかしら……」

「んー!! エレナ起きたの?」

「楓おはよ。貴方も早いのね」

私が横でガサガサしていたからだろうか、気が付けば横で寝ていたはずの楓が目を開けて、こちらを見ていた。

「昨日疲れてて早く寝たしね。いてて……やっぱり体痛いや……」



「だからマッサージしてあげるって言ったのに……私それなりに整体に心得があるのよ？」

「お母様から教えられてるのは私もメイドだったし知ってたよ。ホントに変なことしない？」

「しないわよ。体痛いでしょ？うつ伏せになりなさいな揉んであげるから」

「じゃあお願いしようかな。下着になった方がいいよね？」

「そーね。そっちの方が直接マッサージ出来るだろうし」

昨日とは打って変わって、楓からマッサージをお願いされた。私も体痛いけど楓優先なのは言うまでもないわね。

うつ伏せの楓に、私はまたがると早速マッサージを始めた。なんて言うか……下着姿の彼女にまたがるって……ううん。気にしちやダメだ。それに私は上は好きじゃない。楓の下にいたいし。違う違う！そんな話をしてるんじゃないやなくて！

「特に痛いところは何処がある？」

「んー……太ももかな。すんごい張ってるのわかるんだもん」

「わかった。痛かったら言っってね」

そう言っって私は、楓の太もも付近をゆっくり力を入れて揉んだ。

「んん……」

「大丈夫?」

「うん。気持ちいいよー」

変なことしないと豪語しちゃったからにはそういう事をやる訳にはいかないんだけど。私からしてみたら楓の気持ち良さそうな声は凶器でしかなかった。楓の柔らかい体を丁寧に触っているという事実だけで私の中にくるものがあった。

「エレナ? 手止まつてるよ? エレナも痛いなら無理して私のマッサージとかしなくて大丈夫だよ?」

「え!? ううん。ごめんねちよつと考え事してただけよ。続けるわね」

危なかつた……楓はこういう時の勘がとても鋭い。もし変な気持ちになつてるなんて楓にバレたら夏季休暇と同じように怒られてしまうかもしれないし、なんとかこの気持ちを抑えなきゃ。

「ああ……気持ちいい……エレナホントに上手なんだね」

「お母様は、全体の免許を持つてみたいだったからね。基本的に手先は器用だしね私」  
「ホントにエレナって何やらせてもそつ無くこなすって言うか何でも出来るよね。ん! そこすんごい気持ちいいよエレナ」

時折漏れてくる楓の気持ち良さそうな声にそろそろ私の理性は崩壊寸前だった。この子わざとやってるわけじゃないわよね……いやいや。楓はそんな卑しい子じゃない

わ。

「エレナ、もう少し上の方お願い出来る？」

「お尻の方？」

「うん」

「その前にちよつとトイレ行ってきてもいいかしら？」

「大丈夫だよー。じゃあ私冷たい物持つてくるよ」

「ありがとう」

……………どーしたらいいのよ!!!お尻近くとか無理に決まってるじゃない!それに楓は、下着しか身に付けてないのよ?それでお尻の方とか意識したらとか……仕方ないわ。これは、楓に嫌われないために仕方なくだからね。私は、部屋を出る時にくすねた楓のパジャマを片手にトイレで数十分籠ることとなった。

エレナ遅いなあ。お腹でも痛くなつたのかな。私もずっと下着じやお腹冷やしそうだし、1回パジャマ着ちやおつと。あれ……私のズボンどこ行つたんだろ。冷たい物取りに行くまであつたと思うんだけどな。お嬢様が洗濯物に出したんだろうか。

気になつていつも洗濯物をまとめている場所に行つてみると、昨日の体操着ぐらいしか洗濯物には無く、私のパジャマはなかった。

「おかしいなあ……エレナに知らないか聞いてこよ」

トイレ中失礼だとは思ったが私は、お嬢様の元へと向かった。

「エレナ、私のパジャマ知らない？」

私が外から声を掛けた瞬間中でバタバタと何か大きな音がした。もしかしてお嬢様も筋肉痛で動けなくなつたんじゃないか……

「エレナ大丈夫!?!もしかして昨日の疲れで立ち上がれなくなつたりしてないよ?」

「え、ええ……大丈夫よ。つく!!!」

到底大丈夫とは思えないようなくぐもつた声がトイレの中から聞こえた。

「やっぱり大丈夫じゃないじゃん!待ってて今すぐトイレのスペアキー持ってくるから!」

私は、踵を返してスペアの鍵などが保管してある倉庫へと急いだ。

「ホントに大丈夫よ!超元気よ私!ほら!!!こんなに大きな声も出せるし!!!」

何かお嬢様が言っていた気がするが、きつとまた強がりだろう。私は、そう自己解釈して鍵を取り、トイレへと戻つたのだが……

「なんだ自分で出れたんだ……心配したんだからね。……エレナ。今何隠したの?」

顔を赤くして、息を何故か荒くしているお嬢様がトイレの目の前に立っていた。それになんて今、何かを隠したの?なんか服みたいに見えたけど。待てよ。服?もしかして

お嬢様……

「何も隠さないわよ」

相変わらずこの人は嘘が下手だ。私が目線を合わせようとしても、目を逸らすし、挙動不審だし何か隠しているのは明白だった。

「じゃあその右手に持つてるもの私に見せられるよね？」

「え、ええ……楓！後ろゴキブリ!!!」

「え!? エレナ!!! 待つて!!! 待つて!!! 待つて!!! 待つて!!!」

私に後ろを確認させてる間にお嬢様は、一目散にその場から退散しようとして全力疾走で自室の方へ逃げていった。はぐらかされる前に捕まえなきゃ。

「待たない!!! キヤツ!!!」

やっぱり疲れ抜けてないのは一緒だったみたいだった。お嬢様は、数メートル走ったところで思いっきり躓いていた。

「捕まえた。下はカーペットだし怪我してないよね? それで私のパジャマトイレに持つて行つて何してたのかなエレナ」

「何もしてないわよ。ただ洗濯物出しに行つて上げる前にトイレ行つてたの」

言い訳が苦しすぎる……ならなんで上も持つていかないのかつてなるでしょうに

……

「エレナ、私のパジャマでしてたんだよね？」

私はお嬢様の目を見ながら言った。目を逸らしたがるお嬢様の頭をがちり固定して、逃げられないようにした。

「してないです……」

「もう一度聞くね。してたんでしょ？白状しなよ。今なら許してあげる」

「……してた」

「何をしたのか言って」

「楓。これ以上は勘弁して……」

お嬢様は、恥じらいで顔が真っ赤になっていた。こうやって恥ずかしがるお嬢様見ると、虐めたくなるんだよね。

「だーめ。言って。言ってくれたら許すだけじゃなくてご褒美もあげようかなって考えるんだけど？」

私は、お嬢様に吐息が当たるぐらいに近付いて耳元でボソツと囁いた。その瞬間お嬢様の顔は更に真赤になっていた。きっとこれからの展開も分かっているだろう。

「ホントに……？」

「ホントだよ。エレナ。もう一度聞くね。これがラストチャンス。私の、パジャマで、何してたのかな？」

「えつと……楓のパジャマの匂い嗅ぎながら……」

そこでお嬢様の言葉が止まる。私はすかさず追い打ちをかけた。

「そつか。言えないんだね。じゃあ今後口聞いてあげないし、ご褒美も上げない」

「まつ！待ってください！言います！言いますから！楓様のパジャマの匂い嗅ぎながらオナニーしてました……」

「よく出来ました」

「その、ご褒美と言うのは……」

お嬢様の目は、私の下半身。主に足のあたりに釘付けになっていた。仕方ない人なんだからほんとに。まあ私も楽しんでるし人の事言えないか。

「はい。走って少し汗かいちやつてるけど舐めていいよ。エレナにとってはご褒美だよね？」

「もちろんです……楓様の綺麗な足舐めれるなんて光栄です」

そう言うとお嬢様は、私の足を優しく撫でた後に犬のようにペロペロと指先から舐め始めた。

「ホントに犬みたい。ねえわんちゃん。舐めながらトイレでやったこと私の前でもやって見せてよ。出来るよね？」

「ふえ……流石にそれは……」

「出来るよね？」

少し強めの口調で私はお嬢様に言った。

「わかりました……」

そう言うとお嬢様は、私の言った通りにやる事をし始めた。きつとトイレでは、私が声をかけたせいで中途半端だったんだろう。数秒もすると、お嬢様は体を跳ねさせカーペットの上に倒れ込んだ。

「まだいけるよね。次は一緒に。だよね？」

「もちろんです楓様……」

冬季休暇初日の朝。私達は、久々の交わりでお互い興奮していたのかは分からないが、筋肉痛の中体力が続く限り交わり続けた。



## クリスマスに向けて

冬季休暇に入って2週間がたった。日付は12月20日。街はクリスマススムードで賑わっていた。どこに行ってもクリスマススケーキーの予約などの看板でいっぱいだった。今、私は詩織さんとクリスマスパーティーの準備をするために都内のショッピングモールに来ています。お嬢様は、相変わらずの引きこもり体質で、私は行かないわよと一言だけ残し、自室に籠ってしまった。

「詩織さん、ここでエレナにクリスマスプレゼント買いたいので、クリスマスパーティーの材料買った後少し別行動でも大丈夫ですか?」

「おっけー。材料私一人で大丈夫だし、もう行つていいよ。プレゼント買ったら車に戻つておいで」

「ホントですか?すみませんありがとうございます」

「いいのよそんなに畏まらなくて。それに私も後でエレナに言わなきゃいけないことあるし……」

「え?何かあったんです?」

「ううん。なんでもないの。それじゃまた明日ね」

詩織さんらしくもないが、何か罰が悪そうにスーパーの食料品売り場の方へと向かっていった。

さてと……何買おうかな。この間天音様に相談したらなんにも参考にならなかつたし……

時刻は昨日の夜に戻る。

『もしもし天音だけど。楓ちゃんから電話なんて珍しいね。どうしたの?』

「すみません突然。ちよつと相談したいことがあります」

『全然大丈夫だよー。私にすることはエレナの事だよね? どうしたの? エッチのマンネリ化が進んでて何か新しい責め方でも教えて欲しいって? そうだなあ』

「違いますー!」

私は、食い気味に否定の言葉を送った。どうやったらそっち系の質問を相談しようとするのか……

『え? 違うの? てつきりそういう系だと思ったのに』

「違いますよ……話をもどしますね。そろそろクリスマスじゃないですか、それで何かエレナにクリスマスプレゼント送りたいなって思いました」

『なるほどね。エレナなら楓ちゃんから何貰っても嬉しいと思うけどね』

「確かにエレナならそう言ってくれると思うんですけど思い出として残る品がいいか

なつて思つて」

『思い出……エレナと楓ちゃんの思い出かあ……分かった！首輪だ！思い出に残ると思うよ！エレナに首輪つけちゃおうよ！それで写真撮つて日付入れておけば完璧じゃない？』

「……相談する相手間違えたみたいです。ありがとうございます。おやすみなさい」

『ちよーちよつと』

何か天音様が言つていたような気がするが、私はそれを無視して電話を切つた。

「はあ……どうしようかな。自分でちゃんと考えようかな」

と言つた感じで全く参考にならなかつた。そんなもの送り付けられたら流石のお嬢様だつて怒ると思うけど……

とりあえずせつかくシヨツピングモールに来てるんだし色んなお店見て回ろうかな。

私は、グルツと一通りお店を見て買うものを決めた。一年に一度のクリスマスだもん。少し洒落たプレゼントを送つてもいいよね。

---

一方その頃月村邸では……

「ええ。すみませんありますがとうございませす。では、当日そのような段取りで宜しく願ひ致します」

私は、とある所に電話をかけていた。勿論クリスマスパーティーに関係する事だった。天音にも言われた通り今年はちゃんとしたクリスマスパーティー開かないとね。幸いお母様が残してくれた財産はあるしね。そろそろ私もお母様の様に事業やらないと顔向け出来ないわね。まあそれも私が今からやろうとしていることをちゃんと完遂出来たらかな。今回のクリスマスパーティーで私は……

楓にプロポーズをする。ずっと前から考えていた事だった。付き合ってから2年目ぐらいからかな。私の気持ちの中で、楓とこれ以上の関係になりたいって思い始めるようになった。紅葉さんには、私一人でこの間挨拶をしに行つた。頭を下げ、楓さんと結婚したいと思っています。としつかり紅葉さんに伝え、二つ返事で楓を宜しくね。とお願ひされた。これで後は楓だけ。私のプロポーズを受けてくれるかな……正直自分の心の中は不安でいっぱいだった。許してもらつてるとはいえ過去の私の楓への言動。それに最近は何かと呆れさせてしまう事も多くなつてる気がするし……

「ああ！考へても仕方ないでしょ月村エレナ！ダメだったらその時はその時よ。とにかく今は、クリスマスまでに間に合うように、それでいて楓に気付かれないようにしなくっちゃ！」

私は、自室から飛び出るとクリスマスパーティーに向けて準備を始めた。

「詩織さんすみませんお待たせしました！」

「いいよいいよ。それで何か買えたの？」

「はい。悩んだんですけどペアのネックレスにしました。プレゼントとしては、ちょっと重いかどうか考えたんですけど、お揃いのものとかあんまり持っていないって思ってたこれにしました」

私が悩みに悩んで買ったのはペアのネックレスだった。プレート型になっていて、クリスマスの日付、お互いの名前を掘って貰うことにした。彫刻に時間がかかるのでネックレス本体が到着するのは丁度24日の昼の辺りになるみたいだ。

「いいんじゃない？きつとエレナも喜ぶと思うよ。後、私クリスマスパーティー一緒に出られないかもしれないんだごめんね」

詩織さんは、申し訳なきそうに私に喋っていた。別に月村家参加の義務はないんだからそんな顔しなくても……

「そうなんですわね……でも詩織さんぐらい綺麗な人なら男の人放っておかないと思いますし仕方ないですよ！」

詩織さんは、同性の私から見ても魅力的だもん。女性らしい体って言うのかな？出る

とこ出てるしって感じ。

「いやあ……男だったら私もごめん彼氏とクリスマスデートだから！って言ってるよ。ソフイって知ってるよね？ジエシカのメイドの。あの人からなんとかうちのクリスマスパーティー来れないかって誘われちゃってさ。どうにもジエシカに気に入られたみたい」

「そうなんです。でもエレナも何も言わないし悪いとは思わないと思いますよ」

ジエシカは、絶対あの人よこさないでよね！なんて言ってたのに、どうやら内心はその逆だったみたいだ。

「今のエレナは、ホントに優しくなったからね。それじゃ戻ろっか」

「はい！」

私達は、都内のショッピングモールからお嬢様が待つお屋敷へと戻った。

## クリスマスに向けて②

「ただいまー」

「あら、以外に早かったのね。もう少し帰ってくるの遅くだと思ってたわ。詩織も買い出しありがとね」

お屋敷に戻ると、お嬢様はリビングでパソコンをいじっていた。珍しいな。何か調べ物でもしていたのだろうか。

「たまにはエレナも外出てよね。それと、話しあるんだけど、今大丈夫？」

「ん？別に構わないわよ。私も丁度終わらせたとこだから」

「クリスマスの時外出を許可して貰えない？行き先はジェシカのお屋敷なんだけど」

「ジェシカから聞いてたわよ。気に入られてるみたいで良かったじゃない。でも、その必要はなくなったわ。このお屋敷に、紅葉さん、佳奈さん、天音、さゆりちゃん、ジェシカ、ソフィさんと呼んで大勢でクリスマスをお過ごしことに決めたのよ。皆には了承を貰えたり、天音とさゆりちゃんには明日からクリスマスパーティーの準備を手伝って貰えることになったわよ」

私達が買い出しに行ってる間に全員に声掛けてたんだ。お屋敷でぼーっと待ってる

ただだと思いましたよ。ごめんなさい勘違いして。

「そーいう事なら大丈夫だね。なら私も明日から手伝うよ。今日は、買った材料冷蔵庫に入れておけばいいよね？」

「そうね。後は好きにして貰って構わないわ」

「りよーかい」

そう言うとき織さんは、買った食料を冷蔵庫へと運んで行った。私はと言うと、お嬢様と詩織さんに何か飲み物を、と思い温かい紅茶を準備していた。

「パソコンで何調べてたの？」

私は、紅茶をお嬢様に出しながら訪ねた。パソコン使っているの見たのなんて修学旅行以来じゃないかな。

「ちよつと色々ね。クリスマスパーティーに合う料理とかなくなって思っ。料理は、天音のこのシェフが数人来てくれるみたいよ。私達がやる事なんて部屋の装飾ぐらいだから、楓も気負わなくていいからね」

「天音様のシェフさん来てくれるんだ。大丈夫だよ。元から気負ってなんてないよ。エレナこそ大丈夫？何かさつきからソワソワしてるように見えるけど」

何故かは、わからないがお嬢様はいつになくソワソワしているというか、何かを隠しているような気がした。クリスマスのサプライズとか考えてくれてたら悪いからこれ



以上は、追求しないであげよ。その代わり最高のサプライズお願いね。

「気の所為よ。強いて言うならちよつと楽しみにしてゐるつてぐらいね。普段はこういう事で張り切ったりしないんだけど、球技大会もあつたし、仲良い人で集まれるつて素晴らしいと思わない? きつと天音達とはこの先もずっと友達だと思つてわ」

「ふふ、数年前のエレナに聞かせてあげたいよほんとに。絶対言わなかつたと思つよ。エレナが変わつてくれて私もホントに嬉しいよ。私もずっと皆と一緒にだと思つよ」

「そーね。それじゃお風呂の準備でもしてくるわ」

「え!?! いいよ私やるから」

「たまにはやらせなさいな。貴方達人混み行つて疲れてるでしょ。いいから座つてなさい」

「エレナがそう言うならお願いしようかな」

「任せなさい」

そう言うとお嬢様は、1人お風呂場の方へと向かつていった。珍しいな自分からやるつて言うなんて。忙しい時には、手伝つてくれるつていうか私やつておくからいいよつて言つてくれる事はあるけど、特に忙しくもない時に変わった時なんてあつたかな。

「はあ……いつも通りに過ごすことがこんなにきついだなんて思わなかったわ……」

私は何故お風呂掃除を勝手でたのかと言うと、楓と一緒に空間にしているとボロが出そうで怖かったからだ。プロポーズは、クリスマスパーティー最大のサプライズ。絶対に勘づかれるわけにはいかない。

「こんな調子でクリスマスまで持つのかな私……人生でこんなにドキドキするなんて初めてよ。とにかく四日後。それまでは頑張らなくっちゃ」

「なーに一人でブツブツ言ってるのよエレナ。明らか言動おかしいと思ってたけど何かサプライズでも考えてるって感じよねさっきの台詞だと」

気がつけばお風呂場の入口に詩織が寄りかかってこちらを見つめていた。いつからいたんだろうか。

「いつからいたの?」

「お風呂掃除やるわよって言った辺りからよ。ホントに隠し事するの苦手だよねエレナって。いつもと様子違いすぎるんだもん」

「そんなにわかりやすいかしら……」

「うん。少なくとも普段一緒にいる人ならすぐわかるぐらいにはね。それで何するつもりなのよ? 私にも関係ある事ならこれ以上の詮索はしないけど何か協力出来ることあるならするわよ?」

関係……無くはないけど、ここまで私が隠し事下手くそなら協力して貰った方が良さそうかな……

「関係なくはないわね。でも協力して貰ってもいいかしら？ 実は、クリスマスパーティーの時に楓にサプライズでプロポーズしようと思ってるの。今日一人で家に残ったのも、ネットで婚約指輪を見たり、OK貰った時のためにウエディングドレスから何から準備してたってわけ。だから貴方達が帰ってきた時パソコン使ってたのよ。もう少し早く帰ってこられてたら危なかったわ……」

「マジで!?! いいじゃんいいじゃん！ 私より先に結婚かぁ。エレナのくせに生意気じゃん。それならエレナのあのおかしな言動にも納得いくわね。ってかクリスマスパーティーが事実上の結婚式ってことよねそれ？」

私のクリスマスパーティーの計画を聞くと、詩織はびっくりしながらも計画に関しては、賛成みただった。私と楓が付き合ってるって聞いた時は、否定的だったけど今は、何も思っていないみたいで少し安心したわ。

「そーなるわね。プロポーズ受けて貰えるならそのまま式をお屋敷で上げようと思ってるわ。だから皆を呼んだって言うのもあるかな。他に呼ぶ人もいないしね」

「なるほどね。わかった！ 私も協力してあげる。とにかくこれから三日間エレナは、ジェシカのお屋敷に行きなさい。楓には、クリスマスパーティーの準備でしばらく出かけ

るからって言うておくからさ」

「楓と3日も会えなくなる……？流石に嫌よそれわ」

楓と会えない日が出てくるのは、いくらサブライズの為とはいえ、私の生活のモチベーションが無くなる。私の行動理念は、だいたい楓基準で動いていると言っても過言ではなかった。

「あんたねえ……このままだと絶対どこかで勘づかれるわよ。楓ちゃんの事だから分かっててもエレナが何かしたいんだろうなああって思ってた黙ってくれるかもだけどサブライズ感は薄くなつちゃうんじゃないの？それでもいいならいいんじゃない？」

詩織の言う通りかもしれない。確かに優しい楓なら気付いていても気付かない振りをすることも……ここは詩織の言う通りにした方がいいかもね。

「分かったわ。でもジェシカが良いって言うかしら」

「心配しないで。もうメッセ入れといたから。善は急げよ。早く準備しちやいなさい」

「仕事が早いからね……その前に最後に楓にジェシカのところ行って言うぐらいなら」

「いいから行きなさい！」

「詩織の意地悪」

「そんな子犬みたいな顔してもダメよ。なーにが意地悪よ。数年前のあんたに比べたらこんなの仏よ」

数年前の話をされては、引き下がらずをえない。しかし楓とこれから三日間も会えないなんて……ううん。これも絶対成功させるため！やりきってやるわよ。

「それじゃ準備するわね。ジエシカのお屋敷まで運転お願い」

「あいよ」

それから私は、2日分の着替えを鞆に詰め、楓がお風呂に入っている間に詩織の車に乗り込んでジエシカ低へと向かった。

## クリスマスに向けて③

詩織の車に揺られジエシカのお屋敷へと向かっている時だった。

P r r r r r …… P r r r r r r

ん？電話？

ディスプレイには楓の文字が表示されていた。何かあったのかしら？

「もしもし？」

「あ、エレナ？どこ行ったの？お風呂から上がったらエレナも詩織さんもいないんだもん。びつくりしちゃったじゃん、一言ぐらいメモ残して置いていてよね」

詩織……貴方も言ってこなかったのね……

「ごめんね。ちよつと私はしばらくクリスマスパーティーの準備で絶対にやらなきやいけないことあるから三日間家を空けるわ。心配しないで。ちゃんと詩織は置いていくから」

「絶対に？エレナがそこまで言うなら私は何も言わないけど……少しでもエレナと会えなくなるのはちよつと寂しいかな……」

楓……電話口から聞こえてくる楓の声が少し寂しそうに聞こえてくる。

「私もホントに寂しいわ。だから毎日電話をかけるわ。これじゃダメかしら？」

「ううん。それだけでもすんごい嬉しい。何をするのか分からないけど頑張つてね」

「ありがと。風邪引かないように暖かくして寝なね？おやすみ」

「うん。おやすみエレナ」

そう言つて電話は切れた。そつか……楓と離れている間一人で寝るのか……一人なんてすんごい久しぶりな気がする。そう言えば初めは私の勘違いから始まったのよね。楓との仲を深めたくてめちやくちや焦つてたなああの時は……姉妹で一緒に同じ布団で寝るものでしょ？なんて言つたり、楓がDMだつて変に勘違いしてお姉ちゃん頑張るね！なんて言つてたつけ私。それから何年たつたんだろ。ホントに時間が経つのも早いよね。幼稚園ぐらいの歳では、姉妹のように育てられて、小学生に入る前ぐらいから、私が楓を含めたメイドさん達に強く当たり始めたのわ。本当に申し訳ない事しちゃつたな……お祖母様の言い付けとはいいい、どれだけ非人道的な事をしてきたのかわからない。きつと表面上は許してもらつていても楓や詩織は、永遠に許してはくれないでしょうね。いや、許されていい行為ではない。私は、これからずっとその事を忘れずに人に接していかなければいけない。これは枷だ。結婚が決まつたらメイド一人一人の家を回つて頭を下げに行こう。私には、これぐらいしなければならぬはずだよね。

「ねえ？ねえつてば！」

運転席で車を運転している詩織の声に考え事をしようとしたせいも、詩織の声が聞こえていかなかったらしく、横から大きな声で呼ばれた。

「ごめんなさい。ちよつと考え事をしていたわ。どうしたの？」

「あんたさ、今昔のこと考えてたでしょ？最初はニヤニヤしてたと思つたら急に難しい顔して何かに責任感じるような顔してるんだもん違う？」

「間違いなわね。よく分かつたじゃない」

「顔に出すぎなんだもん。それでまだ気にしてる訳？私は、もう昔の事は許してるからあんたのお屋敷にいるだけけど？」

「そんなに分かりやすいのね私って……貴方が許す許さないじゃないのよ。あんなにいたたくさんのメイドを辞めさせてしまつて、その後の再就職だつて大変だつたんだろ？だなどかどうしても思つてしまうのよ。そうだわ……最後にやらなきゃいけないこと。詩織お願いがあるんだけど」

「まあエレナがそこまで気にしてるって言うならこれ以上は言わないけどさ。何？楓ちゃんと会えない間性の捌け口になつてって言うのは嫌よ？」

「そんな訳ないでしょ！お願いって言うのは滝さんに会わせて欲しいのよ。前に言つたでしょ、詩織と再開した時に鬱になつたつて。ならどんな事をされてでも謝りにいかなきゃいけないと思うの。それに滝さんは、お母様もお世話になつてるぐらい長い人だつ



たでしょ？楓も小さい頃お世話になってると思うし、あの人だけには出来ることなら謝りたい」

私は、横で運転している詩織の目を真剣に見つめながら話した。詩織と再開した時から思っていた事だった。会いたくないと言われればそれまでだが……

「うーん……一応滝さんの連絡先は知ってるけど、あの人がそれを了承してくれるかが問題だと思うよ。心身ともに疲れちゃってて私達が出て行った日から1ヶ月は精神科の病院で入院してたんだからね。まあいいわ。とにかく聞いてみるからあんたはそれまでプロポーズの言葉でも考えておきなさい」

「ありがとう詩織」

「そんな真剣に見つめながらお礼なんていらないわよ。あんた見てくれだけはいいんだからちよつと照れるわ」

横の詩織を見ると、確かに少しだけ頬が赤くなっているみたいだった。

「ふふ、詩織も照れることなんてあるのね」

私は、からかいを含めた声で詩織に言葉を返す。

「はあ!?私だつて女なんだから当たり前でしょ。なんかあつたまきました。大人しく運転してようかと思つたけど、しーらないつと。行くよ私の35!」

「な!ちよつと!……一般道よ!!ブレーキ!ブレーキ!!」

私が必死に止めようとしても、詩織はアクセルを踏める足を緩めずに、他の車が居ないことをいい事に長い国道を100キロを超えるスピードでジェシカの屋敷へと向かった。

「あんたね……なんてことしてくれるのよ。寿命が10年ぐらい縮んだわよ」

「久々に全力で走ったけどやっぱり楽しいわ。ほら降りた降りた」

結局アクセルをあれからも緩めずに助手席にいた私は、体に降りかかるGに恐怖しながらジェシカのお屋敷へと辿り着いた。

「じゃあ楓をお願いね。ジェシカには私からお礼を言っておくわ」

「はいよ。絶対成功させなさいよね！」

「もちろんそのつもりよ」

「その意気だよ。じゃあ滝さんから何か連絡来たら言うね」

そう言うと、再び詩織は私のお屋敷に戻って行った。

「待ったわよ月村。もう寝るところだったのに」

「ごめんなさいね。わざわざ出迎えてくれなくても良かったのに」

「何言ってるのよ。月村なんかでも一応は客人なんだからそれぐらいするわよ。それじゃ入って」

「お邪魔します」

クリスマスまで残り3日。詩織にも協力して貰ったんだから絶対成功させなきゃだね。ジェシカのお屋敷で、私は客間に通されその日はすぐに寝てしまった。

## クリスマスに向けて④

「月村起きなさい！朝ごはん出来たから早く!!」

耳元で甲高い声が響いている。うるさいわね……

「ねえ！朝！あーさー！」

「うるさい!!!」

「うるさいとまで言わなくていいじゃん！せつかく起こしてあげたのに！月村のバカ！」

ホントに朝から騒々しいわね……

「寝起き悪いのよ許して頂戴。それで今何時なの？」

「え？6時だよ。丁度朝ごはんの準備出来たからソフィが月村起こして来いって」

「はあ!?!今日休みよね？なんでそんな朝早く起きなきゃいけないのよ……」

「うちでは休みだろうが休みじゃなくても9時寝6時起きが基本だもん。ほら早く早く」

そう言ってジェシカは、私の掛け布団をいきなりひっぺがして、右手を引つ張ってきた。なんで休みの日にこんな早くに起きなきゃ行けないのよ……まあ客人として来て

る以上文句は言えないわね。

「わかったわよ……今起きるわ」

「つて！なんで服着てないの!?!もしかしてドMだけじゃなくて露出癖もあるの!?!つて  
いったあ!!?!なんで叩くのよ!」

私は、変な事を口走ったジェシカの頭を引っぱたくと無言で前日用意しておいた着替えに袖を通した。

「あるわけないでしょ。私寝る時は何も着ないのよ」

「この時期なのに?」

「暖房MAXにしてるからね。特に気にならないのよ」

「そっか!胸もないから形が崩れるとか考えなくていいもんね!」

「ジェシカ。またボコボコにして欲しいのかしら?」

私は精一杯の笑顔をジェシカに向けながら言い放った。

「それだけはやめて……とにかく服着たなら私に着いてきて。お父様とお母様もいるから」

「わかったわ」

そっか……そうだよ。普通の家には両親が一緒に住んでるもんね。私と楓が基準になっていたわ。長いこと2人だと感覚が麻痺しそうになるわね。最近では詩織も増え

て3人になったけど。

部屋の外に出ると、昨日は気にならなかったが、私のお屋敷よりも大きい家だなと思つた。これを家と言つていいのかはわからないけどね。さつきまで私が使つていた客間は推定だけで20畳程の広さにトイレ付き。そういう部屋が30室はあつた。いつたどういう構造をしているのかはわからないが、とにかく馬鹿みたいに広い。通路には何かあつたとき用のためだろうか、常に二人体制でメイドさんがついていた。しばらく歩いた後、ようやくリビングだろうか？ジェシカの足が止まり扉が開いた。

「お父様、お母様。友人の月村さんです」

丁寧な両親に向けて私を紹介してくれた。父親が日本人で母がロシア人らしい。ジェシカの母親は、ジェシカと違つて出るところは出ていてスタイルがともよかつた。その辺にはジェシカに遺伝しなかつたらしい。それに挨拶をする時は流石のロシアの姫だ。いつものジェシカと180。違つて少しだけびっくりしたが、私も気を引き締めお嬢様らしく挨拶を返すことにした。

「月村エレナと申します。この度は突然お邪魔してしまつて申し訳ありません。手厚い歓迎に感謝致します」

私は、ジェシカの両親に向かつて深々と頭を下げた。

「そんなに畏まらなくても大丈夫よ。ジェシカがお友達を連れてくるつて言つて、私も

父も楽しみにしてたのよ。ね？お父さん」

「月村さんって言ったかな？ジェシカと遊んでくれてありがとうね。この子はやかましいところは多いと思うが根はいい子だと思ってるから今後とも仲良くしてあげてくれるかな」

父親も母親も柔らかい顔をして私に向けて話してくれた。このぐらい楽な話し方をしてもらえると私としてもとても助かった。

「もちろんです。ジェシカさんとは今後も仲良くさせて頂きたいと思っております」

「もー！パパもママもそんなこと言わなくていいよ！ほら月村座って座って！ご飯冷めちゃうよ」

「さっきのお父様、お母様はどこにいったのよ……そうね。失礼します」

テーブルには、日本人に合わせてくれたのかはわからないが、シンプルに焼き鮭、わかめと油揚げのお味噌汁、生野菜、納豆、白飯が綺麗に並べられていた。

「では揃ったようだね。ソフィも座りなさい。頂きます」

一同「頂きます」

ご飯はどれを食べても美味しかった。日本人に合わせた味付けなのかはわからないが、薄味で朝食にぴったりだった。

「月村さんのお口にあったかしら？」

私の前の席に座っているジェシカの母親から声をかけられた。

「はい。とつても美味しかったです。ごちそうさまでした」

「ならよかったわ。ご飯も食べ終わった事だし、ちよつと質問してもいいかしら？」

「大丈夫ですよ」

質問？もしかして前うちの娘にヘッドロックかけて落としたのは貴方かしら？なんて言われないよね。

「女性同士で結婚するというのは本当なの？ジェシカから聞いてとてもびっくりしましたわ。悪い意味に取らないで下さいね。単純な個人の興味本位なので」

「ちよつとママ」

「ジェシカ、別に構わないわよ」

「月村がそう言うなら……」

きつと私に悪いと思ったのだろう。お母さんの言葉を聞いたジェシカが、すぐに止めに入ろうとしてくれた。

「本当です。クリスマスパーティーの時にプロポーズをしようと思つています。ここに泊まらせて貰おうと思つた理由も、私のメイドが、私の態度がよそよそすぎてクリスマスパーティー前にバレてしまうんじゃないか？という心遣いから泊まりに来ています。



本当にご迷惑をおかけしてしまつて申し訳ありません」

私は、今回泊まつた理由を包み隠さずジェシカのお母さんに話した。

「そうなのね。とつても素敵だと思つうわ。そうだわ！ソフィ！私の結婚式に使つたウエディングドレスつてまだあつたかしら？」

「それでしたら、ニーナ様のお部屋のクローゼットの中にあるかと」

「ここに持つてきて頂戴。ロシアでの結婚式と日本での結婚式の2着ね」

「承知致しました」

そう言うソフィは、数人のメイドを引き連れてリビングから出て行つた。

「話の流れで分かつたと思つうけど良かったら私のウエディングドレスを貰つてくれないかしら。もう20年前の物だけど、素材はそこら辺のものよりは優れていると思つうわ。嚴重に保管させていたから新品と代わらないぐらい綺麗にもなつてるわ」

「そんな大切な物を頂けませんよ。ジェシカさんの結婚式の時に残して置いてあげてください」

バツテイ家のそんなものを貰えるわけがない。1国のお姫様が使つていたウエディングドレスなんて私なんかを着ていい代物じゃないことは明らかだつた。

「ジェシカに私も上げようとしたんだけどね。その子どうにも水色つて色にこだわつてみたいで白のウエディングドレスなんて着ない！つて言い張つて聞かなかつたのよ。」

「1年前ぐらいから、そろそろ捨てちゃおうか？って悩んでたから、月村さんと楓さんでどうかなって？」

ジェシカ……水色のウエディングドレスなんて聞いたこともないけど。でもやっぱりお姫様なんだな……もう結婚の話とかもしてるみたいだし。お見合いとかも大変なんだろうな。

「なるほど……ジェシカもいいの？」

「私も月村と楓に着て貰えたら嬉しいよ！ママとパパの思い出が次の人の思い出になるってとっても素敵だと思う」

「ジェシカ……そうね。分かりました。私には本当にもつたいないぐらいですが、ウエディングドレス2着譲って貰っても大丈夫でしょうか？」

「もちろんですよ。ねえ貴方？」

「もちろんだとも。月村さんと言ったかな。昔娘が大変失礼したみたいでその時はすまなかったね。そのお返して言うわけでもないが、困ったことがあったら何でも言ってくるといい。若い女性2人だけだと色々大変だろうからな」

「やっぱりバレてたかあ……よくお泊まりOKしてくれたなほんとに。」

「ありがとうございます」

コンコンコン

「ソフイです。ウエディングドレス2着用意出来ました」

「ありがとう。入っていいわよ」

リビングの扉を開けて入ってきたソフイを含めた数人のメイドさんの手には、マネキンに着せられているウエディングドレスが2着しつかりとそこにあつた。

「綺麗……これホントに貰ってもいいんですか？」

「もちろんよ」

純白という言葉通りの透き通つた白がそこにはあつた。20年前に使っているはずなのに新品同様に輝いていた。装飾などは2着とも何も無く、一つだけ違いがあつたのは胸の所に装飾があるかないかだった。片方は何も無く、もう片方は胸の辺りに花の刺繍がしてあつた。

「本当にありがとうございます。絶対結婚して幸せになつてみせます」

「その意気よ。きつと楓さんだつて喜んでくれるわよ。それじゃ話はおしまい。後は適当にくつろいで頂戴。何かあればお屋敷のメイドに言ってもらえれば対応出来ると思ふから」

「ありがとうございます」

そう言うのと、ジェシカのお母さんはリビングから出て行つた。

「月村、この後予定あるの？」

「特にはないわね。ウエディングドレス見ようと思ってたんだけどジエシカのお母さんのお陰でそれも解決したし」

「じゃあ私の部屋に来てよ。ゲームしよ！暇でしよ！」

「あんたはホントにいつも通りね……まあいいわ。息抜きだと思って付き合うわよ」

その後夕方近くまでゲームをして楽しんだ私達はそれだけで一日を終えた。クリスマスパーティーまで残り2日となった。

## クリスマスに向けて⑤

『もしもしエレナ？今大丈夫？』

「ええ、大丈夫よ。滝さんの件かしら？」

『うん』

時刻は23日の10時。私は、客間でプロポーズの言葉をどうしようかと頭を悩ませていた。シンプルに結婚して下さいでいいのか、それとも少し変化を加えた方がいいのか、などで頭の中がぐちゃぐちゃになっていた。早いものでクリスマスパーティーはもう明日に迫っていた。考えが決まらないと悩んでいたところで詩織から電話がかかってきた。

「なんだって？」

『私同伴で会ってくれるって、エレナの今の現状は包み隠さず話したわ。楓ちゃんと恋仲になつてることだね。めっちゃくちや驚いてたわよ。一体何が起きてるかわからないうって。薬でも使ったんじゃないの？って言われてるぐらいよ。それでも行くの？向こうからのエレナの信頼は0どころかマイナスよ。いいの？』

「大丈夫よ。それは分かっている。それでも私は絶対やらなきゃ行けないことだと思おうか

ら……」

『そう……なら今から迎えに行くわ。準備だけしておいてね。辛くなったらやめていいんだからね?』

詩織らしくもない心配の言葉。きつと電話で詩織も何か言われたんだろうな……ごめんね私のせいで……

「大丈夫よ。ありがとね詩織」

『いいのよ。それじゃね』

「うん」

そう言うと電話は切れた。詩織の事だ。きつと30分もしないうちに私の所へ来るだろう。急いで準備しなくっちゃ。

「出かけるの?」

ノックもせずにジエシカが顔を見せていた。きつと電話の最中に暇になって来てみたら私が電話をしていたから声をかけづらかったんだろう。

「ええ。ちよつと昔のメイドのところにね」

「大丈夫? 顔色悪いよ」

「大丈夫よ。私を誰だと思ってるの……ジエシカ? もう……私は、貴方の恋敵なのよ。そんなに優しくしてどうするのよ」

私の顔色がそれほど悪かったのか、直感できつい事がこれからあると思ったのかは分からないが、ジェシカは優しく私を抱きしめた。突然こんな事をされて私も動揺せざるを得なかった。

「今の月村見てたらこうしたくなつたからしただけだもん。頑張つて来てね。美味しいご飯ソフィにお願ひしておくから」

「ありがとう。少しだけだけど元氣出たわ。それにしてもこう抱き着かれるとホントに小学生みたいね」

「もー!!!早く行きなよ!!!バカ!!!」

抱きついていて腕を離すとボタンと音を立てて扉を閉めて出ていった。

「私はホントに恵まれてるわね。こんなに周りに優しい子がいるんだもん。さてと……行くわよ月村エレナ」

氣を引き締め直すと、私は玄関を出て詩織の到着を待った。

数分もすると、いつもの35のエキゾースト音がこだまし、詩織が来たことを伝えてくれた。ホントに深夜にあの車走つたら近所迷惑で通報されかねないわね……

「ごめんちよつと待たせたかな?」

「大丈夫よ。行きましよ」

「うん」

私が助手席に乗り込むやいなや、すぐに詩織は車を出した。

「緊張してるかと思つたらそうでもないみたいね。顔色普通だもん。流石エレナって感じだね」

「ちよつとお姫様から施し貰つたからね。それに助けられたわ」

「お姫様？ジエシカから何か貰つたの？」

「ふふ、あの子らしくもないことよほんとに。私の顔色がよつぽど悪かつたんでしょうね。優しいハグだったわ」

「可愛いじゃん。何で私にはしてくれないんだろ」

「胸が邪魔でハグしづらいんじゃない？」

「全く。まあ元氣みたいで良かったわ。後数分もしたら着くと思うから、言葉少しは考えときなさいよ」

「そうするわ」

表面上は、余裕つぽく見せてはいるが、内心は心臓が破裂するんじゃないか？つていうぐらい緊張していた。一体どういう風に謝罪をすればいいのか、私の顔を見て滝さんはどう思うのか気になって仕方がなかった。

「着いたよ。ここが今は滝さんの住んでるところ」

「普通の一軒家ね」



詩織が車を止めた目の前には、何の変哲もない一軒家が建っていた。滝さんの家は住宅街の一角にあった。

「エレナは下がってて。一回私が出るわ」

そう言うと詩織は、玄関の門の前にあるチャイムを鳴らした。

ピンポーン……ピンポーン……

『滝ですが』

久々に聞いた滝さんの声。何年も聞いていなかったがすぐに滝さんだとわかった。

「詩織です。エレナも一緒に来ています」

『今開けるわ。ちょっと待ってて』

数秒もすると玄関の扉に人影が映っていた。久々の再会。いつも通り普通の顔をしなきや……そう思っている顔は強ばる一方だった。

「久しぶりね詩織。それにエレナ様。寒かったでしょ？暖房入れて置いたから早く」

「ありがとうございます。何突っ立てんのよ、行くよエレナ」

「え、ええ」

私は滝さんの家に足を踏み入れた。中はそれなりに広く人がすれ違う分には全く問題ないぐらいの廊下が目の前にあった。廊下を真っ直ぐ進んだ先がリビングだろうか。扉を開け、滝さんは中に入って行った。

「そこに座つて。今温かいものいれるから」

「ありがとうございます」

私は、素直に椅子に腰掛け滝さんを待った。詩織も同じように私の隣に腰を下ろした。

「お待たせ。二人ともコーヒーで良かったかしら？」

「はい」

「私も大丈夫です」

「それじゃ詩織、それにエレナ様」

私と詩織の前にマグカップが差し出された。わざわざ温かいものまで入れてくれるなんて……と感動していたのだが……

「え、滝さんこれつてお湯じゃ……」

「何詩織？貴方にはお湯に見えるの貴方に渡した物も、エレナ様に渡したのもコーヒーよ。そうですよねエレナ様？」

「間違いないです。頂きます」

間違いなく詩織に出された飲み物はコーヒーだった。しかし、私の前に差し出されたのはただのお湯だった……このぐらいはされるよね……私がやってきたことなんてこれの何倍も酷かつたんだし。

「お口に合いましたかエレナ様」

「ええ。わざわざありがとうございます。心遣いに感謝します。もう私はお嬢様ではないので、様なんて付けなくてもいいですよ」

「それもそうね。じゃあ単刀直入に聞くけど何しに来たの？正直に言うけど貴方の顔なんて見たくなかったわ。貴方の下について仕事をしていた時間はホントに無駄だったと思う。何をしても怒られ、納得のいかないことがあるとすぐに八つ当たりで私や詩織や楓ちゃんに当たっていたわよね？確かに丸くなっただんでしょうよ。今貴方の隣に詩織がいることが全てそれを証明していると思うわ。でもね、私は貴方を許す気はないわ。帰って頂戴」

「滝さん！そんなに言わなくても！」

「詩織は黙ってて！いくら丸くなろうが月村エレナは月村エレナよ。許せるわけがないじゃない」

「滝さん……」

滝さんは、椅子から立ち上がると私を睨みつけながら激昂していた。詩織が止めに入るもその勢いは止まるどころか加速していく一方だった。

「だいたい何よ同性婚って！しかも相手は楓ちゃん？冗談じゃないわよ！昔から楓ちゃんには時々甘いと思ってたとは思ってたけどそういう事だったわけ？一体楓ちゃんに

何したのよ！ねえ！答えなさいよ！何かの薬でも飲ませたんじゃないの!?黙ってないで喋りなさいよ!!!」

「っ…………!!!」

「滝さん!!!」

滝さんは、私の方に向かってくると髪を引つ張りあげ、私の頬を叩いた。人から思いつき叩かれたのなんていつ以来だったかな……

「詩織いいのよ。滝さんを離して上げて」

「でもー!」

「いいの。これは私が受けなきゃいけないことだから」

「そりやそうよね！人の事を散々好き勝手にしてくれた挙句に突然謝りたい？ふざけるのもいい加減にしなさいよ、ね!!!」

「本当に人生をめちゃくちゃにしてしまつてすみませんでした。許して貰おうとは思っていません。本当にすみませんでした」

「うるさい!!!」

それから滝さんは、私をぶつ手を止めなかった。私は、ひたすらに床に頭を付け謝り続けた。

「はあ…………もういいわよ。詩織、その人を連れて帰って」

「はい……エレナ、もういいよね？」

「ええ……滝さん。失礼します」

「二度と顔を見せないで」

そう冷たく言い放つと滝さんは、リビングから出ていった。

詩織の車に戻ると、私は、叩かれた頬や腕を、詩織の車に積んであつた救急箱から湿布を取り出して冷やしていた。

「派手にやられたわね。やっぱり止めた方がよかつたんじゃないの？綺麗な顔腫れちやつてるじゃん。明日その顔でプロポーズする気？」

「別に大丈夫よ。一日冷やしてればこのぐらいの腫れすぐに引くわよ。まあでも……ちよつとここまでやられるとは思わなかつたかな……詩織、ここから先は何も見なかつたことにして欲しいんだけどいいかしら？」

「分かつた。ここからジェシカの家に戻るまでは、エレナがいないことにするわ」

「ありがと……ダメだつた……楓ごめんね。ホントに私ダメなお嬢様だつたよね……つ……」

私は泣いた。内心どうにかなると思つていた所もあつた。一生懸命謝つてどうにかなるわけないのにね。何年間滝さんを苦しめていたのかと思うと、ホントに自分の行った行為が頭の中で何回も再生され、更に苦しくなつた。

「これは、私の独り言。楓ちゃんからエレナの愛は間違いなく本物よ。私と再会した時に強く分かったわ。私に怒鳴られるエレナを守ったのは誰？楓ちゃんだっただでしょ？仮に楓ちゃんとエレナが偽りの恋愛ごっこをしていたのならそんな風には守れないと思う。だから自信持ちなさい。滝さんは怒りに我を忘れて酷いこと言っただけよ。楓ちゃんにはエレナ。エレナには楓ちゃんが一番お似合いなんだからしつかりしなさい。独り言終わり」

「詩織……ありがとう」

私は、詩織の肩に頭を寄せ、そのままジェシカの家に着くまで身体を預けた。

「エレナ、いつまでくっついてるのよ。私が楓ちゃんに怒られるじゃない」

「ごめんなさい。着いたのね？」

「うん。それじゃ明日までに顔の腫れ治してきなさいよね」

「ありがとう。絶対明日成功させて見せるから期待してね」

「はいよ」

そう言うのと、詩織は楓が待っているであろう我が家へと戻って行った。

「さてと……この顔どうジェシカに説明しようかしらね……」

この後ジェシカに顔を見られ、屋敷中に響くような甲高い声で「誰か!!!エレナが怪我してる!!!早く!!!」なんて言うものだから、お屋敷が一時騒然となった。まあその悲鳴の

お陰で、メイドさん達に顔や腕に湿布を巻いてもらったり、付きつきりで手厚い介護を受けたおかげで腫れは深夜には収まっていた。いよいよ明日運命の日。待っててね楓。

## クリスマスに向けて⑥

「ふぁーあ……エレナ起きてる？そっか……ジェシカの家で準備してるんだっけ。どーせなら私も連れて行ってくれれば良かったのに」

日付は12/22日。クリスマスパーティーまで残り2日と言ったところだった。昨晩突然エレナが出ていった時は流石にびつくりしたよ。少しぐらい相談してくれても良かったんじゃないかな。まあいいや。私も私でクリスマスパーティーまでに料理の下ごしらえとかもしなきゃだし、やる事やっちゃお。

リビングに向かうと、一足先に詩織さんが起きていたみたいだった。

「おはようございます」

「おはよ。下ごしらえなら私だけで大丈夫だよ？クリスマスパーティーに着る服とか決めなくて大丈夫？」

「そうですね……前日でもいいかなって思っていました。あれ？詩織さんって料理出来ましたっけ？」

私の記憶だと詩織さんの料理の腕は壊滅的だった気がするんだけど……

「失礼しちゃうわね。これでも最近自炊してるんだからね？ジェシカのお屋敷に言った



時に男っぽい口調出さないようにとかめちやくちやうるさかったんだからあの子。まあとにかく決めてきちやいなよ。エレナに可愛いつて言つて欲しいでしょ？」

「そうだったんですね」

にやにやししながら詩織さんは、私に話しかけてきた。エレナなら何着ても可愛いつて言つてくれると思うけど、確かにせっかくのクリスマスパーティーだし気合入れてみようかな。

「そうですね。うーん……お言葉に甘えて服選んできてもいいですか？前日バタバタしかねませんし」

「全然おつけー！エレナも今頃選んでるんじゃないかな？全身カラスじゃないといいね」

「間違いないですね。エレナったら絶対外行く時真つ黒なんですもん。あれじゃ不審者ですよ」

「確かにね」

詩織さんもエレナの格好のおかしさは分かっているみたいだった。確かに今までお嬢様が外に行く用事がある時は基本制服で、部屋にいる時はジャージーやスウェットで過ごしていたため、メイドの私達もお嬢様の私服は全く知らなかった。

「それじゃちよつと服決めてきますね」

「はいはい。その後も部屋でゆっくりしてていいからね。お腹すいたら言ってくれば作るからさ」

「ありがとうございます」

なんかお母さん見たいって言ったら失礼かもだけどそんな感じだな詩織さんって。お母さん元気かな。エレナがお母さんも呼んだって言ってたけど。若菜ちゃんも連れてきて欲しいなあ。ホントに子供って可愛いよね。私もエレナと結婚したらあんな子が欲しいな。出来れば20ぐらいにはしたいよね。でもプロポーズってどっちからしたらいいんだろ……何となくだけどエレナからして欲しいな……私が言うのはなんか違う気がする。

「さてと……どうしようかな。お嬢様のパーティの付き添いで着ていったドレスとかならあるけど。うーん……敢えてズボンもありかなあ。ううん。やつぱりドレスにしよ！きつとエレナならパーティなんだからダンスぐらい計画してる気がするし。それで一緒に踊りたいなあ……ちよつと顔を赤くしたエレナとか見ていたい。ホントに可愛いんだよね照れてるエレナ。早く明後日にならないかなあ……」

タンスを開け、パーティドレスを一通り取り出して、ベットのの上に広げ、何を着ようか考えていると、携帯が鳴っていることに気が付いた。エレナかな？連絡寄越してくるなんて気が利くじゃん。

「ん？さゆり？なんだろう」

ディスプレイに表示されていたのは月村エレナではなく伊集院さゆりだった。

「もしもし？」

『あ、楓？今暇？』

「ひまだよー」

『お願いがあるんだけど、天音のクリスマスプレゼント選ぶの一緒に探してくれないかなって。どうもー人だと悩んじゃってさ……』

なるほど……確かに私も大分悩んだしなあ。詩織さんに任せちゃうのは少し気が引けるけど付き合ってあげようかな。

「わかった。なら駅前集合でいい？」

『うん！ありがと！それじゃ後でね！』

「おっけー」

詩織さんに出掛けること伝えてこなくっちゃ。

「詩織さん、少し出掛けてきてもいいですか？」

「大丈夫だよー。さゆりちゃん？」

「ですね。天音様のクリスマスプレゼントに悩んでるみたいなので一緒に選んできます」

「はいよ。行つてらっしやい」

「行つてきます」

さてと、流石に部屋着じや行けないし着替えなきやだね。私は、部屋着から私服へと着替えると早歩きで駅の方へと向かった。

駅前に着くと、クリスマス前っていう影響もあるのか、いつもより駅前に人がたくさぬいた。さゆり見つけられるかなあ……私にもう少し身長があれば……

「かえでー！こつちこつちー」

さゆりを探していると、丁度声をかけられた。さほど遠い所には居なかつたみたいだ。

「見つけてくれて助かったよ。凄い人だね。何かイベントでもあるの？」

「うーん、クリスマス前だからじゃない？それにショッピングモール目の前じゃん？」

「それもあるかもね。それじゃ行こつか。何にしたいとかってある程度は決めてるの？」

「そうね、お揃いの物にしようかなとは思ってるよ。楓は何買ったの？」

「私はお揃いのネックレスにしたよ。プレートに日付と名前彫ってもらうんだ」

「それいいね。ちゃんと思いい出にもなるし。うーん……そうだ！私も決まったかも。ついでに……」

「え？ちよつと待つてさゆり！」

私のペアネックレスからアイデアが浮かんだのか、さゆりは人混みを交わしながらシヨツピングモールの中に入っていった。

さゆりが足を止めたのは小物などが売っているお店だった。お店の中には、小物入れや、雑貨、ぬいぐるみなどがあつた。どれも女の子が好きそうな可愛いデザインをして  
いた。

「それで何を買うの？」

「ぬいぐるみにしようかなつて。小さい時に初めて天音と遊んだ遊びつて言うのがぬいぐるみ遊びで、お揃いのぬいぐるみプレゼントしようかなつて、色違いとかいいと思うんだけど楓はどう思う？」

思い出の品つて事かな。天音様つて抜けてるように見えるけどそういう所はちゃん  
と覚えてそうだし、案外最初にぬいぐるみで遊んだよねありがと。とか言いそうかも。  
「いいんじゃない？天音様も喜んでくれると思う」

「ならそうしようかな。付き合つてくれてありがと楓。お礼に何か奢るよ。フードコー  
ト行つて温かいもの飲も」

「ラッキー。それじゃお言葉に甘えて奢つてもらおうかな」

その後、少し悩んでさゆりは、白とピンクの色違いの熊のぬいぐるみを購入していた。

私達は、帰り際にカフェで紅茶を飲んでクリスマスパーティーの話をしただけして帰宅した。クリスマスパーティーまで残り2日。早くエレナに会いたいな。

## クリスマスパーティー開宴

「楓ちゃんクリスマスツリーの位置だけどうしようか？端っこに置く？それともリビングのど真ん中に目立つように置く？」

「そうですね……当日たくさんの人が来ますし、ちよつとツリーが可哀想だけど邪魔にならないように端っこに置いた方がいいかもですね」

時刻は、朝の9時。私と詩織さんは、明日のクリスマスパーティーの準備の為に、特にリビングの装飾をしていた。ツリーを飾ったり、イルミネーションを付けたたり、普段はリビングに1つしかないテーブルを、倉庫から持ってきて4つ並べていた。流石にお嬢様のお屋敷だけあってこれだけ並べてもスペースは余っていて、何一つスペースに關しては、苦勞する事はなさそうだ。

p r r r r r r r r r r r r r r r r

ん？電話？詩織さんの携帯かな。

「詩織さん携帯鳴ってますよ」

「ん？ああ！ごめんちよつと席外すね！」

「わかりました」

なんか詩織さんの様子が変だ。私に聞かれたくない話なんだろうか。いつもなら普通に私の前で電話してたけどなあ……もしかして彼氏さんとかかな？

そんな事を考えていると5分もしないうちに詩織さんは、戻ってきた。

「ごめんちよつと出てくる。夕方には帰ると思うから。装飾大変だと思うけど少しだけ任せてもいいかな？」

「全然大丈夫ですよ。昨日私何もしてませんし、ゆっくりしてきてください」

「ありがとね！じゃあちよつと出てくるから！あ！もしもし！」

詩織さんは忙しそうに電話をかけながら外へと出ていった。詩織さんの愛車のR35のエンジン音が聞こえてきたという事はそれなりに遠出だろうか。とにかく私も終わらせて明日着るドレスの試着でもしよつと。

私は、残りの装飾をそれなりのスピードで終わらせ14時には全ての準備を整えた。後は、明日の12時のクリスマスパーティー開始に合わせて料理を並べるだけだ。

「んー！終わったあ。皆楽しんでくれるといいなあ。全員で集まるのも久しぶりになるもんね。エレナもよく分からないけど準備してるみたいだし、このクリスマスパーティーがちゃんと成功したらいいな」

ブオンブオン!!

エキゾースト音。詩織さんも丁度帰ってきたかな。



「ただいま」

「おかえりなさい。つてなんか顔色悪いですよ。大丈夫ですか？」

「ちよつと色々あつてね……あ、綺麗に出来たみたいだね。ありがとう」

「いえ……今何か温かいもの入れますよ」

「いや、大丈夫よ。でもちよつと横になろうかな。ごめんね帰ってきたばかりなのに」

「全然大丈夫ですよ！ホントに何があつたんですか？話ぐらいなら私で良ければ聞きますよ」

「ううん。ホントに大丈夫だから。ごめんね気使わせて。それじゃちよつと寝てくる。このまま朝まで起きないかもだからクリスマスパーティーの料理もあるし朝8時になったら起こしてもらつてもいい？」

「わかりました……」

そう言うのと、フラフラしながら詩織さんは自室へと向かつて行つた。

ホントに何があつたんだろう……詩織さんのあんな表情を見たのは初めてだった。悲しみに溢れてるっていうか、とにかく辛そうだった。外出先で何があつたかはわからないが、明日になったらそれも忘れて楽しんでくれたらいいな……

「私もドレスの試着したらお風呂入つて寝ちゃおうかな。万が一にでも寝坊なんてしたら洒落にならないもんね」

私は、自室に戻るとさゆりと出かける前に2着まで選択肢を絞ったドレスを手に取りどちらにしようか決めかねていた。

「んー……赤も悪くないしオレンジも悪くないんだよね。でもエレナはきつと黒だから2人で並んだ時映える色がいいよね。なら赤かなあ。ちよつと胸元空いてて大胆だけどこんな時ぐらいにしか着ないしいいよね」

悩んだ結果私は、赤のロングドレスに決めた。胸元が少し空いていてちよつとセクシーなものだったがこのぐらならないなら支障はないだろう。

「エレナに綺麗とか可愛いって言って欲しいな……やっぱり好きな人から言われる可愛いとかって他の人とは違うよね。それにしても向こうに行つてからなんの連絡も無しはちよつと酷いと思うな。まあそれだけ忙しいのかもしれないけどさ」

ドレスを決めた私は、ハンガーにそのドレスをかけ、軽い夕飯を取つてお風呂に入り明日に備えた。

迎えたクリスマスパーティ当日の朝。私は、目覚ましがなる前に目を覚ました。時刻は朝の7時。

「んー!!よしー準備しよつとー!」

私は、布団から飛び起きると、すぐにリビングへと向かうことにした。

「あれ、楓ちゃんおはよ。早いんだね」

自室から出ると詩織さんとぼったり遭遇した。詩織さんは下着にトレーナーを羽織っただけの格好をしていた。

「おはようございます。なんだか目が覚めちゃったので」

「私これからお風呂入るけど楓ちゃんもどう？寒いから温まってから色々やろうかなって思ってたんだけど」

「いいですね。たまには詩織さんと一緒にお風呂入りたいです」

「じゃあ行こっか」

「はいー」

私は、詩織さんの後を追うようになっていった。たまには朝風呂もいいよね。

「あつたまるわあ……エレナから何か連絡きた？」

「それが何一つ連絡が無くて……少しぐらい連絡超越してくれてもいいと思いません？まあ忙しいのかも知れないですけど」

「ふふ、ホントにエレナも楓ちゃんも変わったよね。気がついたら大きくなつててホントにびっくりしたもん。楓ちゃんこっちおいで」

詩織さんがほんぽんと自分の膝を叩いていた。ここに座つてということなんだろうか。

「流石にもうそんな歳じゃないですよ」

私は、苦笑いで詩織さんに返答した。

「堅いこと言わないの！懐かしいなあこの感じ……楓ちゃん小さい時は私から離れなかつたんだからね？」

強引に詩織さんの膝の上に乗せられてしまった。なんていうか、とても恥ずかしかつた。確かに小さい頃は、詩織さん！詩織さん！つてくついていたっけ。

「強引なんですから……副業が決まった時もこうしましたよね。やっぱり詩織さんの腕の中にいると安心します」

「私はちよつとだけ寂しいよ。大事に育ててきた娘が旅立つちゃうつてこんな気持ちなんだろうな……楓ちゃんもエレナも大きくなつてこれから旅立つて行くんだなつて思うとほんのちよつとだけ寂しいよ」

詩織さんらしくない弱音だった。でもそれほど私、いや私達は大切にされていたんだなつて改めて実感した気がした。

「私もエレナも何処にも行きませんよ。詩織さんも何処にも行かないで下さいね。こんなに安心出来る場所なんてそうそうないんですから」

私は、詩織さんに寄りかかりながらそう言った。小さい頃から寄りかかつてきた大きな胸。これほど安心出来る場所なんてないと思う。実の親ではないけど、ホントに詩織

さんには感謝しきれないぐらいだ。

「そうだよ。ありがと。まさか私が慰められる時が来るなんてね。なんか悔しい！エレナにあげたくない」

詩織さんは、私を後ろから強く抱きしめながら、笑っていた。良かった。やつといつも詩織さんの顔が見れた。

「もー！何言ってるんですか。そろそろ準備しましょうよ」

「もう少しだけこうさせて。たまには甘えてもいいでしょ」

「後5分だけですからね」

詩織さんは、しばらく私を抱き抱えて離さなかった。やっぱり昨日のことがよほど応えていたらしい。原因は分からずじまいだけど私なんかで力になれたらそれでよかったかな。

「よし！それじゃ準備しよっか！」

「はいー」

お風呂から出ると私達はキッチンに向かい、予め下ごしらえをしていた料理と対面していた。分かっただけこうしてみると凄い量……私、エレナ、詩織さん、天音様、さゆり、ジェシカ、紅葉お母さん、佳奈お母さん、若菜ちゃんで9人分。昨日下準備をしてなかったら到底間に合わなかった。

「揚げ物からやっちゃいますか？」

「1番時間かかるしそうしようか」

「了解です」

昨日から味を染み込ませていた唐揚げの袋に手をつけた時だった。

ピンポンピンポン

誰だろうか。まだ約束の時間には早いはず。

「はい、月村ですが」

「あ、楓？手伝いに来たよ！9人分の準備するの大変かって。天音は後から来るから」  
「ホントに!?助かるよありがとう」

さゆりが手伝いに来てくれたみたいだ。1人でも人手が増えるのはホントにありがたい。

「よし！じゃあ私盛り付けしてテーブルに並べちゃうね。サラダとかも、もう並べていいよね？」

「大丈夫！後1時間ちよいだし丁度いいと思う」

それから時間がすぎるのはあつという間だった。料理をして、テーブルに並べての作業を繰り返していたら時刻はあつという間に11:30となった。

「終わったあ……後は皆待つだけだね。ホントに助かったよさゆり」

「気にしないで。私もすんごく今日楽しみにしてたんだけ。楓も詩織さんも着替えますよ  
ね？私細かいところやっておくので着替えてきてく大丈夫ですよ」

「ありがと！詩織さん行きましょ」

「そうだね」

私は、1度自室に戻り、昨晚決めたパーティドレスへと着替えた。

「楓綺麗……ってか結構大胆なドレスにしたんだね。楓にしては珍しいんじゃない？」

「ありがと。たまにはいいかなって思ったの。こういうの着る機会なんてそんなにない  
しね」

ちなみにさゆりは黄色のパーティドレスを着ていた。腰にリボン巻いていてとても可愛らしかった。

「まあ確かにそうだね。エレナ様もびっくりするかもね」

「そうかも」

ピンポンピンポン

「誰か来たみたいだね」

「だね。月村です。あー！すみません今受け取りに行きますので！」

ピンポンした人は、どうやらこの間買ったアクセサリー店の人みたいだった。そう言  
えばこのぐらいの時間に来るって言ってたっけ。

私は、急いでアクセサリーを受け取ると、エレナが来る前に急いで自室の机の中にプレゼントを隠した。

「エレナ様へのプレゼント?」

「うん。間に合って良かったよ。早く皆来ないかな」

ピンポーンピンポーン

今度こそ来たかな。

「はい」

「お待たせ! 皆いるよ!!!」

インターホンのカメラから皆の姿が確認出来た。どうやらどこかで待ち合わせをしていたみたいだった。

「今開けるね」

「うわあ!!! すんごい綺麗! これ楓と詩織がやったの!?!」

「そーだよ」

部屋のイルミネーションやツリーを見るとジエシカがとても驚いていた。喜んでくれたみたいでよかった。

「楓ちゃん久しぶりね」

「佳奈お母さんもいらっしやい。紅葉お母さんとは喧嘩してない?」



「もちろんよ。ほら、紅葉来て」

「ドレス似合ってるわよ楓。私の若い頃にそっくり」

「ふふ、ありがと紅葉お母さん。紅葉お母さんも綺麗だよ」

佳奈お母さんと紅葉お母さんは、紺のドレスを着ていた。どうやら2人で合わせてきたみたいだ。

「まんま！まんま！」

紅葉お母さんの背中の方から赤ん坊の声がした。若菜ちゃんだ。会うの久しぶりだから楽しみにしてたんだよね。

「若菜ちゃん久しぶり！お姉ちゃんの事わかるかな？」

背中のお母さんに声をかけてみたが、ぶいっとそっぽを向かれました。どうも初対面の時から私を苦手にしているらしい……

「あらあら、さつきまでエレナちゃんが抱っこしてた時は笑顔だったんだけどね。後で抱っこさせてあげるから来なさいな」

「なんでエレナだけ……わかった！後で行くね！」

そう言うとき2人のお母さんは、テーブルの方へと向かって行った。

「私も可愛い？今日の為にママに買ってもらったんだ！」

声を掛けてきたのはジェシカ。ジェシカは、水色のミニスカートのドレスだった。周りが皆ロングスカートだからとても目立っていた。ツインテールの髪にも星の髪飾りがついていてとても可愛らしかった。

「ジェシカも可愛いよ」

「ありがと！ねえ！早くパーティー始めようよ！お腹すいちやった」

「ジェシカったらいつも以上に子供だね。そう思わない？楓ちゃんさゆりは役に立った？」

次に声をかけてきたのは天音様。天音様にしては珍しく、明るい色のドレスではなく茶色のパーティードレスに身を包んでいた。

「ホントに子供みたいです。はい。ホントに助かりました」

「ならよかった。パーティー楽しもうね！」

「はいー！」

「楓」

透き通るように綺麗な声。エレナだと直ぐにわかった。

「少しは連絡してきても良かったんじゃないのエレナ」

「ごめんなさい。連絡しようか悩んだんだけど忙しかったら迷惑になるかなって」

申し訳なさそうに謝るエレナを見て、私の怒りはどこかへ消えていった。私もホント

にエレナに対して甘いと思うけど仕方ないよね。

「氣使つてたんなら許してあげる。やつぱり黒なんだね」

「ありがと。そうね。やつぱり黒が落ち着くもの。楓は、赤なのね。とても似合っているわよ。でもちよつと胸元開けすぎじゃないの？」

「たまにはいいかなつて思つたの。ダメだつたかな？」

「ううん。ホントによく似合つてるし、綺麗だと思うわ。そろそろ席に着きましようか。料理が冷めたらもつたいたいし」

「そーだね。じゃあエレナ皆に言つて。月村家の代表なんだから今日は仕切っちゃつてよ」

「わかつたわ。皆そろそろ席につきましようか。テーブル4個に椅子が適当にあると思うから適当に座つて頂戴」

「適当ばつかじゃん！」

「うるさいわよ天音。どんなふうに分けていいか分からなかつたんだから仕方ないでしよ」

「まあ確かにそれはあるね。じゃあ適当に座っちゃうね」

結局席はこうなつた。

第1テーブルには私とエレナとジェシカ

第2テーブルには天音様とさゆり

第3テーブルには紅葉お母さんと佳奈お母さん、若菜ちゃん、詩織さんが座った。

「じゃあ第1回目村家主催のクリスマスパーティを始めたいと思います。皆さんグラスを手に持ってください。乾杯！」

一同「乾杯！」

ついに待ちに待ったクリスマスパーティが始まった。皆楽しんでくれるといいな。

## プレゼント交換

「この唐揚げ美味しい！楓が作ったの？」

「私と詩織さんで作ったんだよ。ジエシカの口に合ってるならよかった」

「うん！ほら月村も食べなよ。どうしたのポーツとして？」

「ああごめんなさい。頂くわ」

「エレナ何処か体調悪いの？」

「ううん。ちよつと考え事してただけよ、あら、ホントに美味しい。また料理の腕上げたんじゃない？」

「えへへ、ありがと」

各テーブルで、それぞれ皆、料理を楽しんでいるようだった。エレナの様子が少しおかしい以外は、どこのテーブルからも明るい声が聞こえ、とてもいい雰囲気だった。

「エレナ！ちよつといい？」

「何？」

少し離れたテーブルに座っていた天音様が立ち上がって、エレナに声を掛けていた。何かあったのかな？

「各自でクリスマス마스プレゼント持ってくるように言っておいたんだ。だからプレゼント交換しよーよ。ずっと談笑してるだけじゃもつたないでしょ？ エレナも持ってきてるわよね？」

「え、ええもちろんよ。そうね。なら前の方に集まってやりましょうか。もちろんトツプバッターは言い出しつべの天音ときゆりちゃんのパアからね」

「仕方ないなあ。さゆり、プレゼント持ってきてるよね？」

「当たり前でしょ。前に出て渡すの恥ずかしいんだけど……」

「気にしない気にしない！ ほら早く！」

「もー！ 分かったわよ！」

そう言うとき音様ときゆりは、前の方の空いているスペースへと移動した。

「ねえ楓」

「ん？ どしたの？」

隣に座っているジェシカから声をかけられた。

「実は、私詩織に渡すんだよね。前にお世話になったからいいかなって。詩織の気に入らないものならどうしようって思ってた……」

少し恥ずかしそうにジェシカは話していた。

なんだかんだ言ってもジェシカって詩織さんのこと好きだよ。じゃなかったらプ

レゼント送ろうなんて思わないもん。

「大丈夫だよ。詩織さんそういう人じゃないもん。自信持って渡してくればいいと思うよ」

「そっか……そうだよね！ありがと楓！」

「うん！」

「それじゃプレゼント交換を始めたいと思います。順番は勝手ながら私、月村エレナが決めさせて頂きました」

前の方でエレナが全員に聞こえるようにアナウンスをしていた。ジェシカのお屋敷に行つての準備つてプレゼントの事だったのかな？

「最初に天音、さゆりちゃんペア。次に紅葉さんと佳奈さん、次にジェシカと詩織、最後に私と楓つて順番でいいかしら？」

「異議なし！その代わりラストしつかり締めなさいよね」

天音様がからかうようにエレナに声を掛け、会場のボルテージも上がってきた。皆、最初のペアの2人に注目していた。

「それじゃ私は、席に戻るわね」

そう言うところエレナは、私達のテーブルに戻つて椅子に腰掛けた。

「プレゼント交換の予定なんてあったの？」

「ジェシカの提案よ。天音がそれに悪ノリして当日のサプライズにしようって言ったの。ほら、始まるみたいよ」

「さゆり、いつもありがとうね。これからも宜しく。これは、私から貴方へのプレゼントよ。受け取ってもらえる？」

そう言つて天音様が渡したプレゼントはと言うと……

「ピアス？ すんごい綺麗……いいの？ こんなの貰つても？」

「もちろんよ。ちなみに私とお揃いだからね」

天音様が渡したのは、ダイヤモンドが埋め込まれているピアスだった。遠目から見てもそれは、とても綺麗に輝いていた。

「ありがとう……とつても嬉しい。私からのプレゼントは……ピアスには見劣りしちゃうかもだけどこれだよ」

そう言つてさゆりは、可愛らしいクマのぬいぐるみを渡した。

「可愛い！ さゆりらしいしプレゼントをありがとう。そう言えば私達が最初に遊んだのもぬいぐるみ遊びだったよね。覚えてる？」

「え？ うん……むしろそれが理由でぬいぐるみにしたんだ。覚えてくれててすんごい嬉しい……ありがとう天音」

「そっか！ それじゃ次のペアも控えてる事だし席戻ろつか」



「うん！」

良かったねさゆり。ちゃんと天音様覚えてくれてたじゃん。テーブルに戻るさゆりの表情は、とても幸せそうにしていた。天音様に貰ったピアスを大事そうに両手で握っていた。

「続いて紅葉さん、佳奈さん。前の方にどうぞ」

お母さんコンビの順番になった。結婚を決めて半年ぐらいかな？若菜ちゃんも前より大きくなった気がする。

「エレナちゃん、若菜をお願い出来る？」

「はい。若菜ちゃんおいで」

「えれにゃー！」

お母さんは、若菜ちゃんをエレナに預けると前に進んだ。どうも私には懐いてくれないのに、エレナには懐いているみたいだった。違いは何なんだろうか……

「若菜ちゃんしーだよ。今からお母さん達がプレゼント交換するから一緒に見よつか」  
「うん！」

エレナが若菜ちゃんにそう言うと、若菜ちゃんも分かったのかすぐに静かになって2人のお母さんの方へ体を向けていた。

「私が言うよりエレナちゃんが言った方がいふことききそうねもう。それじゃ佳奈、い

いっ。」

「うん。じゃあ私からはこれを」

そう言つて佳奈お母さんが紅葉お母さんに渡したのは、マフラーだった。

「あら綺麗……これつて佳奈が編んだの？」

「うん。初めて編んだから綺麗に出来てるか心配だったんだ。後、若菜にも」

佳奈お母さんは、エレナの膝の上に座つている若菜ちゃんにもマフラーを渡して、巻いてあげていた。

「若菜ちゃんママにありがとうは？」

「みやまありがと！」

「どういたしまして」

若菜ちゃんも嬉しそうに渡されたばかりのマフラーをまじまじと見ていた。

「佳奈、私からはこれを」

紅葉お母さんが手渡したのはスケジュール帳と万年筆だった。

「学校大変だから使わないかなつて思つてね。後、万年筆よく見てね」

「万年筆？あれ、これつて私と紅葉と若菜の名前……凄くいいと思う。仕事で疲れてる時もこれ見たら頑張れる気がする。紅葉ホントにありがとう」

「いえいえ、じゃあ私達は戻りましょうか。後は若い子達の出番よ」

「そーだね。若菜おいで」

「えれにや！えれにや!!」

「お姉ちゃんに迷惑かけちゃダメでしょ。ほらいらっしゃい」

「ふう……」

若菜ちゃんを佳奈お母さんに渡して、お母さん達は席に戻って行った。次は詩織さんとジエシカの番だ。

「どうしよう楓緊張してきた」

「大丈夫だよ。ほら行った行った」

「では続きまして、詩織とジエシカの2人は前の方へ」

エレナのアナウンスが入り、詩織さんとジエシカは前の方へと出た。ジエシカは、まだ緊張しているみたいで、詩織さんに渡すプレゼントを後ろに隠して持っているが、その手が震えているのが分かった。

「ジエシカ？顔赤いけど大丈夫？」

「だ！大丈夫よ！詩織こそ緊張してるんじゃないの？」

「するわけないでしょ。ほら、ちよつとこつち来なさい」

詩織さんは、ジエシカを自分の方へと呼んでいた。何をする気だろうか。

「ふえ!?な、なにをするつもりなのよ!」

「いいからちよつと動かないで。よし、出来たよ。鏡貸してあげるから見てみなさい」

詩織さんがジエシカへのプレゼントに選んだのは髪飾りだった。流れ星の髪飾り。明るいジエシカの髪色と相まってとても似合っていた。

「ありがと……はあびつくりした……」

「なーにい？キスされるとでも思ったの？」

「違うわよバカ！とにかくこ、これ！私からのプレゼントだから！」

そう言うときジエシカは、走って元に行った場所へと戻ってきた。

「それで詩織さんその袋の中身はなんだったんですか？」

「メイド服……かな。前に私がジエシカのお屋敷に行った時来てなかったから気利かせてくれたんじゃない？ありがとねジエシカ。今度また行ってあげる」

詩織さんは、ジエシカの髪を撫でて席へと戻って行った。

「詩織さん喜んでたみたいだよ。良かったねジエシカ」

「うん。めちやくちや恥ずかしかった……でも私も髪飾りすんごい可愛いと思うし嬉しかった」

「とつても似合ってるよ」

「えへへ、ありがと」

さてと……私の番か。アクセサリー部屋から取って来なくっちゃ。

「エレナちよつとだけ時間貰える？部屋にプレゼント置いたままだったからさ」  
「大丈夫よ」

私は、プレゼントを取りに自室に走りすぐに会場となつていているリビングへと戻つた。  
「つて暗！なにこれ!!」

リビングへ戻ると部屋の照明が落ちていて、カーテンも閉ざされていた。唯一明かりがあるのは、エレナが立っている前の方だけだった。

「やっぱり最後は演出もあつた方がいいじゃない？楓、いらつしやい」  
「まあ別にいいけどさ」

ライトに照らされたエレナは、とても神秘的に見えるぐらい綺麗だった。元から宝石のような肌が照らされていて、これに魅了されるな。と言われる方が難しいぐらいだ。

私は、前の方へと進むとエレナの横に並ぶように立つた。

「では、最後に私と楓のプレゼント交換を行いたいと思います」

「待つてました!!楓ちゃんぶちかましちやえ！」  
「何をかますんですか私は……」

天音様の悪ノリが入る。お酒とか飲んでないよね？まあいつも通りか。

「それじゃ先に楓のプレゼントを頂こうかしら」

「うん。私からは、ペアのアクセサリーを送ります。プレートの所に名前と日付が掘つ

てあるから見てみてね」

私は、予定通りにエレナにペアのアクセサリーを渡した。

「ありがとう。つけてもいいかしら？」

「うん」

エレナは、自分の首に手を回すと渡したばかりのアクセサリーを付けた。

「どう？ 似合ってるかしら？」

「うん！ でもアクセサリーがエレナに負けちゃってるかも。綺麗すぎるのもずるいよ」

「何言ってるのよ。楓にも付けてあげるわ。背中向けて」

「ありがとう」

私がエレナの方に背を向けると、アクセサリーを丁寧につけてくれた。

「出来たわよ。うん。可愛いわよ。さてと……次は私の番ね」

何故か、エレナらしくもなくとても緊張しているような顔になっていた。普段の余裕

のある態度とは大違いだ。

「楓、私からのプレゼント……っていうよりお願いかな。聞いてもらえるかしら」

「え？ うん。もちろん聞くよ。どうしたの？」

「ありがとうそれじゃ……」

エレナは、ドレスのポケットから小さい小箱を取り出して私の方に差し出した。

「楓、ううん。橘楓さん。私と結婚して貰えませんか？」

これからもずっと。

「私と結婚してもらえませんか？」

エレナは小箱を開け、私に指輪を差し出していた。

私と結婚して貰えませんか？聞き間違ひなくエレナはそう私に言った。

「え、えつとその！ちよ！ちよつと待つて！」

突然のプロポーズに私は素つ頓狂な声を上げてしまった。でも、でも答えはもう決まっているじゃないか。それをそのまま言えばいい。私は深呼吸をするとエレナの指輪を受け取りながらこう伝えた。

「こちらこそ宜しく願ひします。ジェシカのお屋敷に行つてたのはこの為だったんだね……ホントに嬉しい……エレナア！大好き！」

私はたまらずエレナに抱きついた。嬉しさのあまり私は、気が付けば涙を流していた。

「ホントに私なんかでいいの？エレナならもつとカツコイイ人や綺麗な人だっているんだよ？」

「楓がいいの。楓じゃなきゃダメなのよ！私こそこんなダメ主人でDMで、どうしよう



もないぐらいの自己中な私でいいの？楓にだってたくさんいい人はいるわよ」

エレナも私を強く抱き締めながら声を上げた。エレナの顔を見ると、涙をぐつと堪えながら言っているみたいだった。

「バカ言わないでよ……エレナ以外の人なんて考えられるわけないじゃん。ぐすん……もうホントにダメ主人なんだから……でもそんな所も含めて好きなの。エレナは私の事好きなんだよね？」

「当たり前でしょ。好きよ。大好きよ！」

ついにエレナからも涙が溢れた。はなからみたら抱き合いながら泣いている痛々しいカツプルかも知れないがこんな泣かずにはいられるわけがなかった。大好きな人と結ばれた。この事実だけでたくさんだった。

「よかったね……月村、楓おめでどう！ホントによかったあ!!!」

「ジェシカ……ありがとう。ジェシカにもたくさん辛い思いさせちゃったよねごめんね」

「ジェシカ。私からお礼を言うわ。ホントにありがとう。貴方に励ましてもらわなかったらこんな風に来れなかったと思うわ」

きつとジェシカも私とエレナの事が心配だったんだろう。涙を流しながら私とエレナに抱きついてきた。私の事を好きだって言ってくれて、今でも気持ちが変わってない

ならホントは一番辛いはずなのに本当に優しいんだなって改めて思う。私なら同じ対応が出来たかなんてわからない。

「ホントに心配したわよ。エレナったら挙動不審すぎたでしょ？だからジエシカのお屋敷に一時的に避難させたのよ。でも綺麗に収まって良かったわ。おめでどうエレナ、楓ちゃん」

次は詩織さんが駆け寄ってくれた。確かに挙動不審だったのは間違いなかったけど、こうなるとは思わなかったですよ。

「楓、エレナちゃんおめでどう。これからも仲良くやるのよ。何か困ったことがあったらすぐに相談してね」

「楓、月村さん本当におめでどう。まさか教え子のプロポーズを目の前で見れるなんて思わなかったわ。末永く幸せにね」

「紅葉お母さん、佳奈お母さん……ありがとうございます。私とっても幸せだよ」

「紅葉さん、佳奈さんありがとうございます。絶対楓を幸せにします」

続いて2人のお母さんが声をかけてくれた。紅葉お母さんも目に涙を浮かべて、娘の結婚を喜んでくれているみたいだった。

「エレナ、楓ちゃんおめでどう！まさか2人が結婚するなんて初対面の時は思わなかったよ。むしろエレナが殺されるんじゃないかって思ってたぐらいなんだからね」

「ありがとうございます。流石にそれはしませんよ。まああの時の事があってこそ今の  
だと思えます」

「ありがとう。天音と友達で本当に良かったと思うわ。あの時ちゃんと心変わりをす  
きっかけをくれたのも天音だったわね。本当に感謝してる」

「そんなに褒められても困るって。ほらさゆりもずっと泣いてないで何か言ったら?」

「だって! ホントに良かったって思えたら涙止まらなくて……楓が辛そうにしたの  
知ってたからホントにこんな風になれたのが凄いつて思ったら……うわああん! 楓ホ  
ントにおめでとう!!」

「さゆり……心配してくれてありがとう。でも大丈夫だよ。私、今とっても幸せだから」  
私は、泣きじゃくるさゆりを優しく抱きしめながら答えた。さゆりとは中学生の頃か  
ら愚痴を言い合ってたもんね……ホントに心配してくれてありがとう。

「楓、これで私のプレゼントは終わった訳じゃないのよ」

「え? まだあるの?」

「うん。ジェシカ、お願いしてもいいかしら?」

「任せて! ソファイ! ママ!」

ジェシカが声を挙げるとリビングの扉が開いて中に入ってきたのは……

「え!? ウエディングドレス?」

「そうよ。プロポーズに答えてくれたらそのまま式も上げちゃおうかなって。ダメだった?」

「ううん。すんごく嬉しい……ここまで考えてくれてたんだね。ありがとうエレナ」

「当たり前じゃない」

リビングにいる他の人達からも歓声が上がっていた。誰が見ても純白のウエディングドレス2着は美しかった。

「それじゃまた後で会いましょ。私は、自室で着替えてくるから楓もどこかで着替えてきて。ソフィがやってくれると思うから」

「うん!ソフィさんお願い出来ますか?」

「任せて下さい。では移動しましょうか。客間を一室借りられますか?」

「はい。宜しく願います」

私とソフィさんは、ウエディングドレスを1着受け取り空いている客間へと移動した。

「遅れましたがご結婚おめでとうございます。まさかこの歳でウエディングドレスの着付けをやることになるとは思いませんでしたよ」

「ありがとうございます。私もこんな早くウエディングドレスが着れるなんて思わなかったです」

それから服を脱ぐと、丁寧にソフィさんがウエディングドレスを着せてくれた。鏡に写っている自分が、本当に自分なのかと疑うぐらい鏡に写っている自分が綺麗になっていくのがわかった。

「胸のあたりとかきつくはないですか？」

「大丈夫ですよ」

「よかったです。これで完成ですよ。確認してみてください」

最後にティアラを乗せて貰って、私は再び鏡に写っている自分を見つめ直した。

「綺麗……こんなに変わるんですね」

「女の子皆の夢が fulfillment ですからね。本当にお綺麗ですよ。それではリビングの方に行きましょう。歩きづらいいと思いますので私が手を引きますね」

「ありがとうございます」

私はソフィさんの手を掴むとリビングに向けて歩き出した。

---

sideエレナ

「無事に成功してホントによかったわね。おめでとう月村さん」

「ありがとうございます。内心ホントに心臓が破裂するぐらいドキドキしましたよ」

「ふふ、でも今はホントに幸せでいっぱいな気持ちでしょ？私も主人にプロポーズされ

た時はこんな感じだったもの」

「そうなんですね」

私は、自室でジェシカのお母さんのニーナさんに着付けをお願いしていた所だった。しかし、ホントに楓に指輪を受け取って貰えて良かった。楓が泣きながら私を抱きしめてくれた時なんて、私も喜びの余り涙が零れてしまったし、こんなに大好きな人と結ばれる事が嬉しいだなんて思わなかった。これからは、彼女じゃなくて家族になるんだもんね。そう考えると自然と頬が緩むのがわかった。

「ふふ、やっぱり嬉しいよね。ずっと月村さん笑ってるもの」

「自分でも分かっています。真面目な顔を作ろうとしても今は嬉しくて嬉しくて笑顔しか出てこないです」

「それに今夜は初夜だもんね」

冗談混じりにニーナさんは、笑いながら話す。こういう事を言うのは天音ぐらいだと思っていたけど、まさかニーナさんに言われるなんてね。

「ニーナさんにそんなこと言われるとは思いませんでしたよ」

「あら、私だって女よ？欲ぐらいあるに決まってるじゃない。優しくしてあげるのよっ！」  
「もちろんです」

そう話してる間に、私の着付けは完了した。鏡に写った自分を見ると、ホントに結婚

するんだ……という気持ちになった。

「お父様、お母様、天国で見てくださいか？今度私の可愛くて優しいお嫁さんを紹介しに行きますね」

「よし！それじゃ行きましようか月村さん」

「はい」

私は、ニーナさんと共にリビングへと向かった。

---

side エレナ終

「エレナまだかな。早くしてよ緊張で死んじやいそうだよ……」

私はリビングの扉の前でエレナを待っていた。待っているだけなのに、心臓はうるさいぐらいに音を鳴らしていた。

「お待たせ……凄く似合ってるわよ。一瞬誰かと思うぐらいにね」  
「エレナ」

私の目の前にウエディングドレスを着たエレナが立っていた。その姿は、本当にどこかの国のお姫様を連想させるぐらいにとても綺麗だった。

「やっぱりずるいよ。そんな綺麗な人の横に並べるわけないじゃん」

「何言ってるのよ。ほら、皆待ってるわよ。行きましよ」

「うん」

エレナは、私の手を握るとリビングの扉を開けた……

扉を開けると、皆が2列に並び、拍手で迎え入れてくれた。

「おめでどう!!!」

「おめでどう!!!」

私は、祝いの言葉一つ一つに頭を下げた。そしていつの間にか、私達がプレゼント交換をしていた場所にぽつんと机が置かれ、そこにはニーナさんが立っていた。

「月村エレナさん、あなたは橘楓さんを妻とし、神の導きによつて家族になろうとしています。汝健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、敬い、慰め合い、共に助け合い、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか?」

「はい。誓います」

「橘楓さん、あなたは月村エレナさんを妻とし、神の導きによつて家族になろうとしています。汝健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、敬い、慰め合い、共に助け合い、その命ある限り真



心を尽くすことを誓いますか？」

「はい。誓います」

私達は、2人の思いを確かめるかのように見つめ合いながら言葉を述べた。

「それでは誓のキスを」

「エレナ……私本当に幸せ。これからもずっと仲良くしようね。大好きだよ」

「楓……私も幸せよ。今、私がここに居るのは楓のお陰だもの。大好き。もう絶対離さないからね」

私達は、永遠の愛を誓い、誓のキスをした。

3年後……

「彩葉（いろは）、忘れ物確認した？」

「はい。大丈夫です。楓さん行ってきます」

「ママでいいって言ってるのに……行ってらっしゃい」

「まだママとは呼んでくれないみたいね」

「うん。やっぱりまだ難しいかな」

私とエレナは、結婚して3年がたった日に紅葉お母さんが務めている孤児院から女の子を1人預かった。前々から子供は、紅葉お母さんの施設の子を預かろうかと決めてい

た。何回か通ううちに5歳の女の子が、来る度に私にずっと手を振っていることに気が付き、結局その子を引き取ることにした。内気な性格なのか、まだすっかりママとは呼んでくれないが今では立派な家族だ。名前も橘から月村に変わって、女の子には彩葉と名付けた。

「そうねえ……ねえ楓、最近彩葉ばかりだったじゃない？その……さ？分かるでしょ楓？」

「あのさ……2日前にも同じような事言ってたよね？エレナだつてこれから仕事でしょ？」

「分かってるわよ……でもそんな足出しながら家事なんてやってたら目がいつっちゃうのは仕方ないでしょ？」

季節は春から夏に移り変わろうとしている6月の半ば。ジメジメとした熱さが続いていて、私も家の中では、ハーフパンツに半袖という軽い格好をしていた。

「ホントにどうしようもないんだから……私が誘ってるみたいな言い方しないでよね……1回だけだからね」

「楓様いつものやつお願いします……エレナをたくさん虐めて下さい」

エレナは、私の前に座ると勝手に私の右足を撫で始めた。ホントにこういう所だけは結婚しても変わっていきなかつた。

「ホントにどうしようもないんだから……1回しか言わないからね。私の足を舐めなさい!!!」

「エレナ感激です!!!」

まだ私達の結婚生活は、始まったばかり。これからどんな障害が待ち受けているかはわからないが、この人とならやっていけそうな気がした。

t o b e c o n t i n u e . . . .